

---

# 機動戦士ガンダム〇〇～変革への道 New Generations～

剣也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムOO～変革への道 New Generations

### 【Nコード】

N2637V

### 【作者名】

剣也

### 【あらすじ】

ELS戦役から20年……

人間、イノベーター、イノベイド…そしてELS

世界は一つになるが、戦乱の火種は消えない。

そんな時代の中、新たな世代、新たなガンダムが世界を動かしてい



## 基本設定（前書き）

独自設定などがあります。

## 基本設定

『ソレスタルビーイング』

2307年に現れた機動兵器『ガンダム』を所有する施設武装組織全世界に対し紛争根絶を宣言して武力介入を行ったが、国連軍によって壊滅させられる。

2312年に再び活動を開始し、独立治安維持部隊『アロウズ』と戦い、その背後に存在した『イノベイド』を倒した。

2314年には表舞台から姿を消して活動を行っていたが、ELS襲来に対しELSとの対話を試みて対話を成功させている。

現在は公式には存在していないが、連邦政府は特定の条件を守っている限りはその存在を黙認している。

・連邦政府がCBを黙認する条件

保有するMSはガンダムタイプに限る。

保有する戦力の動力にはオリジナルタイプのGNドライブまたはGNコンデンサーに限る。

保有している戦力はヴェーダに記載する。

作戦行動はヴェーダに記載する（場合によっては事後報告でも可）

ガンダムマイスターの情報をヴェーダに記載する。

保有戦力はコリツク社の製造した物に限る。

新型機、及び新装備を開発する際は連邦議会に提出し、許可を得てから製造にかかる事。

上記が守られなかった場合はCBをテロ組織と断定して連邦軍は武力行使に入る。(それに対し、潔白を証明出来れば、問題は保留となる。)

他いくつか

『ガンダム』

CBが保有するMSの総称。

ガンダムタイプと称するMSはCB以外の保有は認めておらず、CBはガンダムタイプ以外の保有は禁止されている。

CB以外のガンダムタイプが存在する場合はCBが全力を持って破壊しなければならない。

・ガンダムと認められる条件

機体名にガンダムが入っている。

頭部のV字アンテナ、ツインアイ

オリジナルタイプのGNドライブを搭載している。  
頭部以外がガンダムタイプの機体を使用している。  
他いくつか

『TGNドライブ』

CBが開発した新型のGNドライブ。  
オリジナル同様の永久機関でツインドライブと同等の粒子量を一基で生産することが出来る。

高出力の反面、量産が通常のオリジナルのGNドライブよりも困難な為、現在はCBの4基のみ稼働している。

『強化Eカーボン』

EカーボンにGN粒子を内蔵する事で強度が増している。  
ジェシカが考案したもので、連邦軍で製造出来る強化EカーボンはCBの物に比べて強度は低い。

現在はMSの装甲の標準的になっている。

### 『相転移装甲』

ジエシカが考案した新装甲である一定以上の負荷がかかるとより強度な装甲に相転移する。

連邦軍のMSのフレームの関節や一部の機体のコックピット周りに搭載されているが、CBの新型ガンダムには強化Eカーボンとの二重装甲に使われている。

CBの相転移装甲は連邦軍の相転移装甲に比べて精度が高い。

### 『GNフレーム』

フレームにGN粒子が混ぜ込まれている為、強度と脳量子波の感度が向上している。

連邦軍ではイノベーター専用機のコックピットの周りなどに搭載されているがCBのガンダムには全身のフレームに搭載されている。

### 『コリニック社』

アメリカの本社を持つ巨大企業。

以前は兵器開発部が好き勝手にMSを建造していたが、社長交代に際して、厳しく制限されている。



現在は表向きは連邦軍の機体の強化Eカーボンや相転移装甲を製造しているが、裏ではCBのガンダムなどを製造している。

また、CBの活動資金なども極秘裏に提供している。

### 『コロニー国家』

ELS戦役後に宇宙開発が発展し、宇宙コロニーが集まって作られた国家。

基本的には人間に擬態したELSを中心とした国家だが、兵器の類も持つ事が許されないなど、多くの制限を持っている。

### 『ELS』

20年前に来訪した異星体の呼称。

一度は人類との誤解から交戦状態になったが、CBによってその誤解は解かれて一応の共存体制がとられている。

現在は地球圏への滞在を許可されているが、地球への居住は一部しか認められていない。

また、地球上の物に擬態する時は目に見えるところをELSである事を分かるようにしなければならない。

もし、それが守られなかった場合はその個体は駆除対象となる。

『人類解放戦線』

E L S 襲来後に発足された思想者の過激派の総称。

元々はイノベーターやイノベイドも排除対象だったが、アベルなどがある為に声だかには言えない為、もっぱらはE L Sの排除を訴えている。

連邦政府や連邦軍内部にもシンパがいるため、M Sや戦艦などの装備が充実している。

『ハーフィンベーター』

イノベーターと人間の間に来た子供を指す。

人間に比べて高い身体能力と脳量子波を持つがイノベーターには及ばない為、劣化イノベーターとも呼ばれる。

『人工イノベーター』

超兵やイノベイドの技術を応用して人工的に作られたイノベーター。

## 『イノベイド』

ELS戦役後に人口が大幅に減少した為に人口増大の為にかつてのイノベイドとは違い、遺伝子操作やナノマシンを使わずに人間と生まれ方以外は全く同じの繁殖型のイノベイドが多数製造されている。

## キャラ設定

主人公たち

アニエス・グラス

(CV 佐藤 利奈)

16歳(女)

ソレスタルビーイングに所属するガンダムマイスターで純粹種のイノベーター。

ソレスタルビーイングの理念に共感を持っているわけではなく、金のために戦い金に対しては強い執着を持っている。

性格はサバサバしているため、他のマイスターに対しても仕事上の関係で割り切っているため、仲間意識をたいして持っていない。

11

バット・スカーレット

(CV 小野 大輔)

22歳(男)

人類解放戦線に所属しているMSパイロット。

アベル・ウォーカーに対し強い憎しみを持ちイノベーターに対してもあまり良く思っていない。

M Sの操縦技術はかなり高くイノベーターに対してもひけを取らない実力を持っている。

バン・ノマル

(CV 前野 智昭)

25歳(男)

地球連邦軍に所属するM Sパイロット。

軍務に忠実な軍人だが、特出した能力はなく士官学校での成績も平均的な成績で卒業している。

真面目過ぎる為、融通が利かないが市民を守る為ならどこまで突っ走って行ってしまうところがある。

階級は中尉。

ソレスタルビーイング

ロックオン・ストラトス

(CV 笹沼 晃)

19歳(男)

ソレスタルビーイングの所属するガンダムマイスターで三代目のロックスオン・ストラトス。

人類解放戦線のテロで両親を亡くしている。

孤児になったところをテロに武力介入をしたソレスタルビーイングで拾われる。

その後はロックオン（ライル）の元でMSの操縦技術などを学び、彼の引退を機にロックオンのコードネームを引き継いだ。

女好きで軽いところがあるが、射撃の腕はマイスターの中でも随一を誇る。

マレール・ハプティズム

（CV 福山 潤）

18歳（男）

ソレスタルビーイングのガンダムマイスターでアレルヤとマリーの息子。

容姿は若いころのアレルヤの良く似ている。

性格は冷静沈着だが、独自の美学を持ち周りには理解されない事が多い。

超兵を両親に持つため、常人よりは高い脳量子波を持っている。

レムリア・レーベルト

(CV 日笠 陽子)

20歳(女)

ソレスタルビーイングのガンダムマイスターでELS戦役後にマイスタータイプのイノベイド。

マイスタータイプのイノベイドだが、人間社会に溶け込めるように肉体的にも精神的にも女で固定されている。

イノベイドの中でも特殊で大量の脳量子派を扱えるように調整を受けている。

根が真面目すぎるため、私の強いマイスターを相手に頭を悩ますことが多い。

マリア・ウォーカー

(CV 堀江 由衣)

47歳(女)

前作ヒロイン

元ガンダムマイスターで現在はプロトレマイオス3の艦長を務めている。

ELS戦役後には正式にアベルと結婚している。

リズ・フロンティア

(CV 水樹 奈々)

41歳(女)

プロレマイオス3の操舵士。

20年前のELS戦役に第二世代のヘルメストートR3で戦い生還している。

超兵機関出身でアレルヤやピーリス程ではないが脳量子波を使える為、プロレマイオス3の操舵を担当されている。

ミリシア・ベクトワール

(CV 竹達 彩奈)

42歳(女)

プロレマイオス3の整備士

元反連邦勢力『プレデント』の構成員で一時期はアベルの私兵をしていた。

自らが巻き込んだシンイチを止める為に殺してしまったために一時期は無気力な生活をしていたがELS襲来の際にはフェレシユテが管理していたケルディムサーガで出撃している。

その戦いで大怪我を負うも生還し、そのままCBに加入した。



その後は予備のパイロット兼整備士を任されている。

ジェシカ・アンダーソン

(CV 水橋 かおり)

48歳(女)

元コリック社の技術者でアベルがCBに戻るとともにCBに加入した。

技術者としては天才的な才能を持ち、強化Eカーボンや相転移装甲などの開発を行っている。

現在ではTGNドライブや新型ガンダムの設計を行いCBの技術の要となっている。

李 香蘭

(CV 高橋 美佳子)

17歳(女)

プロレマイオス3の戦術オペレーター

リコッタ・フルーム

(CV 早見 沙織)

16歳(女)

ブトレマイオス3の戦術オペレーター

地球連邦軍

アベル・ウオーカー

(CV内山 昂輝)

48歳(男)

前主人公

純粹種のイノベーター。

一時期は死んだ事になっていたが、ELS戦役時にメアリーやケビンなどに生存が知られた為、軍に戻って来た。

現在では最強のイノベーターや伝説のイノベーターと言われている。

階級は中将だが、実質的に軍を仕切っている。

以前に比べて、気取った話し方をしているが基本的なところは変わっていない。

アルエット・ルーラー(ウォリアーさんの投稿キャラ)

(CV清水 香里)

53歳（女）

地球連邦軍の軍人でアベル直属の部下。

階級は中佐でメーティアの艦長を任されている。

以前はMSのパイロットで第一次ソレスタルビーイング事変からELS戦役までの戦いにも参加し生き残っている。

ELS戦役後はマシューと結婚している。

所々でいい加減な上司や多忙な任務で頭を悩ませている。

ゴタード・ホークス

（CV 森川 智之）

35歳（男）

メーティアのMS隊の隊長で階級は少佐。

連邦軍でも数少ない経験豊富な軍人で若いパイロット達を上手くまとめ上げている。

パイロットとしての実力も優秀でソルブレイヴに搭乗している。

セシリア・ベルシュタイン

(CV 沢城 みゆき)  
24歳(女)

ミーティアのMS隊のパイロットで階級は中尉。

良家の出で騎士道精神を重んじている。

その半面、熱烈なアベルのシンパでもある。

専用のガラツゾ?に搭乗する。

ライト・クルーガー

(CV 諏訪部 順一)

25歳(男)

ミーティアのMS隊のエースパイロットで純粋種のイノベーター。

階級は大尉でバンとは同期。

イノベーターの中でも比較的優秀な能力を持ち、それにあつた自信を持っている。

シャロン・ウォーカー

(CV 川澄 綾子)

19歳(女)

アベルとマリアの娘のハーフィンベーター。

真面目な性格で責任感も強く英雄の娘として恥ずかしくないように生きる為に軍人となる道を選んだ。

父親譲りの才能で並みのイノベーター以上の実力を持っているが、実戦経験が不足している。

#### 人類解放戦線

ルシオラ・アレキテス

(CV 井上 麻里奈)

18歳(女)

人類解放戦線に所属しているMSパイロット。

対イノベーターのために作られた人工イノベーター。

自分を兵器と定義しているため感情をほとんど出さない。

対イノベーター用に調整されているため、高い戦闘能力を持っている。

ガイウス・ノードン

(CV 置鮎 龍太郎)

40代(男)

人類解放戦線のアレクサンドリア級の艦長を務めている。

元連邦軍の軍人でE L S戦役にもパイロットとして参加しており、その際にE L Sを人類に対する脅威を感じ解放戦線に参加している。

艦のクルーからは『親父』として慕われている。

ジヨナサン・バーズ

(C V 杉山 紀彰)

21歳(男)

人類解放戦線に所属しているM Sパイロット。

普段はお調子者だが、パイロットとしての実力はそれなりのもので自称バットの親友だが、当のバットには軽くあしらわれている。

リーナ・スファイア

(C V 喜多村 英梨)

18歳(女)

人類解放戦線のM Sパイロット

パイロットとしての実力は高く、プライドも高い為、努力ではそう簡単に超える事の出来ないイノベーターを嫌悪している。

また、何かとバットに対抗しているが、バットに対しては少なからず好意を抱いている。

その他

ヘレン・ウォーカー

(CV 大原 さやか)

67歳(女)

アベルの母親でシャロンの祖母。

元地球連邦軍の元帥だったが、現在は連邦政府の大統領となっている。

多忙な雑務と勝手に動き回る息子やパイロットとなった孫娘などに日々頭を悩ませている。

リタ・リバース

(CV 花澤 香奈)

マイスタータイプで現在ではほとんどいない無性型のイノベイド。

かつてはアベルの補佐をしているが、現在ではCB所属ではなく、ウォーカー家の家政婦状態でシャロンからは姉のように思われている。

以前に比べては感情も出している。

メアリー・コリンズ

(CV 松岡 由貴)

48歳(女)

アベルとジェシカの幼馴染。

元地球連邦軍の軍人だったが、ELS戦役後の退役して会社経営を学び、父親の後を継いでコリニック社の社長となる。

その後は今までのコリニック社の兵器開発部門を一新している。

現在ではコリニック社の社長と連邦議会の議員を務めている裏でCBに協力員でもある。

ホープ・E・ブリッジ(想像屋さんの投稿キャラ)

(CV 保志 総一郎)

かつては中東を中心に難民保護をしていたが、ELS戦役後には自らの正体を明かしてELSの代表となった。

現在はコロニー国家の元首として連邦議会への参加権と発言権を与えられ、地球への居住を許可されている。



## 機体設定

### 第6世代ガンダム

ジェシカが設計しコリニック社で製造された最新型のガンダム。

第5世代のガンダムをベースとしながらもそれ以前のガンダムの設計思想も受け継いでいるほか、全機にTGNドライブを搭載し頭部のバルカンや両腕にビームサーベルの内蔵するなどの規格統一もされている。

全機が強化Eカーボンと相転移装甲、GN粒子入りのフレームなどが標準装備されており、連邦軍のMSと比べて圧倒的な性能を誇る。

GN T - 0001 『セイバーガンダム』

ダブルオークアンタをベースに完全に戦闘用にカスタマイズされたイノベーター専用機。

TGNドライブの搭載でGNドライブを二基搭載する必要がなくなったため、クアンタのGNシールドは廃止され、ソードビットのキヤリヤーとして専用のシールドを装備している。

また、近接戦闘用の機体だがバックパックを換装することで高い汎用性を持っている。

## 武装

・GNソード？

GNソード？をベースにしたセイバーガンダムのメイン装備で右腕に装備されている。

基本的にはGNソード？の出力を強化しているだけに外見に変化はないが、使用しない時はライフルの銃身が腕にスライドして他の武器を持ちやすいように改良されている。

また、GNソード？同様、トランザム時にはライザーソードを使うことも可能。

・GNソード？

ダブルオークアンタに装備されていたものと同じで両腰に二基装備されている。

・GNシールド

左腕に装備されているシールドでソードビットのキャリアーも兼ねている。

・GNソードビット

ダブルオークアンタに装備されているものと同じで左腕のシールドに六基装備されている。

・GNビームサーベル

連邦軍で正規に採用されているものと同タイプで両腕に二基内蔵されている。

・GNバルカン

GN-Xシリーズに装備されているものを流用したもの。

GN T - 0001 Z 『Zセイバーガンダム』<sup>ザン</sup>

セイバーガンダムにザンライザーを装備した状態。

近接戦闘に特化し、若干機動力も向上している。

また、ザンライザーを遠隔操作したり、サブパイロットを乗せての戦闘も可能。

GNT - 0001I 『アイズ』  
Iセイバーガンダム

セイバーガンダムに1・5ガンダムのバインダーを装備した状態で機動力や砲撃能力がバランス良く向上している。

GNT - 0001B 『バスター』  
Bセイバーガンダム

セイバーガンダムにラファエルガンダムに装備されていたセラヴィーガンダム?を装備した状態で砲撃能力と防御能力が向上している。

セラヴィーガンダム?は無人数機としてだけではなく、コックピットを搭載しているため、有人でも使う事が出来るがセラヴィーガンダム?には疑似GNドライブからGNコンデンサーに変更されているので稼働時間には限界があるが、セイバーガンダムから補給も可能。また、セラヴィーガンダム?にはGNフィールド発生装置が搭載され、GNフィールドを展開することも可能。

GNT - 0001W 『ウイング』  
Wセイバーガンダム

セイバーガンダムにGNウイングシステム？を搭載した状態で機動力に特化している。

GN T - 0002 『コマンドガンダム』

ガンダムサバーニヤをベースとし、デユナメスの多数の銃を使うという設計思想を受け継ぎケルディムサーガのデータを使い全身に重火器を多数装備している。

そのため、近接戦闘能力はこれまでの狙撃型のガンダムの中でも最も低い。

コックピットはサバーニヤの物を流用するだけではなく、デユナメスとケルディムで採用されていた専用のガンコントローラーも採用し、狙撃時の状態で使い分けることが可能となっている。

また、ビット兵器の廃止で八口の数も一機に減り、オレンジ色の八口が搭載されている。

## 武装

・GNスナイパーライフル？

ケルディムのスナイパーライフルを改造したものでビームマグナムに搭載されていたカートリッジを搭載することで威力が上がり、射程も今までのライフルとは比べものにならなくなっている。

その反面、カートリッジの搭載で三連バルカンモードが廃止されている。

使用しない時はホルスターフルシールドに装備されている。

・GNメガビームライフル？

かつてはデユナメス用に開発され、アルヒスに装備されたメガビームライフルを改造したライフルで、以前の弱点であった弾数をビームマグナムのカートリッジを搭載することでクリアされた。

威力はスナイパーライフル？よりも高いが精度はスパイパーライフル？の方が高い。

使用しない時はホルスターフルシールドに装備されている。

GNスナイパーライフルTYPE-P

スナイパーライフルをベースとし、弾丸を粒子ビームから実弾に変更されたライフルで主に水中の敵への狙撃やGNフィールドに対する攻撃用で使われる。

使用しない時はホルスターフルシールドに装備されている。

・GNバスターライフル

リボンガンダムなどに装備されていたものを流用している。

使用しない時はホルスターフルシールドに装備されている。

・GNホルスターフルシールド

デユナメスのフルシールドとサバーニヤのホルスタービットを合わせたシールドで両肩に装備されている。

内部に火器を二基ずつ装備できるが火器を内蔵しているせいで大型化している。

また、シールドの内側に予備のカートリッジが大量に装備されている。

- ・NGNバズーカ

GN-Xシリーズが装備していた実弾のバズーカを流用している。

使用しない時は背部に装備されている。

- ・GNガトリングライフル？

アルヒスのフル装備に使われていたガトリングライフルを改造したものでカートリッジを搭載し、威力と連射時間が向上されている。

使用しない時は背部に搭載されている。

- ・GNホルスター

両腰に搭載されているホルスターで火器を二基搭載できるがホルスターフルシールドよりも小型の火器しか内蔵できない。

- ・GNビームマグナム

ペルセウスなどに装備されていたものを流用し腰のホルスターに搭載されている。

- ・GNビームライフル

GN-Xシリーズに装備されていたものを流用している。

使用しない時は腰のホルスターに搭載されている。

・GNサブマシンガン

ケルディムサーガに装備されているものを流用している。

・GNグレネードランチャー

GNミサイルと同じ特性を持つ弾丸を放つライフルで使用しない時は腰のホルスターに装備されている。

・GNショットライフル

イカリアに装備されていたものを流用している。

腰の裏側に二基、胸部に二基の計4基搭載されている。

・GNミサイル

サバーニヤ同様全身に装備されているが重火器のせいで大半が使用できない状態にあり、重火器をパージした状態での最後の火器として使用される。

・GNバルカン

GN-Xシリーズに装備されているものを流用したもの。

GN T - 0003 『アクセルガンダム』

ガンダムハルートをベースとして開発されたガンダムでハルートの採用された複座式のコックピットは廃止されている。

背部のは大型のスラスタが搭載され、圧倒的な機動性能を持つて

いる。

可変機構はキュリオスの物をベースとしている。

## 武装

### ・GNシザーシールド

キュリオスに装備されていたシールドを改造したもので両腕に装備されている。

シールド内の実体剣を廃止し、クロー部分とシールドの周囲をGNソード?などに使われている新素材を使用し、そのまま斬撃武器として使うこともできる。

### ・GNサブマシンガン

アリオス同様両腕に搭載されていて、アクセルガンダムのMS形態のメインの火器。

### ・GNキャノン

飛行形態の機首に装備されている砲門で飛行形態専用の火器。

### ・GNミサイルコンテナ

キュリオスやハルードに装備されていたものを流用している。

### ・GNビームサーベル

連邦軍で正規に採用されているものと同タイプで両腕に二基内蔵されている。



・GNバルカン

GN-Xシリーズに装備されているものを流用したもの。

GN T - 0004 『フォートレスガンダム』

ラファエルガンダムをベースにヴァーチェとセラヴィーの設計思想を取り入れた機体。

本体はラファエルをベースとしたガンダムでそのガンダムの全身にGNフィールド発生装置を内蔵した追加の装甲を取り付け背部にはセラヴィムガンダムを改造したバックパックを装備している。

また、OSにはBNF-Pシステムのコピーデータが搭載されている。

## 武装

・GNビッグキャノン？

ラファエルガンダムに搭載されていたGNビッグキャノンを改良したもので両肩の横と両足の横、バックパックに二基の計六基搭載されている。

バックパックの二基は前方に向けられないので背部に対する攻撃にも使われる。

規制により擬似太陽炉が使えないため、大型のGNコンデンサーが内蔵されているので機体から離して使える時間は短くなっている。

・GNガトリングキャノン？

ナキールが最終決戦時に装備したガトリングキャノンを改良したもので連射速度に優れてガトリングモードを威力に優れたキャノンモードを使い分ける事が出来る。

また、先端から大型のビームソードを展開する事も可能。

・GNキャノン

セラヴィーに装備されていたものを流用し、両肩と両膝のアーマ  
ーに搭載されている。

・GN拡散ビーム砲

胸部の追加装甲に装備されているビーム砲で収束砲が廃止された分、  
拡散ビームの威力と拡散範囲が広がっている。

・GNミサイル

両足のアーマー内に搭載されている。

・GNビームサーベル

連邦軍で正規に採用されているものと同タイプで両腕に二基内蔵  
されている。

・GNバルカン

GN-Xシリーズに装備されているものを流用したもの。

ソレスタルビーイング所属

GN - 008 ケルデイルガンダム（偵察仕様）

コリック社が再製造したケルデイルガンダム。

戦闘能力よりも隠密能力や偵察能力に特化している。

両肩にはサダルスードに搭載されていたセンサーシールドを搭載し、シールドビットの代わりに光学カメラの内蔵されたカメラビットを搭載している。

ELS戦役後に再製造されたオリジナルタイプのGNドライブが搭載されている。

パイロットはライル・ディランディ

GN T - 9998 『アザゼルガンダム』

20年前に製造されたイノベーター専用のガンダムで唯一初期に作られたオリジナルのGNドライブを搭載している。

現在は武装を解除されてCBで保管されている。

CBS 78 『ブトレマイオス3』

ブトレマイオス2改の後継艦で愛称は引き続き『トレミー』

武装などは大差はないが、中央のカタパルトはセイバーガンダムの武装を簡単に換装することが出来る構造となっている。

また、艦内にオリジナルタイプのGNドライブ二基を搭載しツインドライブシステムが搭載されており、ガンダムを搭載していなくても航行が可能となっている。

それにより、短距離ならば艦を量子化しての量子ジャンプが可能となっている。

『外宇宙航行艦ソレスタルビーイング』

ELS戦役では人類側の指令室として使われていたが、現在は武装を解除してCBに極秘裏に譲渡されてCBの本拠地となっている。

武装はないが、GNフィールドを展開することが可能で動力にアザゼルガンダムのツインドライブが使われている。

総司令官はスメラギ・李・ノリエガ。

地球連邦軍所属

GNX-800T 『GN-X?』

GN-X?をベースに開発された連邦軍の主力MS

GN-X?の汎用性を引き継ぎ、全身にハードポイントが増設され

て汎用性が高くなっている。

頭部はガンダムタイプと区別をつける為にモノアイを採用し、隊長機には通信能力を向上させるためにブレードアンテナがついている。

また、パイロットの安全性の確保の為にコアファイターが内蔵されている。

開発されたのは10年近く前だが、その汎用性の高さから未だに主力機として活躍している。

武装（固定のみ）

- ・GNサブマシンガン

両腕に内蔵されている火器

- ・GNビームサーベル

ガンダムにも使用されている物でガンダム同様両腕に内蔵されている。

- ・GNバルカン

ガンダムにも使用されている物でガンダム同様頭部に装備されている。

GNX - 800TC 『GN - X? キャノン』

GN - X? に追加装甲と両肩にGNキャノンを装備した状態で火力の向上と装甲の強化で安定性が高く、熟練のパイロットに好まれている。

バン専用機

GN - X? キャノンをバン専用カスタムした機体で機体を水色に塗装されている。

武装（追加）

・GNビームライフル

GN - Xシリーズに装備されている物

・GNシールド

表面にGNフィールドを展開する事が可能なシールドで左腕に搭載されている。

GNX - 800TI 『GN - X? 高軌道ユニット装備』

GN - X? の背部にイカリアのバックパックを改良したものを装備した状態

機動力が大幅に向上し、他の武器とも合わせ易いのでGN-X?の標準的な装備となっている。

武装（追加）

・GNミサイル

背部のユニットに内蔵されている。

GTZ-003? 『ガデッサ?』

かつてはイノベイド専用機だったが、改良されて人間でも扱う事が可能となっている砲戦用MS

外見こそは変化はないが、性能は最新の技術を使いかなり向上している。

コアファイターはGN-X?と共通の物が搭載されている。

武装

・GNバルカン

両手首付近に各1門ずつを内蔵されている。

・GNメガランチャー？

ガデッサに装備されていた物を改良し、先端かたビームソードを展開して近接戦闘にも対応されている。

・GNビームサーベル

GN-X？に装備されている物と同じ

GTZ-005？ 『ガラッゾ？』

かつてはイノベイド専用機だったが、改良されて人間でも扱う事が可能となっている格闘戦用MS

外見こそは変化はないが、性能は最新の技術を使いかなり向上している。

コアファイターはGN-X？と共通の物が搭載されている。

武装

・GNビームクロー

ガラッゾに装備されていた物と同じ。

・GNバルカン



両手首付近に各1門ずつを内蔵されている。

・GNショートキャノン

両肩に内蔵されているキャノンで砲身が短いので近距離でしか使えない。

セシリア専用機

ガラツゾ？をセシリア専用カスタムした機体。

武装（追加）

・GNロングソード

両腰に一基ずつ装備されている実体剣。

・GNソードファング

機体の右肩に4基装備されている物で通常のファングよりも刃が長い。粒子ビームを撃つ事は出来ない。

GNXY910 『ソルブレイヴ』

20年前のELS戦役に投入され、多大な戦果をあげたブレイヴの

後継機で正式に採用した機体。

機体の構造上、コアファイターが搭載出来なかったため、コックピットの周りに相転移装甲が採用されている。

武装はブレイヴと共通だが、最新の技術を使われているので性能は向上している。

また、コアファイターを搭載していない為、ソルブレイヴを与えられるパイロットは熟練のパイロットに限定されている為、ブレイヴの指揮官機同様、ダブルドライヴ仕様となっている。

G N M S - Y 0 0 0 2 『カイノス』

連邦軍が開発したイノベーター専用機

リベリオンシリーズをベースにしているが背部にスラスターとしても使えるGNビットを4基装備している。

また、コアファイターは搭載されておらず、コックピットの周りに相転移装甲とGNフレームを採用している。

武装

・GNビームライフル

専用に開発されたビームライフル

・GNビット

背部に4基装備されている大型のビットで使用しない時はスラスタ  
ーとして使われている。

・GNバルカン

頭部に二門装備されている。

・GNビームサーベル

両腕に内蔵されている。

・GNシールド

左腕に装備されているシールドでGNフィールドを展開することが  
出来る。

真メーティアス級戦艦「メーティア」

連邦軍が製造したメーティア級を改良した戦艦で一番艦にはかつて  
のZEUSの母艦と同じ名が使われている。

以前のメーティア級とは違い、単艦でも大気圏の離脱と突入が可能

となっている。

武装はメーティア級と共通の物で一番艦にのみGNハイパーメガビームキャノンが搭載されている。

一番艦の艦長はアルエット・ルーラー

アレクサンドリア級大型輸送艦

連邦軍が新しく設計した輸送艦で旧ユニオンのバージニア級をベースにしている。

戦闘能力は高くはないが、GNフィールドの展開やMAや大型MSなどの搭載も出来る上に地上でも運用出来るので広く使われている。

搭載機も最大で20機と比較的多く、さまざまな部隊で活用されている。

また、トランザムも可能で長距離航行にも適した艦内構造をしている。

ヴィクトリア級航宙戦艦

地球連邦軍が新設計した宇宙戦艦。

MSの搭載数は最大で10機搭載出来るが、大型のMAなどは搭

載出来ない。

GNフィールドの展開や多数の火器を搭載し、連邦宇宙艦隊の主力艦となっている。

### 人類解放戦線

GNMS-Y0001 『ガデアス』

20年前に設計されたイノベーター専用の大型MS

当時はデカルト・シャーマン大尉専用に開発されていたが、完成の前にデカルトが戦死した為にパーツのままだったところを人類解放戦線に譲渡された。

古い機体だが、強化Eカーボンや相転移装甲、GNフレーム、ツインドライブシステム、全方位GNフィールドなども試験的に搭載されているため、高い性能を持っている。

また、両肩には大型のシールドスラスタが装備され、ツインドライブと相まって巨体に似合わない機動性を持っている。

実験的な武装を搭載していたガデラーザとは反対で武装の大半はすでに存在している機体の物を改良した物が多い。

パイロットはルシオラ・アレキテス。

武装

・GNメガビーム砲

レグナントに装備されていた大型ビーム砲を改良したもので、レグナント同様粒子ビームを屈曲させる事が可能。

胸部に一門装備されている。

・GNビームガトリング

両腕に装備されているガトリング砲。

連射速度を優先しているが、通常のMSの火器に比べて高い威力を持っている。

・GNファンク

両肩のシールドスラスターに片方に10基つづ、計20基装備されている。

形状はスローネやアルケーに搭載されていた物ではなく、ガデラーザの小型GNファンクを搭載している。

・GNスピア

フロントンに装備されていたカーボンスピアを大型にしたような形状をしているが、表面にGN粒子がコーティングされ、ビームサーベルと実体剣の特性を持っている。

機体の出力を合わさって強化Eカーボン製のMSですらも易々と破壊する威力を持つ。

・GNビームアックス

本機の数少ない新規の製造武器。

手持ちのハンドアックスだが、粒子ビームの刃の出力を上げると大型GNビームソードとしても使える。

また、手持ちの武器としてだけでなく、投げて使う事も可能。

・GNバルカン

頭部に二門つつ計4門装備されている。

GN-Xシリーズのビームライフルの銃身を使っている為、通常のバルカンよりも高い威力を持っている。

バット専用GN-X?

バット専用にカスタムされた指揮官用のGN-X?で高軌道ユニットを装備し、赤く塗装されている。

この時代において赤い機体カラーはアベル専用機を彷彿させる事からつけられる事はないが、バットはアベルへの当てつけで機体を赤くしている。

武装（追加）

・GNロングビームライフル

GN-X?の時からある物を使用している。

・GNハンドガン

至近距離用のビームライフルで両腰に一基つづ装備されている。

・GNシールド

GN-X?の標準的なシールドで両肩に装備されている。



## Mission 01 新しい世代

西暦2334年、ELS戦役から20年が経ち、異星体ELSの来訪により世界は大きく変革した。

イノベーターやイノベイドに加えてELS存在によって世界は混乱したが、大きな戦いに発展することはなかった。

しかし、完全に火種が消えたわけでもなかった。

世界には小さい火種が多数存在し、その火種がいつ大きな火種になるかもしれない緊張が世界には漂っていた……

「艦長、間もなくコロニー国家の国境に接触します。」

ラグランジュ2に存在するコロニー国家の国境に一隻の連邦軍の戦艦が接近していた。

船名は『メーティア』

20年前のELS戦役時に火星圏での戦闘で撃沈した戦艦の名を受け継いだ戦艦

「了解した。国境ギリギリで艦を待機させる。間違っても国境に触れるなよ。後で面倒な事になる。」

メーティアの艦長席でアルエット・ルーラーはそう言う。

第一次ソレスタルビーイング事変から第一線で戦いかつてのメーティアのクルーでもある彼女がこの艦の艦長である。

「了解しました。」

コロニー国家はあくまでも地球連邦に加盟しているが、その特徴上独自の軍事力を持つ事が許されず、そのためテロリストなどの温床となるケースが多い。

しかし、国家と言う体裁を取っている為、連邦軍の戦艦でも無許可で国内に侵入することは条約違反になる。

宇宙では地上のように明確に国境を規定は出来ない為、アルエットの指示は無茶に思えたが、メーティアのクルーは末端に至るまで、連邦軍内の選りすぐりを選出しているので操舵士はそれを文句の一つも言わずにやっつけてのけている。

「しかし…艦長、例のタレこみの情報は正しいのでしょうか？」

艦の速度が緩まると、ブリッジクルーの一人がそう言う。

今回のメーティアの任務はコロニー国家のコロニーに対するテロの阻止だったが、その情報は匿名の人物によるタレこみによるものだった。

通常ならタレこみで軍が動く事は少ないが、そのタレこみは日時やテロの行われるコロニーの位置などが明確に指定されていたので、念の為にメーティアが派遣されたのだった。

それでも、軍がおおつぴらに動く事は出来ないので、メーティアの単艦の任務となっている。

「さあな。私に聞かれても困るな。」

アルエットはそう言うが彼女には確信があつた。

テロでは無いにしろ、この宙域で何かが起こると言う事は……

なんせ、彼女の直属の上司の命令でメーティアは地上から宇宙<sup>そら</sup>に上がり、ここまで来ている。

彼は面倒な事を嫌うが、無意味な事も面倒として嫌っている節があるのは20年以上もの付き合いのあるアルエットは分かっている。

そんな彼が自分の懐刀であるメーティアを派遣する以上、何かがあると彼女は考えていた。

「だが、何かが起こった時に対応が出来ないでは中将の顔に泥を塗る事になる。MS隊をいつでも準備させておけ。」

「了解しました。」

部下がMS隊の発進準備を格納庫とパイロットに艦内アナウンスをしているのを見て切に願っていた。

彼は面倒な事は嫌いだが、人に取つての面倒事を見るには以外と好きなどころがあるため、自分たちが面倒事に叩きこまれたのではない事を……

アルエットの指示でメーティアのパイロット達はブリーフィングルームに集められていた。

通常の戦艦にはMS隊が最低でも2個小隊は配属されているが、メーティアにはMSが4機しか配備されていない。

本来は真メーティア級には10機のMSが搭載出来る為、ブリーフィングルームもパイロットや指揮官やその他の要員が入れるように20人程度は入る事が出来るが、現在は4人しかいない為、寂しく見える。

「今回の我々の任務はコロニー国家のコロニーに対するテロの阻止だ。」

ブリーフィングルームの大型モニターの前で大柄で中年の男がそう言う。

彼はメーティアのMS小隊を指揮する小隊長、ゴタード・ホークス。ELS戦役の経験こそは無いが、連邦軍でも数少ない熟練のMSパイロット。

「だが、その情報は確証がないんだろ？」

壁にもたれ掛かり腕を組んでいる若い男がそう言う。

ライト・クルーガー……20年ほど前から確認された人類の進化形態、イノベーター……

彼はそのイノベーターであり、この艦のエースパイロットでもある彼は上官のゴタードに臆する事なくそう言うが、当のゴタードは大して気にしている様子はない。

それだけの態度を取る事が許されている程の実力をライトは持っているからだ。

「しかし……ライト、中將が何の確証もなく、我々を動かすとは思えないぞ。」

ブリーフィングルームの椅子に座っていたバン・ノマルがそう言う。

ライトは年相応の若者を思わせるが、バンは生粋の軍人を思わせる。

「そうですね！大佐がそのような事をする訳がありません！」

バンに同調して大声を出すのはセシリア・ベルシュタイン。

メーティアの紅一点で、ブロンド髪とウェーブのかかった長髪をなびかせるせ、その言動から彼女は旧世代の貴族を連想する物は少くない。

実際、彼女の家系を遡ると貴族の家系に辿り着く。

今でもベルシュタイン家と言えば、連邦政府樹立以前からAEUを支える名家で彼女はその令嬢の為、MSのパイロットは愚か、軍人になる必要すらない生まれにいる。

「大佐には宇宙よりも深いお考えがあるに違いありませんわ！」

しかし、彼女は熱烈なアベル・ウォーカーのシンパだった。

以前からアベル・ウォーカーは連邦政府が英雄である事を大々的に宣伝し、一時期はアベル教とまで言われかけた事もある。

今でこそはそれも鎮静化したが、未だに最強のイノベーター、伝説のイノベーターと言われ、軍や政府に大きな影響力を持つ彼を崇拜する物は少なくない。

彼女もそんな熱烈なシンパの一人だった。

それ故、彼女は軍人となった。

「落ち着け、セリシア、ライトは中將の判断を批判している訳じゃない。実際、中將も情報の出所が分からない為、不測の事態に備えて、俺達を派遣したんだ。」

「当然ですわ。隊長、大佐が判断を誤る事などあり得ませんわ。」

セシリアはゴタードにそう言われて納得し、怒りの矛を収めた。

それを見ていたバンとライトは互いに目を合わせて、セシリアに気づかれないように肩をすくめていた。

彼らにとって少しでもアベルの批判に聞こえる事はセシリアは強烈に反応し、今のようになり癩癩をおこすのである種のタブーとなっていた。

「だから、我々は待機、動きがあり次第出撃をする。各自、気を引き締めておけよ。」

ゴタードがそう言い締めくくった。

ラグランジュ2のコロニー国家の領内にアレクサンドリア級大型輸送艦が航行している。

無論、連邦軍の軍艦ではない。

アレクサンドリア級大型輸送艦はMSの搭載数や航行距離から様々な軍や民間問わずに運用されている。

それは彼ら、人類解放戦線でも例外でない。

人類解放戦線……20年ほど前にイノベーターが出現し始めたところから、その母体は出来始めていた。

世界をイノベーターやイノベイドの支配から解放する事を名目に活動していたが、ELSの襲来で連邦政府の誇る英雄、アベル・ウォーカーやその戦いを収めた歴史に名を残されていないイノベーターによって大きく声を荒げてイノベーターやイノベイドの廃絶を言えなくなっていたが、その代りにイノベーター達よりも分かりやすい敵としてELSを廃絶する事を大きく掲げている。

20年前のELS戦役で多くの被害が出た軍内部でもその意見に賛同する者は少なくは無く、かつての反政府勢力『カタロン』とは比べ物にならないくらいの戦力を有している。

そのため、連邦政府も明確なテロ行為を行った者しか取り締まる事が出来ずにいる。

「親父、先方の連中が動きましたぜ？」

「そうか……ルシオラを出せ、他の奴も待機させておけ」

親父と呼ばれた艦長席に座る男……ガイウス・ノードンはそう言う。

彼は親父と呼ばれたが、そのクルーとガイウスとの間に血縁関係は無い。

しかし、彼はその人柄から艦内では親父として慕われている。

「了解、ルシオラには伝えておきます。」

「ルシオラには先遣隊の支援をさせろ。」

「了解でさあ」

ガイウスは部下に指示を出すと、戦いの策を考える。

「ルシオラ！」



アレクサンドリア級の格納庫で赤毛の青年、バット・スカーレットはパイロットスーツに身を包んでいる少女……ルシオラ・アレキテスに声をかける。

「何だ？」

呼ばれたルシオラは止まるが、その目は感情が無いかのように冷たい目をしている。

「出るのか？」

「ああ…コロニーを攻撃に出た部隊の支援を命じられている。」

バットの問いにルシオラは自分の仕事に興味が無いかのように淡々を答える。

彼女はイノベイドや超兵の技術を応用されて作られた人工イノベイド……

イノベイドやELSを駆逐するために作られた彼女は任務に不必要な感情の一切を自らの奥底に押し込めるように調整されている。

そのため、彼女が任務をこなす事は至極当然の事なので、そこに一切の興味などは持ち合わせてはいなかった。

「そうか……俺達も援護に向かう予定だ。」

「そうか……しかし、お前たちの出番はないだろう。私一人で十分だ。」

ルシオラはそう言い、自分のMS『ガディアス』に乗り込んだ。

「振られたか？色男」

ルシオラが機体に乗り込むと、バットの背後から声をかけられる。

声をかけたのはジョナサン・バース、見た目こそはチャライ軟派な彼だが、この艦の立派な戦力に数えられている。

「あの冷血女に何を言っても無駄よ。」

そう言ったのはつり目で気の強そうなイメージを持たせる少女、リーナ・スファイア。

彼女もまた、この艦のMSパイロットの一人である。

「バットに相手にして貰えず嫉妬かい？」

「うっさいわね。」

ジョナサンがリーナにからかい気味に言うと今までも不機嫌そうだったリーナは更に不機嫌になる。

「漫才はその辺にしておけ、俺達も出撃準備だ。」

「何が漫才よ！」

リーナは抗議するが、バットはそのまま格納庫を出て行く。

「相変わらずだねえ……ウチのエース様は」

「何よ……あんな女……」

リーナはガディアスを憎しげに見つめた。

「ガディアス、発進準備が完了したぞ。」

「了解」

ガディアスに乗り込み、ルシオラは機体を起動させて、システムチエックを終える。

「良いか、ルシオラ：お前の役目は国境付近に接近している連邦の戦艦が介入して来たときの援護だ。連邦が介入してこなかった場合は適当なところで戻って来い。」

「了解」

今回のルシオラの任務は先遣隊が行動を起こせば、すぐにでも動くであろう連邦軍の相手。

しかし、ルシオラはどうでも良かった。

自分はただ、与えられた任務を遂行し、イノベーターを破壊するだけだから……

「ガディアス、ルシオラ・アレキテス：出る。」

アレクサンドリア級のハッチが開き、ルシオラのガディアスが両肩のシールドスラスタから大量のGN粒子を噴出し、出撃した。

「所属不明の戦艦を補足しました。」

コロニー国家領内で、連邦の戦艦とは明らかに違うフォルムの戦艦が航行していた。

それは私設武装組織『ソレスタルビーイング』が保有している多目的輸送艦『プトレマイオス3』通称『トレミー』

「ヴェーダの予測通り、解放戦線の物かと思われませう。」

そのトレミーのブリッジで戦術オペレーターの李 香蘭とリコッタ・フルームが報告する。

二人ともまだ、10代の少女だが、ソレスタルビーイングが正式にスカウトした為、優秀なクルーだった。

「また、いつものテロか？飽きないな解放戦線も……」

トレミーの砲撃主席でラッセ・アイオンが呆れ気味にそう言う。

「だけど……油断は禁物」

操舵席のリズがそう言うが、ラッセは油断をしている訳でもない。

クルーの中で最も古株のラッセは戦場で予定外の事が起こる事がある事を良く知っている。

「それに一番近い国境線に連邦の戦艦が接近してるしね。」

艦長席でマリアはそう言う。

彼女は第一次ソレスタルビーイング事変から戦っている元ガンダムマイスターでかつてはユノ・アークスと言うコードネームで戦い、時期は戦闘指揮もとっていた。

「連中は増援を送って来ると思うか？艦長」

「可能性は高いと思うよ。スメラギさんも同様の見解だし、アベルもそう思ったから自分の部下を送って来てくれたと思うしね。」

マリアは夫のアベルが自分の部下を無駄に動かさない事を知っている。

だからこそ、マリアはそう判断出来る。

「だから、増援は来ると思うよ。アニエスとロックオンにはそう伝えておいて。」

「了解です。」

リコッタはコンソールを操作して、その事を二人に使えた。

「と言う訳だから、注意しておいてね。」

「分かったわ。」

トレミーの一室で茶髪を短くしている少女は答えた。

一件、普通の少女に見えるが、彼女は純粹種のイノベーターでソレスタルビーイングのガンダムマイスター、アニエス・グラス。

「増援の話し聞いたか？」

アニエスがブリッジとの通信をしていると背後から声がかかり、アニエスは少し不機嫌そうに振り向く。

「ロックくらいしたらどうなの？ロックオン」

ロックオンと呼ばれた青年は一瞬あっけに取られるが、すぐに噴き出した。

「生憎と俺はお前みたいなまな板には興味無いんでね。艦長程で無いにしても最低でもレムリアくらいは欲しいね。」

ロックオンはやれやれと肩をすくめている。

ロックオンはそうは言っているがこれでもソレスタルビーイングでガンダムマイスターをしている。

先代のロックオン・ストラトスことライル・ディランディの元で射撃の訓練を受けてその実力はマイスターの中で随一を誇っている。

だからこそ、ロックオン・ストラトスと言うコードネームを引き継いでいる。

「生憎とイノベーターは成長速度が人間に比べて遅いのよ。私の場合はこれからのよ。」

アニエスはそう言うがそれは俗説である。

一般的にイノベーターは常人の二倍近い寿命を持つが故に老化の速度は人間に比べると遅いが、成長の速度は変わらないとされている。

つまりはアニエスの発育は完全に個人差の問題と言える。

「ああ…そうかい。」

その事を知っているロックオンは適当に聞き流す。

下手にからかうと藪蛇なのはすでに経験済みだからだ。

「行くわよ。」

アニエスはヘルメットを持って部屋を出て行く。

「ミリシアさん、ガンダムの調整は？」

「出来てるわ。いつでも行ける。」

アニエスとロックオンは格納庫に入るとノーマルスーツを来たミリシアが八口に指示を出していた。

20年前の戦いで深手を負ったミリシアだが、持ち前の強運で生き延びていた。

「んじゃちよっくら、行つて来ますよ。」

ロックオンはそう言い二人はガンダムに乗り込んだ。

ロックオンは機体に入り込むと、機体内の端末に歴代のロックオンの相棒を務めたオレンジ色の八口を乗せた。

「第一、第二カタパルトオープン……」

香蘭のアナウンスでロックオンのガンダム、コマンドガンダムがリニアカタパルトに移動される。

「コマンド、リニアカタパルトに固定…タイミングをコマンドに譲渡します。」

「オーライ……コマンドガンダム、ロックオン・ストラトス。出撃する。」

ロックオンがそう言いレバーを動かすとコマンドガンダムは射出された。

「続いて、セイバーの射出準備……」

「装備はアイズを使用します。」

トレミーの中央の第一カタパルトにセットされたセイバーガンダムにカタパルト内の作業アームがアイズユニットをセイバーの背部に装着した。



セイバーは近接戦闘に特化しているが、作戦に合わせて、背部を換装することで様々な特性を持った機体となる。

今回の装備はかつて、イノベイドが製造した1.5ガンダムに装備されていた背部バインダーを改造したユニットを装備し、セイバーの砲撃能力や機動力をバランス良く強化することが出来る。

「了解……セイバーガンダム、アニエス・グラス……行きます。」

セイバーガンダムは射出され、二機のガンダムは作戦行動に入る。

ソレスタルビーイング、連邦軍、人類解放戦線……この何気ない作戦行動が世界を大きく揺るがす変革の始まりである事をこの時は誰も知るよしがなかった。

## Mission 02 新時代の邂逅

### 『コロニー国家』

20年前のELS戦役後の数年後に設立されたラグランジュ2にあるコロニー群の総称。

表向きは地球圏に飛来したELSの居住を目的にした新国家だが、実際はELSを必要以上に地球に踏みこませない政府の政策の一つだった。

人類は完全にELSを信用した訳ではなかった。

例え誤解から交戦状態となり、その誤解が解けたとしても地球を守る為に戦った軍人やELSが地球に落ちた時に起こした事件で死んだ人が帰って来る事はなく、完全に受け入れてしまえば、暴動は必ずだっかからだ。

だが、ELSは人類とは違い宇宙環境に適した進化をしていた為にその能力を活かしてコロニー開発にかかわらせる事で一気に宇宙開発が進み、コロニー国家は連邦政府に加盟する事が許された。

しかし、その力を危険化した一部の者たちとELSの力を有効に使うとした者たちが対立し、議論の結果コロニー国家の国家元首には議会への参加権と発言権のみを与えるや、独自の戦力を持つことの禁止や国家と言う事を理由に連邦政府は緊急時以外は軍の出入りをしないなどの事実上、不平等な条約を決議した。

一方のELS側も人類を取り込んだ事や刹那・F・セイエイとの意

識共有で人類の事を知り、それを受け入れるしかなかった。

コロニー国家には連邦軍が簡単に入って来れない事を良い事にテロリストの温床をなっているが、政府は大した手を撃つことはなかった。

「目標、視認：作戦行動に入る。」

コロニー国家領内のコロニーに接近する機影があった。

GN-X?……20年前のELS戦役では連邦軍の主力機として活躍した機体だが、GN-X?の配備が進むにつれてその存在は旧式として廃れて行き、今では非正規軍で運用される事が殆どとなっている。

そのGN-X?は編隊を組んで、コロニーに接近している。

武装をしている事から宇宙での作業をするためでない事が分かる。

「化け物が……これ以上、俺達の故郷で好きにはさせない!」

一機のGN-X?がGNバズーカをコロニーに向けて放とうとするが、そのGN-X?は粒子ビームでバズーカごと、腕を撃ち抜かれた。

「敵襲だど!」

「連邦はここには来れないはずじゃないのか!」

連邦軍はコロニー国家領内であコロニー国家の要請か、緊急時でしか入る事は出来ない。

しかし、攻撃をしたのは連邦軍のMSではなかった。

「あのMSは……」

「ガンダム！」

彼らに攻撃を仕掛けたのは私設武装組織『ソレスタルビーイング』

どこの国家に属している訳ではない彼らに国境など意味を成さない。

「報告には聞いてたけど…旧式ばかりね。」

「相手はコアファイターを搭載してないタイプだ。分かってんだろうな。」

ロックオンは狙撃用のスコープを除き、アニエスにそう言う。

今回の任務は相手を撃墜することは避けなくてはならない。

「分かってるわ。ロックオンこそ、狙いを外さないでよ。」

アニエスはそう言い機体を加速させた。

「そんじゃ……私のお給料の為にやられてよね！」

セイバーはGNソード？をソードモードにするとGN-X？に切りかかる。

GN-X?はビームライフルで応戦するが、セイバーは反撃をもちもしないで、GN-X?の右腕と頭部を両断する。

「何でガンダムが我々に!」

GN-X?がロングビームライフルを構えるが、背後からの攻撃で頭部が吹き飛ばされて、セイバーはGNソード?をライフルモードにして、ロングビームライフルを破壊した。

「たく……隙を見せ過ぎなんだよ……」

コロニーから少し離れたところで、コマンドガンダムがGNスナイパーライフル?を構えている。

「私一人でも十分なのよね!」

セイバーはGNソードビットを射出し、GN-X?を胴体だけに切り刻む。

「こんな旧式相手にさ!」

「くそ!こんなはずでは!」

残った二機は撤退しようとするが、コマンドの狙撃で戦闘不能となる。

「後は母艦だけだ。」

コマンドは後退するために反転をしようとしているバイガル級のス

ラスターをGNスナイパーライフル？で撃ち抜いた。

「これで動けないだろ。」

「後は仕上げよ。」

セイバーはGNソード？のソードモードでバイガル級のビーム砲を切り裂いて破壊する。

「ミッション完了ね。」

「ああ…タイミングもバッチリだ。」

ロックオンがそう言うのと4機のMSが接近して来る。

戦闘機に近いフォルムの飛行形態のソルブレイヴに牽引されて専用のカスタムがされているガラツゾ？、砲撃戦用の装備をしているGN-X？、イノベーター専用機のカイノス。

戦闘が開始された事で国境沿いで待機していたメーティアからのMS隊だった。

「後は連邦に任せれば良い…俺達は撤退するぞ。」

「………そうね。」

ロックオンがそう言い機体を引かせようとするのとアニエスが曖昧な返事をする。

「あれはガンダムか………」

「俺達の任務はあくまでもテロリストの捕獲だ。連中は攻撃を受けるまでは放っておけ……」

ゴタードがそう言い大破したGN-X?に接近している。

「何だ……殺気か?どこから……」

そんな中、ライトは妙な殺気を感じていた。

「来るわ!」

「来るぞ!」

アニエスとライトがほぼ同時に叫ぶを強力な粒子ビームがバイガル級を葬り去り、戦闘宙域を漂っているGN-X?も何機か巻き込んだ。

「敵襲か!各機散開!追撃に備えろ!」

ゴタードが指示を出し、メーティアのMS隊は臨戦態勢を取った。

「おいおい……増援が来る可能性は聞いてたが……こいつは……」

「貧乏くじ!貧乏くじ!」

「そんなレベルじゃねえだろ……」

「最悪ね……」

一方、ソレスタルビーイングの方は敵を補足していた。

「連邦軍のイノベーター専用機に…イノベーター専用のガンダム…  
…破壊する！ファンング！」

バイガル級を葬った機体、ガディアスから20基のGNファンングが  
射出され、セイバーとカイノスに向かう。

「狙いはイノベーターって訳……本当に最悪ね！」

「ちい！」

セイバーとカイノスはファンングからの攻撃を回避し、応戦する。

「バンとセシリアは大破した機体だけでも回収しろ！」

「了解！」

「分かりましたわ！」

バンのGN-X？とセシリアのガラツゾ？は大破したGN-X？に  
向かうが粒子ビームが邪魔をする。

「増援か！」

「あのMSは……」

二機の邪魔をした機体はバンのGN-X？の指揮官機に高軌道ユニットを装備しているが、機体が真っ赤に染め上げられている。

赤い機体はアベル専用機のイメージが強い為、機体を赤く塗装させ



ることは嫌われる為、戦場での赤い機体はトランザムを発動している機体くらいしか見かけないが、その機体は明らかに赤い塗装をされている。

「テロリストが赤い機体など！」

セシリアのガラツゾはGNバルカンを連射しながら、赤いGN-X?に向かう。

「セシリア！たく！」

バンはセシリアを止めても無駄だと判断し、赤いGN-X?にGNキャノンを放つ。

「その程度の砲撃が！」

赤いGN-X?のパイロット、バットはそう言い二機からの攻撃を回避し、ロングビームライフルで反撃した。

「その程度の攻撃が利くとお思いですか！」

ガラツゾ?はGNフィールドで赤いGN-X?の攻撃を防ぐ。

「GNフィールドか……面倒な。」

赤いGN-X?はビームサーベルを抜くとガラツゾ?に接近する。

「そつはさせない！」

しかし、GN-X?がビームライフルで牽制する。

「邪魔な……」

「お行きなさい！ファング！」

ガラッゾ？は右肩に装備されていた、GNソードファングを射出した。

「ファングか……しかし！」

赤いGN-X？はGNソードファングをかわすとビームサーベルで切り裂き、バルカンで破壊する。

「まだですわ！」

ガラッゾ？は残った二基のファングを差し向けて、GNロングソードを抜いて接近する。

「遅いんだよ。」

赤いGN-X？はGNソードファングをかわし、ガラッゾ？に接近し、切りかかるガラッゾ？の腕を逆に切り落とした。

「セリシア！」

GN-X？は腕に内蔵されているビームマシンガンで赤いGN-X？を牽制して引き離す。

「セリシア、まだいけるか？」

「当然ですわ。大佐と同じ赤い機体を使うとは万死でも足りませんわ。」

ガラッゾ？はもう片方の手にロングソードを持って構える。

「援護する。」

「お任せしましたわ。」

GN-X？はGNキャノンを放ち、ガラッゾ？は赤いGN-X？に向かう。

「ミサイル接近！ミサイル接近！」

前線の援護狙撃をしていたコマンドガンダムの中でハロが警告をして、ロックオンは周囲を警戒すると大量のミサイルがコロニーに向けられて放たれていた。

「マジかよー！」

コマンドはGNスナイパーライフル？で迎撃するが、威力と射程を重視したスナイパーライフル？では手数が足りない。

「こいつじゃ無理だ！ハロ！」

「了解！了解！」

コマンドのホルスターフルシールドが開閉し、その中にスナイパーライフル？を収容すると背部のGNガトリングライフル？も持たせる。

「こいつで何とか！」

コマンドはガトリングライフルを？をミサイルに向けて連射した。

コマンドの放った粒子ビームは次々とミサイルを撃墜していく。

「全弾破壊！全弾破壊！」

「終わりが……」

ロックオンがミサイル攻撃が止んだと思っていると今度は強力な粒子ビームが飛んで来て、とっさにかわした。

「まだ増援かよ！」

「冗談だろ……ガンダムかよ。」

「相手なんて関係ないわよ。行くわよ。ジオナサン」

攻撃を行ったのはアレクサンドリア級から出撃したMS隊だった。

ジオナサンの乗るガデッサ？がGNメガランチャー？を放ち、リーナのガラッゾ？がGNバルカンを放ちながら、コマンドに接近する。

「幾らガンダムでも！」

ガラッゾ？は10本のビームサーベルを展開すると、コマンドに切りかかる。

「ちい！」

コマンドはガラッゾ？の攻撃をかわすが、ガデッサ？の砲撃が飛んで来て無理な体勢でかわす。

「後方注意！後方注意！」

八口の警告でロックオンは背後を向くとGN-X？がビームライフルを放ち、コマンドの背部に直撃する。

「まだいんのかよ！」

コマンドは一番厄介な近接戦闘タイプの機体のガラッゾ？にガトリングライフル？を向けて放つが、ガラッゾ？はGNフィールドで防いだ。

「GNフィールドかよ！面倒だなおい！」

コマンドはガトリングライフル？を捨てるとGNホルスターフルシールドからGNスナイパーライフルTYPE-Pを取りだしてガラッゾ？に放つ。

「そんな攻撃なんてね！」

ガラッゾ？はGNフィールドで防ごうとしたが、対GNフィールド用のコーティングがされている弾丸はGNフィールドを突破し、ガラッゾ？も左腕を吹き飛ばす。

「リーナ！」

「この程度！」

ガラツゾ？は右肩に内蔵されているGNショートキャノンでコマンドを牽制する。

「GNフィールドがなければ！」

コマンドは再び、スナイパーライフルTYPE-Pを向けるが、ガデッサ？も砲撃や他のGN-X？の粒子ビームで阻まれる。

「糞つたれ！」

コマンド全方位からの集中砲火を受けて、GNホルスターフルシールドで防いでいる。

「アニエス！何とかしてくれ！この数は面倒だ！」

ロックオンはセイバーに通信を繋いでそう言う。

コマンドガンダムは従来の狙撃型のガンダムの中でも最も近接能力を完全に無視した射撃戦用のガンダムで、遠距離での戦闘では圧倒的な優位を持つが、今回の戦闘のようにある程度の距離まで接近された上に囲まれた戦闘ではその能力をフルに使う事は出来ない。

そのため、単機での戦闘は不向きな機体と言える。

「だったら、ロックオンがこいつの相手する？私は構わないけど」

モニターのはガディアスと粒子ビームを撃ち合い、高速で動きまわるセイバーが映し出されている。

「遠慮してくわ。そっちは任せた。」

その様子を見たロックオンはそう判断する。

ガディアスの粒子ビームをかわしているのはセイバーの機動性とア  
ニエスのイノベーターとしての能力だからで、コマンドで同じ事を  
しろと言われても不可能だ。

だからこそ、数が多くても何とか出来そうなこちらをロックオンは  
選択した。

「とは言ってもね……」

しかし、だからと言ってこっちの状況が良くなる事はないと思われ  
たが、GN-X?が破壊される。

「何だ？」

「ガンダムのパイロット！聞こえるか？共通の敵だ。援護する。」

ゴタードのソルブレイヴは飛行形態で粒子ビームを放ちながら、接  
近して来る。

「連邦軍か？ありがたい！つっても援護すんのは俺だけだな！」

コマンドは後方に引きながらGNスナイパーライフル?を構える。

「あの動き……はやり、イノベーターか！」

ガディアスのファンングや粒子ビームを脅威的な反応で回避し続けるセイバーガンダムとカイノスを見てルシオラはそう判断した。

「イノベーターは破壊する！」

ガディアスはGNメガビーム砲をセイバーに放つ。

「流石のガンダムもあの火力はやばいわよ！」

セイバーは粒子ビームをかわすが、粒子ビームは屈曲しセイバーへと向かって来る。

「ビームを曲げた！最悪よ！」

ガディアスのGNメガビーム砲はかつて、イノベイドが製造した大型MA『レグナント』に搭載された物を改良している。

当然、粒子ビームを曲げる事が可能。

セイバーは何度もかわすがそのつど粒子ビームはセイバーを追うように屈曲する。

「しつこい！」

セイバーはGNソードビットを射出し、GNフィールドを発生させて防いだ。

そして、GNソード？をライフルモードにして放つ。

「貰った！」



ガディアスがセイバーに気を取られていた隙にカイノスは背後に回り込んでビームライフルを向けている。

「それがどうした！」

二機の粒子ビームはガディアスのGNフィールドで防がれる。

「あの火力でGNフィールドって……最悪！そんな面倒な機体はレムリアのガンダムだけにしてよね！」

アニメスはそう言いながらもファングからの攻撃をかわす。

「GNフィールドか……厄介な物を搭載している。」

カイノスもファングの攻撃を回避し、ファングにビームライフルを放ち撃ち落とす。

「GNフィールドなら、接近さえ出来れば……」

セイバーには実体剣が装備されている。

GNフィールドに対抗するには最も有効な装備だが、ガディアスの火力の前には接近して間合いを詰めるのも容易な事ではない上に、ソードビットを差し向けたら守りが薄くなる。

「どっぴにか接近出来れば……」

「この機体に対GNフィールド用の装備はない……セシリアの機体も赤い奴に抑えられている……あのガンダムには実体剣が装備され

ているのか……仕方がない。」

カインスは背部のGNビットをガディアスに差し向けた。

ビットはガディアスの周囲を飛び回り粒子ビームを放つが、ガディアスのGNフィールドは突破できない。

「小賢しい!」

ガディアスは両腕のガトリング砲と頭部のバルカンで攻撃するもビットには当たらない。

「今のうちね!」

ガディアスがビットに気を取られている隙にセイバーは腰のGNソード?を持ち、展開していたGNソードビットを集約し、GNバスターソードとした。

「ガンダム!」

ルシオラはGNスピアでセイバーの一撃を受け止めた。

「こつちと同じ出力を持つてんの!」

「舐めるな!」

ガディアスはGNスピアを持っていない左腕でセイバーを殴り飛ばした。

「まだよ!」

セイバーは殴り飛ばされながらもGNバスターソードをGNバスターライフルにしていた。

「この距離なら！」

アニメスは引き金を引き、バスターライフルから粒子ビームが放たれる。

ガディアスはGNフィールドを展開するも防ぎきる事は出来なかったが、威力はだいぶ軽減していたので肩のスラスターフィールドで防ぐ事が出来たが、スラスターフィールドの表面はバスターライフルの威力で焼け焦げている。

「ガンダム！」

「隙だらけだな！」

ガディアスがセイバーに追撃をしようとするが、カイノスがビームサーベルを抜いて接近していた。

「邪魔をするな！連邦のイノベーター！」

カイノスはガディアスの左腕を肘から切り裂いた。

「くっ！」

「終わらせる！」

カイノスはガディアスの胸部にビームサーベルを突き刺そうとする

が、ビームサーベルを持っていた右腕が撃ち抜かれる。

「ちい！」

ガディアスは右腕のガトリング砲でカイノスを牽制し、カイノスはシールドで防ぎながら、後退する。

「赤い奴か！あの距離で撃って来たのか！」

カイノスのモニターの隅でバンとセシリアと交戦している赤いGN-X？がロングビームライフルを向けていたのが見えた。

「ガディアスが損傷したか……ルシオラ、撤退するぞ。」

「……了解」

バットはガディアスが損傷し、援護に来た先遣隊が全滅している事から撤退を判断し、バックパックのミサイルは一斉に戦場に放つ。

ミサイルで煙幕が張られて、各機は視界を奪われた。

「引くぞ！」

解放戦線のMSは一斉に撤退を始める。

「お待ちなさい！」

「よせ、セリシア！無策で追えば反撃を食らう。」

「しかし！」

バンの判断はもつともだが、敬愛するアベルと同じ色の機体を使われたセリシアの怒りは収まらない。

「MS隊は帰投しろ。」

戦場に到着したメーティアから連邦軍の機体に通信が送られて来る。

「セリシア」

「……分かりましたわ……」

セリシアは渋々だが、命令に従いメーティアに帰投する。

「連中も引いたし、俺達も帰るか。」

「そうね。これ以上、ここに居ても面倒事しかないわね。」

ア二エス達も合流し、撤退を始めた。

「ガンダムも引くか……艦長、ガンダムはどうします?」

「我々の任務はあくまでもコロニーに対するテロの阻止だ。ソレスタルビーイングの殲滅は任務には入っていない。それに少佐はガンダム二機を相手に現状の戦力に対応できると?」

「無理ですな。」

相手は二機だが、すでに連邦軍もセリシアのガラッゾ?とライトのカイノスが腕を片方無くしている。

数は倍でも勝ち目はない。

「ならば、帰投して中将の判断を仰ぐしかあるまい？」

「そうですね。」

はなっからガンダムとは戦う気のない事を悟るとゴタード達もメーティアに帰投した。

「セイバー、コマンド収容しました。」

戦闘を終えたガンダム二機は無事、トレミーに帰還していた。

「機関最大で現宙域から離脱します。」

「…了解」

ガンダムを収容したトレミーはすぐに宙域から離脱する。

この一件で連邦軍の戦艦が宙域に事件の捜査に来るため、ソレスタルビーイングがいては何かと都合が悪いからだ。

ソレスタルビーイングは政府から黙認状態だが、軍としてもソレスタルビーイングと遭遇すれば何かしらの対処をせざる負えない。

「まさか、本当に増援が出て来るとはな。」

「そうだね。それにかなり厄介な相手みたいだったし……」

セイバーとコマンドは現在存在しているMSの中でもトップクラスの性能を誇っている。

セイバーを火力と防御力で抑えたガディアスと性能では圧倒的に劣っても、組織戦で抑えたMS隊は十分な脅威と言える。

「解放戦線にそこまでの戦力があるなんて……ガンダムを分散させるのは不味いのでは？」

「そうだね。でも、あれだけの部隊はそうそういないだろうし、ガンダムをトレミーに集中させたら、動かし辛いからね。」

だからこそ、トレミーにはセイバーとコマンドしか搭載しておらず、他の二機は地上に置いている。

「だけど、備えはしておかないとね。リズ、進路をソレスタルビーイングに……一度、母艦に帰投して装備を整えるわ。」

「了解」

ガンダムを集中出来ない以上はガンダムの装備を整えるしかない。

そう判断したマリアは自分達の本拠地に艦を向けさせた。

「どついつつもりだ？ルシオラ？」

アレキサンドリア級では戻って来たルシオラをガイウスが問い詰めている。

彼女の任務は先遣隊の援護、しかし、ルシオラは母艦を沈め、大破したMSを破壊している。

「彼らを連邦に捕縛させると我々の情報が漏れる恐れがあります。作戦が失敗に終わった以上、機密保持を優先しました。」

ルシオラの言い分は正しい…だが、それは軍隊での話だ。

人類解放戦線は軍隊や組織の名前ではない。

イノベーターやイノベイド、ELSと言った人類以外を駆逐し、人類を解放すると言う思想の持ち主の中でも武力を行使する危険思想の持ち主の集まりの総称が人類解放戦線。

そのため、部隊としては機能しているが、軍隊としてはそれほど機能はしていない。

部隊同士の繋がりはあるが、無い部隊も沢山存在している。

そのため、機密保持とは言え、口を塞ぐ理由には少し弱い。

もっとも、ソレスタルビーイングがMSを撃墜しなかったのは連邦軍に捕縛させて、MSの入手ルートや補給路を割り出させる為だったので、ルシオラの判断は正しいとも言える。



「……もう良い。下がれ。」

「了解しました。」

ルシオラはそう言い出て行く。

本来なら、面識が無くとも、友軍の彼らの口を塞ぐ必要をガイウスは認めないが、ルシオラは任務を効率良く遂行するため調整を受けている事を知っている為、これ以上は何も良わなかった。

「糞が……」

幾ら、戦いに勝利するためでもルシオラはまだ18で本来なら守られる立場に居てもおかしくは無い年頃なのに、そんなルシオラを戦闘用の兵器として調整して寄こした上の連中にガイウスは嫌悪感を抱かずにはいらなかった。

「報告は聞いた。イノベーター専用機が出て来たとか？」

「その通りです。」

アルエットは艦長室で通信をしていた。

相手は彼女の直属の上司に当たるアベル・ウォーカー

「成程……だとしたら、ライトが機体を破損したのも頷ける。性能

ではツインドライヴを搭載している向こうの機体の方が上だ。」

「大尉の機体を破損させたのは赤いGN-Xです。」

アルエットが報告するとアベルは興味深そうにした。

「ほう……赤いMS?」

「ええ……ノマル中尉とベルシュタイン中尉の二人を相手に互角以上の戦いをしました。」

バンとセシリアのコンビは軍内部でも随一を誇り、それだけでも赤いMS……バットの实力が高い事が分かる。

「あの二人をね……」

「それで中将……現場に居合わせたガンダムの方は如何いたします?」

「おかしなことを聞く。」

アベルはアルエットにそう言う。

「ガンダムもソレスタルビーイングも存在していないんだ。存在しないものとどうやって対処する。」

アベルがそう言いアルエットは理解する。

アベルは初めからソレスタルビーイングもガンダムも追うつもりは愚か、その存在すら認める気はないのだと。

「了解しました。」

「中佐には補給と整備を終え次第、その部隊の追撃の任について貰う。無論、増援も用意する。」

「頼みます。」

アルエットはそう言い通信を切るとため息をついた。

「食えない人だ……」

今回の任務を命じられた時から覚悟はしていたが、本当に厄介な任務を押しつけられた事のため息をつかずにはいられなかった。

「これ以上の厄介事は御免だぞ……」

アルエットは切実にそう思っていた。

「ずいぶん面白い事になりそうだ。」

メーティアとの通信を終えたアベルはそう言う。

「これから世界がどう動くのが見ものだな……」

そう言うアベルは表情こそは真剣な顔をしていて、彼のシンパが見れば卒倒ものだったが、その口元は明らかに笑っている。

「破滅か変革か……当分は退屈しないで済みそうだ。」

この戦場での出会いが世界を少しづつだか、確実に動きだす前兆である事をアベルはイノベーターとしての直感で漠然とだが感じていた。

## Mission 03 邂逅の後

「シャロン・ウォーカー少尉入ります。」

そう言い俺の執務室に愛娘が入って来る。

シャロンは執務室に入るなり、直立不動で敬礼する。

しかし……最近のシャロンはマリアに似て来ている。

「それで、私に用とはなんでしょう。中将」

あくまでもシャロンは娘としてではなく、軍人として俺に聞いて来る。

昔はパパ…パパと俺の後をついて来たっけ……

娘の成長が嬉しいが複雑だな……

「少尉がデータ収集を行っている試作機の事だ。」

「シルフィードの事ですか？」

そう言えば、そう言う機体名だったな。

「そうだ。一応はコリニック社からテストの報告は来ているがパイロットの少尉の意見も聞きたい。」

半分はシャロンを呼ぶ口実だが、データと実際に乗った者との反応

の差は良くある事だ。

「そうですね……機体の加速性や機動力には申し分はありません。武装も複合兵器を中心としているので、量産向きです。しかしながら、可変機ですので、機体の強度の問題も出てきてますし、コアファイターを搭載するのもソルブレイヴ同様難しいとスタッフの意見です。武装も複合兵器は量産は可能ですが、扱いが難しいと言う面もあります。技術者達は可変機構と複合兵器を廃止し、正式にロールアウトする予定と聞いています。」

まあ…俺のところに来た報告と大差無いな。

メアリーが社長になってからは、以前のようにさまざまなところに兵器を売り渡して無いため、テロの頻度も物凄く低下した。

つづか、コリニツク社が真つ先の俺達に武力介入を受けるべきだったのかも知れないな。

「重力下での運用データは取り終えましたので、次は無重力下での運用データと戦闘データが欲しいを仰っています。」

「聞いている。」

だからこそ、今日シャロンをここに呼んだ。

「それで少尉にはすぐに機体ともども、宇宙に上がって貰う。配属先はメーティアだ。」

「中将直属ですか？」

「そうだ。ミーティアは現在、宇宙で人類解放戦線の物と思しき、アレクサンドリア級の追撃の任を与えている。補給と増援が終え次第、捜索にかかる予定だ。少尉は増援とともにミーティアに向かい、ミーティアに乗艦し、そのままルーラー中佐の指揮下で追撃の任について欲しい。」

相手はイノベーター専用機に俺の機体と同じ赤いMSを所有している。

一筋縄ではいかない相手だ。

シャロンの試作機はカタログスペックでは相当な物と聞く。

そいつを投入するのも一興だ。

アルエットなら、シャロンを死なす事もないだろうしな。

それにバカ息子はともかく、愛娘は自分の目の届く範囲において行きたい。

「了解しました。すぐに宇宙に上がる準備を致します。」

シャロンはそう言い再び敬礼をして執務室を出て行き。

……………それだけ？

ここ半年近くは何かと忙しかったからまともに話もしていないのに……

「ハア……………」

「トレミー…ドックに着艦しました。」

私達は戦闘から、母艦に帰投している。

「何とか、無事に帰投出来たな。」

ラッセはそう言うけど、問題も山積みだよ。

昔にデータで見たイノベーター専用機に赤いMS……考えないといけない問題が多過ぎるよ。

それをこれから、スメラギさんと一緒に考えないといけない。

あれだけの戦力が解放戦線が持っているのは正直なところ、予想外だった。

作戦事態は完全に成功した訳ではないけれど、失敗した訳でもないから良しとしよう。

過ぎた事を言っても仕方がないしね。

「マイスターにはすぐに地上に降りて貰わないといけないから、そう伝えて。」

「分かりました。」



あの二人には悪いけど、地上でのミッションが控えて言えるから休む時間もほとんどないかな……

それに地上ではそろそろ、マレールとレムリアのミッションが始まる。

そちらもある程度は厄介な事になる可能性があるけど、今回のような事は無いと思うし、サポートにアレルヤも入っているから大丈夫だと信じたい。」

「ガンダムの整備が終わり次第、トレミーの整備にかかるから、それが終わるまで各員は次の航海に備えて、英気を養うように」

とにかく、今は出来る事やって行かないと……

「直せないだど？」

連邦軍を撤いた俺達は暗礁宙域に身を潜ませている。

船のメカニックがルシオラのカディアスを直せないと言ったらしい。

「カディアスは20年も前に製造された機体だ。パーツもほとんど生産されていない。多少の損傷ならともかく、片腕を切り裂かれ、シールドも一部が破損している。ここの物資と設備では直せないのは当然の事だ。」

当のルシオラは大して気にした様子はない。

「お前は良いのか？それでも……」

パイロットにとって自分の機体が壊れたままなのは面白くないだろう。

「機体の稼働には問題ない。GNフィールドが使えずに片腕が無い程度では私のガディアスは問題ない。」

確かにルシオラの腕なら問題ないが……前の戦闘のようにガンダムとやり合つとすれば、致命的とも言える。

「例え、機体が果てようと、私はイノベーターを破壊する。私はそのための存在なのだから」

ルシオラはそう言い格納庫から出て行く。

本当にお前はそれで良いのかよ……

与えられた役目をこなすだけで……俺はそんなのは御免だ。

誰かに与えられた人生など、俺はまっぴら御免だ。

そのために俺はここに居る。

ここに居れば、あの男……アベル・ウォーカーと対峙することも出来るだろうからな。

俺の人生を歪めたあの男を俺は決して許さない。

俺があの男を殺す。

ガンダムとの予期せぬ共闘を終えた俺達はメーティアに帰還すると、周囲の警戒を行ったが、すでに解放戦線の戦艦もMSも発見できなかった。

艦長は中将から追撃の命を受けて、そのための戦力の補強が到着するのを現宙域で待つつもりだ。

その間に俺のGN-Xと隊長のソルブレイヴの整備をやっておくらしい。

セリシアのガラッゾとライトのカイノスは腕を落とされているから、補給に予備のパーツが来るまでは修理が出来ないらしい。

よりもよって、破損率の低い二機が破損した為、予備パーツが足りず、補給が到着する前に初めてしまつと中途半端なところまでしか出来ないと聞いている。

そんな俺達が出来る事は少ない。

本来なら、あの敵を想定したシュミレーションでも行つべきだが、コロニー国家の領内に居る以上はいつテロリストの襲撃があつてもおかしくはない。

だから、俺達が体力を消耗するのは避けたい。

だが、何もしない訳にもいかない為、俺達はブリーフィングルーム

で先の戦闘を検証している。

「この機体は20年も前に製造されたイノベーター専用機だと判明した。」

隊長がそう言いライトと青いガンダムが戦った大型のMSの映像を出す。

「20年前……ELS戦役の辺りですね。」

20年前のELS戦役の時は俺はまだ5歳だった。

世界が大変な事になりかけていたが、幼い俺には理解できなかった事を今でも少し覚えている。

「そつだ。」

「20年も前に作られた機体にあれだけの性能を持たせたけど？」

確かに……ガンダムの性能は言う事は無いが、ライトのカイノスは軍のMSの中でも最高クラスの機体で、ライトはイノベーターだ。

認めたくはないが、ライトの実力は本物だ。

「この機体には当時の最先端の技術を注ぎ込んでいる。その結果が20年後の現在でも戦力としてこれだけの戦いが出来ると言う訳だ。」

確か、ツインドライブシステム……

20年以上前にソレスタルビーイングが確立したGNドライブの新しい運用法だと聞いている。

二基のGNドライブを同調させることで粒子量が桁違いになるらしい……

詳しい理論は分らんが、ソレスタルビーイングの二個付きと呼ばれていたガンダムは不完全ながらも当時の最新鋭機を相手に圧倒も出来たと聞いている。

未だに研究が続けられているが、量産機への実用段階には程遠いらしい。

「正直な話……あのガンダムが実体剣を装備していてくれて助かったよ。こっちにはGNフィールドに対抗出来るのはセシリアのガラツゾだけだ。そのセシリアも赤いMSにバンと一緒に抑え込まれていたしな。」

赤いMS……機体自体は俺のGN-Xの指揮官機用に高軌道ユニットを装備していただけの機体だったが、俺とセシリアの二人掛かりでも完全に押されていた。

「何なんですの！あのMSは！」

ライトが赤いGN-Xの事を言うとセシリアが怒り出す。

「大佐の真似をして！許せませんわ！」

セシリアの気持ちも今回ばかりは分からない事もないな。

ウォーカー中將は軍人なら誰でも尊敬している。

その中將のパーソナルカラーを使うのは軍のイノベーターでもそんな事はしない。

すれば、周りからバッシングを受けるのが目に見えているからな。

「落ち着け、セリシア……お前の気持ちも分かるが、お前とバンが抑え込まれたのは事実だ。事実を事実として受け止めないと死ぬぞ。」

「……分かってますわ。それでも気は収まりませんけど……」

流石は隊長だ。

こうなったセシリアを止められるのは艦の中でも中佐と隊長くらいだからな。

俺はライトは止める事は出来やしない。

「それに古い機体が多いけれど、緑のガンダムを完全に抑え込んでますね。」

「そうだったな。あのガンダムは狙撃型の流れを汲む機体と思うが、近接戦闘をある程度は捨てていたんだらう。」

「青いガンダムは近接戦闘に強そうだったしな。」

だから、二機で行動をしていたと言う事が……

互いが互いの短所を補い合い、長所を活かす為に……

「機体特性のせいだけじゃない。俺も戦ったから分かるが、連中は普通の解放戦線の奴らとは違う。部隊として統率がとれていた。」

映像を見る限り、隊長の言う通りだ。

一般的に人類解放戦線と呼ばれる連中はELSを中心とし、時にはイノベーターやイノベイドを排斥する団体で、俺達のように正規の訓練を受けた者はほとんどいないから、連携など素人も良いところだ。

しかし、連中は古い世代のMSを中心にガンダムと対等に戦っている。

例え、ガンダムの苦手な戦い方だとしても相当なものだ。

「相手はただのテロリストと見るのは危険と言う事ですね？」

「バンの言う通りだ。相手を素人の集まりだと考えるのは危険だ。各自、その事を肝に銘じておけ。」

確かに相手は通常のテロリストではない。

しかし、俺達は連邦市民を守る軍人だ。

俺達には世界の平和を守る義務と責任がある。

裏で行動しているソレスタルビーイングに頼ってばかりではいられない。

「どうしたんだよ。アニエス？」

「危険手当が出ないか、かけあってるのよ。」

私達は母艦に帰投し、ガンダムの整備が終わるまでは自由時間だけで、整備が終わり次第、地上に降りて任務があるから艦内をぶらつく事も出来やしない。

「無理だつて、艦長は増援は来るって言ってたしさ……間違った判断はしてねえだろ？」

「確かにそうだけど……」

確かに艦長はその可能性を示唆してたけどさ……

あんなんが出て来るなんて聞いて無いし！

「まあ……流石にあれはきついけどな……」

「でしょ？」

データを見たけど、あのMSはツインドライブ搭載機……つまりは出力的には私達のガンダムとたを張れる出力じゃない……

最悪じゃない。



ガンダムの出力は段違いだったけど、アイツ相手にはそうもいかないって事じゃない。

「だけど、俺らが文句を言っても始まらねえし、俺らは地上だ。連中と出くわす可能性は無いと思うぜ?」

「地上でも出くわしたらそれこそ、最悪よ。」

「だな」

まあ……データ上ではあの機体は量産されてないから、そんな事は無いけど……本当に出ないかなあ……危険手当……

「もうすぐ、作戦宙域だ。二人とも準備は良いかい?」

アリオスガンダムのコックピットでアレルヤ・ハプティズムはそう言う。

すでに現役を引退したアレルヤとかつて、第二次ソレスタルビーイング事変で使用された可変型ガンダムは飛行形態で地上を飛んでいた。

飛行形態のアリオスの背中には本来ドッキングするGNアーチャーではなく、MSすらも収容出来そうな大型のコンテナがつけられている。

当時に製造された機体はすでに失われているが、ソレスタルビーイングがアリオスのGNアーチャーとのドッキングが可能な構造に目をつけて、コリニック社で再製造されていた。

現在では戦力としてではなく、地上での足としてその能力が活用されている。

「分かっていますよ。父さん」

そう言ったのはコンテナの中で飛行形態で収容されているアクセルガンダムに乗っている、マレール・ハプティズム。

その名と発言から分かるように彼はアレルヤとマリーの間に出来た息子で二人が乗っていたガンダムハルートの後継機のマイスター。

「油断は禁物だ。何が出て来るかは分からないのだ。」

そう言ったのはコンテナに収容されているもう一機のガンダムフォートレスガンダムに乗っているレムリア・レーベルト。

「ヴェーダからの最新の情報ではアニエスとロックオンはイレギュラーと交戦したとされている。」

レムリアの両目の虹彩は輝いている。

彼女はフォートレスガンダムのベースとなっているヴァーチェヤラファエルなどの重砲撃型のガンダムのマイスターと努めた、ティエリアと同じイノベイドである。

「レムリアの言う通りだよ。何が出て来るかは分からないんだ。気

を抜くと命取りになる。

「了解ですよ。いつも通りにクールで行きます。それで構わないですよ?」

「任務を完遂させれば私は構わん。」

レムリアはそう言い目を閉じて精神を統一させる。

「そろそろ、目的地につく……」

アレルヤがそう言うとコンテナの上下のハッチが解放される。

「それじゃ、行って来るよ。父さん……アクセルガンダム、マレール・ハプティズム……目標へ飛翔します。」

「フォートレスガンダム、レムリア・レーベルト……出る。」

二機のガンダムはコンテナから出ると、目的地へと向かっていく。

## Mission 04 過去の遺物

『コリニック社』

アメリカに本社を持ち、旧ユニオンの産業を支えた大企業。

さまざまな分野に関わり、裏ではソレスタルビーイングとも少なからず繋がっていた。

前社長、デビット・コリンズは会社経営において優れた才能を発揮し、兵器開発部門の負債を帳消しにするほどの利益を出していた。

GNドライブ搭載機が主力となると、今まで成績の上がらなかった兵器開発部門は成果を上げて来た。

特にアベル・ウォーカーの愛機として知られるリベリオンシリーズなどの有名機を多く生産した。

しかし、現在はデビット・コリンズの一人娘のメアリー・コリンズが社長に就任してから、経営方針は大きく転向された。

まずは、兵器開発部門の縮小。

元から兵器開発での負債をもろともしないだけの利益を上げていたため、兵器開発を縮小しても問題なく利益を上げる事が出来た。

そのため、今では軍のMSの主流となっている強化Eカーボンなどの製造を主とする裏でソレスタルビーイングのガンダムの製造など

を行っている。

しかし、元から性格に難のある技術者を多く抱えていたため、社長のメアリーの命令を無視して兵器開発を行おうとする者達も多く存在した。

だが、その事をメアリーが許すはずもなく、再三にも渡る通告を行い、それをも無視した時最後の手段に出る。

それがガンダムによる武力介入である。

彼らの行いは必要以上の兵器開発を行い、その兵器のテストをするためならば、軍や民間以外の俗に言うテロリストなどにも渡するため、ソレスタルビーイングの武力介入の対象をなりえる。

「見えた……あれですね。」

「そのようだ。」

アクセルガンダムとフォートレスガンダムはコリニック社の閉鎖された研究所に接近していた。

彼らの任務はメアリーの再三にも渡る勧告を無視した技術者の排除と研究施設とその兵器のデータの完全な破棄が命じられていた。

「さて……鬼が出るか…蛇が出るか……」

「関係ない。何が出ようと全力で排除するのみだ。」

二機が施設に接近すると施設から迎撃のMSが発進して来た。

「どつやら……穩便に始末されてくれるつもりは無いみたいですね。」

アクセルは加速するとGNミサイルを一斉に放つ。

敵MSはミサイルを迎撃していると、アクセルの後方からフォートレスの粒子ビームで破壊された。

「敵は旧式ばかりだ。このまま力押しで行く。」

「あまりスマートなやり方ではないですけど！」

アクセルは機体をMS形態に変形させると、腕のシザーシールドでGN-X?を両断する。

「知った事か、任務の完遂が優先だ。」

フォートレスはGNビッグキャノン?で斜線上の敵を一掃する。

敵は旧式な事もあり、二機のガンダムの前に成すすべもなく全滅した。

「呆気ない物ですね。」

「当然の結果だ。ガンダムマイスターに敗北は許されない。」

二機は再び施設に向かおうとすると強力な粒子ビームが飛んで来た斜線上に居たアクセルは緊急回避を取る。

「まだ、いたようですね……しかし、この火力は……」

「あれは……M A……」

新しく出て来たM A……それは20年前にE L S戦役で実践投入された試作機『ガデラーザ』

E L Sとの相性も悪く、戦果をあげる事無く撃墜された機体だが、少数であるが再生産されていた。

「イノベーター専用のM A……となれば、あれのパイロットは……」

「当然、イノベーターだな。」

「ですよね……」

マレールは同じマイスターにイノベーターがいるため、その能力を知っている。

「だが、敵である以上は破壊するのみだ。」

フォートレスはGNビッグキャノン？をガデラーザに放つと、ガデラーザは回避する。

「その巨体で良く動く!」

そして、ガデラーザは大型のGNファンクを射出し、その中から小型のGNファンクが射出された。

「冗談はその巨体だけにして欲しいですね!」

アクセルは機体を飛行形態に変形させると、ファングからの攻撃を掻い潜り、GNサブマシンガンで迎撃する。

「幾ら数が多くとも！」

フォートレスはGNフィールドを展開し、ファングからの攻撃を防ぐ。

ガデラーザはGNブラスターを展開すると、フォートレスに粒子ビームを放つ。

「このフォートレスガンダムに通用しない！」

その一撃をも、フォートレスガンダムのGNフィールドは防ぎきる。

「幾ら、イノベーター専用機とはいえども……過去の遺物……そんなものが！」

レムリアの両目の虹彩が輝くと、機体のコンソールにBNF-Pの文字が出る。

BNF-Pシステム……かつて、イオリア・シュヘンベルグが残したシステムの一つで人類がイノベーターを武力で排除しようとした時の対応策として、ヴェーダとリンクしている機体からの情報から戦場で送りうる情報を脳量子波としてパイロットにフィードバックするシステム。

本来なら、イノベータークラスの脳量子波使いで無いと脳が耐え切れないが、レムリアはその脳量子波に耐える事が可能な調整がされ



ている唯一のイノベイド。

そのため、レムリアはシステムにより、ファングの動きをすべて見切っていた。

「トランザム！」

フォートレスガンダムが赤く発光すると、全砲門が開き、圧倒的な火力を持ってガデラーザのファングを一掃していく。

「クレイジーなのは敵だけでなく、味方ものようですね。」

アクセルはフォートレスの砲撃をかわしている。

「お前の動きも計算済みだ。余程間抜けでない限り当たらん。」

「言ってくれますね！」

フォートレスの砲撃でガデラーザのファングが一掃されると、アクセルは一気にガデラーザに接近する。

「大量のファングが無ければ、簡単に接近出来ますね。」

ガデラーザは隠し腕のビームガンで応戦するも、アクセルは回避し、接近しシザーシールドで隠し腕を両断し、距離を取る。

「これはおまけです。」

飛行形態で旋回し、GNキャノンでガデラーザのGNブラスターを撃ち抜く。

「後はお任せしましたよ。レムリア」

「ああ」

トランザムが続くフォートレスはGNビッグキャノン？を機体から離すとガデラーザを囲み砲撃を浴びせる。

火力こそは圧倒的なガデラーザだが、その火力を持って敵を殲滅し近づけさせない事が大前提な機体なため、ビッグキャノン？の砲撃を防ぐ術は無く、攻撃をまともに受けて行く。

そして、ビッグキャノン？はフォートレスに戻るとフォートレスは全火力をガデラーザに浴びせる。

防ぐ手段の無いガデラーザは撃沈し、施設に落ちて行く。

「終わりにさせる。」

フォートレスはガデラーザの落ちた施設に粒子ビームを撃ちこみ、施設は跡形もなく消滅した。

「これで任務コンプリートですかね？」

「ああ……すでにここいら一体のネットワークはヴェーダが抑えている。ネットワークを経由しての情報の漏洩は考えにくい。施設を完全に破壊した以上、情報の漏洩は無いと見て良い。任務は完了だ。」

レムリアがそう結論付けて、二機のガンダムはこの戦闘を嗅ぎつけ

た連邦と出くわす前に撤退を開始した。

「どつやら、地上のマールとレムリアは無事に任務が完了したよ  
うだぜ。」

戻ってからずっと待機していた私にロックオンが地上の任務が終わ  
ったらしく、その事を伝えに来ていた。

「ふうん……」

「それだけかよ……」

それ以上に何があるのよ。

地上の任務が成功したところで私には関係無いし……強いて言うな  
ら、失敗すれば、私達が尻拭いをしなきゃいけないかも知れな  
いってくらいじゃない。

成功したから、関係無いみたいだけど……

「ガンダムの整備は終わりそうだな。」

「そうね。」

すでに私のセイバーは整備を終えて、地上で使うザンライザーが装  
備されている。

ロックオンのコマンドにも前の任務では装備していなかった腰のホ

ルスターを装備し、準備は万全になりつつある。

「整備が終わり次第、地上で任務だそうだ。」

「そうね。」

これが終わったら、ロックオンの言葉通り地上での任務の為、地上に降りる。

どうも、急を要する任務があるらしく、珍しくガンダム4機での作戦行動らしい。

「そうねって……他に無いのかよ？」

「別に無いわよ。私達は与えられた任務をこなせば良いだけよ。」

他のマイスターはどうかは知らないけど、私にとってガンダムマイスターとは単に仕事でしかない。

イノベーターが一番優遇されるのは軍だけど、16歳の私では年齢で引がかかるからその半面、ソレスタルビーイングは極端に幼くなければ、雇って貰えるし機密の口止めで軍人のイノベーターよりも給料面でも良いし、ガンダムの整備と補給の方も万全だから別に軍人になりたい訳ではないから、こっちの方が断然いい。

「仲間意識を持つのは良いけど、私はロックオンの本名とか知らないしね。」

ロックオン・ストラトスは彼のコードネームで本名は私は知らないし、興味もない。

「そうだけだよ……少しくらい仲間意識を持ってバチは当たんねえじゃないのか？」

「最低限のコミュニケーションは取ってるわ。」

コミュニケーションは仕事をする上で最も必要なスキルだから、当然私もその位は行っている。

「ロックオンがどう考えているかは知った事じゃないけど、それを私に押し付けないでくれる？迷惑だから。」

最低限、相手に合わせる事はするけど、生憎と私にも譲れない物はある。

私はお金の為にガンダムマイスターになった。

私がガンダムマイスターである理由はそれ以上でもそれ以下でもないのよ。

そのためなら多少の我慢はするけど、馴れ合いは御免よ。

「そうか……それは不幸な出来事だ。」

「そうね……本当に不幸な事故よね。」

俺はメアリーとプライベートチャンネルを繋いでいた。

「まさか、こんな事になるなんて……」

メアリーからの通信の内容はコリニック社の閉鎖された施設を使おうとしたところ、偶然にも事故が起こり、施設を使おうとした研究員は全滅したと言う事らしい……

それに関して、正式な会見を前に軍と政府に口裏を合わせて欲しいと言う事だった。

表向きは事故だが、実際はガンダムによる武力介入によるもので、世間では存在していないソレスタルビーイングが武力介入をするとは出来ないの、事故で片づけると言う事だ。

「ああ……こんな事故は誰も予測は出来なかったよ。」

メアリーもやるようになったな。

以前なら、裏工作などするタイプではないが、この程度の事は出来るようになってる。

まあ……上の命令を無視すれば、それなりの対応されるのは当然の事でそれが嫌なら、上の命令に従うしかない。

自業自得だな。

「そうね……本当に偶然は怖いわね。」

「流石の俺も偶然には対処が難しいからな。」

もっとも、その偶然に対処してこそ、最強のイノベーターと言われ

るんだがな。

「それじゃあ…ウォーカー中将、そう言う事をお願いね。」

「分かりましたよ。コリンズ社長…事故の件は私にお任せ下さい。」

俺はそう言い通信を切る。

「さてと……」

コリニックの連中にも困ったものだ。

こっちは面倒事を抱えていると言つのに……

「アメリカ……少し来てくれ。」

俺が端末でアメリカを呼び出すし、暫くするとアメリカが入ってくる。

アメリカ・ニューレイズ

多少、イノベイドで性格は多少、きついが優秀な人材なため、俺付きの補佐官として重宝している。

「中将…お呼びですか？」

「ああ……コリニック社の施設の一件の事は？」

「概要だけなら……」

「話が早くて助かる。」

俺は簡潔に状況を説明する。

「成程……少し、気にはなっていました。そう言う事だったのですね。」

「ああ……それで、お前にはその情報統制を任せたい。ヴェーダとリンクする権限を与えられているお前の方が適任だろう。」

ぶっちゃけると面倒だから、ここはアメリカに丸投げしてやる。

俺は俺で面倒な案件を抱えているからな。

「了解しました。しかし、例の件はどうします？私がこちらを担当しますと、そちらが疎かにならざる負えませんが……」

確かに……今まで、その件が大きな動きが無いのは俺がアメリカに命じて情報操作で時間を稼いで貰っていたからな。

しかし、こちらも放ってはおけない案件だしな……

仕方がない……時間的には五分五分だが、こちらをアメリカに任せてあの案件はあいつらに任すしかないか……

「構わん。お前はこちらを担当しろ。」

「よろしいので？こちらの方が優先度が低いと思えますが？」



「構わんと言った。すでに手は打ってある。」

アメリカが時間を稼いでいたお陰で手を打つことが出来ている。

もっとも、時間の関係上、厳しいとは思うがやるしかない。

どちらも放っておくことは出来ない案件だからな。

両方、同時にやるしかあるまい。

最悪、俺が動いて帳尻を合わせれば問題は無い。

「了解しました。」

アメリカはそう言い執務室を出て行く。

「やるしかないな……」

メーティアが宇宙で動けない以上、この手しかないが、些か不安だが、他の手を打っている時間もない事も事実だ。

だったら、やってやるぞ……

最強のイノベーターの悪運を見せてやるよ。

## Mission 04 過去の遺物（後書き）

### 新キャラ設定

アメリカ・ニューレイズ

（CV 生天目 仁美）

地球連邦軍に所属しているイノベイド

元は情報収集タイプของイノベイドだったが、アベルがその能力を見込み自分の補佐兼秘書官とする。

性格は真面目だが、きついため、上司のアベルにもはっきり意見を言うだけでなく、毒を吐く事もしばしばある。

階級は大佐。

## Mission05 墮落した者たち

「こいつは……」

中東の山岳地帯に隠れているケルディムガンダムの中でライル・デイルランディは呟く。

コードネームを三代目に引き継がせた後もライルはソレスタルビーイングのエージェントとして活動している。

体力的な問題もあり、前線では戦う事は無いが、情報収集や後方支援で前線のマイスターを支援している。

「どうだい。ライル？」

ライルが偵察に出していらカメラビットからの映像を確認しているとアレルヤが来る。

「見てみるよ……どう考えても異常だぜ？」

ライルは送られて来たデータをアレルヤのアリオスにも転送する。

「これは……」

その映像には30機近いMSが映されており、その中央には教会が存在している。

移動教会『SEVIOR CHURCH』

以前は現コロニー国家の代表、ホープ・E・ブリッジが難民を保護していたが、現在では武装集団となり果てていた。

「GN-Xだけじゃねえ。拠点防衛用のアグリムまでいやがる。」

GNX-AEU0713 『アグリム』

旧AEUのMAアグリッサをベースとして開発された拠点防衛用のMA

機体自体はイナクトを改良した物を使用している。

疑似GNドライブを搭載し、両肩からはスローネアインにも使用されているGNランチャーを二門装備し更にGN-X?などにも使用されているGNシールドを改良し、より高出力のGNフィールドを前方に展開することが可能となっている。

「確かに……それにGN-Xも第4世代のが何機かいるね。」

「ああ……本当にこいつらは元難民か？MSの機種は旧式どころか、疑似太陽炉も搭載していない骨董品も多いが、この数を集めるのは相当な金がかかるぞ。」

ライルの言い分は正しい。

幾ら旧式とは言え、MSを運用するためにはそれなりの維持費が必要となる。

元難民の彼らにこれだけのMSを運用するのは明らかに不可能と言える。

「そうだね。何か裏があるかも知れない。スメラギさん達に報告して調査する必要があると思うだね。」

「そうだな。そのあとは後輩に任せるか。」

そうして、ライルは情報をヴェーダへと上げると、気づかれる前にアレルヤとともに撤退した。

武装の換装を終えた私達は地上に降りると、地上で任務を終えて最低限の整備を終えたマレールとレムリアと合流し目的地の近くで待機している。

今回の任務はガンダム4機での作戦行動になるから、アリオスでの空輸は出来ないため、私達が自力で移動しないといけなくなっている。

「それでは作戦を説明する。」

私達が揃うとレムリアが話を始める。

「今回の任務は移動が可能な教会を拠点としている武装集団の排除だ。」

レムリアがそう言うとエージェントが得た映像が、私達の機体に転送されて映される。

「珍しいですね。移動が可能な教会とは……」

「この教会は数十年以上前から難民保護を目的として、現コロニー国家の代表のホープ・E・ブリッジ氏が運用していた物だ。」

難民保護ねえ……

「何で、それは武装集団になつたんだよ？」

「元々彼らは三国家時代や旧連邦政府の圧政で国を追われた物が多く、新政府樹立後もそれらを理由に教会に留まり続けていた。」

「政府は何も対応はしなかつたんですか？」

新政府は旧政府とは違い融和政策を推し進めていたはずだったわね。

「無論、政府は教会に対し食糧支援を行い、ブリッジ氏もそれを受け入れていた。」

「政府は信用出来ないってのにちゃっかりと支援は受け入れるのな。」

「ああ……そして20年前のELS戦役後にブリッジ氏が自らをELSだと言い。その後は皆も知っているだろう。」

新国家であるコロニー国家の代表になつたんだっけ……

「それが武装集団となる事と関係があるんですか？」

確かに……あまり関係があるとは思えないけど……

「ブリッジ氏がコロナー国家の代表となっってから、数年間は政府も支援を行っていたが、教会の者達は一向に社会復帰をする兆しが無いため、政府はその意思が無いと判断し、支援を打ち切っている。」

「当然よね。政府も慈善活動で支援をしている訳じゃないしね。」

政府が難民や中東を支援したのは、最終的には連邦政府に利益があるからで、それが見込めない相手に支援をするくらいなら見込める相手を支援するのは当たり前前の判断ね。

「その後からだ。連中が我々はE L Sに騙されていた被害者だと声高に主張し始めたのは。」

「はあ？何だよそりゃ？」

「要するにそいつらは被害者でいたいんでしょ？」

被害者でいれば、周りは何かと同情とかをしてくれて気分が良いからね。

「国や政府の圧政の被害者と言って教会に寄生し、今度はE L Sに被害者……とんだ寄生虫根性ね。」

連中も初めは被害者だったのかも知れないけど、新政府が樹立してその政策と見て数年も経つても政府が信用出来ないとか言っているのは、はなっからその気がない証拠よね。

そこで、世間から見放されると今度は政府の側になる。

「しかし、今更政府は連中の声には耳を傾け無かった。その時には  
「コロニー国家も樹立し、E L Sとの共存が始まるうとしていたしな  
」

「当然の判断ね。」

彼らとE L Sとの共存を天秤にかければ、考える必要すらないわね。

「それでもあれだけの武装を出来る事の説明にはなりませんか？」

「その後に彼らは武装をして訴えに出たが、政府は武力で鎮圧する  
ことではなく、対話による解決を行おうとした。」

それはあり得る話ね。」

今でも、武力を行使するのは相手が武力行使をして来た場合などの  
時やテロリストに対する時のみが当たり前となっている。

「それに名乗りを上げたのはブリッジ氏だ。元々、彼が保護してい  
た難民だからと言う理由でだ。政府はそれを受理し、ブリッジ氏が  
彼らの説得を開始し、その結果和解し生活を安定するまでの資金援  
助をすることとなった。」

「おいおいおい！ちょっと待てよ。明らかにその気はないだろ！」

「そうね。自立するために金をくれと言うのは明らかにその気の無  
い奴の言う事じゃない。」

て言うか、援助すべきなのは資金よりも食糧や仕事の斡旋で資金を  
上げれば何に使われるか分かったものじゃないわ。



現に恐らくはその資金でMSを集めたんでしょっね。

「その代表はその事に何も言わなかったの？」

「ああ……あくまでも自分は彼らを信じると言い。資金を提供し続けているそっだ。」

未だに続いているの……最悪ね。

「そいつは難民保護の時からそんな事を？」

「そっだ。そのため、教会からは救世主として崇められていたそっだ。」

救世主ね……

本当にそんな物がこの世界に必要なのかしら？

そもそも、彼の行いが教会の連中を救ったのは一時の事で、その後は墮落しているから救ったかはどうかは微妙なところね。

「無償で生活を保障し守ってくれる……その上、その見返りを求めないと来れば、ずいぶん都合の良い救世主だな。」

無償で差し出すから、人はその甘えて自分の足で歩く事を止めてしまった。

「同感ね。人は楽を覚えるとそれから脱するのは難しくなるわ。その結果が被害者面って事ね。ああはなりたくないわ。」

そんな事しても何も変わらないわ。

被害者なんてもなしだけよ……

「意外だな。お前は一方的に支援して貰えるなら真っ先に食いつくと思っただが？」

「失礼ね。ロックオン……アンタが私をどう見ているか良く分かったわ。そうね。私はお金の為にガンダムマイスターになったわ。でもね……私は私の納得する方法でお金を稼ぐの……」

そうでないとはあの子に顔向け出来ないのよ……

「だから、こんな方法は死んでも御免ね。」

「アニエスの理由は今は関係ない。ここからが本題だ。連邦政府もこれ以上の支援は逆効果だと判断し、支援を打ち切るようにブリッジ氏に通達するも、彼は教会を信じているとかたくなに拒否している。彼には議会への参加権と発言権しか与えられていないが、政府から公式にこの一件を任された以上は大統領でもその決定を覆すのは難しいし、時間もかかる。そのため、彼らを武装集団として排除することが決まった。現に彼らは民間で所有出来る戦力の規定を大幅に超えている。」

まあ……数だけなら、連邦の1部隊よりも多いしね。

それを無視し続ければ、市民の不安も広がるし、中東の治安の悪化にも繋がりがかねない。

「だったら、俺らが出る必要はなくてね？連中と連邦じゃ戦力差があり過ぎる。軍が動けば結果は見えている。」

それにあの程度の数ならガンダム1機でも十分に片づけられるわ。

「確かにそうだが、今回の事に関してはブリッジ氏の意見は完全に無視されている。」

当然ね。

元々は彼が良いように使われていたのが原因で、その意見は教会側に偏っている可能性が高い。

そんな奴を信用するほど、連邦政府が馬鹿じゃない。

「だから、彼の意見が反映されないのも、最悪の展開として、彼が教会を守るために武力行使をすることだ。以前にもアロウズから教会を守るために武力を行使している。もし、そうなれば大変な事態となる。」

確かに……彼は今や国の代表……ひいてはE.L.Sの代表とも言える。

E.L.Sと接触してから20年が経つけど、E.L.S戦役を生き延びた軍人がE.L.Sとの共存に否定的な人が多いと聞いている。

当然の反応よね。

あの戦いで連邦軍は大打撃を受けている。

軍人がE.L.Sを良く思わないのは当然の流れとも言える。

もしも、E L Sの代表である彼によって被害が出れば、政府もE L Sを人類に敵対する危険な生物と判断をせざる負えない。

「もしかして……彼らの武器の出所は……」

「恐らくは軍内部の解放戦線のシンパだと言うのが濃厚だ。」

つまりは、教会を利用し政府にE L Sが危険な生物だと判断させて、E L Sを殲滅する事が目的……

「マッチポンプかよ…結局は……」

そのためにM Sを横流しして、軍を動かす理由を作ったと言う事ね

……

最悪ね……

「その通りだ。ブリッジ氏が動かない可能性もあるが、動く可能性の方が高い。そのため、我々が軍よりも速く行動し、教会に対し武力介入を行う。」

「私達ならE L Sの被害を受けても政府はE L Sを危険生物だと判断する必要も無くなると言う事ね。」

私達は一般的には存在していないから丁度良いつてことか……

「そうだ。これは我々ソレスタルビーイングの存在を賭けた任務と言っても言い。20年前のE L S戦役時に来るべき対話を成功させたが、ここでその共存を反故にする訳にはいかない。」

現状が共存と言えるのは微妙なところだけだね。

それでも今回の任務が重要なのは分かった。

「成程ね……師匠達が命を賭けて作り上げた今の世界を壊す訳にはいかねえな。」

「ですね。僕も父さんと母さんからその時に話を聞いているから、見過ごせませんね。」

「その通りだ。来るべき対話を成功させ、人類を外宇宙に進出させる事こそが、ソレスタルビーイングの本懐……何としてもやり遂げるぞ。」

他のマイスターはやる気満々ね。

まあ……それなりの理由もあるみたいだしね。

だけど……これだけの重要な任務だから、私への報酬も期待できそうね。

だったら……私も気合を入れずにはいられないわね。

## MISSION 05 墮落した者たち（後書き）

### 新MS設定

GNX - AEU0713 『アグリム』

地球連邦軍が開発した拠点防衛用MA

かつて、AEUで開発されたアグリツサをベースとし疑似GNドラ  
イヴが搭載されている。

しかし、GN粒子をGNランチャーとGNフィールドに回している  
ため、飛行能力が無いが、アグリツサ同様の多脚で足場の悪いとこ  
ろでも易々と移動が出来る。

### 武装

・GNランチャー

両肩に二門装備され、本機の唯一の粒子ビーム兵器

・GNシールド

両肩に装備されており、GN-X?の物を改良し、より強力なGNフィールドを前方に展開することが可能。

・ミサイル

機体の下半身後方に内蔵されている。

対空弾幕や散弾による対地攻撃などに使われる。

・ヒートクロー

機体の足の先端に装備され、本機唯一の格闘戦用の武装。

攻撃時に先端が発熱することで攻撃力が増している。

・リニアマシンガン

両手に装備されている火器で通常の粒子ビーム兵器と比べると火力が落ちる。

主にGNランチャーでは近過ぎる距離や歩兵や車両に対して使われる。

## Mission 6 思惑と陰謀

「フウ……」

俺は面倒な会議を終えて会議室を出る。

今回の会議で中東の武装集団に対する武力行使が決定した。

案の定、コロニー国家の代表殿は不服を唱えるが完全に無視の方向で会議は進んでいた。

初めから無視する気であるなら、呼ばなければ良い。

連邦議会とは違い、彼に軍内部での会議への参加権は与えられていない。

やはり、今回の一件は軍内部の解放戦線のシンパによるマッチポンプで確定だな。

そのためにアイツを会議に呼んで、決定を聞かせて動かせるための布石と言ったところか……

「ウォーカー中将」

俺が会議室を出ると、初老の男……確か……リード中将だったな。

軍内部でも武闘派でも知られているリード中将だが、解放戦線との繋がりも噂されている人物だと聞いている。



アメリカの調べではこいつが今回の黒幕と言う線が濃厚だが、武闘派の癖してなかなか尻尾が掴めない。

「リード中将…何か私に用でも？」

俺がそう言つとリード中将は俺と並んで歩きだす。

「意外でしたよ。中将が今回の武力行使に賛成をするなんてね。」

「何が言いたいんですか？」

「いえね…中将はブリッジ代表とは旧知の仲と聞いています。私はてつきり、彼の肩を持つと思つていろいろと用意していたんですけどね。」

こいつ……俺とアイツが出会つたのは20年も前の話だ。

プライベートでは勿論の事、仕事上でも必要以上の付き合いは持っていない。

無論、ヴェーダにも俺の個人的な繋がりやマイスター時代の情報などは一切、記されていない。

良くもまあ…そこまで調べ上げた物だ。

以外と頭が切れると言つ事が……

「それは申し訳ない。ですが、私と彼は20年以上も前に数回顔を合わせただけで、無論…彼がELSだと言つ事は知りませんでしたよ。」

「ほう……つまり、貴方はE L S擁護の立場ではないと？」

なぜ、そう言う流れになるのかは分からんが、結局のところ、俺を敵に回すのは避けたいと言ったところか……

懸命な判断だ。

俺を敵に回すと言う事がどういう事になるのかを分かった上での判断か。

「そうですね。私はE L Sの能力が現状では人類に有益だと考えています。なので、議会ではE L Sを擁護する意見を述べているに過ぎません。」

それもあるが、実際は刹那とテイエリアが今、E L Sの母星に向かい、分かり合うための対話の旅に出ている。

イオリアの爺さんの計画はどうでもいいが、あいつらが帰って来た時にE L Sと人類が全面戦争をしているとか、E L Sが殲滅されていると言った事態は避けたいからな。

「無論、リード中将の危惧している事態となれば、私も最強のイノベーターの名に賭けて、E L Sを殲滅することをお約束しましょう。」

だからと言って、俺もE L Sを完全に信用した訳じゃない。

今はまだ、様子見と言ったところだ。

あれから20年も経つが、ELSの生態を完全に把握出来た訳でもない。

もつとも、ELSに対抗するための新兵器はほぼ完成していると聞いている。

もしも、ELSが人類に牙をむいた時には刹那とティエリアには悪いが始末をさせて貰う。

「それを聞いて安心しましたよ。その時は最強のイノベーターの力を頼らせて貰うとしますよ。」

リード中将はそう言い廊下の道を分かれた。

喰えないおっさんだ……

俺の力を頼りにする？

あの目は俺の力を利用してやるぜ！と言っていたように感じたがね。

まったく……面白いじゃないか。

イノベーターとなり、MSでの戦闘では完全無欠の無敵で最強な俺だが、策謀の渦巻く政治の世界では気を抜くと終わりと言う事が……

だが、それでこそ面白みがあると言う物だ。

「アベル！」

俺がリード中将と別れると、俺を呼びとめる声がする。

この場で俺を名前で呼ぶのはアイツしかいないだろう。

「これは……ブリッジ代表、自分に何か用でも？」

かなり焦っているな……

「君に頼みがある。君の権限で教会への攻撃を中止かそれが駄目なら先延ばしにして欲しい。」

案の定、無理な事を言う。

「無理ですね。」

「なぜだ？君なら出来るだろう？」

「自分にでも出来ない事はありますよ。今回の作戦を指示したのはリード中将、階級では自分と同じ……彼に命令など出来はしませんよ。」

事実上、軍を仕切っていると言っても俺は中将。

軍のトップである訳じゃない。

ただ、軍のトップも上層部の大半も俺の言う事は何でも聞いてくれるだけに過ぎない。

「だけど、今回の作戦はおかしいじゃないか？」

「おかしい？どこがですか？」

寧ろ、今まで何のアクションも起こさなかった事の方がおかしいと言える。

「教会のみんながテロリストだなんてあり得ない。僕は彼らの事を良く知っている。」

「しかし、代表もご覧になったでしょう？ヴェーダに教会が規定以上の戦力を保有している事を？」

すでにライルからの情報はこちらでも確認済みだ。

「だからと言って……何か訳があるんだ。そうでなければ、こんなことになる訳がない。」

訳ね……

恐らくはこいつが自らがELSと言う事を好評した事が発端となっているだろう。

ELS戦役が終わって間もないころは、ELSとの和解が成立しても、一般人のELSへの不信任や恐怖感は現在まで続いているからな。

そんな時に公表したら、受け入れられないのが当然だ。

今まで、自分たちを助けて来た救世主が実のところ、余所の星から来た化け物だと知れば、今までの信頼は無くなり、その分：騙されていたや利用されていたと言う負の感情の方が強くなったんだろう。

信賴関係なんてのは、築くのは時間もかかり難しいが、壊れるのは一瞬だ。

人間なんてのはそんなものだ。

だからこそ、途切れる事の無い絆に価値がある。

何の見返りもなく、難民だと言う事を理由に与えられる事が当然となっていた奴らがこいつ無しで生きる事など出来はしない。

結局のところ、こいつは救世主ではないと言う事だ。

初めは救っても自分の足で歩く事を教えてないんだ。

こいつがいなくなれば、今まで通り、何かの被害者となり誰かの救いの手を求めるしかない。

三国家群のせい……国連のせい……地球連邦のせい……アロウズのせい……そして、E L Sのせい……

そうやって被害者となり、施しを受ける事でしか生きていけなくなつた……哀れだな。

そんなところに解放戦線に踊らされたと言うところか……

「例え、訳があろうと、彼が規定に違反している事は事実です。」  
もつとも、踊らされている事が明るみになったところで、彼らが規定以上の戦力を保有している事実がある以上、正統性はこちらにある。

「だが、政府は融和政策を推進している。武力を行使するのは間違っている。」

「間違っているのはその考えの方ですよ。融和政策が適用されるのはあくまでも国や企業などでそこにテロリストは含まれません。テロに屈しないと言うのは何百年前から続く国際常識ですよ。代表。」

融和政策と完全に武力を行使しないと言う事は同じじゃない。

相手を選ぶさ……

「それに融和政策の一環の対話は20年近く、代表がなされているではありませんか？それなのに一向に武力解除の気配が見えない。」

「それは……」

「それに代表は彼らに自立支援として要求された資金提供を行っているそうではありませんか？彼らの軍資金はそこから出ているのは明らかです。」

MS一機を運用するにもそれなりの金がかかる。

元難民にその金を用意するのは不可能だ。

まず、間違いないだろう。

「だから、彼らへの資金提供を打ち切ったのです。彼らよりもそれが必要な人達は大勢いる。」

「それで、彼らを見捨てたと言うのか？」

「そうです。社会復帰の可能性のない者達に支援する理由はありませんから。我々も慈善活動で援助をしている訳ではないので……」

中東の支援と再建も最終的には連邦政府に利益が来るから行われたが、それが見込めないなら支援する必要は無い。

「くっ……」

「どうしても、攻撃を中止したければ、大統領に直談判を成されるか？大統領からの直々の命令ならリード中將も攻撃を中止せざる負えません。」

「それは本当かい？」

「ええ…我々は連邦政府と連邦市民の総意で動いていますからね。」

俺がそう言つと、代表は走り去って行く。

恐らくは母さんのところに向かうのだろう。

無駄なのにな……

アイツは自分で思っている以上に政府から信用されていない。

自らの利益を求めずに難民を保護していた人物など政府が信用する訳がない。

人間とあ必ず、自分の利益を優先としている。



だから、自分の利益を追求しないと云っている人物ほど胡散臭い人物はいない。

そんなアイツがE L Sの代表なのはアイツが人類側の思考で行動しているのと扱いやすいからだ。

人類とE L Sとの共存の為だと言えば、大抵の不平等な条約は受け入れる。

E L Sの生態や習慣、思考パターンなどがはつきりしない以上、奴は利用出来ると政府は判断している。

だが、教会の一件でアイツの信用は更に落ちた。

教会の武装解除どころか、武装強化に手を貸したんだ。

本来なら、逮捕拘束されてもおかしくない。

それでも、利用出来るから泳がされていると云うところか……

母さんも中止はしないだろうが、大統領の母さんが中止をしないと知れば、アイツは実力行使に出かねない。

そうなれば、面倒な事になるな……

その前に政府の俺のシンパに言ってアイツが母さんに直談判するまでに時間を稼がせるか……

それでも、軍の動きはもう時間は稼げない。

もしも、直談判が間に合わないとなれば、やはり実力行使に出る可能性が出て来るため、タイムリミットは軍の武力行使が開始されるまでか……

後はソレスタルビーイングのガンダムマイスター次第と言う事か……

やって見せるよ……ガンダムマイスターに失敗は許されないんだ。

一方そのころ、移動教会でも動きがあった。

移動教会の周りに配置されていたティエレンが撃ち抜かれた。

突如の襲撃に対応する間もなく、二機目、三機目と撃ち抜かれる。

「命中！命中！」

「動いてないのを狙ってた。当たり前だ。」

数十キロも離れた山影から、コマンドガンダムがGNスナイパーライフル？を構えている。

「後方支援は任せろ。」

「頼んだぞ。ロックオン」

コマンドの狙撃で教会側も敵襲と知れた事で三機のガンダムは光学迷彩を解除する。

「あれは……ガンダム！」

「くそお！何でガンダムが！」

教会側の大半は第一次ソレスタルビーイング事変や第二次ソレスタルビーイング事変を知っている。

当然、ガンダムの力も……

突如のガンダムの出現で正規の訓練を受けていない教会側は隊列を  
まともに組む事が出来ない。

「地上の連中は無視しろ。一気に本丸を叩く！」

「了解」

三機のガンダムは地上からの攻撃をかわしながら、教会へと突き進  
む。

すると教会から大量のミサイルが放たれる。

「ふん……そんな攻撃がガンダムに効くと思っているのか。」

フォートレスガンダムは全砲門でミサイルを撃ち落とす。

「相変わらず、火力は化け物よね。」

「同感ですよ。アニエス」

「無駄口を叩くな。航空部隊が来るぞ。」

レムリアがそう言い、教会からGN-X?を先頭にフラッグやイナクトと言った空中戦が可能なMSが出て来る。

「あまり時間をかけたくない。雑魚は私一人で十分だ。アニエスとマレールは本丸へ行け。ロックオンは地上の雑魚を任せる。」

レムリアが各マイスターに指示を出すと、マイスター達は速やかに行動に移す。

「たく……しゃーねえか。」

ロックオンは狙撃用のガンコントローラーを覗き、引き金を引く。

GNスパイパーライフル?から粒子ビームが放たれて、移動教会の車両を撃ち抜いた。

「これで逃げらんねえぞ。」

移動教会は車両が撃ち抜かれた事で緊急停止した。

「後は任せるぜ。お二人さん。」

「何だ!このガンダムは!」

「守りが堅過ぎる!」

フォートレスガンダムはGNフィールドを展開すると、敵からの攻

撃を防いでいる。

「脆弱な攻撃だな。その程度で良くELS根絶を吠えられたものだ。」

「

フォートレスがGNビッグキャノン？を前方に放つと、斜線上のMSを一掃する。」

「道は作った。後はお前たちの任務だ。」

「分かってるわ。」

フォートレスが作った道をZセイバーガンダムとアクセルガンダムは抜けて行く。

「行かせるか！」

一機のGN-X？が二機を追おうとするが、背後からフォートレスのGNキャノンで破壊される。

「ここを通りたくば、私を倒してからにして貰おう。」

フォートレスガンダムがGNフィールドを展開して立ちはだかっていた。

「まずは行きますよ。」

飛行形態のアクセルはGNミサイルを教会に向けて放つ。

教会から、アグリムが迎撃のミサイルや粒子ビームを放ち、大した

効果は得られなかった。

「戦闘能力は低いとは言え、厄介ですね。」

「だったら、私が行くわよ。」

セイバーガンダムはGNバスターソード？を両手に持つと、降下しアグリムを切り裂く。

アグリムは防御をする前に両断される。

「アンタ達は見ていてむかつくのよ！いつまでも被害者面してさあ！」

セイバーはバスターソードでリアルドホバータンクを切り裂く。

「これ以上はやらせん！」

アグリムが脚部のヒートクローでセイバーに切りかかる。

しかし、セイバーはバスターソードで受け止める。

「アンタ達はいなくなっただ方が世界の為なのよ！」

そして、もう片方のバスターソードでアグリムの足を切り裂き、アグリムはバランスを崩した。

セイバーは両手のバスターソードを合体させて、アグリムを両断した。

「今回のアニエスあずいぶんとイラついていますね。」

アクセルはMS形態に変形するとGNサブマシンガンでティエレンを破壊する。

「だけど……僕はいつも通りにクールに行かせて貰いますよ。」

アクセルはアグリムからの粒子ビームをかわし、アグリムに接近するとGNシザーシールドでアグリムの両腕を切断する。

そして、再び空に舞い上がるとサブマシンガンで両腕を失ったアグリムを破壊する。

戦いはソレスタルビーイングの一方向的な展開で進んでいた。

「レムリア、連邦の部隊を確認した。ここいらが潮時だぜ?」

戦場から一番離れていたロックオンのコマンドガンダムが接近する連邦軍の部隊を補足し、そのデータをレムリアのフォートレスガンダムに転送している。

「確かに……アニエス、マレール! ミッションプランをT37に変更。各自、撤退を開始せよ。」

「ちっ……了解」

「意外と早かったですね。」

その指示を聞いたアニエスとマレールは戦闘を中断する。

そして、各々が事前に決められている撤退ルートで撤退を開始した。

「何だと！」

私は部下からの報告を聞き、部下を怒鳴りつける。

「それは本当の事なのか！」

「間違いありません。リード中将……我々が到着した時にはすでに攻撃対象は壊滅的な打撃を受けていました。」

どう言う事だ……

付近の部隊も攻撃部隊に組み込んだはずだ……

「何処の仕業だ？」

これがあの化け物どもの仕業なら、相手がテロリストでも殲滅の口実が出来るが……

「不明です。拘束した生き残りの証言ではガンダムによる攻撃を受けたと……」

ガンダムだと！

ソレスタルビーイングか！

なぜ、このタイミングだ……



連中の掲げる理念なら、確かに武力介入の対象になっても不思議でない。

しかし、今まで放置していたのに、このタイミングで武力介入だと？

タイミングが良過ぎる。

まるで、こちらの手を予測した上で先手を打ったようではないか……

互いがヴェーダで情報を共有しているとは言え、あまりにも対応が早過ぎる。

ウォーカーの小僧か？

アイツならソレスタルビーイングを支援しているコリニック社の小娘とはかつての上官と部下で個人的な付き合いも長いはずだ。

コリニック社を経由して情報をリークしたとすれば辻褄は合う。

しかし、それを追求することはできんか……

ソレスタルビーイングは公には存在しておらんのだ。

存在していない組織に情報をリーク出来るはずがないと言われればそこまでだ。

……まあ良い。

今回の作戦は何かと賭けが多過ぎるからな。

今回はウォーカーの小僧に花を持たせるか……

結果として、中東に巣くう武装集団を被害もなく壊滅させた事で中東の治安と市民の信頼の回復は出来た。

ガンダムが武力介入してくれたおかげで、部隊運営の費用もかけずに済んだ。

浮いた資金は中東の治安回復に使えば良い。

だが、それでも宇宙に巣くう化け物どもを野放しにすることは出来んな。

あの計画の準備は出来ている。

見ているよ……化け物どもが……

我らの故郷を好きにはさせんぞ。

## Mission07 追う者と追われる者

地上でソレスタルビーイングの武力介入が終わり、連邦軍が事後処理に追われているころ、コロニー国家領内のメーティアはアベルが手配した補給を受けていた。

バイカル級が二隻、新たにメーティアの指揮下に入り、アレクサンドリア級には補給物資として以前の戦闘で破損した機体の予備パーツがメーティアに積み込まれている。

それとは別に1機のMSが搬入されている。

グレーのボディにGN-X系統に比べて、ほっそりとした四肢、頭部には初期のGN-Xに採用されていた複眼のメインカメラをバイザーで保護している。

背部には変形時には主翼になると思われるウイングが二基見える。

右腕には刀身の長い銃剣に左腕にはGN-Xシリーズの物よりも細長いシールドが装備されている。

GNX-YN001 『シルフィード』

コリック社が時期主力MSとして開発中の新型機のプロトタイプ。

地上での試験飛行や模擬戦でデータの収集を終えて、宇宙でのデータ収集と実践のデータを収集するためにメーティアの配属された。

「これがメーティア……」

機体がメーティアに搬送され、機体を格納庫に収容し、ハンガーに固定すると胸部のコックピットハッチが開閉する。

シルフィードのパイロット、シャロン・ウォーカーは機体から降りると格納庫を見渡した。

「ここがお父さんの直属の部隊……」

「君がこの機体のパイロットか？」

シャロンが格納庫を見渡しているとバンとセシリアが新型機が搬入された事を知り見に来ていた。

「本日付けで、メーティアに配属されました。シャロン・ウォーカー少尉です。」

シャロンは二人に敬礼をしてそう言う。

バンとセシリアはウォーカーの名に一瞬、驚くがすぐに敬礼を返す。

「俺はMS隊所属のバン・ノマル中尉、こっちは同じくMS隊所属のセリシア・ベルシュタイン中尉だ。」

「よろしくお願いします。中尉殿」

「こちらこそ、少尉には期待していますわ。」

セリシアはそう言い手を差し出し、シャロンは戸惑いながらも握り返した。

「地上でそんな事が……」

無事に補給をしていたが、補給部隊からの情報で地上で動きがある事を知り、緊急的にゴタードを呼び出して今後の事を決めている。

「ああ……そちらはすでにニューレイズ大佐が事後処理で動いている。私たちは任務を続行せよとの事だ。」

大佐は情報戦において秀でた能力を持っている。

だからこそ、中將も秘書として重宝している。

個人的にはなぜか、好きにはなれんが、能力は認めるしかあるまい。

少なくとも私に同じ事をしろと言われても無理なのは分かり切っている。

「しかし、増援がバイガル級2隻と言うのは少な過ぎやしませんか？相手はイノベーター専用機を所有してますぜ？」

ゴタードの言いたい事は分かる。

イノベーター専用機の性能は一般のMSをはるかに凌駕している。

ガイディアスは20年近く前に製造された機体だが、純粋な機体性能だけで見ると、カイノスよりも上だ。

最低でも後二来はカイノスを寄こして欲しかったが、送られて来たのはGN-X?12機と試作機が一機の計13機……

これで数の腕ではこちらが優位に立てるが、問題は試作機のパイロットだ。

シャロン・ウォーカー少尉。

その名の通り、中將の実子……

送られて来たデータを見る限りでは士官学校を首席で卒業している。

能力は悪くは無いのだが……決定的に実践経験がない。

そんな新人を……実の娘をメーティアに寄こすなど、正気とは思えん。

中將の事だ……権力を躊躇う事なく、私用で使ったのだろうか。

中將の娘と言う事は隊長のお孫さんにも当たる。

未だに中將を隊長の息子として見ている私への当てつけのつもりだろうか……

「イノベーターの代わりですかね。少尉は？」

「さあな……データを見る限りでは優秀そうじゃないか。」

しかし、実戦経験がないのではどこまで使えるか……

次の戦闘は激化することは目に見えているのにな……

少尉を死なせる訳にも行かないが、彼女一人を特別扱いをすることは私の立場上、好ましくない。

一体私にどうしろと言つのだ……

「ではやっぱり、君は……」

俺とセシリアは少尉を艦長室まで案内している。

その道中で俺達が気になった事を聞いたが、どうやら俺達の考え通りみたいだ。

「はい。ウォーカー中将は私の父です。」

「やはりそうでしたか!」

セシリアは興奮気味にそう言う。

幾ら、中将の熱烈なシンパとはいえ、その娘に対してもその態度なのか？

「どうして君は軍人に？」

俺は気になっていたもう一つの疑問を口にした。

中将の娘さんなら、現大統領のお孫さんだ。

いわゆるお嬢様とも言える立場にいる。

セリシアもそうだが、彼女の場合は更に軍人になる必要はないと思うのだが……

中將は様々な分野に顔が利く、政財界はもちろんのところ、今はそれほどではないが、一時期はテレビに引つ張りだこで芸能界の方面にも顔が利くらしい。

少尉は美人に分類されるだろうし、こう言うては何だが、英雄の娘と言うネームバリューも持っている。

いろんな道に進めたらろうに……

なぜ、わざわざ軍人と言う道を選んだのかが分からない。

中將を見ていれば、軍人の仕事がどう言ったものなのかは少尉も知っているはずだ。

「父は幾度も世界を救った英雄です。私はそんな父を誇りに思い、尊敬しています。私はそんな父の娘に恥じない生き方を選んだ結果、軍人として父のように世界を……連邦市民を守るために軍人になりました。」

少尉は躊躇う事なく、はっきりと俺にそう言った。

「素晴らしいですわ!」

少尉がそう言うのとセリシアがそう言い、少尉の手を握る。



「流石は大佐の娘さんですわ！とても立派なお考えです！貴女ならきっとなれますわ！大佐の様な立派な軍人に！」

「ありがとうございます！若輩者ですが、中尉殿達の足を引っ張らないよう、いろいろとご教授お願いします！」

「お任せくださいな！」

何だろう……この空気……

ついていけない……

だが、少尉の考えは分かった。

少なくとも、中將の名で楽をしようと言う浮ついた考えで軍人になった訳ではないのなら、俺は何も言うまい……

「連中の動きが分からん以上、こっちは後手に回るしかないでしょうな。」

ゴタードの言う通り、現在我々はあのアレクサンドリア級をロストしている。

恐らくはまだ、コロニー国家領内に潜伏していると見て間違いないだろう。

しかし、ここでは我々は完全に自由に動ける訳でもない。

従って、連中が動き出してからしか動けないのが現状だ。

「ああ……しかし、準備は出来よう。」

策を立てるには不確定要素が大きいが、MS隊の陣形や戦術フォーメーションなどを確認するなどの事は出来る。

「ですな……うちにも新人が入ったんで、隊列などの確認も必要でしょうな。」

そう結論付けているとアラームがなる。

「入れ」

私がそう言うとバン達が入って来る。

「艦長、着任した少尉をお連れしました。」

「ああ……お前たちは下がれ」

私がそう言うとバンとセシリアは下がり、少尉だけが残る。

「本日付けで着任しました。シャロン・ウォーカー少尉であります。」

少尉はそう言い敬礼する。

ずいぶん大きくなったものだ。

最後に合ったのは10年以上も昔か……

あの時は小さい子供だと思っていたが、ここまで大きくなったか……

あれから、一度も会ってないが、中将に良く写真を見せられたから成長を感じる事もないと思っていたが、実際に会うのでは違うな。

写真を持っている辺りは隊長と親子と言っているところか……

隊長も部下に見せびらかす事は無かったが、機体のコックピットに家族の写真を忍ばせている事は部下達は皆知っている。

もつとも、中将は娘と奥さんの写真のみだな。

「聞いている。私が本艦の艦長のアルエット・ルーラー中佐だ。こ  
つちがお前が所属するMS隊の隊長の……」

「ゴタード・ホークス……階級は少佐だ。歓迎するぞ。少尉」

「ありがとうございます。」

しかし……本当に少尉はあの中将の娘か？

あまりにも性格が似つかん……

中将も少しは娘を見習って貰えると助かるのだが……

いや……ありえんな。

「貴官には少佐の下で任務について貰う事となる。英雄の娘の実力……宛てにしているぞ。」

「はっ！期待に添えるように致します。」

「期待している。下がって良いぞ。」

「失礼します。」

少尉はそう言い艦長室を出て行く。

「少なくとも足手まといにはなりそうにはないですな。」

「のようだな。」

しかし、私の悩みの種は尽きんがな。

「増援が来たって本当か？」

戦闘を終えて、デブリベルトに潜伏していたが、どうやら連邦の戦艦は増援を呼んだらしい。

「ああ…バイカル級が二隻だ。」

バイガル級が二隻……数の上ではこっちの方が劣る。

「旧式の戦艦が増援なんて、連邦の懐もさびしいな。」

ジヨナサンがそう言うが、戦艦の性能はともかく、MSの数で劣るのは不味い。

向こうにはイノベーター専用のカイノスが配属されている。

こちらのイノベーター専用機のカディアスは手負いだ。

「それでどうすんの？いつまでも隠れては入れられないでしょ？」

「そこでお前たちの仕事だ。」

俺達の出番を言う事は荒事か……

「我々にですか？」

「そうだ。前の戦闘でこっちも戦力が削られた。だから、補強する。」

「

「だが、どうすんだ？上からの補給は来ないんだろ？」

だから、ルシオラのガディアスの修理もままならないんだろ。

「ああ……だから、セルフで補給をさせて貰うさ。」

「成程な……それで俺達の出番と言う事が……」

親父の考えは分かった。

セルフなんて上品なやり方じゃないけどな。

どの道、連邦に見つかるのは時間の問題だ。

ならば、こっちから討って出るのも一つの手か……

コロニー国家内では連邦軍は自由には動けない。

しかし、戦力を持ってないコロニー国家の唯一の防衛力として若干ながら、連邦軍の部隊が配置されている。

「たく……どうせ、敵なんて来ないのに哨戒かよ……」

コロニー国家内の連邦軍の補給のための資源衛星の周囲を警戒しているGN-X?のパイロットが呟く。

すでにGN-X?は旧式となっているが、コロニー国家は連邦軍の中でも優先度が低いため、主力のGN-X?などは配備されていない。

「ぼやくなよ……忙しい地上の連中に比べればマシだよ。」

もう一機のGN-X?のパイロットがそう言っていると、相方のGN-X?が粒子ビームで撃ち抜かれる。

「何だ！敵襲！」

GN-X?のパイロットが敵襲に気づくと粒子ビームがいくつも飛

んで来る。

「糞！司令部！敵しゅ……」

GN-X？のパイロットが司令部にそれを伝える前に粒子ビームに撃ち抜かれてGN-X？は爆散する。

「ずいぶんとザルな警備だな。」

「油断は禁物だ。敵が出て来るぞ。」

バットがジオナサンをたしなめていると資源衛星から防衛のMSが出て来る。

「来るぞ。」

ルシオラのガディアスが大量のGN粒子を放出して加速する。

「リーナは突っ込んで、ジオナサンはリーナの援護をしる。」

「はいよ。」

ガデッサ？はGNメガランチャー？を構えると前方のGN-X？を撃ち抜く。

「邪魔なのよ！」

リーナのガラッゾ？はGNバルカンを連射しながら、大型GNビームソードで切り裂く。

「雑魚は雑魚らしくやらねさいよ。」

ガラッゾ？はGN-X？を切り裂くと、別のGN-X？がGNバスターソードで切りかかり、ガラッゾ？は大型ビームソードで受け止めた。

「鬱陶しいわよー！」

リーナが声を荒げていると、ガデッサ？の粒子ビームが放たれて、GN-X？は距離を取るがガラッゾ？はGNショートキャノンでGN-X？を撃墜する。

「邪魔したか？」

「とつてもね！」

ガラッゾ？は両手からビームソードを展開し、防衛隊に突っ込んでいく。

ガディアスは胸部のGNメガビームで斜線上の敵を薙ぎ払う。

「この程度の任務で手間取る訳にはいかない。」

「全くだ。」

バットのGN-X？はGNロングライフルでGN-X？を撃ち抜く。

「早いところ、司令部を落とすぞ。」



「分かっている。」

ガディアスはGNビームアックスを抜いて、GN-X?を切り裂いて、資源衛星の司令部を目指す。

GN-X?はガディアスを追おうとするも、赤いGN-X?がGNミサイルを放ち撃墜されていく。

「悪いが俺が相手をしてやるよ。」

赤いGN-X?はGNハンドガンとGNビームサーベルを持ち、突っ込む。

「親父！バット達が制圧したみたいだぜ。」

資源衛星から少し離れた宙域にアレクサンドリア級が資源衛星での戦闘が終了した知らせを聞いていた。

「そうか。残りのMSを出せ……奴らが来る前に物資を積んで撤退するぞ！」

ガイウスがそう言うと今回の戦闘に出さなかったGN-X?が出撃し、資源衛星へと向かう。

「ここからは時間との勝負だ。手間取るなよ。」

「動きがあったのか？」

メーティアのブリッジに資源衛星との通信が途切れたとの報告が来て、アルエットはブリッジに上がって来ていた。

「はい……数時間前から通信が途絶しています。」

「艦の補給状況はどうか？」

「完了しています。MSの修理も現地に着くまでには完了するとの事です。」

部下からの報告を聞き、アルエットは艦長席につき判断する。

「僚艦に打電しろ。我が隊はこれより、資源衛星に向かう。襲撃を受けた可能性がある。その場合の予想出来る撤退ルートの割り出しをしておけ。」

「了解しました。」

アルエットの指示でブリッジクルーは慌ただしく動き出し、メーティアと僚艦のバイカル級は資源衛星を目指して動き出す。

メーティアとアレクサンドリアの二隻が再び、宇宙でぶつかり合う。

## MISSION07 追う者と追われる者(後書き)

### 新MS設定

GNX-YN001 『シルフィード』

コリニック社が次期主力MSのプロトタイプとして開発した試作MS。

可変機構を有し、機体内に三基の疑似GNドライブを搭載しているため高い出力を出す事が出来る。

戦場ではその出力を活かした高軌道力だけでなく、MSを素早く展開するサブフライトシステムとしても使用出来る。

### 武装

・GNロングソードライフル

機体のメイン装備で、ロングライフルとロングソードとして使う事が出来る。

飛行形態でも使用可能。

・GNロングビームサーベル

通常のビームサーベルに比べて、刃の長いビームサーベルを展開す

ることが可能な新型のビームサーベル。

シールドの裏側に二本装備され、シールドに装備した状態でも使用が出来る。

また、出力を変える事で通常と同じ長さやビームダガーとしても使用可能。

・GNビームガン

シールドの表側に二門内蔵されている。

ロングソードライフルに比べて、射程が短い分、連射速度に優れている。

飛行形態でも使用可能。

・GNシールド

左腕に装備されているシールドでGN-XシリーズのGNシールドよりも細長い。

GNフィールドを展開することは出来ないが、ディフェンスロッドのように回転させる事が可能となっている。

裏側に二本のGNロングビームサーベルが装備され、そのままツインビームクローとしても使用可能。

飛行形態時は機体の腹部に装備されている。

・GNバルカン

頭部に二門装備されている標準的な装備。

MS形態でしか使用できない。

## Mission 08 異変

「親父！連邦の戦艦に補足されましたぜ！」

連邦軍の資源衛星を強襲し、物資を強奪したアレクサンドリアはメーティアに補足されていた。

「数は？」

「例の戦艦1隻と後方にバイカル級が二隻！」

メーティアは相手に奪った物資での体勢を整えさせないために資源衛星に残された痕跡から、アレクサンドリアと追っていた。

最短でアレクサンドリアを追うためにメーティアは必然的に単艦での強行軍となっていた。

「1隻か……後方の2隻の増援もあるぞ。バット達を出せ、増援が来る前に蹴りをつけさせる！」

「がつてんです！」

「艦長、敵艦を補足しました。」

「バイカル級の位置は？」

メーティアでアレクサンドリアを補足すると、アルエットは策を考

える。

「距離300です。」

「そうか……MS隊を出撃！バイカル級が到着するまで敵艦の足止めを行う。」

「了解しました。」

二隻の戦艦からMSが出撃し、戦闘が開始された。

先端を開いたのはメーティアだった。

メーティアがGNキャノンでMS隊に放つと、MS隊は散開しようとするが、避けきれなかったGN-X？などが落とされる。

「バンとセリシア、シャロンは赤い奴を抑さえろ。ライトはガディアスだ。残りは俺が抑える。」

ゴタードの指示で連邦軍の機体は散開する。

「生かすか！」

ガディアスがバンのGN-X？とセリシアのガラッゾ？を背中に乗せて、バットのGN-X？に向かうシャロンのシルフィードを狙うがライトのカイノスの粒子ビームがそれを阻む。

「悪いがこの前の借りを返させて貰う。」

「イノベーター！」

ガディアスは標的をカイノスに変えるとGNメガビームを放つ。

「相変わらず厄介な攻撃だ……しかし、そう何度も！」

カイノスはガディアスの曲がる粒子ビームをかわしながら、GNビ  
ットを射出する。

「ちい！」

ガディアスはビットからの攻撃を回避しつつ、ビームガトリングで  
応戦する。

「どうやら、手負いではフィールドは使えないらしいな。」

ガディアスがビットの相手をしているうちにカイノスはビームサー  
ベルを抜いて接近していた。

「舐めるなよ！イノベーター！例え、フィールドが張れなくとも！」

ガディアスはビームトマホークを抜いて、受け止めた。

「私は負けはしない！」

鏝迫り合いをしていたガディアスはカイノスを蹴り飛ばすとバルカ  
ンで追撃する。

「流石に一筋縄ではいかないか……！」



カインスはシールドで防ぎながら、後退しビットを差し向ける。

「ならば！ファング！」

ガディアスもGNファングを射出し、二機は互いに粒子ビームを浴びせ合い、それをかわしあう。

「俺達を相手に一機で突っ込んで来て！」

ジオナサンのガデッサ？はゴタードのソルブレイヴにGNメガランチャー？を放つがソルブレイヴはかわしてトライパニツシャーで反撃し、ガデッサ？の付近にいたGN-X？を撃墜する。

「ジオナサン！援護しなさい！私が！」

リーナのガラッゾ？が両手のビームソードを展開し、ソルブレイヴに切りかかる。

「お前と近接戦闘をするつもりは無いな。」

ソルブレイヴはガラッゾ？の攻撃を回避すると、距離を取り、MS形態に変形しビームライフルとGNキャノンでガラッゾ？に放つ。

「そんな攻撃！」

ガラッゾ？がGNフィールドでソルブレイヴの攻撃を防ぐが、ソルブレイヴは両足に内蔵されているチャクラムグレネードを使う。

「何よー！」

「センサーがいかれた！」

チャクラムグレネードでセンサーを無力化していると、ソルブレイヴはジオナサンのガデッサ？に接近していた。

「まずは面倒な砲撃型のお前からだ。」

ソルブレイヴはビームサーベルを抜いて、ガデッサ？に切りかかる。

「ちくしょー！」

ガデッサ？はソルブレイヴにGNメガランチャー？を向けるが、粒子ビームを放つ前にソルブレイヴのビームサーベルで切り裂かれる。

「マジかよー！」

そして、ソルブレイヴはガデッサ？を踏み台にして加速し、飛行形態に変形する。

「ジオナサン！」

ガラッゾ？がGNバルカンを放つが、ソルブレイヴはかわして、旋回するとガラッゾ？に高出力モードのビームライフルを放つ。

ガラッゾ？はGNフィールドを展開するが、その威力に押し切られる。

「つうつう！」

「リーナ！」

「大丈夫よ！アイツ……」

ガラッゾ？は破壊されるが、リーナはコアファイターで脱出していた。

「何なんだよ……あのパイロット！」

ガデッサ？はGNバルカンでソルブレイヴを追撃するが、当たらない。

「若いな。」

ソルブレイヴは急制動をかけてMS形態に変形して、追撃して来たガデッサ？の腕を切り裂いた。

「シャロンさん……ワタクシ達が援護します。緊張なさらずに……」

「了解です。中尉殿」

ガディアスやガデッサ？を抜けたシルフィードはロングライフルを構えていたバットの赤いGN-X？にロングソードライフルを放つ。

「新型か……だからと言って！」

赤いGN-X？はシルフィードの攻撃をかわすと、ロングライフル

で反撃する。

シルフィードは機体を変形させると、GNシールドで防ぐが、足を止めてしまい他のGN-X?の攻撃を受けてしまう。

しかし、間にセリシアのガデッサ?が割り込んでGNフィールドで防ぐ。

「中尉殿！」

「戦闘中に足を止めてはいけませんわよ！」

セリシアはそう言いロングソードを抜いて、GN-X?を切り裂く。

シルフィードは機体を変形させるとビームガンを撃ちながら、移動する。

「これが……実践……だけど…私は！」

シルフィードはそのまま加速し、GN-X?からの粒子ビームをかわしながら、接近し変形してすれ違いざまにGN-X?をツインビームクローで撃墜し再び飛行形態に変形して離脱する。

「あの新型……以外と面倒だ。」

バットの赤いGN-X?はロングライフルを構えるとシルフィードに放つ。

赤いGN-X?の攻撃はシルフィードを捉えるかと思われたが、シルフィードは当たる直前に機体を変形して、進路を変えた為、当た

る事は無かった。

「避けたのか……良い感をしているパイロットだ。」

バットが感心していると、バンのGN-X?がGNキャノンを放ち、回避する。

「この前は後れを取ったが、今度こそ！」

バンのGN-X?はGNキャノンとビームライフルを連射して、赤いGN-X?はかわしながら、ビームサーベルを抜いた。

「お前に用は無い！」

赤いGN-X?はバンのGN-X?に接近し、バンのGN-X?もビームサーベルで応戦する。

二機はぶつかり合い、離れては何度もぶつかり合う。

「性能は互角……それでも押されているのか……」

バンのGN-X?が押されかけていたが、シルフィードがロングソードライフルで援護射撃する。

「中尉殿！」

「ちい！新型か！」

バットがシルフィードに気を取られていると、セシリアのガラッソ?が接近していた。

「余所見はいけませんわよ！」

ガラツゾ？はロングソードで赤いGN-X？に切りかかる。

「何機いようと！俺は！」

赤いGN-X？はGNシールドで受け止めた。

「艦長！間もなく、バイカル級が戦闘宙域に到着します。」

メーティアのブリッジでは後方に置き去りにして来たバイカル級の到着を確認していた。

「艦長！司令部から緊急暗号通信です！」

アルエツトが戦況の優位を確信していると、別のオペレーターが叫ぶ。

「後にしろ！戦闘中だ！」

「しかし！最優先との事です！」

オペレーターがそう言い、モニターに映像を出す。

「これは……」

アルエツトは通信に添えられていた映像データを見て驚く。

他のクルーはいまいち状況が飲み込めずにいたが、アルエットはそれを知っていた。

「MS隊に通達しろ！今すぐに戦闘を中止し本艦に帰投させる！」

「艦長？」

「早くしろ！事態は一刻を争う！」

アルエットに怒鳴られて、オペレーターは前線のパイロットに通達する。

「一体何が起きたと言っただ……」

アルエットは映像を見て呟く。

映像には一基のコロニーが映し出されている。

しかし、そのコロニーは通常のコロニーの映像では無かった。

そのコロニーは全身が金属の様な物に包まれている。

それはまるで20年前のELS戦役で侵食を受けたMSや戦艦のよう……

「どっつ言っ事ですか？」

外宇宙航行艦『ソレスタルビーイング』の指令室に休んでいたマリアが飛び込んできた。

「来たわね。」

この船の指揮官のスメラギはマリアが来たところでフェルトに映像を出させる。

「これは……ELS?」

そこにはアルエットが見たのと同じコロニーが映し出されている。

「数時間前に突然、ELSの大群が侵攻し、コロニーを侵食……現在には行動を停止していますが、まだコロニーの中には大勢の人が取り残されています。」

「ELSがどうして……」

「不明です。ヴェーダの予測でも何も……」

端末でヴェーダにアクセスしているミレイナがそう言う。

「このコロニーには民間人もいた筈ですよね?」

「少なくとも100人以上は……」

フェルトがそう言い思い思いの空気が流れる。

「ガンダムを宇宙に上げるのにはどの最短で10日はかかるわ……」

「時間がかかり過ぎる……」



スメラギの言葉にマリアはそう言う。

流石に10日もこの状況では中の民間人は絶望的と言える。

「ミレイナ、連邦軍の動きはどうなってるの？」

「現在は宇宙艦隊を集結させて、コロニー内の人命救助とELSの殲滅の為に動いています。」

「問題はその後……」

マリアは思い口調でそう言う。

今までの共存は危うい状況でなっている。

政府や軍内部の人類解放戦線のシンパを抑え込んでいる最大の理由はELSは人類に対し有益な存在である事が大きい。

しかし、これはそれを覆し、ELSは危険な生物であるとして軍がELSの完全な殲滅を決めるとしてもおかしくは無い状況。

「幾らアベルでもこの状況は……」

アベルは軍や政府に多大な発言権を持っている。

今まではそれを最大限使い、ELSを駆逐させないようにしていたが、流石にアベルでもこれを庇いだてする事は出来ない。

「どちらにせよ、ガンダムが地上にある以上…私達は静観するしかないわ……」

スメラギはそう言っが、皆の表情は暗かった。

20年前に刹那とテイエリアが成した来るべき対話による異種との共存がたったの20年で崩れるかも知れないからだ。

「分かったよ。母さん……俺の方で出来る限りはしてみるよ。」

「頼んだわよ。」

俺は地上でコロニーの一件を母さんから聞かされていた。

まさか……ELSがコロニーを侵食するなど、予想もしていなかった。

「中将…如何なさいます?」

「どうするかね……」

リード中将にああ言った手前、ELSを駆逐すべき何だろうけど……何が引つかかる。

なぜ、このタイミングで行動を起こした?

単なる偶然か?

俺には先日の教会の一件が失敗に終わったから、別の手としてこの事件が起きたようにも思える。

理由なんてない。

俺の感がそう言っている。

しかし…問題はどつちだったのかだ。

E L Sも馬鹿じゃない。

自分達の立場を悪くするような行動をする訳がない。

だが、映像を見る限りではE L Sで間違いない。

前後の映像も残っているから確実だ。

「アメリカ…少しきな臭い。」

「分かりました。至急調査します。」

アメリカはそう言い執務室を出て行く。

万全を期すために戦力の確保を言えば、7日は時間が稼げる。

その内にアメリカが何かしらの情報を得る事が出来れば、状況が変わる可能性が出て来る。

あれからまだ20年だ。

刹那とティエリアが戻るまでは俺が何とかしてみせるぞ……

何処の誰だ知らないが、無粋な真似をしてくれる……

まあ良い。

そう好き勝手にはさせないさ……

## Mission 09 事件の裏側

「これが、連邦が引いた理由か……」

先の戦闘で連邦軍が優勢にも関わらず撤退した理由を俺達は帰投後、親父に見せられた。

「艦長……これは一体？」

ルシオラが俺達を代表して親父に聞いた。

「こいつはE L Sが侵食したコロニーだ。」

E L S……地球外変異性金属体だったな。

俺もガキの頃に映像を見た事がある。

E L Sが地球に来た当時は相当な混乱が起きて、人類存亡の危機とまで言われていたらしい。

「マジかよ……E L Sは人類と共存するって話じゃなかったのかよ。」

「だけど、実際これでしょ？所詮は信用できないってことよ。」

「それで、親父……俺達はどうする？」

位置的にコロニーに行けない事もない。

連邦もこんな時に俺達に仕掛けては来ないだろう。

「そうだな…… ELS 戦役の生き残りとしては放っておく事は出来ん……しかし、現状の俺達の戦力を考えると無茶としか言いようがない。今の搭載機には対 ELS 用のコーティングがされてないし、するだけの設備もないしな。」

先の戦闘でジヨナサンの機体が武器を失い、腕が切り落とされているし、リーナは落とされてコアファイターで帰投している。

それ以外でも何機かは落とされている。

ルシオラのカディアスも GNフィールドを展開出来ないし、手負いだ。

ELS は脳量子波に引かれると言う特性があると聞く、ルシオラは俺達の中で最も高い脳量子波を持っている。

それに ELS は他者を侵食するため、連邦軍はそれに対応するために機体や武装を ELS に侵食されないようにコーティングする技術を確立させている。

だが、俺達にそのコーティングをする事が出来ない以上、20年前同様近接戦闘は避けなければならない。

「確かにな……」

「だが、俺達はこの隙に地上に降りようと思つ。」

「地上に？」

「そうだ。地上なら補給を受ける事も出来るし、この状況だ。連邦も俺達を相手にしている余裕はないだろう。地上に降りるには絶好のチャンスだ。」

確かに……今の戦力ではこの一件が終わった後、どこまで逃げ切れるか分かったもんじゃない。

地上なら、最悪艦を捨ててMSだけで逃亡することも可能だが、宇宙ではそうは行かない。

「しかし……この状況を放っておくので？」

「ルシオラ……俺達の敵はELSだが、現状ではお前たちを死なせに行くようなものだ。この艦の艦長として俺はそれを了承する訳にはいかない。今、俺達がすべき事は大勢を整える事だ。今は無茶をすべき時ではない。」

「……了解しました。」

親父の言葉にルシオラは一応の納得を見せる。

ルシオラも論理的過ぎるところがあるが、引き際も心得ている。

「話はここまでだ。最悪戦闘になる可能性を考えて、お前たちは休んでおけ。」

親父のこの言葉でこの場はお開きとなる。

「中佐、ELSの件は聞いているな。」

MS隊を回収し、地上の中将との連絡が取れていた。

「どうやら、あの映像は中将の性質の悪い悪戯ではなく、事実だったようだ。」

「ええ……一体、どう言う訳で？」

「私に聞かれても困るな。現在はブリッジ代表を拘束し、尋問しているが無駄だろうな。」

「ですね。」

「恐らく、今回の一件に代表は関わっている可能性が低い。」

「しかし、不可解だ。」

「この20年、いかなる不平等な条約でも受け入れて来た彼らがなぜ今になって……」

「中佐の気持ちは分かる。しかし、これは現実起きた事だ。」

「それで政府はどのような対策を取るつもりで？」

「現在は連邦宇宙軍の戦力を集めて、コロニー内の人命救助とELSの排除を検討中だ。」

「その排除の中にはコロニー国家にいるELSや代表も含まれている」



のだろう。

「それは確実に可決されるだろう。だが、中佐も考えている通り、この一件はキナ臭い。」

「同感です。動くタイミングがおかしいです。」

「そつだ。なので、アメリカに調査をさせている。だが、ELSがコロニーを襲ったと言う事実は消える事は無い。私もコロニーを侵食したELSを排除することに関しては賛成だ。しかし、コロニー国家や代表を排除するのは早計だと考える。」

ELSの能力は危険だが、宇宙空間で自由に動けると言うのは人類に対しては有益と言わざる負えない。

「メーティアは予定を少し変更し、対ELS用の試作品を受領してコロニーに向かって欲しい。」

中将がそう言いデータを送って来る。

以前より、技研で対ELS用の兵器を開発していると聞いていたが、試作品が出来ていたとは……しかし……

「中将、このルートですと、戦闘開始予定時刻を若干遅れる事になります。」

「構わない。メーティアは増援として現地に向かい。試作品のデータ収集も兼ねて参戦すれば良い。作戦は追ってメーティアにも伝えるように手配してある。」

「了解しました。」

中將は今回の一件も利用しようと言つ腹か……

ここまで用意周到だと、中將が仕組んだか、知っていて見逃したようにも思えて来る。

「事故処理はこちらで行う。中佐等は任務を完遂させることを第一に考えて行動せよ。」

「はっ！」

そこで通信が切れる。

「聞いたな。諸君、我々の任務は重大だ。増援だからと言い気を抜かずにかかれ！」

私がそう言つとクルー達の顔は引き締まり、作業に戻つた。

「大丈夫ですか？」

「ああ」

メーティアのシュミレータールームの端で休んでいるとセシリアもシュミレーションを止めて休憩に入ったようだ。

「少尉はまだ？」

「ええ……大したものですね。」

少尉はすでに何時間もシミュレーションで訓練をしている。

「今は過去のE L S戦のデータを使っていますが、流石ですね。すでに対E L S戦の感覚を掴みつつあります。このままいけば、次の戦闘までには問題なく戦えると思いますわ。」

対E L S戦は対M S戦や対艦戦に比べて、癖が強いからな。

新兵はなれるまでに時間がかかるし、実戦で鍛える事も出来ない。

俺を含めて、メーティアで対E L S戦の実戦を経験しているのは艦長位しかいないと思う。

俺だった得意な訳じゃない。

これが天才って奴か……

イノベーターのライトが士官学校時代からその能力は秀でていたのは見て来たから、知っているが少尉はハーフィンベーターだ。

半分でも親が親なだけあり、これだけの才能に恵まれているのか……

「どうしました？」

「どうやら、考え込んでいたようだ。」

「何でもない。」

「緊張してますの?」

確かにな……そうでもないところなことを考えたりはしないな……

「少しな……」

「ワタクシもですわ。ELSとの戦闘は初めてですし……20年前の事もうつすらとですが、覚えてますし……」

20年前か……

俺はその時は5歳だったけな……セシリアは俺の一つ下だから4歳か……

あの時は訳が分からずに怖い宇宙人が攻めて来たと聞かされたたな。

今ではそうは思っていないが、20年前に植えつけられたELSの恐怖は未だに世界に根付いている。

「確かにな……だが、それ以上に不安なのは地上や宇宙で暮らしている連邦市民だ。俺達は連邦軍の軍人としてそれらを守らないといけない。例え、不安でも怖くても俺達を守らないといけない。」

俺はそのために軍人になった。

20年前に命を賭けて戦った連邦軍の軍人の様な軍人に憧れて……

「そうですね。」

「そろそろ休憩は終わりだ。少尉を見習い、俺達も訓練をするか。」  
「ですわね。」

不安なら、体を動かしてでも忘れて少しでも作戦の成功率を上げないといけない。

20年前とは違う。

今度は俺達を守る側だ。

「ヴェーダはなんて？」

ミッションを終えて機体の整備が終わるのを待っていた私たちは宇宙での一件を知った。

レムリアの両目の虹彩が輝き、ヴェーダとリンクしている事が分かる。

「連邦軍が動いたようだ。我々のガンダムを宇宙に上げている時間は無いらしい。」

ガンダムは地上に降りるときは簡単だけど、宇宙に上がる時は時間がかかるからね。

今回は、ミッションを素早く完遂させるために戦力を集めたのが仇となったわね。

「つまり、俺らは地上で事の顛末を見届けるしかないと言う事か…  
…」

「歯がゆいですね。せつかく、地上での任務が問題なく終わったと言つのに……」

「だが、いつでも動けるようにはしておけと言う事だ。」

この一件がどこまで飛び火するかは分かんないからね。

最悪の状況で動けませんじゃ洒落にもならないって事が……

「了解」

どの道、私たちは地上で見てる事しか出来ないって事よね。

「それで、代表の方はどうなってる？」

アルエットとの通信を終えて、今度は大統領府に居る母さんに連絡を取る。

「特に情報は無いわ。何かの間違いだの一点張りよ。」

「だろうね。」

俺の感だが、今回の一件にはコロナー国家は絡んでいない。

しかし、この状況でアイツに勝手に動かれたら最悪の方向に進む事しか予想できない。

だから、このまま拘束されていくとなると非情にありがたい。

あれから、3日だがそろそろアメリカが何かしらの情報を持って来てくれないと動き用がない。

このままだと、俺がELSを駆逐しないとイケなくなる。

とりあえず面倒だ。

「だけど、勝手に動かれるのも嫌だから、適当に理由をつけて拘留しておいて、くれぐれも逃がさないようにね。」

「分かってるわ。アベルこそ、早いところ何とかしなさい。出ないと私も立场上、決めないとイケないから……」

「ああ……俺もそれだけは避けたい。出来るだけの事はして見るよ。」

と言ったは良いが、決定的に情報が足りない。

「中将、入ります。」

俺が頭を悩ませているとアメリカが来たようだ。

「母さん、進展があり次第連絡する。」

俺はそう言い母さんとの通信を切り、アメリカを入れる。

「それで？」

「なかなか興味深い情報があります。恐らく今回の一件で使用されたのはこれでしょう。」

アメリカはそう言い何やら資料を出す。

「これは？」

見たところ、何かの装置によつに見えるが……

「これは対ELS用に開発された物の一つでヴェーダを元に開発された、量子演算処理システムのようなです。」

ヴェーダをね……

「これを使えば、ELSの脳量子波に干渉し、理論上はELSを自在にコントロールできる予定です。」

「予定と言うのは？」

「現状ではELSの脳量子波に干渉してELSの行動をおかしくする程度の効果しかないとの事です。」

つまりはこれを使い、ELSをおかしくしてこの状況を引き起こしたと言う事が……

ELSが何かしらの行動を起こせば、軍は対応をせざる負えないからな。



「それで？どこの誰が？起こした。」

アメリカの事だ。これだけの情報で戻ってきたりはしない。

「すでに確保しています。」

アメリカが端末に情報を出す。

見たところ、解放戦線のシンパらしいが、これと言って特徴は無い男だ。

「こいつが？」

「実行犯は彼に間違いありません。すでに自白まで追いこんでいます。」

3日でそこまでか……多少、引つかかるが上出来だ。

「バックは？」

「不明です。彼自信も知らない可能性があります。体に聞いたのでまず間違いないかと……」

どう言う方法を取ったのかは敢えて聞くまい。

この男がそこまでされて、口を割らないと言う事は知らないと見て違い無いだろう。

「ヴェーダを使えば多少時間はかかりますが、割り出すのも不可能

ではないかと……」

確かに……現状でヴェーダを欺くのが不可能に近い。

解放戦線にそれだけの事が出来る人物はいないと見て良い。

「いや……心当たりがある。」

「それで私によつとは？ウォーカー中将」

俺の心当たり……それはリード中将。

思えば、あの時のあの会話で俺にELSを駆逐すると言わせたのはこの時の布石……

幾ら、ELSに問題を起こさせても事態を收拾出来化ければ意味がない。

そう言う事では俺以上の適任者はいないと言う事か……

「リード中将はコロニーの一件はご存じでしょう？」

「あれだけの事態だ。当然知っている。」

まあ……これだけの大事だからな。

「それで？」

「今回の一件で軍内部で特殊な装置を使って起きた事件だと言う事が私の部下の調べで付いたんですよ。」

「ほう…それは大変遺憾な事だ。」

「ですよね。」

あくまでもポーカーフェイスで来るか……上等だ。

「幸い、犯人は私の部下が拘束しました……しかし、彼は末端の実行犯で黒幕は別にいる。」

「中将は私を疑っているか？」

恐らく、こいつだろうが、尻尾は出さないだろうな。

だから、限りなく黒に近いグレーと言ったところか……

「まさか……リード中将がそんな事をする人でない事は私は知っていますよ。黒幕については部下がヴェーダを使って捜査しています。見つけるのは時間の問題でしょう。」

「それは何よりだ。」

「今日、中将に来ていただいたのは別の話です。」

俺はそう言い予め用意させておいた物を出す。

「これは？」

「いえね…娘が休暇を取ると聞いたので、久しぶりに娘と一緒に南の島にでも旅行へ行こうと思いましたがね。今回の一件で娘も対応に出る事となってしまいましたね。」

前半はウソだけど。

「それは気の毒に……」

「しかし、せつかくですので中将に譲ろうかと思ひましてね。」

「私にですか？」

「ええ……中将にも娘さんがいましたよね。」

俺がその話題を出すと微かにリード中将の表情が動く。

どんな人間にも弱点が存在する。

大抵の人間は家族だ。

ヴェーダを使えば、旧マスターの情報以外は大抵は手に入るんでな。

「それに娘さんは結婚まじかとか？私も年頃も娘を持つ身、中将の心情は察しますよ。」

俺がそこまで言うとりード中将はその言葉の本当の意味に気付いたらしく、目が分かっていない。

「相手はコリニック社系列の会社の次期重役候補とか……私も娘婿

にはそれなりの地位が約束された相手が良いと思ってますよ。」  
相手の情報を出す事で更に険しくなる。

「……何が言いたい。」

「私は連邦軍の軍人として同僚の家族にも幸せになって欲しいんですよ。せっかく、良い相手が見つかったのに破談とかになれば、娘さんも可哀そうですね。」

遠回しの言い方だが、俺の意図は伝わっている事は分かる。

自分では隠しているつもりだが、動揺していると俺には感じる事が出来る。

大方、ELSを排除せねばと言う義務感と娘への愛情で揺らいでいるのだろう。

馬鹿な男だ。

悩むような事じゃない。

俺なら躊躇う事なく、娘を選ぶ。

親として子供の幸せ以上の物は存在しない。

「……聞かせて欲しい。ウォーカー中将はどうするつもりだ。」

「無論、コロニーに取りこ残されている人の救出を最優先として、コロニーを侵食しているELSの排除はお約束します。」

「そうか……それを聞いて安心して休暇を取れる。」  
落ちたな……

「そうですね……良い休暇を……中将が戻られるころには黒幕も捕まり、すべてが終わっていますよ。」

俺がそう言つとリード中将は俺の出したエアチケットを持って出て行く。

そうさ……それで良い。

今、リード中将を切り捨てるのはもつたない。

この男は優秀だ。

俺にそう簡単に尻尾を掴ませない上に今回は完全に出し抜かれた。

だが、俺もただでは出し抜かれる訳にはいかない。

今回の一件でリード中将に首輪をつける事には成功した。

これで人類解放戦線へのパイプも出来るだろう。

「アメリカ」

「聞いてましたよ。大した悪代官振りでしたね。」

「さて……何の事かな？」

アメリカは別の部屋でこの会話を聞いていたらしい。

情報収集能力と情報操作能力はイノベイドでもかなりのものだが、油断出来ない相手だ。

「だったら、俺の良いたい事も分かるな？」

「ええ……… 適当に軍内部の解放戦線のシンパを人柱にすればよろしいので？」

「おいおい…… 人聞きの悪い事を言うなよ。俺は黒幕を捕えろと言ってるんだ。」

まったく……… 人聞きの悪い。

俺はそんな指示を出してないし、そんな事を考えてはいない。

しかし、黒幕は捕まり、すべてを自供するだろう。

そうすれば、そいつを処罰にかければ、マスコミ対策も出来るし、市民も納得するだろう。

それにこれを理由に軍内部のシンパの一掃に解放戦線の撲滅にも大々的に動く事が出来る。

後は作戦がうまく行けば良い。

そうすれば、最悪の事態だけは避けられる。

俺が動くような事態にだけはしてくれなよ。

面倒くさいから……



## Mission 10 軍人として

E L S が汚染し侵食したコロニーの周囲に地球連邦軍の宇宙艦隊が終結していた。

しかし、これを機にコロニー国家に対し、武力行使に出る人類解放戦線を警戒して最低限の戦力した投入出来ない。

装置によりおかしくされたE L S と連邦艦隊との戦力差は約3倍。

20年前の1万倍と比べるとかなり、戦力差は無いが、当時に比べてM S の性能が向上し、対E L S の対策が出来ているが、それでもパイロットの経験不足や実力の低下は間逃れず、戦いは厳しい物となっている。

「ウエルキン大尉。地上のウォーカー中将より作戦の発令が出た。」

ヴィクトリア級航空戦艦のカタパルトにセットされている蒼い色の専用のG N - X ? のコックピットでアスカ・ウエルキンが母艦の艦長よりそう言われる。

「了解。アスカ・ウエルキン出撃する。」

彼女のG N - X ? が射出され、他の戦艦からも続々とM S が射出され、戦端が開かれた。

戦闘が開始されると戦場では粒子ビームが飛び交う。

連邦軍だけでなく、E L S 側も戦闘が始まると否や、複数の小型E

LSが集まりGN-X?をかたちどる。

20年前はこの事態に戸惑っていたが、すでにその能力は周知の事実の為、連邦軍は戸惑う事無く、応戦する。

「各機、俺達の任務はメーティア隊が到着するまで、敵の数を減らす事だ。無茶はするなよ！」

アスカの指示でMS隊は散開してELSに粒子ビームを放つ。

「数が多い……」

アスカのGN-X?は高軌道ユニットに内蔵されているGNミサイルを一斉掃射し、ELSを破壊していく。

「だが……それでも引く訳にはいかない！」

アスカのGN-X?は両手にビームライフルを持ち、ELSを撃墜していく。

「艦長……間もなく、戦闘宙域に到着します。」

戦闘が開始され、暫くすると二隻のバイカル級を引き連れて、メーティアが戦場に到着する。

「MS隊を出撃させる。出撃後、対ELS量子ミサイルを放て、それとハイパーメガビームキャノンのチャージを忘れるなよ！」

「了解しました。」

アルエットの指示でオペレーターが各部署に指示を出して、メーテ  
イアのカタパルトが開閉する。

「分かっているな。この作戦はお前たちが要だ。」

「了解」

「了解しましたわ。」

リニアカタパルトにバンのGN-X?がセットされる。

今回の作戦ではバンのGN-X?とセシリアのガラッゾ?が突入隊  
の主力とされている。

そのため、バンのGN-X?には通常時のキャノンユニットに加え、  
背部にGN-X?が20年前のELS戦役時にも装備していた増加  
粒子タンクに加え、両肩に一基つづGNバスターソード、腰にはガ  
デッサ?のGNメガランチャー?を装備し重装備となっている。

加えてセシリアのガラッゾ?にはGN-Xシリーズ用のビームライ  
フルを両手に持たされている。

「バン・ノマル……出撃します。」

「セシリア・ベルシュタイン……行きますわ!」

バンのGN-X?とセシリアのガラッゾ?が射出され、ゴタードの  
ソルブレイヴ、ライトのカイノス、シャロンのシルフィードが射出

されメーティアも戦闘に参加した。

「粒子量が……」

メーティアが参戦し、戦闘が激化している。

アスカのGN-X？も奮闘しているが、ELSの数が多くGN粒子の残量が底を尽きかけ、被弾箇所も増えている。

「流石に無理をしかけたか……」

アスカはそう言い自分の小隊の状況を把握しつつ、GNブレイドでELSを切り裂く。

「状態は良くないな……メーティアが到着した以上、ここいらが引き際だな。」

アスカはそう判断し、部下に通信を繋ぐ。

「全機、俺達の仕事はここまでだ。被弾している者、粒子が尽きかけている者を優先として緩やかに母艦まで後退する！」

アスカのGN-X？はGNサブマシンガンを放ちながら、部下とともに後退を始まる。

「隊長！」

「俺が殿をする。お前たちは先に戻っている。」

「しかし……隊長の機体も粒子残量が……」

事実、部下の言う通りアスカのGN-X？は通常の戦闘時よりもハイペースで粒子ビームを使ってい、スラスタも使っているため、粒子の残量が他の機体よりも残りが少ない。

「大丈夫だ。だからお前は早く帰艦しろ。ここは俺が引き受ける。俺もちゃんと後で帰艦する。約束だ。俺が約束を破ったことがあるか？ないだろ？心配はいらない、俺を信じろ。」

「……了解しました。」

部下はそう言いアスカは通信を切る。

「約束するか……守れるかな……」

アスカのGN-X？は両腕のビームサーベルを展開し、ELSを切り裂いて行く。

しかし、機体内で粒子の残量が尽きる寸前のアラートが鳴り響く。

「ここまでか……済まないな……約束は守れそうにない……」

アスカが諦めかけ、大量の小型のELSがアスカのGN-X？に突っ込んで来るが、そのELSの大群は後方からの粒子ビームが撃ち落とす。

「良く持ちこらえた。ここからは俺達に任せて後退しろ。」

アスカのGN-X？にゴタードのソルブレイヴからの通信が繋がれ、

モニターにはソルブレイヴを戦闘にメーティアとともに参戦したバ  
イカル級に搭載されていたGN-X?などが粒子ビームでELSを  
撃墜していく。

「了解した。後は任せます。」

粒子の残量が少ないため、アスカは戦闘を中断し、そのまま母艦ま  
で帰投していく。

「先遣隊が命賭けで数を減らしたんだ。作戦を完遂させろよ。」

ゴタードはそう言い、飛行形態のままビームライフルとGNキャノ  
ンでELSを蹴散らす。

メーティア隊のMSが戦闘に参加すると、メーティアから大量のミ  
サイルが放たれた。

ミサイルはELSに当たる前に爆発し、戦場に粒子状の物体を撒き  
散らかす。

すると、ELSは統率が取れないかのようにバラバラに動きだす。

対ELS量子ミサイル……人類がこの20年間でELSの生態を調  
査し、もしもの時の為に開発していた試作の兵器。

ELSの放つ脳量子波が人間にとって不快なようにミサイル内にE  
LSが不快に感じる脳量子波を放出する物体を内蔵し、戦場にはら  
まく事でELSの脳量子波に干渉して脳量子波で統率を取っている  
ELSの統率を取れなくすることが出来る。

「新兵器の効果は上々のようだ。バン！セリシア！行って来い！」  
ゴタードはそう言いバンのGN-X？とセリシアのガラッゾ？は友軍の援護を受けて、コロニーに向かう。

「ミサイルが放たれたか……」

ライトのカイノスはビームライフルでELSを撃ち抜く。

「しかし……俺の脳量子波にまだ、群がるか……」

ライトとシャロンが交戦をしているところは対ELS量子ミサイルを放たれた宙域から外れている。

対ELS量子ミサイルは未だに試作品の段階の域を出ていないため、イノベーターやハーフィンベーターの脳量子波に対してはどのような効果が出るかは分からないため、二人は戦場から外れたところでELSが戦闘宙域から出て行かないように囷となっている。

「大尉殿！」

カイノスは大量のELSに群がられるとシャロンのシルフィードが飛行形態で駆けつけて、カイノスはシルフィードの背中に掴まり、難を逃れる。

「分かってはいましたが……」

「鬱陶しい……」

カイノスはシルフィードに掴まりながら、後方にビームライフルを放ち、シルフィードは前方にビームガンとロングソードライフルを放つ。

「大尉殿！」

「ちい！」

前方からもELSの大群が押し寄せて、二機は離れるとカイノスはGNビットを射出し、ELSを殲滅していく。

シルフィードも機体をMS形態に変形させると、ビームガンとロングソードライフルで迎撃する。

バンとセシリアは戦闘宙域を抜けるとELSが侵食するコロニーに取りついていった。

「下がっている。」

バンは付いて来たMS隊をコロニーから離れさせると、ビームライフルをしまい、持って来ていたGNメガビームランチャーを構えて、先端からビームソードを展開すると、コロニーの外壁を粒子ビームで焼き切る。

粒子ビームでMSが通れるほどの穴をあけると、バンは中を覗き、セシリアを先頭にしてMS隊が中に突入し、最後のバンも内部に突入する。



「空気が抜けているな……」

穴をあけた時点で内部の空気が出てきない事から、予測はしていたが、すでにコロニー内部の空気は抜けて、内部は真空となっていた。

「急がないと不味いですわね。」

セシリアがそう呟く。

いつから、真空になったかは分からないが、空気がないと言う事は生存者がいる確率は大きく下がる。

「俺がELSの中枢を叩く。セシリアはコロニーのシエルターを見て来てくれ。」

「了解ですわ。MSはワタクシとともに生存者の搜索を……」

バンはセシリア達と別れると、コロニーを取りこんでいるELSの中枢がいると思われるコロニーの機関部を目指した。

「確立的だと、ここが一番怪しいんだが……居てくれよ。」

バンのGN-X？は途中のELSをGNメガランチャー？で焼き払いつつ、機関部を目指した。

コロニーの回転や、気象はすべて、ヴェーダとリンクされて管理している。

そのため、コロニーで一番脳量子波を出している場所とも言える。

「ビンゴだ……」

機関部に入るとそこには巨大な金属の塊が待ち構えていた。

明らかにコロニーを取り込んだELSの中枢である事は明白だったため、バンのGN-X？はGNメガランチャー？を構えるが、死角から先端が尖り触手状のELSが伸びて来て、GN-X？はとつさにGNメガランチャーを投げ捨ててかわした。

「ベルシュタイン中尉！シエルターに生存者を確認！」

「でかしまわたわ！」

バンと別れたセシリア達はコロニー内に設置されている緊急避難用のシエルターを当たっていると、者ルターの内部には生存者が多数発見出来た。

「すぐに避難をさせない。メーティアにもこの事を打電してちょうだいな。」

セリシアが指示を出しているとコロニー内にもELSが多数存在し、セシリア達に向かって来る。

「邪魔をしないでくださいまし！手の空いている人は迎撃を！」

セリシアのガラッゾ？は持っていたビームライフルで迎撃する。

「せっかく、生存者が見つかったと言うのに……無粋ですわね！お行きなさい！ファング！」

ガラッゾ？からGNソードファンクが射出され、ELSを切り刻んでいく。

「バンさんはまだなのかしら……」

「くっ……」

バンのGN-X？はELSの触手をかわし、機関部の柱の影に隠れる。

「不味いな……ランチャーの火力が欲しいところだが……」

GN-X？は影から出るとGNキャノンとビームライフルでELSの中枢を攻撃するが、触手状のELSで防ぎ、中枢まで粒子ビームは届かない。

「駄目か……なら！」

GN-X？はビームライフルを捨てるとバスターソードを抜いた。

そして、一気に加速し飛び上がり、触手状のELSをバスターソードで切り裂きながら、接近し中枢のバスターソードを突き刺す。

「これで……どうだ……」

バスターソードは中枢に深く突き刺さるが、触手状のELSがGN

-X?を弾き飛ばして、バスターソードは根元から折れてGN-X?は地面に叩きつけられる。

「ぐっ！」

バンは叩きつけられた衝撃で息が詰まるが、ELSはバンの息を整える時間を与える前に、触手状のELSがGN-X?に向かう。

GN-X?は起き上がる余裕がなく、仰向けの状態でバルカンを撃ちながら、後退して攻撃をかわす。

「くそ……」

最初の何発かたはかわせていたが、かわしきれずにGN-Xの右足に触手状のELSが突き刺さり、GN-X?を内部から侵食を始める。

対ELS戦用のコーティングはあくまでも機体と武器の表面上に施されているため、今回のように内部からは侵食が出来る。

「やらせるか！」

バンはすぐに右足をビームサーベルで切り裂いて、迫る触手状のELSをビームサーベルで切り裂きながら、体勢を整える。

「ハアハア……どうする……今ここで引く訳にはいかない……」

バンが周囲を見渡すと最初に投げ捨てたGNランチャー?が目に入る。

「あれしかないか……」

GN-X?はもう一本のバスターソードをELSに投げるけると、触手状のELSがバスターソードを弾いている隙にGNメガランチャー?を拾い、ELSの中枢に飛び込む。

ELSは触手状のELSを差し向けるが、GN-X?は大して動く事は無い。

「俺は!」

触手状のELSはGN-X?の装甲を抉って行くが、GN-X?はELSの中枢に接近し、GNランチャー?を構える。

「市民を守る……」

GN-X?はトランザムを起動させると赤く発光する。

「連邦の軍人だ!」

バンは叫び、トリガーを引いた。

「中尉!」

「ええ……これは一体……」

ELSを迎撃していたセシリア達は機関部の方で爆発が起こると、ELSの動きが目に見えて鈍っている事に気がつく。

「さっきの爆発は機関部から……ここは任せましたわ。貴方も作戦通り、生存者の方々とともに撤退を……ワタクシはノマル中尉とともに脱出しますわ。」

セリシアはそう言い、機体を爆発のあつた機関部へ向ける。

「バンさん！どこにいますのー！」

セリシアは機関部につくとそこにはE.L.Sの死骸と周囲は瓦礫の山だった。

「生きていますのー！バンさん！」

セリシアは通信を開いてバンに呼び掛けるが、返事がないため、最悪の事態を予測するが通信にノイズが走る。

「セリ……リアか……」

「バンさん！無事でしたのー！」

ノイズから途切れ途切れだが、バンの声が聞こえセリシアは安堵する。

「なんとか……な……」

「どこですのー？」

セリシアが瓦礫の中を搜索すると、瓦礫の下にコアファイターが見える。

「大丈夫ですか？」

「一応はな……」

セシリアのガラツゾ？は瓦礫をどかして、バンのGN-X？のコアファイターを抱きかかえる。

「後はワタクシ達だけですわ。」

「そうか……」

ガラツゾ？はコアファイターを抱きかかえたまま、機関部を離れて入って来た穴からコロニーの外に出る。

「セシリア！バンはどうした！」

セリシアが外に出ると、ゴタードが通信を繋いで来た。

「機体は失いましたが、無事ですわ。作戦も完了したしたわ。」

「そうか……こっちも生存者の移送は完了している。メーティア！バンとセリシアが出て来た。後を頼む！」

「艦長、ホークス少佐からノマル中尉、ベルシュタイン中尉の離脱を確認したとの報告がありました。」

メーティアのブリッジでアルエットは前線からの報告を聞いていた。

「そうか……ハイパーメガビームキャノンのチャージはどうか？」

「完了しています。いつでも撃てます。」

アルエットは一息つく。

「MS隊に通達！これより、作戦は最終段階に入る！ハイパーメガビームキャノンをスタンバイ！MS隊を斜線上より退避させる！」

アルエットの指示でオペレーターはMS隊にその事を伝え、前線のMS隊は一斉にハイパーメガビームキャノンの斜線上から外れに行く。

「ハイパーメガビームキャノン……撃て！」

アルエットの掛け声でメーティアのGNハイパーメガビームキャノンが放たれるとELSに取り込まれていたコロニーは粒子ビームに包まれて跡形もなく消しとんだ。

「ハイパーメガビームキャノンの命中を確認。」

「目標、構造物の消滅を確認。」

「MS各機は残存兵力の掃討戦に移行！最後まで油断するなよ。」

戦闘の結果は決まり、掃討戦は何の問題も起こる事なく、完了した。



「中将：メーティアより。暗号通信です。どうやら、作戦は無事終了した模様です。」

俺は地上でアメリカから報告を聞いていた。

「そうか……それで、例の兵器の効果は？」

「上々だったと。」

どうやら、技研の開発したミサイルの効果は良いようだ。

もう片方の装置もアメリカが抑えさせた。

「メーティアには月面基地に帰投後は休暇でも与えてやれ……」

流石にそろそろ、兵達も限界だろうからな。

戦闘中にアレクサンドリア級が地上に降りたと報告が来ている。

恐らくは例の部隊だろう。

連邦が対処している隙に地上に降りられた。

向こうも馬鹿じゃないと言う事が……

そんでないとな……

今回の一件で対ELS用の兵器の有用性と解放戦線とのパイプも出来た。

何処の誰だが知らないが、今回俺を出し抜いた事は見逃してやる。

「アメリカ」

「すでに黒幕は拘束しています。尋問官も中將の息のかかった者を手配しています。」

相変わらず手際が良い。

「これで通常の望む結末を迎える事が可能です。」

後は市民の不安と怒りを解放戦線に向ければ、この一件は適当なところで終わるだろう。

とりあえずは第二次ELS戦役とか面倒な事態は避けられそうだ。

「分かった。後は任せる。」

「承知しました。」

アメリカはそう言い頭を下げて、執務室を出て行く。

「さて……俺だ。」

アメリカが出て行って、聞き耳を立てていない事を確認すると俺はヴェーダを経由してある場所に連絡を取る。

「お前に少し頼みたい事がある……ああ……そうだ。この前、頼んでいた事だ。出来るだけ早急に頼む。」

俺は要件を伝えると通信を切る。

いろいろと面白くなって来たじゃないか……

## Mission 10 軍人として（後書き）

### 新キャラ設定

アスカ・ウェルキン（Reyさん投稿キャラ）

（CV 渡辺 明乃）

27歳（女）

地球連邦軍所属のパイロットで大尉。

黒髪で、髪型は首辺りでの一つ結び。髪は肩甲骨辺りまでの長さ。身長は高め。

一人称は俺だが、面倒見が良く女性らしい性格をしている。根が真面目で、命令はなるべく忠実に守る。戦場では、仲間を助けに行く姿や仲間を守る姿を良く見かける。仲間を見捨てるのを嫌うが、自ら犠牲となる者の覚悟を踏みにじるようなことはしない。また、指揮官としての才能が少し有り退き際というのを心得ている。

良く女性にモテるらしいが、本人は困っている。家事全般が得意で、時々部隊のみんなに差し入れを作ってくることがある。

アスカ専用GN-X?カスタム(Reyさん投稿MS)

GN-X?をアスカ専用カスタムした機体。

指揮官用のGN-X?を深い蒼い色で塗装されており、高軌道ユニットを装備し、近接高機動戦闘を得意としている。

## 武装

・GNビームサーベル

通常の二本に両腕に二本追加されている。

新しく追加された二本は抜く事なく、ビームトンファアとしても使う事が出来る。

・GNバルカン

GN-X?の固定装備。

・GNサブマシンガン

GN-X?の固定装備。

・GNミサイル

背部のユニットに内蔵されている。

・GNブレイド

後ろ腰部に1つだけマウントしてある刀状の実体剣。刀身は少し長め。

・GNビームライフル

左右の腰部にそれぞれマウントしてある。

・GNシールド

左腕部側面に固定されるシールド。裏側にアンカーが仕込まれている。

## Mission 11 東の間の平穩

「休暇ですか……」

コロニーでの戦闘を終え、生存者を他の部隊に任せると月面基地に戻り、バン、セリシア、シャロンを呼び出していた。

地上で式典が行われるらしい。

E L S 戦役終結が今年で20年目に当たり、近々E L S 戦役の行われた宙域での追悼式典が行われる。

今回はその前振りの式典でもあるらしい。

それに今回の作戦で功績をあげたバンのグラハム勲章が授与される事となった。

グラハム勲章……20年前のE L S 戦役を終結させたガンダムに命と引き換えに道を開いたグラハム・エーカー大佐にちなんで戦場で自らの命を省みず、に世界を守ろうとした軍人に与えられる勲章。

もつとも、この20年で生きて授与された軍人はほとんどいない。

条件的に大抵は戦死してから授与される軍人が多いからな。

「そうだ。君たちには地上で行われる政財界の式典に招待されている。」

バン以外でもセリシアはベルシュタイン家の令嬢でシャロンは言う

までもない。

「ついでに地上で休息でも取ると良い。」

特にバンとセシリアは最近はいろいろと任務でまともに休ませてはいないからな。

「我々だけでよろしいので？」

「構わん。どの道、メーティアも搭載機もオーバーホールが必要だしな。艦にはゴタードとライトが残っていれば十分だ。すでにホテルの方も手配済みだ。」

それに基地に居る以上、何が起きてても私たちで対処する必要もない。

月面基地は連邦軍の宇宙基地でも戦力は最も充実しているからな。

「了解しました。謹んで了承します。」

三人は敬礼して艦長室を出て行く。

地上で待機していた私たちは宇宙での戦闘が終結した事をヴェーダからの情報を連日のニュースで知った。

「とりあえず、最悪の事態は避けられましたね。」

「だな……流石は連邦政府つてところか…宇宙での戦闘終了後、数



時間後には事件の事実解明を公表している。」

確かに……

それのお陰で世界のE.L.Sを見る目は大して変わらず、その上軍は解放戦線に対しての厳しい武力行使も出来る風潮に持って行っている。

「それで、私たちの待機は解かれたの？」

「ああ…待機は解除、私たちは一度宇宙に上がる。」

「宇宙に？」

「そうだ。今回の事を受けて、地上よりも宇宙の方が荒れる可能性が出て来た。一度、宇宙に上がり、世界の動きを見た上で、地上にガンダムを下すか決めるそうだ。」

まあ…今回はガンダムを全機、地上に下ろしたせいで私たちは事になり行きを地上から見ると出来なかった訳だし……

「そつ……そんじゃ、私は少し用事があるから先戻って。」

宇宙に戻る前に一度行っていききたいところがある。

あんな胸糞悪い戦闘のせいね。

「くれぐれも勝手な行動はするなよ。」

「分かってるわ。」

下手にもめごとでも起こして私の報酬が減ったら目も当てられないわ。

私はそのまま、他のマイスターと別れるとガンダムで目的地へと向かった。

「フウ……」

地上に降りて、式典で勲章を授与され、今はパーティ状態となり、俺は壁まで退避している。

正直、こういうパーティも式典も無縁だったから落ち着かない。

「御苦労さまですわ。」

俺が一息ついているとセシリアと少尉がやって来る。

二人は招待客なので、パーティ用のドレスを来ている。

二人ともこういう場に慣れているのか、落ち着いている。

「疲れた……」

勲章が貰えると言う事は自分の戦果を認められて、軍人としては喜ぶところなのだろうが、慣れないと疲れる。

「大丈夫ですか？ノマル中尉。」

「何とかね。」

しかし、数日前にあれだけの事件があったと言つのに招待客は皆、そんな事がなかったかのように振舞っている。

これが政治家と軍人の温度差か……

「なかなかの活躍だったようだな。」

「なっ……」

俺達が話していると別の人物に声をかけられて、セリシアは固まる。

「父さ……ウォーカー中将」

シャロンは言いなおすが、声をかけてきたのはアベル・ウォーカー  
中将。

伝説的な英雄で最強のイノベーター……

「久しぶり。シャロン」

中将は少尉にそう言う。

「元気にしていたか？かなりの大規模な戦闘だったからな。」

「はい……」

二人が会話していると、セシリアが俺の腕を引いて行く。

「おい……何なんだよ。」

「ハア……」

少尉と中将から離れるとセシリアは一息つく。

心なしかセシリアの息が荒い。

「セシリア？」

明らかに様子がおかしい。

「流石にあれ以上は直視できませんわ……」

ああ……成程。

俺達はウォーカー中将と直接会う機会なんてそうそうない。

だから、直接会った事でテンションが上がり過ぎたと言う事か……

「何ですか？」

「いや……何でもない。」

「まあ……良いですね。それよりもバンさんは明日の予定はありますか？」

そう言えば、艦長から休暇を命じられていたんだよな。俺達……

すでに会場近くのホテルが三人分部屋を取ってあるらしい。

それも最高級のホテルだった……

少なくとも、一介の軍人の給料じゃ泊る事は出来ないレベルのだ。

それも上層部が手配してくれたらしい。

「いや…特にはない。精々、部屋で寝るくらいか……」

俺はこっちには知人も友人を居ないし、この辺りは観光出来るような場所もない。

それに、この前の戦闘で深手こそ負わなかったが、体のあちらこちらを打ちつけたしな。

おとなしくホテルの部屋で休むのも良いだろう。

幸いホテルは最高級…日頃の戦いを忘れて次の戦いへの英気を養うにはうってつけだからな。

「でしたら、ワタクシに付き合ってくださいな。」

「付き合っ？どこに？」

「せっかく、地上で休暇を取れるんですので、いろいろと物入りですの。」

女はいろいろと必要だと言っしな……

まあ、一人でゴロゴロよりかはマシな休暇の使い方か……

「構わない。」

「そうですね。でしたら、きちんとエスコートをしてくださいまし……」

俺はこの時、あんな事態になるとはこの時は知るよしもなかった。

俺はシャロンを連れて、会場の一室に來ている。

パーティ会場ではおちおち話もしてられないからな。

「それで中将、私に話とは？」

「今はオフだ。普通にしてくれ。シャロン」

流石に休暇中にまで、軍人としての態度で接しられたら、俺は泣くね。

「分かったわ。お父さん。」

「別に用事と言っしほどではないが、メーティアでは上手くやれているか？」

「うん……先輩や上官も良くしてくれてるよ。」

そうか……まあ、英雄として名高い俺の娘を目に見えて虐めるような度胸のある奴は軍にはいないか。

それ以前にメーティアは俺の直属の部隊だしな。

「それは何よりだ。戦闘にはなれたか？」

「初陣ではミスをしたけど、何とかフォローもして貰えているし、訓練もつけて貰ってるから大丈夫よ。」

まあ、俺の娘だ……才能はあるだろう。

それにハーフィンベイターだから普通の人間に比べると能力が高いのは当然とも言える。

「それなら安心だ。」

俺はそう言いシャロンを抱きしめる。

「お父さん！私、もう子供じゃないよ！」

シャロンはそう言い、顔を真っ赤にして俺の腕の中から逃れようとする。

こっぴいところろは親子だな……

昔はマリアも同じ反応をしてたな……

今では、慣れたのが反応してくれなくなった……

昔は反応してくれて可愛かったのにな……

もつとも、今でも世界一可愛い事には変わりはないがな。

「親から見れば、子供はいつまでも子供だよ。」

今なら、母さんが俺がフラフラしていた事を心配する気持ちも分かんなくはない。

後悔はしてないけどな。

「もつ……」

シャロンは諦めたのかおとなしくなる。

幾ら、ハーフィンノベーターとは言え、イノベーターの俺の力から逃れる事は出来ないからな。

俺はシャロンを暫く、抱擁するとシャロンを離す。

「気が済んだ？」

「まあな。」

本当はいつまでも抱きしていたが、そろそろ時間だ。

「俺はこれから、人と会う約束がある。お前も適当なところでホテルに戻ってるよ。」



「だから、私は子供じゃないよ。」

シャロンは少しむくねてそう言う。

そう言うところが子供だし、シャロンはまだ未成年だろ？

「はいはい、分かったよ。」

俺はそう言い部屋を出て行く。

後ろではシャロンが文句を言っていたが、聞いているとまたからかいたくなるため、聞かない事にする。

「よお…もう来ていたのか。」

俺は会場から抜け出すと人気のない森の中で待ち合わせしていた。

「時間を過ぎてるよ。アベル」

「しょうがないだろ。シャロンと会うのは久しぶりだったんだ。リタ」

木の影から出て来たのはリタ。

俺はリタと密かに待ち合わせしていた。

「遅刻を悪びれないとは相変わらずだね。」

リタは分かってそう言う。

「それで？例の奴は？」

「うん…ボクの方でも調べてみたけど、かなりキナ臭いよ。」

リタはそう言い、俺に紙の束を渡した。

このご時世、データよりも紙媒体の方がデータの改竄されている可能性が低い。

俺はそれを受け取ると紙を流し読みする。

「こいつは……」

「キナ臭いでしょ？彼女……アメリカ・ニューレイズの塩基配列パターンは存在します。しかし、彼女を製造した記録がヴェーダ内に存在しません。」

リタの行っている事は明らかにおかしい。

イノベイドの精製技術は世には出回っていない。

ヴェーダ内にはデータはあるが、生成することは外宇宙航行艦でしか出来ないはずだ。

そこで作られたのならば、必ず製造記録が残っている。

それが残っていないと言う事で考えられるパターンは二つ。

一つはアメリカが製造されたと言う記録を何者かが消したと言う可能性。

もう一つはアメリカは別のところで製造されたと言う可能性。

どちらにせよ、何者かがヴェーダにハッキングをしたと言う事になる。

ヴェーダは今でも世界最高峰の量子演算処理システムだ。

そこにアクセスできる者はごく一部でしかない。

一体どういう事だ……

「アベル…彼女は怪しい。これ以上、アベルのそばに置いておくのは危険だ。」

「確かにな……だが、アメリカが優秀である事には変わりはない。」

「危険過ぎる。」

確かに危険かもしれない。

だが、だからこそだ。

俺の傍に置いておけば、尻尾が掴めるかも知れない。

それに今では大抵の奴が俺の言う事なら大抵は聞いてくれる。

たまにはそう言う奴を傍に置くのも悪くない。

「アメリカが敵ならば、叩き潰せば良い。それまでは精々その能力を利用して貰うさ……」

最近は刺激がなくて退屈していたが、面白くなって来たじゃないか  
……

「おはようございます。中尉殿」

式典から一晩が開けて、俺とセシリアが町に出かけるため、ホテルのロビーで待ち合わせしていたら、同じホテルに泊っていた少尉と出くわした。

それにしても……少尉とはメーティアでしか会った事がないから、軍服しか見たことがなかったが、私服の少尉は新鮮に見える。

「シャロンさんは……ずいぶんと大荷物ですわね。」

セシリアの言う通り、少尉はキャリアケースを持っている。

「はい。私はこれから父と一度、アメリカに戻ります。ですので、私は別ルートで月面基地に戻ります。」

「そうですの。」

成程な……だから、大荷物なのか。

「お二人はお出かけですか？」

「そうですね。久しぶりの地上での休暇ですから、買い物も少々……」

俺は荷物持ちらしいけど……

「そうですね……」

「シャロン」

後ろからウォーカー中將がやって来てセリシアは固まる。

またかよ……

「私服……大佐の……私服ですわ……」

完全にトリップしてるよ……

まあ、中將が人前に出るときは軍服だからな。

私服の中將は珍しいんだろう。

「君たちは……」

「お父さん、この方達が昨日話した。MS隊の先輩だよ。」

少尉の口調がいつもよりも柔らかいのは中將といるからか……

「そうか……君たちが……いつも娘が世話になっている。」

「そそそそんな事は御座いませんわ！たい…中将」  
言いなおした。

流石に本人を前にいつも通りの大佐は不味いだろうしな。  
それにしても面白いくらい嘔みまくりだな。

「さて…行くか。シャロン」

「うん」

「これからも娘を頼むよ。」

中将は別れ際にセシリアの肩に手を当てるそう言う。

「失礼します。」

シャロンが頭を下げて、中将と一緒にホテルと出て行く。

「ハア……………」

二人が去るとセシリアは崩れ落ちそうになるが、俺が慌てて支える。

「もう…………死んでも構いませんわ……………」

いや…………構えよ。

「バット…少し良いか？」

宇宙でのごたごたに便乗して地上に降りて、潜伏しており暇を持って余していると親父に呼び止められた。

「何だ？親父」

「お前、暇だよな。」

「まあ……」

決めつけられるのは少しむかつくが事実だから、言い返せない。

「なら、お前に仕事を頼みたい。」

「俺に？」

はっきり言つて俺はMS戦以外では役に立つ事なんてないぞ？

「ああ…食糧の補給の目処がたった。お前はこれからルシオラと一緒に近くの町まで出て、仲間を接触して来てくれ、ついでに町をぶらついて息抜きでもして来い。」

何で俺が……と言いたいが、町に出られるのは魅力的だ。

ここのところ、連邦に見つからないように神経をすり減らして潜伏していたからな。

「分かった。言つて来るよ。」

「助かる。ルシオラは部屋にいるはずだ。」

「分かった。」

俺はルシオラの部屋へと向かう。

「ルシオラ…居るか？」

俺は親父に言われた通りにルシオラの部屋を訪ねていた。

「バットか……」

ドアが空き、そこにはパイロットスーツのルシオラが顔を出す。

ルシオラはいつでも戦闘に入っても良いようにパイロットスーツで居る事が多い。

俺はルシオラに招かれて部屋に入る。

ルシオラの部屋は質素過ぎる。

俺の部屋でもここまで何も無い訳じゃない。

「何か用か？」

「ああ…親父が俺とお前に町まで出て、仲間を接触しろとさ……」

「そうか……」



俺がそう言つとルシオラはパイロットスーツを脱ぎ出す。

「おい！何脱ぎだしてんだ！」

俺が慌ててそう言つとルシオラは豆鉄砲を食らったかのようにポカ  
ンとしている。

「何を言っている。パイロットスーツで町まで出る訳にはいかん  
だろ。」

間違つてない……間違つてないんだが……

俺が言いたいののはなぜ、俺が居るのに脱ぎ出すと言つ事だ。

パイロットスーツの下にはアンダーシャツを着ているが、私服に着  
替えるならそれをも脱がないといけないだろ……

俺がそう考えこんでいると、ルシオラは俺に構つ事なく再びパイロ  
ットスーツを脱ぎ出す。

これ以上、何かを言うよりも俺が部屋を出て行った方が良いだろう。

俺はそう判断し、速攻で部屋を出た。

俺が部屋を出て数分後にはルシオラは出て来た。

意外と早い……

以前、リーナと出かけた時は1時間以上待たされたぞ。

「待たせた。」

「いや……」

リーナに待たされた時間を考えると、待ってないのと同じだ。

そして、俺とルシオラは仲間を接触すべく、町に向かった。

## Mission 12 交差した者たち

……………甘く見ていた。

戦場では一つの判断ミスが己だけでなく、部隊全体を危険に晒す事は分かっている。

だがからこそ、俺は軍人としていついかなる時も判断を間違えないように心がけていた。

しかし……………これは予想外だ。

「何をしていますの？」

愕然としている俺にセシリアが追い打ちをかける。

セシリアと町に出て英気を養うつもりだったが、甘かった。

服が見たいと言い店に入った時からこの悪夢は始まっていた。

初めはセシリアも女の子なんだなと思ったが、セシリアが試着する服の感想を求められ、答えるが俺に服の感想なんて物凄くハードルが高かった。

いつの間にか同じような感想が続いていたのが不満らしく、セシリアの機嫌が悪くなっていった。

その上、大量の服を買い込んでいた。

そんなに必要なのかと聞くとなぜか、デリカシーがないと怒られた。なぜだ……俺達は戦艦に乗っている時間が多いから、私服は数着あれば問題は無い。

大抵は軍服で居るからな。

それなのに大量の服を買う理由が俺には理解できない。

店を出て、服は終わりかと思いきや、また別の店に入る……

それだけで午前中はつぶれた。

無論、買った物は俺が持たされている。

軍隊生活で鍛えているから何とか耐える事が出来たが、流石に辛い。

昼食後は小物やアクセサリ、化粧品などの店を連れ回された。

どの店も男が入るような店ではないため、セシリアが選んでいる間は店員や客の視線で拷問にも等しく思えた。

そんな事をしているうちに日が傾いている。

「大丈夫ですか？」

「……大丈夫に見えるのか？」

「見えませんわね。」

当然だ……そろそろ勦弁して欲しい。

出ないと死ぬ……

死ぬ時は軍人として誇りある死にかたをしたいが、休暇中に同僚と  
買い物として過労死など死んでも御免だ。

「仕方ありませんわね。少しお茶でもして休憩を取りましょう。」

「そうしてくれると助かる。」

出ないと心身ともに限界が来て死ぬ……

ルシオラと町まで仲間を接触を頼まれたが、問題なく完了し補給の  
手筈が整った。

「任務は完了だ。母艦に帰投するか……」

ルシオラがそう言うが、親父は息抜きをして来いと言っていた。

次にいつ、町でゆっくり出来るか分からんから、今のうちに息抜き  
をするのも悪くない。

「ルシオラ、せっかく町に来たんだ。ぶらつかないか？」

「そうだな……このまま母艦に帰投してはもしも、私たちが連邦に  
マークされていた場合、むざむざ敵を母艦に案内するようなものか

……ここはデートを装い、私たちのマークを解いた上で帰投するのがベストだろうな。」

何かが間違っている。

確かにルシオラの言っている可能性は否定できないが、ここは普通の町で治安も悪くない。

連邦軍が俺達を解放戦線だと判断する材料は無いから、マークされている可能性は無いと考えても良い。

だが、ルシオラはその気なら問題はないのか？

俺が考えていると俺の腕が拘束感とともに何か柔らかい物が当たっている。

ふと見ると、ルシオラが俺の腕を抱きしめている。

成程……この柔らかい感触はルシオラの胸か……いや……冷静に判断している場合ではない。

「何をしてるんだ？」

「我々は今から、カップルを装い疑似デートをするんだ。カップルらしい行動をすべきだ。」

正論だが、やはり何かが間違っている。

「この任務の前にジョナサンからのアドバイスだ。職質をされた時にカップルを装うと良いとな。まさか、ジョナサンのアドバイスが

こんなところで役に立つとは……分からないものだな。」

俺にはそれを信じる方が分からない……

ジョナサンの奴も分かっついていて変な事を教えたな……

ルシオラは軍事的な事なら聡明だが、一般的な知識に欠けるところがある。

それはルシオラの生まれ方からすると仕方がないかもしれないが……それしか知らないなんて悲しいだろ……

「ちなみに、コツは胸を相手の腕に強く押し付ける事だ。」

俺の苦悩を知らずにルシオラはジョナサンからの間違った知識を得意げに披露している。

本人がそれで良いなら、どうでも良いか……

「ここで立ち往生も何だから、適当に歩くか……」

こうして、俺とルシオラの疑似デート？が始まった。

結果として疑似デートはルシオラのマニュアル通りに進んでいる。

「よし……次はカフェでお茶だ。」

これもデートの定番か……

「そうだな。」

まあ…意外と楽しそうだがら、黙って従うか……

俺達が店に入ると店員は相席でも良いかと尋ねられた。

俺がどうするか判断していると、ルシオラが俺の意見を聞く前に構わないと言いだす。

いや……そこは断われよ。

下手に人と関わると何処で俺達の素性に感づかれるか分かったもんじゃない。

最悪、相席相手がイノベイターだと感だけで違和感に気づかれる可能性もある。

「お客様。相席でもよろしいでしょうか？」

そんな事を考えていると店員が相席相手の席で相席でも良いかと尋ねていた。

不味いな……この状況で相席を断るのは不自然……

ここは適当に一杯のコーヒーを飲んで店を出るのが得策。

「構いませんわ。バンさんもよろしいですわね。」

「ああ、俺も別に……」

相席相手が断れば一番ベストだったが、そう上手くは行かないか……



そうして、俺達は席に案内される。

相席相手は金髪でいかにもお嬢様と言った感じの女とガタイの良い男。

俺達が席につくと、二人は少し怪訝な顔をする。

恐らくはこいつか……

ルシオラは相変わらず俺の腕にくっ付いている。

離すところが、二人に見せつけるかのように力が強くなっている。

……多分、俺達の素性がばれないようにカップルである事をアピールしてるんだろうな……

「失礼ですが、お二人は恋人どうしなのですか？」

女の方が気を使いながらそう言う。

「ああ、そうだ。私たちは恋人同士だ。そう言うお前たちもそうなのだろう？」

ルシオラは『恋人』を強調して俺に振る。

もう…分かったから、止めてくれ……これ以上、面倒事を増やさないでくれ……

これ以上は俺の精神が持たない。

まさか、ルシオラにこんな欠点があったとは……

ここまで対人スキルに欠けているのは流石に不味いだろ……

「なっ何を仰ってますの！」

女の方は思いつきり動揺して立ち上がる。

店中の視線が俺達の席に集まる。

ほんと……いい加減にしくれ……

「落ちつけよ。セリシア……俺達は単なる同僚ですよ。」

女の方は男の方に気があるみたいだけどな。

それにしても同僚ね……

男の方は体育会系に見えるし、女の方はお嬢様に見える。

どういう仕事だ？

考えるに平社員と社長令嬢ってところか……

男の方は鈍そうだし、女には苦勞するタイプと見た。

……人の事情とかを考えている余裕はない。

ここは波風を立てる事無く、この場を収めて母艦に帰投することを

第一に考えねば……

シャロンとともにアメリカに帰って来た俺達は久しぶりに父さんの墓参りに来ていた。

「久しぶり…お爺ちゃん。」

シャロンは父さんの墓の前で手を合わせている。

ここに来るのは実に何年振りかな？

まあ、良い。

天国の父さん……俺の娘はこれだけ大きくなったぞ。

それだけ俺も歳を喰ったと言う事か……

今なら、俺が士官学校に入ると言いだしたときの父さんの何とも言えない複雑な顔の理由が理解できる。

自分の子供を軍人にするもんじゃないな。

必要以上に気になる。

そして、俺は隣の墓にも花を供える。

そこにはこう書いてある「グラム・エーカー」と……

ハムさんは元々孤児だったので、当然身よりもなければ独身だったので家族も居ない。

なので、母さんに言って父さんの墓の隣にハムさんの墓も作った。

ハムさん……後で聞いたけど、ハムさんは刹那の道を作って戦死したんだって？

何というか…ハムさんらしい最後だったと思うよ。

それで、刹那は来るべき対話を成功させたよ。

だから、ハムさんの死は無駄じゃなかった。

後の事は俺に任せてよ。

ハムさんや刹那とは違いかもしれないけど、俺が未来を切り開くから……

「ここに来るのも久しぶりね。」

私は他のマイスターと別れるとガンダムでアメリカまで来ていた。

目的は墓参り。

そして、墓にはこう書いてある。

アリシア・グラス

私のたった一人の家族で最愛の妹……

だけど、私はそんな妹一人守れなかった。

アメリカは自由の国とか言うけど、実際はお金がないと何一つ自由な事は無い。

アリシアは直せない病気ではなかった。

だけど、私には手術比を集める事も出来なければ、周りの大人たちは私たちは憐れむだけで見てるだけ……

イノベーターになっても何もできなかった。

最悪……金がないなら、手術は出来ないと言った医者も病院も最悪……自由と言っておきながら、妹を守る選択すら出来ないアメリカも最悪……独り立ちする気もない奴らに金を渡して兵器を買わしていたコロニー国家元首も最悪……本当に最悪……最悪よ……何もかも最悪……

だけど、一番最悪なのはイノベーターに変革しても何一つ変える事の出来なかった私が最悪……

私はあの時、悟ったわ。

この世の中はお金で動いているって……

お金があれば、医者も手術をした…人を動かす事も出来る。

そうなれば、アリシアは死なずに済んだ……人の命だって買う事が出来る。

アリシアの死の運命を変える事だっただけだ。

だから、私はお金に固執する。

お金があれば、あんな思いを二度としないで済むから……

そうして集めたお金はアリシアのようにお金がなくて、手術が受けられない女の子に匿名で寄付している。

だけど、それは善意じゃない。

私の自己満足……

現にアリシアと同年代の女の子にしか寄付してない。

本当の善意なら、老若男女に寄付すべきだから……

こんな方法でしか、私はあの時の世界への憎しみを抑える事が出来ない。

まあ、適度のマイスターの仕事で発散している事もあるわね。

本当に最悪ね……

ねえ……アリシア……今のお姉ちゃんを見てアリシアはどう思うかな？

軽蔑する？

それとも、少しでも人の命を救っている事を喜んでくれるかな？

今となつてはそれを確かめるすべはない。

アリシアは死んだのだから……

例え私が死んでもアリシアのところへは行けないだろうしね。

私は私の勝手に人を殺し過ぎている。

今となつては人を殺す事に罪悪感も思えなくなつたしね。

御免ね。アリシア……

私はいつも通り、アリシアに謝つて墓を後にする。

墓地から出ようとすると、向かいから親子と思しき二人組が歩いて来る。

父親の方はどこかで……

私はそう思いながら、すれ違つと全身に悪寒が走ると同時に立ち止まった。

違つた……動けないのよ。

そして、思いだした。

アベル・ウォーカー

それが父親の方の名前。

最強のイノベーターで現状での連邦を仕切っている軍人。

そして、うちの艦長の旦那。

すれ違った時に私のイノベーターとしての直感と生物としての本能が告げた。

アレはやばい……

圧倒的過ぎる。

イノベーターの私ですら……違う。

イノベーターだからこそ理解できる。

アレば別次元だと……

最強のイノベーターがどんなものだと思っていたけど、直接会って見て分かった。

アレにはどう足掻いても勝てない。

アレが敵でなくて本当によかったわ。

アレを相手にしろと言われたら、私は幾らお金を積まれても御免だ



わ。

すれ違ったただけで、それほどまでの事を思わせる。

本当に最悪よ……

あいつはダメだな。

偶然、墓参りの帰りに俺達の後輩に当たるアニエス・グラスを見つけてちよっかいをかけたが、俺の力を感じる事が出来るのは流石だが、アレはダメだ。

確かにイノベーターとしての能力はヴェーダが選んだだけあって申し分はない。

しかし、決定的に欠けているものがある。

アイツの中は空っぽだ。

何もない。

戦う理由も信念も意思も何も感じられない。

昔の俺と同じだ。

マイスターとなる事を受けれた事から、アイツも過去に何かあったんだが、空っぽのアイツはいつか折れる。

それはかつて折れた事のある俺だから言える事だ。

だが、俺には関係のない事だ。

折れば代わりのマイスターを用意すれば良い。

最悪、俺がマイスターに復帰すればアイツに価値は無い。

さて……折れて用済みか、空っぽの中身を埋める事が出来るのか……  
…思いがけないところで楽しみを見つucker事が出来たな。

茫然としていると通信機がなっている事に気付いた。

「遅いぞ。通信には素早く出る。」

いつもの高圧的なレムリアの言葉だが、今の私に反論する気力は無い。

あんな化け物と出くわした後だし……

「何よ……」

「お前とロックオンの帰投が早まった。」

「そう……」

多分、任務が入ったんだろう。

正直、そんな気分じゃないけど、ウジウジしているよりはマシでしょうね。

「分かったわ……すぐに行くわ。」

「そうか……出来るだけ早く戻れよ。」

レムリアは私の様子がおかしい事に気がついていたが、何も言わずに通信を切った。

何か……気を遣われたようね。

普段は口うるさいけど、こういう時は察してくれてありがたいわ。

切り替えないと……私がソレスタルビーイングのガンダムマイスタ

！……

やる事はやる。

それだけよ。

「そろそろ、ホテルに戻りましょうか。」

ようやくこの地獄から解放される。

あの後、相席の二人と軽い世間話をして店を出た後も買い物が続ぎ、正直戦闘よりも疲れた。

「ああ……そうしてくれ……」

甘く見ていた。

まさか、女の子の買い物がこれほどだったとは……

相席相手の男の方……名前はバットさんと言っらしい。

あの人もこんな思いをしているのだろうか……

同僚の俺とは違い、正式に付き合ってるんだからな。

軍人の俺でも大変なんだ。

民間人のバットさんはもっと大変だろうに……

だけど、本人は楽しいんだろうな……

俺は軍人として訓練漬けの毎日でデートとかした事は無いが、彼女の為なら苦でもないんだろうな……

尊敬するよ。

だからこそ、俺達はああ言った人達を守るために戦うんだ。

それが俺が選んだ道だからな……

「どうだった。ルシオラとのデートは？」

母艦に帰投するとジヨナサンがニヤニヤとやって来る。

「お前か……ルシオラに変な事を教えたのは？」

俺はそのせいで必要以上に神経をすり減らしたんだ。

「変な事ってなんだよ？お前だって良い思いしたんだろ？」

ジヨナサンはそう言い俺を小突いて来る。

確かに……だが、それ以上に心労の方が強かった。

カフェでの会話なんて、いつルシオラが変な事を言うんじゃないかと生きた心地がしなかった。

「うるさい」

元凶はこいつだ。

仲間でなければ殺していたかもしれん。

正直、少し殺意が湧いた。

これ以上、一緒に居ると切れそうだ。

俺はそう判断し、まだ何かを言っているジヨナサンを置き去りにして自室に戻って行く。

私はバットの任務を終えると自室で待機していた。

今日の任務は初めての事も多く、若干戸惑う事もあったが、完璧にこなせただろう。

ジヨナサンもたまには役に立つ。

あれでは私とバットが反政府勢力だとは誰も気づく事は無いだろう。

だが……何だ…この感覚は……

町で時折、私の胸の中で確かに何かを感じた。

今までの戦場では決して感じる事なかった感覚だ。

こつ…胸の奥から何かかわき上がるような妙な感覚……

しかし、悪い気はしない。

寧ろ……私の中が満たされるような感覚だ。

分からん……

私の知識では理解が出来ない。

だが、戦いには影響は無いだろう。

少し休めはきつと収まる。

そうに違いない。

私はそう結論付けて今日のところは休んで次の戦いに備えた。

### Mission 13 最強のイノベーター

「俺達は連邦の基地を襲撃する。」

親父はいつものブリーフィングで親父がいきなりそう言う。

「冗談だろ？こっちは戦力の補強が完了してないぜ？」

未だにルシオラのカディアスは片腕でGNフィールドも張れないし、リーナも機体を失っている。

それに主力はGN-X？だ。

連邦の基地にもそれなりの戦力を持っているはずだ。

「だからこそだ。こいつを試してみる。」

親父はそう言い映像を出した。

そこには連邦の輸送機が何やら運んでいる映像が映し出されている。

「これは友軍が得た情報だ。連邦はコリニック社が開発した新型の試作機をこの基地に搬送したらしい。そいつを奪う。」

新型か……

確かに戦力にはなりそうだ……

「バット、お前が連邦の基地に侵入し、新型を奪って来い。他の連



中は陽動だ。」

「ねえ、私はどうすんの？私のMSがないんだけど？」

リーナの機体はコアファイターしか残ってないからな。

コアファイターでの出撃なんて、自殺行為だ。

「リーナにはバットのGN-Xで出て貰う。バットはそのまま新型機を使い。」

俺が新型機に乗れば、GN-Xがパイロット不在となる。

俺のGN-Xは第五世代のGN-Xだからな。

十分戦力となりうる。

「冗談でしょ！あんな目立つ機体に乗るなんて嫌よ。」

赤いMSはアイツの機体と言つイメージが強いからな……戦場で使えば真つ先に狙われるからな。

「安心しろ。お前に赤いGN-Xに乗れとは言わんさ……作戦までには通常のカラーに戻させるさ。」

「まあ……それなら乗っても良いけど……」

自分の愛機が勝手に変えられるのはパイロットとしては複雑だが、新しい愛機か……

柄じゃないが、新型機の性能には期待するか……

「お待ちしておりました。中将！」

休暇が明けると俺はアメリカとともにとある基地の視察に来ている。

俺が専用の輸送機から降りると基地の軍人が道を作っている。

毎度思うが、こいつら暇なのかね？

「出迎え御苦労。司令」

俺とアメリカが輸送機から降りていると、別の輸送機が何やら騒がしい。

「指令、あの輸送機は？」

「あれはコリニック社から新型の試作機が当基地でのテストの為に搬送されたんですよ。」

新型機ね……シャロンの機体のデータが反映されたMSか……

「それは興味深い……司令、その新型機とやらを拝見させて貰おう。」

俺がそう言うと、司令は俺達を新型機を搬入したMSドックに案内

した。

「ほう……これが新型機か……」

格納庫に搬入されたMSは黒を基調としたMSで頭部がフラッグやブレイヴに似ている。

両腕にはフラッグのディフェンスロッドがついている。

胸部や肩はハムさんのスサノオに似ている。

脇からはビームサーベルを思しき物も見える。

元々コリニック社は旧ユニオンに本社があるからな。

ユニオン系列の技術を詰め込んでいると見た。

それだけではなく、ここからは良く見えないが、背部にはシルフィードのウイングが見える。

右手には若干、大き目のライフルを持っている。

「GNX-805 テンペスト……機体事態は試作ですが、性能は折り紙つきだと聞いています。」

「成程……司令、あの機体は今、動かす事は可能なのかな？」

「GN粒子の補給は完了しているので、可能ですが……」

新型機……良い響きだ。

パイロットとして乗ってみたいな。

「中将、あの機体は量産化を前提に開発された機体です。中将の縦技術ではついては来れないでしょう。」

俺が言う前にアメリカが先手を打って来た。

「……仕方がないな。」

まあ、所詮は量産を前提とした機体。

高性能とはいえ、俺にはついて来れないと言う事か……

「それでは中将、次の場所を案内します。」

司令はそう言い、俺達は格納庫を後にした。

「以上が当基地です。如何でしたか？」

「そうだな……」

俺が感想を言おうとすると、爆音とともに大きく揺れた。

「敵襲か……」

幾らなんでも演習や模擬戦でこれほどの爆発は起きないだろう。

それ以前に強い悪意を感じる。

「指令！解放戦線の襲撃です！」

解放戦線ね……

連中が基地を正面から攻撃を仕掛けただと？

「MS対を出せ！連中の戦力など恐れるに足りん！」

連中の目的は何だ？

俺か？

違うな……俺が狙いだったら、移動中を狙う筈だ。

基地に到着すれば、基地の防衛力を相手にするようなものだ。

流石にそんな馬鹿な真似はしないだろう。

だとしたら、新型か……

戦力不足を補うために新型を奪う事で戦力の補強と連邦の戦力を削ぐ事が出来る。

だとしたら。MSは囹……

この混乱を機に新型を奪うつもりか……面白い。

俺は命令を飛ばしている司令に何も言わずに、こっそりと格納庫へと向かう。

「防衛部隊が出て来た。陽動を開始する。」

基地に強襲をかけていた解放戦線のMS隊は防衛のMSの相手をしていた。

「陽動とは言え……手加減はせん！」

ガディアスはGNメガビームでGN-X?を破壊する。

「バットが出て来る時には終わらせるわよ！」

リーナは新しい機体のGN-X?はGNハンドライフルで連邦のGN-X?を破壊する。

「新しい機体で張り切ってるねえ……」

ジヨナサンのガデッサ?がGNメガランチャー?でGN-X?を撃ち抜いた。

三機に続き、解放戦線のMSが連邦のMSとの戦闘を繰り広げる。

「これが新型……」

俺はルシオラ達が陽動をしている間に単独で基地に侵入し、格納庫を風潰しに探していた。

戦闘をしているから、格納庫は整備兵が多く、下手に動くとはれる可能性があるため、慎重に且つ大胆にお目当ての新型機を探していた。

いくつかを探しているとようやく、それらしいMSを見つけた。

フラッグやブレイヴの様なユニオン系の機体の特徴があるこの機体が新型のMSなんだろう。

「さっそく奪わせて貰うとするか……」

早いところ、こいつを持ちだして逃げないと無駄に戦力を消費する。

上手く動いてくれると良いが……

「そう簡単に持って行かせる訳にはいかないな。メデイ」

「なっ……」

俺はそう言われて立ち止まる。

なんで……その名前を……

俺は茫然としながらも、後ろを向くとそこには銃を構えるあの男が立っていた。

「何で……アンタが……」

テンペストをパクろうとしていたメディは信じられないものを見るように俺に言う。

「それはこっちのセリフだ。馬鹿息子……遊び歩いていると思ったら、泥棒か？お父さんは悲しいな。」

まあ…俺も人の事も言えないがね。

俺も遊び歩いていると見せかけて稀代のテロリストの仲間入りしてたからな。

俺と似たような道を進むとは……血は争えないな……

「父親面すんな！」

メディは声を荒げる。

嫌われたもんだな……

分からんでもないか……俺もそうだったしな。

偉大な父を持つと息子は苦勞する。

「そう言われてもな……俺はお前が生まれた時からお前の父親なのは変えられようもない事実だよ。メディ」

「その名は捨てた！俺はバット・スカーレット！人類解放戦線のパ



「イロツトだ！」

捨てたね……

親から貰った名前を何だと思ってんだ……俺が言えた事もないがな

……

メデイがどれだけ俺を憎もうとお前は俺と同じ道を進んでいる事に  
気づいているのか？

「例え、捨ててもお前がメデイ・ウォーカー以上でもそれ以下でも  
ないさ……」

「黙れ！アンタのせいで俺は！」

「それがどうした？結局お前は逃げただけだろ？俺の名前から……」

俺がそうだったようにメデイも逃げた。

「うるさい！」

メデイは叫ぶと手榴弾を思しき物を俺に投げて来る。

おいおい……父親の手榴弾を投げるのかよ！

流星にこれは不味いと判断し、俺は物影に伏せた。

「あぶねえな……」

やってくるな……流星は俺の息子だ。

このくらいはやってくれないと……

爆風が晴れるとそこにはメディの姿は無く、テンペストのコックピットハッチが閉じていた。

おいおい……幾ら、何でも不用心じゃないのか？

「中将！生きてますか？」

遅れて、アメリカが走って来る。

「見ての通りだ。新型が奪われたよ。」

「のようですね。」

「アメリカ…俺のソルブレイヴは出せるか？」

「出るんですか？」

アメリカはあからさまに嫌そうな顔をする。

「まあな。新型の性能とやらを見たくなくなった。」

どちらかと言うとメディの力を実感したくなつたと言つべきか……

俺と同じ道を進んだアイツがどれだけ成長しているのかを親として見る義務がある。

「……出せますよ。」

「上出来だ。」

久しぶりの実戦だ。

「あれが新型か……」

「バット！上手く行ったのか！」

テンペストを奪取したバットはルシオラ達と合流していた。

「ああ……離脱するぞ。」

「了解だ。」

テンペストはGNロングビームサーベルを抜いて、GN-X？を切り捨てる。

それに続いて、ガディアスがビームマシンガンでGN-X？を破壊する。

「今のうちに逃げるぞ！」

解放戦線が撤退をしようとするが、粒子ビームがGN-X？の頭部を撃ち抜く。

「増援？」

「あのMSは……」

攻撃を行ったのは赤い塗装をされたソルブレイヴ……アベル・ウオーカー専用カスタムされた専用機。

ソルブレイヴは通常のソルブレイヴを遥かに超える速度で向かって来る。

「なんで、最強のイノベーターが出てくんのよ！」

「相手は一機だ！やるしかねえだろ！」

リーナのGN-X？は両手のGNハンドライフルを放ち、ジオナサンのガデッサ？はGNメガランチャー？を放つがソルブレイヴは速度を落とす事無く、接近するとビームサーベルを抜いてGN-X？の両腕を切り裂く。

「ウソでしょ！」

「何なんだよ！」

「お前はお呼びじゃないんだよ。」

ガデッサ？はGNバルカンを放つがソルブレイヴを捉える事は出来ずにビームライフルでガデッサ？のメガランチャー？を破壊する。

「邪魔だな。」

ソルブレイヴはビームライフルでGN-X？の頭部や腕を撃ち抜いて行く。

「アベル・ウォーカー！」

ガディアスがGNメガビームをソルブレイヴに放つ。

「ガディアスか……」

「ルシオラ！」

「こいつは私がやる！バットは新型を母艦に持ち帰れ！」

ガディアスがビームマシンガンでソルブレイヴを牽制する。

「成程……悪くない腕だ。」

ソルブレイヴはビームライフルでガディアスを攻撃し、ガディアスはスラスターシールドで防ぐ。

「ルシオラ！」

テンペストはソルブレイヴにGNメガビームライフルを放つ。

「ほう……なかなか……」

ソルブレイヴは機体を変形させてかわす。

「バット！お前はお前の任務を遂行しろ！イノベーターを破壊するのは私の任務だ！」

「くっ……」

ルシオラがそう言い、バットは納得がいかないが、機体を母艦の方向に向ける。

「撤退するか……」

「行かせない！お前の相手は私だ！」

撤退するテンペストをソルブレイヴは追おうとするが、ガディアスがビームトマホークで切りかかり、ソルブレイヴは回避する。

「行け！ファング！」

ガディアスはGNファングを射出し、ソルブレイヴを襲う。

「俺に誘導兵器を使うか……」

ソルブレイヴはビームマシンガンと機関砲でファングを撃ち落とすていく。

「まだだ！」

ガディアスはメガビームを放ち、ソルブレイヴは飛行形態でかわし、粒子ビームは曲がりソルブレイヴを狙うが、アベルは完全に粒子ビームを見切り、回避する。

そして、そのまま接近し、ガディアスはビームトマホークで切りかかるも、ソルブレイヴはかわしてビームサーベルでガディアスの腕を切り裂いた。

「舐めるな！」

ガディアスは頭部のバルカンで至近距離から攻撃するもソルブレイヴはガディアスの上を取り、ビームライフルでガディアスを攻撃し、ガディアスの頭部に被弾して頭部の装甲が破壊されて、メインカメラが剥き出しになる。

「私はあああ！」

ガディアスは振り向きざまにビームトマホークを振うが、ソルブレイヴは機体を仰け反らせてかわして、そのまま一回転して両手にビームサーベルを持ち、ガディアスの両腕を肩から切り裂いた。

「イノベーターを破壊する……そのためだけに作られた！だから！」

ガディアスは体勢を崩しながらもメガビームを放つがソルブレイヴはそれをも回避し、ガディアスの背後の回る。

「まあ…頑張った方だな。」

アベルはそう言うと、ガディアスの背部のスラスターにビームサーベルを抜き刺した。

「ぐつあああああ！」

スラスターを破壊された、ガディアスはGN粒子を放出することが出来ずに、地上に降下して墜落する。

「イノベーターならあの程度じゃ死なんだろ。」

「中将！」

戦闘が終了するころには増援が到着する。

「ご苦労さん。戦闘は終わった。お前らは落ちた機体を回収しろ。大破してるが、動きだす可能性もある。油断するなよ。」

「了解しました！」

増援のMS達は地上に落ちて、動かないガディアスのところに慎重に降下していき、ガディアスを基地に運んで行く。

「メデイとはまともに戦えなかったが、まあ良いか……」

アベルはそう言い、後を増援に任せて機体を飛行形態に変形させると基地に帰投していく。



## Mission 13 最強のイノベーター（後書き）

GNX - 805 『テンペスト』

コリニック社が開発した新型の試作機。

シルフィードのデータをフィードバックしているが、可変機構を廃止し、旧ユニオンの技術が多く使用されている。

武装

・GNメガビームライフル

新しく設計された新型のビームライフル。

銃身が通常のビームライフルよりも大型化されているが、火力が向上している。

また、ブレイヴのビームライフルの技術が使われており、通常のライフルモードと大火力のランチャーモードの切り分けが可能となっている。

・GNロングビームサーベル

シルフィードにも装備されていたロングビームサーベルと同じ技術を使われているが、こちらは剃りがついている。

脇の下から二本装備されている。

・GNディフェンスロッド

両腕に装備されている。

形状はフラッグの物に近いが、回転時にGNフィールドの展開が可能だけでなく、両端からビームサーベルの展開が可能で、その状態で回転させる事で攻撃力を持ったビームシールドの展開も可能。

・トライデントスマッシャー

スサノオに実装され、ブレイヴにも搭載されたトライパニッシャーを改良した装備で、スサノオ同様、腹部と両肩の装甲下に砲口が内蔵されている。

スサノオの様な球体状の粒子ビームとブレイヴの様な斜線上に粒子ビームを使い分ける事が可能となっている。

・GNバルカン

ブレイヴの機関銃と同じところに二門装備されているバルカン

アベル専用ソルブレイヴ

赤く塗装されたアベル専用カスタムされたソルブレイヴ。

基本性能や武装は通常機とは変わらないが、防御力を削り、機動力が圧倒的に向上している。

290

リーナ専用GN-X?

機体を失ったリーナ用にバットのGN-X?をリーナ用にしたMS。

機体の色は通常のGN-X?の物に戻されている。

武装はバットの時とは基本的には分からないが、ロングライフルは装備されておらず、近接戦闘に重点を置いた機体となっている。



## Mission 14 見えざる敵

「どう言う事だよ!」

俺は親父に怒鳴りつける。

作戦は成功し、新型機を奪取には成功したが、その代わりにガデアスが落とされてルシオラが連邦軍に捕まった可能性が高い。

「言った通りだ。俺達は撤退する。」

親父はこのまま安全圏まで撤退すると言う。

「ルシオラはどうする!このまま見捨てんのかよ!」

「そうは言っていない。だがな……さっき入った情報ではルシオラは軍に拘束されて、あのアベル・ウォーカーの指示で別の場所に移送されたそうだ。」

くそ……また、あの男か……

俺は認めない。

アイツが実の親だなんて……

「移送先は不明だ。それにこっちも戦力がスタスタだ。すぐには動けん。」

「だったら、増援を要請すれば良いだろ。」

「それが出来たらやっている。だがな、今回の戦闘では死者が出ない。こう言い方は好きじゃないが、MSが撃墜されていけば、増援も頼めるんだがな……今回はMSが破損しただけだ。それもご丁寧に破壊箇所は正確にジョイント部や関節が破壊されている上に破壊されている場所がバラバラだ。部品をまとめて発注することも出来るん。」

アイツの実力を考えれば、ジオナサンやリーナの機体を撃墜するのは簡単だろう。

ここまで考えて撃墜しないで、被弾に留めたと言うのか……

くそ……あの時、俺がルシオラを止めていれば……

アイツの実力は俺が一番知っていたはずだ。

ルシオラとガディアスでも万全の状態でも勝てるかどうかは五分あれば良い方だ。

それなのに手負いの状態で戦わせるなんて……俺の判断ミスだ。

「修理は急がせる。お前は休んでいる。ルシオラは必ず助ける。」

「了解だ……親父……新型機の色を俺の色に変えておいてくれ……」

ルシオラ……必ず助ける。

あの男が前に立ちふさがると言うのなら、俺が殺す。

「中将、自らご足労。ご苦勞様です。」

「気にするな。」

俺は捕虜にしたパイロットを移送した施設を訪れている。

「それで、彼女は？」

「健康そのものですよ。」

施設の司令が俺を案内し、施設の一室に通された。

その部屋には中央に椅子があるだけで、何も無い。

その椅子には一人の少女が拘束されている。

俺が落としたガディアスに乗っていたパイロットの少女。

「ずいぶんとマニアックな……」

少女は下着の上に薄い服一枚で後ろ手に椅子に拘束されている。

拘束時に来ていたパイロットスーツは中に何を仕込んでいるのか分かったものじゃないから拘束時に脱がして破棄している。

その後少女の精密検査を行い、体内に危険物が無い事を確認した上でこの施設に移送して拘束している。

少女の顔には視界を奪うためにアイマスク、聴覚を奪うためにヘッドホンが、口には猿轡で自殺を防止し、その上からガスマスクがつけられている。

部屋全体には脳量子波が遮断されており、外部との脳量子波での接触が出来なくなっている。

その上で部屋のあちこちから鎖で動きが取れないように椅子ごと拘束されている。

少女が、ぐったりしているのは薬で眠らされているからだろう。

俺は部屋に入るとガスマスクとアイマスクとヘッドホンを外す。

見たところ、シャロンと同年代に見えるが……

暫くすると薬の効果が切れたのか少女は目を覚ます。

「うううう」

少女が目を覚ますと俺を睨みつける。

俺を殺す勢いだが、残念ながら視線では人は殺せない。

「うううう！ううう！」

少女が俺に何かを吠えるが、猿轡を外す事は出来ない。

口を自由にしてしまえば、情報を守るために自決する可能性がある。



だが、このままでは俺が一方的に話すだけで尋問にならない。

「出してくれ。」

俺は部屋をモニターしている施設の司令に事前に頼んでいた事を指示する。

すると、部屋に取りつけられている通風孔から低濃度のGN粒子が流される。

ここの施設の拘留用の部屋には部屋の中に入る前に囚人の動きを封じるために通風孔からガスなどを入れる事が出来る。

今回は人体に影響が出ないレベルの低濃度のGN粒子を流させた。

「これで話す事が出来るだろう。」

俺がそう言つと俺達の両目の虹彩が輝く。

(なぜ…私を殺さない。)

俺の頭の中に少女の声が響く。

俺と少女は脳量子波で意識を共有している。

彼女を精密検査をしている時に彼女は俺の様な純粹種ではなく人工的に作られたイノベーターらしいと言つ事が判明した。

(君には利用価値がある。)

俺も脳量子波で答える。

口で答えても会話が成立するが施設の連中に知られるのも面倒だ。

(私は何をされても情報を漏らす事は無い。)

だろうな……意識を共有しているから分かる。

例え、拷問をされても情報を話す事は無い。

(それを決めるのは君じゃない。)

(……)

少女は何も言わない。

懸命な判断だ。

こちらの意図が分からない以上、何も言わない事が正解だ。

どんな言葉が情報に繋がるか分からないなら、何も言わないのがベストな判断だ。

(だんまりか……まあ良い。君に会いに来たのは個人的な事だ。)

俺がそう言うが少女は無反応を貫く。

(俺の息子が世話になっているみたいだからな。君たちの)

俺がそう言う少し反応が出るが、相変わらず無反応だが、俺の話

に興味を持ったようだ。

意識を共有しているから、俺がウソをついていないのも少女が俺の話に興味を持ったのも分かる。

（新型を奪った男……バットと言っていたな…あれは俺の息子だんだよ。）

（なっ……）

少女はあからさまに驚いている。

やはり、メデイは自分の事を隠しているのか……

当然か…ハーフとはいえ、イノベーターだ。

解放戦線は主にELSを敵視しているが、イノベーターに対しても良い感情を持っていない奴も少なくない。

その上、最強のイノベーターと言われていた俺の息子だなんて周囲には言えないわな。

（馬鹿な……）

（俺と意識を共有してるんだ。俺の言葉が真実である事は分かって居るはずだ。）

（そんな……バットが……）

少女は俺の言葉で動揺しているのが良く分かる。

バット・スカーレット

バットとは蝙蝠……

蝙蝠は牙があるから獣、翼があるから鳥のどちらにつき事もあるからどっち付かずの存在と言える。

イノベーターでもなく、人間でもない。

どっちつかずの存在……メデイには皮肉が利いた偽名だな。

スカーレット……スカーは傷、レットは赤……

反政府勢力で赤い機体に乗る事で俺のパーソナルカラーの赤を傷つけるって事が……

(イノベーターだと……)

さて……そろそろ、時間が……

俺は動揺している少女に外していた物を元に戻す。

「うう！うううう！」

少女が唸るが俺は無視して作業を続けた。

「うううう……ぐっ……」

ガスマスクをつけると再び、ガスを嗅かされて少女は意識を失った。

「後の事は任せる。」

俺は司令の指示を出して施設を後にした。

「あれね……」

アニメスはセラヴィーガンダム？を装備した状態のBセイバーガンダムのコックピットでそう言う。

急遽入った任務でアニメスとロックオンは先に宇宙に上がっていた。

「ああ……本当で出んのかよ……」

二人の任務は近頃、建造時に廃棄されたコロニーに所属不明のMSが軍や民間だけでなく、無差別に消息を絶つていているとの情報を得て、調査に来ていた。

「さあね……私が知る訳ないでしょ。」

「だよな……ハロ、センサーに反応は？」

「反応なし！反応なし！」

コマンドガンダムは長距離の狙撃の行うためにガンダムの中でもセンサー系統の性能が高い。

しかし、コマンドガンダムのセンサーのはハロが言う通り、何も映されていない。

「反応なしか……どうする？白黒つけないと帰れないぞ。」

今回の任務は調査、なぜ、消息を絶つ理由を何かしらの結論を出さないと任務が完了したとは言えない。

「廃棄コロニーの中を調べましょ。何か分かるかもしれないしね。」

「確かに……」

「私が入るから、ロックオンはここで待機……」

「了解だ。俺は外で見張ってる。中は任した。」

アニエスはゆっくりと廃棄コロニーに接近し、廃棄コロニーの内部に侵入する。

「ハア……」

アニエスはコロニー内をゆっくりと進んでいる。

「何で私がこんな任務に……」

アニエスが呟いていると機体に衝撃が走る。

「何！」

衝撃とともにセイバーガンダムの足が切断されているのが、機体の

モニターに映っている。

「攻撃？どこから！」

「どうした！アニエス！」

「分かんないわよ！そっちは何か反応は！」

「ねえよ！」

コマンドガンダムのセンサーには何の反応がないが、セイバーが攻撃を受けたのは変える事の出来ない事実。

「最悪！何でこんな時に！」

アニエスがモニターで周囲を確認するが、敵影は無いがアニエスはモニターの影に一瞬影が見え、アニエスはGNソード？を向けて放つ。

「MS……やっぱり……どっかの誰かが関わっていた訳ね……」

粒子ビームでコロニー内部が破壊され、煙が上がり煙が晴れるとそこには機体を覆うほど大きなマントで姿を覆うMSが見える。

「何処の機体？連邦のMSって訳じゃないわね……」

セイバーはGNソード？を向けると次の瞬間、マントのMSはそこのはいなかった。

「消えた……」

アニエスはMSが突如消えたように見えた。

アニエスはイノベーターで高い反応と反射能力を持っている。

そんなアニエスでもマントのMSの動きが全く見えなかった。

「何処！」

アニエスは神経を集中させているが、マントのMSのパイロットの気配を掴む事が出来なかったが、セイバーの右腕が切り落とされていた。

「なっ！どこから！」

セイバーはGNソードビットを射出し、自分の周囲を高速で動かしながら、GNフィールドを展開する。

「何が起きている！アニエス！」

「敵よ！マントを来てるから機種は分からないけど、アイツからは何も感じないわ！」

「どつ言つ事だよ！こつちでも何の反応もねえよ！」

ロックオンがそう言っていると衝撃が走り、セイバーの頭部のカメラが剥き出しになる。

「くっ！私は……こんなところで……！」



セイバーガンダムがトランザムを発動させて赤く発光するとセラヴィーガンダム？のGNビッグキャノン？を放つ。

「どこから来ても…これなら！」

トランザムで三倍化した火力で廃棄コロニーの外壁をぶち破る火力をセイバーガンダムは狙いをつける事なくデタラメに放つ。

しかし、マントのMSは背後からナイフ状の武器をセラヴィーガンダム？に突き刺し、セラヴィーガンダム？は破壊されると、セイバーガンダムは爆風で吹き飛ばされる。

「ああああ…！」

セイバーはそのまま廃棄コロニーの外壁に叩きつけられる。

「最…悪………」

衝撃で意識が朦朧としているアニエスはそう呟き、マントのMSはナイフを振り上げるが、粒子ビームが飛んで来てマントのMSは回避する。

「アニエス！生きてるな！」

「ロック…オン………」

「何なんだ！アイツ！」

コマンドガンダムはGNスナイパーライフル？からGNスナイパーライフルTYPE-Pに持ち替えて、セイバーがぶち抜いた廃棄コ

コロニーの外壁から狙撃し、死角に入ると突如、コマンドガンダムの前に出て来る。

「こいつ！マジかよ！」

コマンドガンダムはGNスナイパーライフルTYPE-Pを放つがマントのMSは攻撃を回避する。

「くそ！こいつじゃ無理か……」

ロックオンはそう判断して、GNスナイパーライフルTYPE-Pを仕舞うとGNサブマシンガンとGNビームライフルを持ち替えていると、マントのMSは姿を消した。

「ハロ！」

「反応なし！反応なし！」

ロックオンは周囲を警戒するが、マントのMSは姿を現す事は無い。

「……逃げたのか？」

ロックオンは警戒しつつ、廃棄コロニーの内部に入り、アニエスを回収すると廃棄コロニーから離れて行った。

そして、これ以降、この廃棄コロニーの付近で消息を絶つ事が途絶えた。

Mission 15 動く世界

「……」

私はうつすらと目を開ける。

ここは……トレミーの医務室……

そうか……私……あの時、気を失って……

最悪……何なのよ。

あのマントのMSは……

私は体を起こす。

体のところどころが痛くてだるいが、怪我はしてないようね。

流石……イノベーターの体……そうとうな衝撃だったけど、耐え切るなんてね。

私は医務室のカプセルから出ると、カプセルの近くにおいて合った私の制服に着替える。

そして、私は医務室を出ると、ロックオンに呼び止められてブリーフィングルームへと連れて行かれた。

「連れて来たぜ。」

私とロックオンがブリーフィングルームに入るとラッセさんとリズさん、ミリシアさんを覗く艦長とオペレーターの二人が待っていた。

「大丈夫？アニエス。」

艦長が私に心配そうに聞く。

「大丈夫です。問題ありません。」

少々、そっけない態度になってしまったけど、今の私ににこやかに対応するほどの余裕がない。

何せ、相手が訳のわからない相手とは言え、私は負けたも同然よね。

最悪……戦闘能力位しか、私がマイスターとして他のマイスターに勝っている。

「そう……香蘭、リコッタ、セイバーとコマンドから取った映像を出して。」

艦長がそう言うと二人はコンソールを操作し、ブリーフィングルームの中央のモニターに映像が出る。

「これが二機のカメラで録画したアンノウンの映像です。」

モニターには私が戦ったマントのMSの映像が出される。

「……」

「この機体？ ロックオンが言っていた所属不明のMSは？」

「ああ……それで、こいつの機種は分かったのか？」

肉眼ではマントが邪魔で分からないけど、解析すれば、分かるはず

……

「不明です。」

「画像が粗いのと、なぜかヴェーダを使っても解析が不能でした。」

「どう言う事……ヴェーダを使えば多少画像が粗くても機種の特長くらいは出来ず筈じゃない。」

「どう言う事？ この機体のシルエットに一番近い機体は？」

「それも不明です。」

「マントで隠れているとは言え、シルエットで近い機体を出す事も出来ないと言う訳？」

「そう……」

艦長は少し考えこんでいる。

「そうよね。」

「分かつ事は何も分からないと言う事だけじゃない。」

「最悪ね。」

「分かったわ。その件は保留にしておいて、アニエス、ロックオン……この機体が瞬間移動をしたって本当？」

「ええ」

「マジですよ。」

そうじゃないと説明が付かない。

幾ら、高軌道型の機体と言えども、イノベーターの私の動体視力と反射神経で全く反応出来ないを言う事は瞬間移動をしていると考えた方が納得がいく。

それもノーモーションで……

「瞬間移動と言う点では機体を量子化させたと言う可能性がありません。」

「けどよ。それはオリジナルのツインドライブを搭載した機体しか出来ないだろ？」

そう……機体を量子化出来るのはオリジナルのツインドライブ搭載機のみ……

現在では母艦の動力のアザゼルガンダムとトレミーしか搭載してないし、それ以前にオリジナルの太陽炉は私達、ソレスタルビーイングしか所有してないし、生成方法も私達の独占技術……

「ロックオンの言う通りね。アザゼルも母艦にあるはずだし……ツイ

ンドライブで量子化出来るほどに安定稼働させることは連邦でもまだ確立されてない技術だよ。ジェシカさんがいればもっと専門的な情報が得られたんだけどな……」

そう言えば、あの人、今どこにいるのかしら？

「アニエスは何か感じたのか？俺よりもイノベーターのお前の方が感覚的に何かを感じたかも知れないだろ？」

ロックオンが私にそう振る。

「何も感じなかったわよ。」

そう…… 本当に何も感じなかった。

まるで人が乗っていないかのように……

「本当に何も感じなかったの？」

「ええ……あの機体からは脳量子波はおるか、人特有の感覚も感じませんでした。」

本当に誰も乗っていないかのように……だから、私もあのMSの動きに対応出来なかった。

「となると……あの機体は無人数の可能性があるね。」

「可能なんすか？そんなの？」

「可能だよ。ロックオン、代々、ロックオンのガンダムは八口でも

動かす事が出来るでしょ？MSの無人化事体は20年以上も前から確立されているんだよ。もつとも、八口のAIを駆使しても複雑で高度な操縦は出来ないけどね。」

少なくとも、そんな動きなら脳量子波を感知しなくても私は対応出来た。

あの動きは少なくとも連邦のエースパイロットクラスの実力は持っていたわ。

「考えられるパターンは二つ、何らかの形での遠隔操作……それが超高性能AIによる自立稼働をしていたのか……どちらにしても現状の情報では判断することは出来ないね。だから、この件はヴェーダに上げて、何らかの形で情報を集めましょう。ここで考えても結論は出ないと思うから……」

まあ……ここで結論を出すのは危険だろうしね。

「艦長……私のガンダムは？」

最後は気絶していたから、どうなったか分からないけど、無傷でない事は確かよね。

「セイバーはかなりやられてる。トレミーでの修理は時間がかかるから、母艦に帰投後に修理して貰う予定だよ。」

少なくとも、直せないレベルで損傷はしてないようね。

「それまで時間がかかると思うから、アニエスは休んでいて構わないよ。」



艦長はそう言うが、動いていた方が気が紛れるんだけどね……

「ただ、今回のミスは私が任務に集中出来ていない事も原因の一つだと思っから、艦長の言葉に甘えさせて貰うとしますか。」

「中将…お呼びですか？」

俺が執務室で執務をしていると、呼んでいたアメリカが入って来る。

「ああ、例の捕虜の方は？」

「問題ありません。施設の方には中将の指示通りの手を回しておきました。」

「ならば、問題ないな。」

「せつかく、確保したんだ、最大限に有効活用をしないとな。」

「それと、クリニック社の方にも手を指示通りに手を回しておきました。」

「仕事が早いな。」

「先延ばしにしましても残業手当を出す気はないのでしょうか？中将」

の指示は表に出せない事ばかりですし……」

もつとも、まともな仕事でも残業手当を出す気はないがね。

こいつの能力なら大抵の仕事で残業はあり得なし、出来ない量の仕事を回している訳でもない。

「当然だ。」

アメリカの手回しが済んだのならば、今度が俺が手を回す番か……

「それで、指示の意味を尋ねてもよろしいでしょうか？」

「そうだな……強いて言うならば、そろそろ退場を願いたいんだよ。解放戦線にはね。」

今までは世間体もあって強引な武力行使は出来なかったが、頃合いだからな。

連中には悪いが世界から消えて貰う。

そのための布石はすでに打ってある。

後は実際に動くだけだ。

「休暇は楽しめたか？」

バン達、三人の休暇が明け、メーティアに帰還していた。

「勿論ですわ。」

三人を代表してセシリアがそう言うが、心なしか、バンがやつれて  
いるがバンも子供じゃないんだ。

自分の体調の管理は自分で出来るだろう。

「そうか……メーティアに戻ってすぐで悪いが、お前たちにはすぐ  
に機体ともども地上に降りて貰う。」

「地上ですか？」

「そうだ。地上では近々、地上の解放戦線の拠点に対して、一斉攻  
撃をかける事となった。我が隊もその攻撃作戦に参加しろとの命令  
がウォーカー中将直々に来ている。」

今までは政府が融和政策を推し進めているため、強引な攻撃は不味  
いがELSの一件以来、世間は解放戦線に対する風当たりが強くな  
っている。

だからこそ、中将もこのような武力行使に踏み切る事が出来たのだ  
ろう。

しかし、気になるのが、その命令を下した時の中将は何やら企んで  
いる顔をしていた。

一体、何を考えているのやら……

「しかし、我々は例の部隊の追撃の任はどうするのですか？」

「バンの言いたい事も分かる。しかし、我々がELSとの戦闘を行っている時に地上に降りたらしい。だが、その件は今は放置しても構わない。」

「どう言う事ですか？艦長」

「数日前に地上で例の部隊が新型機を奪取した際にウォーカー中將が戦闘を行い。ガディアスを大破させて、パイロットを拘束したと聞いている。」

手負いとは言え、ガディアスは高性能機だ。

それをソルブレイヴで大破させるとは流石と言っしかないな。

「父がですか？」

「そうだ。捕虜から情報が出るまで、待っても遅くは無いとこの事だ。」

新型を奪われたとしてもガディアスを大破させれば、連中の戦力は大幅に低下するのは明白だ。

「了解しました。」

「それと、バン…お前の機体が届いている。作戦前に機体を確認しておけ。」

「了解しました。」

さて……この作戦で解放戦線との戦いも鎮静化してくれば良いのだが……

「あれですわね。バンさんの新しい機体と言うのは……」

俺達は艦長室から出て、メーティアの格納庫に來ているといつもの機体だけでなく、指揮官用のGN-X？がハンガーに収容されている。

「あれは…指揮官用のGN-Xですね。」

「みたいだな。」

本来は指揮官に与えられる機体で、1パイロットの俺には与えられる事は無いと思っていたが……

装備は以前と同じでキャノンユニットの装備に左肩にバスターソードが装備されている。

「あれが俺の新しい機体か……」

新しい機体……この機体で解放戦線との戦いで戦果をあげて、解放戦線との戦いに終止符を打つんだ。

俺達に手で……

「作戦を確認する。」

地上に降りたメーティアのMS隊は山岳地帯に身を潜めていた。

「俺達はこれより、人類解放戦線の拠点に攻撃を仕掛ける。」

ゴタードが他の4人にそう言う。

「敵の戦力は約20機、旧式のGN-Xは数機しか配備されていないそうだ。殆どがGNドライブを搭載していない機体とアムリムらしい。」

「余裕だな。」

「油断は禁物だ。」

余裕を出しているライトをバンが咎める。

「分かってるさ……」

「連中のMS戦力は恐れるに足りんが、対空用のビーム砲がある。」

「それは厄介ですわね。」

解放戦線の拠点には粒子ビーム砲が配置されている。

その威力はMSといえども直撃を受ければ、無傷ではられない。

「作戦を伝える。俺とシャロンが空中から敵の目を引き付ける。残りのバン、ライト、セシリアは地上から接近し、拠点を叩け。」

「よろしいのですか？空中は危険なのでして？」

「俺とシャロンの機体は空中の方が戦い易い。」

ゴタードの機体もシャロンの機体も可変高機動型のMS。

それ故、地上戦よりも空中戦を得意としている。

敵の目を引き付ける役目が必要な以上、可変機に乗る二人が困役としてはベストの選択を言える。

「私は大丈夫です。中尉殿」

「ですが……」

「お前たちが速やかに作戦をこなせば、俺達の危険も減るさ……お前たちが作戦の要だ。気を引き締めて行けよ。」

ゴタードにそう言われると、バンとセシリアは気を引き締める。

「そう堅くなるな。お前たちならいつも通りでやれば、問題なく任務を終えるさ……それと、ウォーカー中将からの指示である程度の敵を逃がせと言う事だ。」

「どついう事ですか？」

シャロンの疑問は当然の事である。

今回の作戦は人類解放戦線の地上での主要拠点の制圧。

敢えて、敵を逃がす利点はない。

「中将には深いお考えがあるのですわ。」

「そう言う事だ。それに俺達は上からの指示に従えば良い。さて…  
…作戦の時間が近い。俺達も作戦を開始する。」

ゴタードが締めて、作戦が開始された。

「行くぞ……」

「了解」

作戦が開始されると、ゴタードのソルブレイヴとシャロンのシルフィードが人類解放戦線の拠点に対し攻撃を開始する。

ソルブレイヴが拠点に対して、トライパニッシャーで先制攻撃を仕掛けるが、アグリムがGNフィールドを展開して防ぐ。

そして、拠点から対空ビームが放たれて、二機は回避する。

「迎撃のMSが出て来た。油断はするなよ。」

「了解！」



シルフィードはGNビームガンで迫るフラッグを撃ち落とす。

イナクトがリニアライフルで応戦するが、シルフィードは回避し機体をMS形態に変形するとGNロングソードライフルで両断する。

「この程度なら！」

ソルブレイヴはGNキャノンとGNビームライフルでGN-X?を撃墜する。

「さて……喰いついて来いよ。」

ソルブレイヴは旋回して、攻撃を回避してトライパニッシャーでGN-X?を撃ち抜いた。

「戦闘が開始されましたわね。」

「そのようだな。」

ゴタードとシャロンの戦闘が始まった頃、地上ルートから拠点に接近していた。

「隊長達が時間を稼いでいる今のうちに仕掛ける。」

「了解ですわ。」

「始めるか……」

バンのGN-X?がGNキャノンで拠点に砲撃を与える。

GN-X?の砲撃で別動隊の存在に解放戦線は気がつくが、セシリアのガラッゾ?とライトのカイノスが粒子ビームを放ちながら、突入する。

「さて……悪いが、仕留めさせて貰う。」

カイノスはビームライフルでティエレンを破壊する。

「大佐の期待を裏切る訳には行きませんわ!」

ガラッゾ?はGNロングソードでアグリムに接近し、アグリムは応戦するが、GNフィールドを展開して防いで接近するとロングソードで切り裂く。

「お行きなさい!ファンゲ!」

ガラッゾ?はGNソードファンゲを射出し、ティエレンを切り刻む。

そして、バンのGN-X?がGNキャノンを放ち、突入する。

「流星は指揮官用の機体だ……」

GN-X?はビームライフルでイナクトを撃ち抜く。

「反応が良い。」

GN-X?はバスターソードを抜いて、アグリムを両断する。

「バン達は突入したか……」

拠点で戦闘が開始された事を陽動のゴタード達にも見えていた。

「陽動はここまでだ。俺達も行かせて貰うぞ。」

「了解」

ソルブレイヴは飛行形態に変形すると拠点に向かってトライパニツシャーで砲台を破壊する。

シャロンのシルフィードもロングソードライフルで拠点を攻撃していく。

「このまま一気に！」

シルフィードはアグリムの粒子ビームを回避していると、セシリアのガラツゾ？がアグリムの両腕をロングソードで切り裂き、シルフィードがロングソードライフルで撃ち抜いた。

「腕を上げましたわね。シャロンさん。」

「中尉殿達のお陰ですよ。」

5機のMSが拠点にて合流すると、戦闘は一方的になって行った。

「あれは……敵が逃げて行くぞ。」

カイノスはビームサーベルでティエレンを切り裂いていると解放戦

線のMSが引いて行く。

「撤退するのか？」

「どうします？隊長」

「構わん。向かって来る敵だけを狙え。」

解放戦線が拠点を破棄して撤退を終えると戦闘は終結した。

世界各地で解放戦線の主要な拠点が連邦軍の一斉攻撃を受けて、地上での解放戦線は拠点を追われて逃げ惑う。

これにより、地上での勢力図は変わって行く。

この連邦の動きの本当の意味を知るものはほとんどいないが、確かにこの日を境に世界が動いて行く事はこの作戦に参加していた者たち、攻撃を受けた解放戦線の生き残りは確かに感じていた。

## Mission 15 動く世界（後書き）

### 新MS設定

バン専用GN-X?改

ELSとの戦闘で機体を失ったバンに新しく与えられた機体。

指揮官用のGN-X?にバンの前の機体同様、キャノンユニットを装備し、新しく左肩にGNバスターソードが追加されている。

また、バンの過去の戦闘データが機体にフィードバックされており、バンとの相性が通常期よりも良くなっている。

機体の色は以前と同じで水色で塗装されている。

## Mission 16 仕組まれた奪還

連邦軍が人類解放戦線の地上拠点に対しての武力行使が始まり、連邦の攻撃で解放戦線の地上の主要拠点の半数近くが連邦に制圧されている。

太平洋上空で粒子ビームの光が飛び交う。

「テロリストが赤いMSなど！」

GN-X?は真紅に塗装されているMS「テンペスト」にビームライフルを放つ。

テンペストはGNディフェンスロッドで防ぐ。

「いい加減に！」

テンペストはロングビームライフルを抜いて、GN-X?を切り裂いた。

「何度も何度も……しつこいんだよ！」

GN-X?はテンペストのGNメガビームライフルから放たれる粒子ビームをかわすと、GNバスターソードで切りかかり、テンペストはディフェンスロッドの先端からビームサーベルを展開して受け止める。

「お前たちの相手をしてるほど、俺達は暇じゃないんだよ！」

テンペストはGN-X?を弾き飛ばすとメガビームライフルで撃墜する。

「後……二機」

テンペストはGN-X?にトライデントスマッシャーを放ち、GN-X?はGNシールドで防ごうとするが、腕ごと破壊される。

そして、テンペストはGN-X?に接近するとロングビームサーベルで両断した。

「お前で…ラストだ。」

GNメガビームライフルを最後のGN-X?に向けて放ち、最後の一機も撃墜する。

「増援は無いな……」

バットは敵の増援がない事を確認すると、母艦のアレクサンドリア級に帰投した。

「今日も楽勝だったな。」

俺が母艦に帰投し、機体から降りるとジオナサンが俺に声をかける。

「ああ…この機体……GN-Xよりも使える。」

奪った新型は思いの他俺との相性がいいのか、GN-Xの一小隊程度なら俺一人でも余裕で勝つ事が出来る。

今のこの艦には俺の機体以外にまともに戦える機体はいない。

「それよりもさあ…今日で何回目よ。」

「さあな」

今日の襲撃で今月に入り、7回目だ。

連邦はどうやら本気で俺達を潰しに来ているようだ。

もつとも、あれしきの攻撃で俺達を潰す事なんて出来はしない。

「だが、俺達はこんなところで負ける訳にはいかない。」

そうさ……俺はアイツを超える。

アイツを超えて殺す事が出来れば、誰も俺を英雄の息子として色眼鏡で見る事もない。

だからこそ……俺はこの程度で負ける訳にはいかない。

「ルシオラの居場所が分かったただと？」

戦闘が終了し、バットが帰投して航行を続けていると、俺が軍人時代からの知人のリードからの秘匿通信を受けていた。



「ああ……あのウォーカーの目を掻い潜るのに時間がかかった。」  
確かに……だが、あのアベル・ウォーカーを一月で出し抜くりー  
ドの手腕は大したものだ。

「それで？ルシオラはどこに？」

「旧人革領の反政府勢力の収監施設だ。位置情報を後で転送する。  
すでに施設には俺の部下を潜りこませている。」

相変わらず手が早いな。

「物資の補給の手筈も整えてある。彼女の機体も修理して施設にあ  
る。ついでに持って行くが良い。」

物資の補給が受けられればMSの修理も出来そうだ。

そうなれば、ルシオラの奪還の可能性も上がる。

それにガディアスも修理しておいてくれたか……

あの機体は特殊なせいでここでは手に負えなかったから助かる。

「恩にきる……」

物資を流すのにも苦労したろうに……

それに報いるためにもルシオラを奪還してみせる。

「構わん。」

リードはそう言い通信を切る。

「親父！施設の位置情報が届きましたぜ。」

「そうか……機関最大！俺達は補給部隊をの補給を完了させて、ルシオラの奪還作戦に入る。」

「これで、良かったのか？」

「上出来ですよ。リード中将」

通信中に下手な事を言つかと内心ドキドキしていたが、流石だ。

「それで、ウォーカー……せっかく、捕縛した捕虜の情報を連中に流す？」

「さあてね……」

無論、彼女をただで返す訳ではない。

当然、裏があるが、それをリード中将に話す訳がない。

この人は敵に回すと厄介だからな。

与える情報は最小限で良い。

「まあ良い……」

「ええ…世の中知らない方が幸せと言う事もありますしね。」

どの道、中將は俺の側に付いたと考えても良い。

元々、ELSの危険性を訴えているだけで、俺の様なイノベーターに対してはそれほど、危険視している訳ではないし、俺が必要とあれば、ELSを殲滅することも辞さないと知ったから無理に俺に敵対する必要もないと判断したんだろう。

俺としては願ったりだ。

丁度、解放戦線とのパイプが欲しかったところだ。

さて……後は時期を待つだけだ。

頼むから、彼女を奪還してくれよ……解放戦線の皆さんよ……

「本当なのか！ルシオラの居場所が分かったって！」

親父に集められた俺達はルシオラの居場所が判明した事を聞かされた。

「マジか？」

「ああ…信用のおける場所からの確定情報だ。」

親父がそう言うんだ。

まず間違いないな。

この一月…ようやくか……

「それで、親父…ルシオラを助けに行くんだろ？」

「ああ…補給を終えて、MSの修理が完了し次第、施設に対して攻撃を仕掛ける。すでにこちらのお息のかかった者達が施設に配置されている。新型機の奪取の時よりは確実だ。」

後少し……後少しでルシオラを助けに行ける。

待ってる……俺が必ず助けるから……

タクラマカン砂漠……27年前に旧三国家群がガンダムを鹵獲するために選んだ場所。

1000機対6機での大戦闘が行われた砂漠は現在、人類解放戦線の拠点がいくつも存在している。

その拠点に対しても武力行使が行われていた。

「良くもまあ…こんな砂漠に隠れて入れるものだ。」

ライトのカイノスがビームライフルでGN-X?を撃ち抜いてそう言う。

「無駄口は戦いが終わった後でだ。」

ゴタードは敵機をビームサーベルで切り裂く。

「さっさと終わらせて、宇宙に戻りたいですね。」

セシリアのガラッゾ?がGNソードファンングで切り刻む。

「だが、重要な任務でもある。」

「そうですね。中尉殿」

バンのGN-X?がGNキャノンで地上のティエレンを撃ち抜き、シャロンのシルフィードがGNロングソードライフルで敵を切り裂く。

たった五機ではあるが、解放戦線のMS隊を圧倒し、程なく戦闘は終結する。

「今回の戦闘も終わりみたいですね。」

「各機、敵の反応はないな。」

ゴタードは各機のレーダーに反応がないかを確認する。

「無いな……ならば、戦闘は終わりだ。帰投する。これで次は宇宙か……お前ら、気を引き締めて戻るぞ。」

ゴタードはそう言いメーティア隊のMSは後方で控えていた仮母艦へと帰投して行く。

「あれだな……」

バットはルシオラが拘束されている施設を遠目で眺めてそう言う。

補給と修理を終えたバット達は情報にあった施設にMSで接近している。

「陽動はいつも通り、俺達がやるからお姫様はお前が助けてこいよ。」

「軽口はそこまでだ。」

ジヨナサンの言葉をバットは不機嫌そうにそう言う。

「怖いねえ……もう少し、落ち着けて……」

「そうよ。今回は前みたいに、あんな化け物が出て来ないどころが出来レースじゃない。」

今回は施設の大半が解放戦線のシンパの為、作戦は始める前から成功したも同然。

しかし、施設の全員が解放戦線のシンパでないため、完全に安全も出来ない。

バットはルシオラがアベルと一対一での戦闘になる事を止めなずにルシオラに言われるがままに母艦に帰投した事を未だに後悔し、自分を責めづつつけている。

それ故に今回の奪還作戦にはいつも以上に気負っているのは仕方がないと言える。

「作戦を開始する。」

テンペストはGNメガビームライフルのランチャーモードで施設に攻撃を仕掛ける。

テンペストの粒子ビームは施設から大きく逸れた。

事前にルシオラの位置を知らされてはいるが、今もそこに居るとは限らず、施設への直接攻撃は避けたかったからだ。

そして、テンペストの攻撃で敵襲を知った施設から防衛のMSが出て来る。

「出て来たか……後は任せる。」

解放戦線の作戦は至って単純……突破力のあるテンペストによる一点突破である。

解放戦線に属しているパイロットはお世辞にも正規の訓練を受けた

パイロットではなく、高度な戦術を与えてもそれを実行する実力を持たない。

だからこそ、単純な作戦しか出来ず、単純な作戦は解放戦線でも実行が出来る。

バットの属しているアレクサンドリア級も例外ではない。

テンペストは粒子ビームを撃ちながら、施設に突っ込んで行き、防衛のMSがテンペストに注意が向いていると、後方から来たジョナサンやリーナが背後から攻撃を仕掛けて、テンペストはそのまま、施設に突っ込んだ。

施設に突っ込んだテンペストからバットが降りると、予め襲撃を聞いていた解放戦線のシンパに機体を見張らせて、シンパにルシオラが情報にあった部屋に拘束されている事を確認したバットはその部屋に走る。

「ここにルシオラが……」

バットはルシオラが拘束されている部屋の前まで来ると、ここに来る途中で渡された部屋の鍵で部屋を開けると中に入る。

「ルシオラ！」

バットが部屋に入るとそこにはアベルが来た時と同じように拘束されて、ぐったりしているルシオラを見つめる。

「何だよ……」



バットはルシオラの状態に憤りを感じるが、それよりもルシオラの拘束を解いた。

「おい！ルシオラ！大丈夫か？」

バットがルシオラを揺るとルシオラはうつすらと目を開ける。

「バットか……なぜ……お前がここに……」

「助けに来た。早くここから出るぞ。」

バットがそう言うところルシオラの薬が切れて次第に意識がはつきりとして来た。

「そうか……それで状況は？作戦は？私はどうすれば良い？」

いつもの状態に戻ったルシオラはバットに状況の説明を求めた。

「後は俺とお前がここから逃げるだけだ。お前の機体もここにあるらしい。」

「了解した。私はガディアスを探す。場所は分かるか？」

「分からないが、MSの格納庫にある可能性が高い。」

「了解だ。」

ルシオラはそう言い二人は別行動を取る。

施設のMSの格納庫とバットがテンペストが突撃しているところは

方向も別で距離があるため、二人で行動すると時間がかかり、付近の連邦軍の部隊が増援に来る可能性もあるため、二手に分かれる事となった。

「ルシオラ…後でな……」

「……ああ」

二人はそう言い走りだす。

「二人はまだなの!」

リーナのGN-X?はビームサーベルで敵機を切り裂く。

「あんま時間を稼ぐのもしんどいな!」

ジヨナサンのガラツゾ?はGNバルカンで弾幕を張る。

アレクサンドリアのMS隊は時間を稼ぐごうとするが、機体の性能や地力の差で次第に追い詰められていく。

「流石に不味いつて……」

解放戦線が押されていると機体に戻ったテンペストが戦いに参加する。

「バット!」

「遅いぜ！お姫さんは？」

「ルシオラは自分の機体を取りに向かっている。」

テンペストが参戦した事で解放戦線にも余裕が生まれて戦闘は互角の戦いとなって行く。

「ハアハア……ここまで体力が落ちているとはな……」

バットと別れたルシオラは施設の格納庫に到着していた。

しかし、ルシオラの息が荒い。

それも当然である。

ルシオラはこの一月、拘束されたままで碌に動いていない。

そのため、ルシオラの筋肉や体力は以前に比べて衰えている。

「どういう事だ？」

ルシオラは格納庫でガディアスを見つける。

しかし、その形状は以前とは少し違う。

両肩に装備されていたシールドスラスタが両肩だけではなく、背中に二基、両腰に一基つつ追加され、両腕のGNビームガトリング砲が二基になっている。

「考えるのは後だ。」

ルシオラはそう判断して機体に入り込む。

「動くか……」

機体に乗ったルシオラは機体のシステムを立ち上げる。

すでにガディアスMk-?は施設のシンパによりいつでも起動出来るようにされていたため、難なく起動することが出来た。

「見た目だけじゃない……性能も上がっている……」

ガディアスMk-?を起動させたルシオラは格納庫から出て行く。

「待たせた。」

「ルシオラか!どうしたんだよ。その機体?」

「話は後だ。後は撤退するだけだ。」

バットがそう言い解放戦線のMSは撤退を始める。

「久しぶりの実戦か……今までの借りを返させて貰う!」

参戦したガディアスMk-?はGNメガビーム砲を放ち、防衛のMS隊を破壊する。

ガディアスMk-?の一撃で防衛隊を切りく崩すとそこから解放戦

線は撤退を開始した。

施設の防衛のMS隊にはガディアスMk-?とテンペストを止める術は無く、解放戦線はその二機を殿として撤退した。

「中将、計画通りに捕虜は解放戦線と合流したようです。」

俺はアメリカから計画の進捗を聞いていたが、一応は計画通りに進んでいる。

しかし……

「これはどういう事だ？俺はガディアスを直せとは言ったが、改良をしるとは命じた覚えはないが？」

データを見るところ、最新の技術を使い性能は大幅に向上しているようだ。

「さあ？私には見当が付きません。大方、どこかで伝達のミスでしょう。」

伝達のミスか……

あり得ない話ではないが、一月もか？

幾らなんでも考え難いが……

「それよりも中将、この一月で地上の解放戦線の主要な拠点の約9割の制圧を完了しました。残りも数日中には制圧出来る予定です。」  
それ以外は計画通りに進んでいるようだ。

「中将の指示を実行した結果、逃げた敵が計画通りに宇宙に上がっています。」

「結構」

このご時世だ。

俺がガンダムマイスター時代とは違い、MSと人を送る手段は山ほどある。

今の時代、地上に降りるよりも宇宙に上がる方が簡単だからな。

「しかし、我々の予想以上に宇宙に上がったようです。このままでは敵を一掃すると言う中将の計画が破綻する必要があります。」

アメリカが確認出来ているだけの解放戦線の戦力を出す。

確かにな……

戦力は相当なものだ。

良くもまあ…こんなにも揃えたもんだ。

機種はアンティークが半数近くあるが、数は厄介と言える。

宇宙の戦力はかなり、地上に下ろしたからな。

残っている戦力は必要最低限しか残っていない。

仕方がない……

「アメリカ、今すぐにコリニック社に連絡を取り。アレを用意させる。」

「アレですか？」

「そうだ。この程度のイレギュラーなら俺が帳尻を合わせる。」

アレを使えば、問題なく計画は完了する。

「了解しました。すぐに手配します。」

「今度は通達ミスをするなよ。」

「分かっています。」

アメリカがそう言い部屋を出て行く。

さて……そろそろ、俺も後ろに下がってないで動くとするか……

## Mission 16 仕組まれた奪還（後書き）

新MS設定

G N M S - Y 0 0 0 1 ? 『ガディアスMk - ?』

アベルとの戦闘で大破したガディアスをコリニック社が通達ミスにより改良した機体。

アベルに破壊された部分は最新の技術を使う事で性能が大幅に向上している。

改良前には両肩に搭載されていたシールドスラスタが背部と両腰に4基増設され、GNフィールドの出力や機動力が向上している。

武装

・GNメガビーム砲

レグナントに装備されていた大型ビーム砲を改良したもので、レグナント同様粒子ビームを屈曲させる事が可能。

胸部に一門装備されている。



・GNビームガトリング

両腕に装備されているガトリング砲。

連射速度を優先しているが、通常のMSの火器に比べて高い威力を持っている。

改良前は両腕に一基つづだったが、二基つづに変更されている。

・GN大型ファング

背部と両腰のシールドスラスターに二基つづ、計8基搭載されている。

形状はスローネやアルケーに搭載されていた物ではなく、ガデラーザの大型GNファングを縮小したものを搭載している。

・GNファング

大型GNファングに5基つづ、計40基装備されている。

形状はスローネやアルケーに搭載されていた物ではなく、ガデラーザの小型GNファングを縮小したものを搭載している。

・GNビームアックス

本機の数少ない新規の製造武器。

手持ちのハンドアックスだが、粒子ビームの刃の出力を上げると大型GNビームソードとしても使える。

また、手持ちの武器としてだけでなく、投げて使う事も可能。

・GNバルカン

頭部に二門つづ計4門装備されている。

GN-Xシリーズのビームライフルの銃身を使っている為、通常のバルカンよりも高い威力を持っている。

・GNキャノン

両肩のシールドスラスターに内蔵されている火器。

改良前はGNファングだったが、内蔵式のGNキャノンに変更されている。

Mission 17 不協和音

「ルシオラ！」

ルシオラを奪還し、俺達は母艦に帰投すると俺はルシオラが機体から降りるところで声をかけた。

「何だ。」

ルシオラは今までと変わらない無感情な声で俺にそう言うが、少し様子がおかしい。

「いや……済まなかった。」

俺があの時、素直に戻ったからルシオラは捕まった。

俺の責任だ。

「何の事だ？」

「何のって……」

「用はそれだけか？」

ルシオラはそう言って立ち去ろうとする。

「ルシオラ！」

俺の話はまだ終わってない。

俺はルシオラの肩を掴んで止める。

「触るな！」

ルシオラは物凄い剣幕で俺の手を振り払う。

「ルシオラ……」

一体、何がどうなってんだ……

今までにこんな事は無かった……

俺が茫然としていると、いつの間にかルシオラは立ち去っていた。

何をやっているのだ……

あの男…アベル・ウォーカーの言葉にウソは無かった。

脳量子波で意識共有をしていたから、偽証は限りなく不可能に近い。

ハーフィンベイター……バットは半分はイノベイターの血を引いている。

あの男の妻に関しては殆ど公になっていないが、父がイノベイターである以上、ハーフか通常のイノベイターである事は間違いない。

バットは私達の仲間？

最強のイノベーターの血を引いている……

分からない……私はどうしたい？

敵は撃つ。

なら……バットは？

バットは仲間だ……仲間のはずだ。

だが……バットはハーフィンベーター……

紛いもののイノベーターの私と同じ……

私はイノベーターを破壊するために作られた。

ならば、バットは敵か？

違う……バットは仲間？敵？

分からない……分からない……私はどうしたいんだ。

格納庫の一件以来、俺とルシオラが話す事無く、数日が経ち連邦の追撃を振り切り俺達は次の目的地に向かっている。

「宇宙に上がるのか？」

「ああ、地上の状態が悪化した以上、一度戦力を宇宙に集めるそう  
だ。」

親父に上から命令が来たらしい。

俺達、解放戦線は軍隊としては機能おらず、部隊規模で活動してい  
る。

だが、その部隊に個別で指示を出す、リーダーがいると聞いている。  
しかし、その正体に関しては俺達はおろか、親父も知らないがMS  
や情報を各部隊に与えている。

胡散臭い事この上ないが、手腕は認めざる負えない。

「このタイミングで？」

ルシオラがブリッジの壁にもたれてそう言う。

ルシオラの言いたいのは地上の拠点には一斉攻撃をしておいて、宇  
宙の部隊には遭遇しない限りは攻撃を仕掛けていないと聞いている。

つまりは、連邦は俺達を宇宙に上げたいと見て間違いない。

「ルシオラの言いたい事は分かる。だが、上からの命令である以上  
無視は出来んだろ。」

軍隊でないにしても、上からの命令を無視すれば、今後の補給や情  
報に影響が出る可能性がある。

「了解した。」

ルシオラはそう言いブリッジを出て行く。

「それで、親父……宇宙に上がるとして何処を目指すんだ？」

「上からは本拠地に戻って来いと言う事だ。」

本拠地……

宇宙にあるとされる、俺達、人類解放戦線の本拠地か……

解放戦線でも一部の人間しか知らず、今までも連邦に発見されてないとされている。

どういうカラクリかは知らないが、連邦の目を誤魔化せるらしい。

「それまでに連邦からの攻撃が予測される。お前とルシオラの活躍を期待しているぞ。」

「ああ」

本拠地まで戻れば、体勢を整える事も可能だ。

今は耐えて体勢を立て直す時だ。

体勢を立て直せば、まだ俺達は戦える。

そして、俺は……

「それで、本当にアレを持っていくの？」

コリニック社の本社の社長室でメアリーはそう言う。

「そのつもりだ。」

アレは伝言では使うと言う趣旨を伝える事は出来るが、承認は俺個人がメアリーに直接言いに来ないと出来ない事になっている。

万が一にもアレが第三者に渡れば面倒になるからな。

「それ程の事な訳？」

「保険だよ。」

それ程事態は緊迫している訳でもないが、保険をかけるに越した事は無い。

「まあ…良いけどさ……気をつけなさいよ。」

「何だ？俺を心配してんのか？」

「そんな訳ないでしょ。アレを使えばアンタが負ける事は無いけど、やり過ぎないように気をつけるって事…幾ら、世論の支持を得てもやり過ぎたら元も子もないわよ。」



そんな事だろうと思ったよ。

だが、メアリーの良い分も一理ある。

解放戦線に対する世論の風当たりは強い。

しかし、やり過ぎれば後々問題になって来る。

まあ…適当なところで切り上げれば問題にはならないだろう。

「分かってる。」

「なら…良いけど…」

「それで？アレの移送の許可は出してくれるのか？」

これで許可が出ないと俺が出向いた意味がない。

俺も暇じゃないんだ。

「良いわ。だけど…あんまり悪だくみもほどほどにしときなさいよ。いつかしっぺ返しにあうかもしれないわよ。」

「肝に銘じておくよ。」

もっとも、そのしっぺ返しが俺に対してのみならば、見てみたいとも思うがね。

どちらにせよ、許可は出た。

俺も宇宙に上がるとするか……

ルシオラを奪還したアレクサンドリア級は宇宙に上がるためのブースターを取りつけられていた。

「親父！大気圏離脱用のブースターの取りつけが終わりましたぜ。」

「ブースターのトランザム可能までの時間は30分で可能。」

「親父！連邦のMSが接近してやがる！」

ガイウスは部下の報告を聞き、策を練る。

すでにアレクサンドリア級は大気圏を離脱するためのブースターが取り付けており、大気圏を離脱体勢を取っているため、戦闘が出来ない。

「艦長、私が出ます。」

MSで待機していたルシオラがブリッジを通信を繋ぎそう言う。

「この程度の数なら、時間までには終わらせる事が出来ます。」

「だったら、俺も出る。一機より、二機の方が早い。」

ルシオラに同調し、バットもそう言う。

「無用だ。私一人で良い。」

ルシオラはバットの申し出にはつきり拒否を示す。

「だが……」

「無用と言っている。」

「良いだろう……ガディアスを出す。バットは待機している。」

ガイウスは敵の数からガディアス一機でも十分で、戦力の温存の為にそう決断して命令する。

「10分で終わらせて戻って来い。」

「了解」

ルシオラはそう言い通信を切る。

「ガディアスを出せ。」

「了解ですぜ。」

ガイウスの指示でアレクサンドリア級のハッチが開閉して、ガディアスMK-?が出撃する。

「さて……この前の戦闘では見る事が出来なかったが……お前の性能を見せて貰うぞ……ファング！」

ガディアスMk-?の両腰のスラスタースールドから大型GNファングが射出される。

大型GNファングから小型GNファングが射出されて、連邦軍のGN-X?を攻撃していく。

GN-X?もビームライフルで反撃するが、ファングは高速で動きまわり回避する。

「前よりも脳量子波の感度が良い……」

ファングは瞬く間にGN-X?を撃墜していく。

「他愛もない……」

MS隊は全滅したが、後方に控えていた母艦のアレクサンドリア級がガディアスMK-?にGNキャノンを放つが、ガディアスMK-?はGNフィールドで防いだ。

「母艦か……MS隊が全滅しても尚、戦うか……愚かな……」

ガディアスMk-?は両肩のスラスタースールドを前方に向けると内蔵されているGNキャノンを放ち、アレクサンドリア級はGNフィールドで防ぎ、直撃を避けた。

「ほう……私達の母艦と同じ型だけある……だが、しかし……トランザム！」

ガディアスMk-?は赤く発光すると、GNメガビームを放つ。

アレクサンドリア級はGNフィールドで防ぎ切れない威力なため、回避行動を取るが、粒子ビームが曲がりアレクサンドリア級の横っ腹に直撃し、アレクサンドリア級が轟沈した。

「任務完了……これより、帰投する。」

母艦も沈めたガディアスMk-？は母艦へと帰投して行く。

「親父！ガディアスを収容しましたぜ！」

「トランザムを起動させる！」

ガイウスの指示でアレクサンドリア級が赤く発光する。

「機関最大！大気圏を離脱する！」

「了解！」

そして、アレクサンドリア級に取り付けられているブースターから大量のGN粒子が放出されると、アレクサンドリア級は高度を上げて行き、やがて大気圏を離脱し宇宙へと上がって行った。

## Mission 18 決戦前夜

ラグランジュ2のコロニー国家領内にそれはある。

コロニー公社が昔に建造し、その後に破棄された廃棄コロニーを改良した人類解放戦線の本拠地。

コロニー国家領内で連邦が自由に搜索は出来なかったが、連邦がコロニー程の大きさの構造物を見逃すはずがない……しかし、なぜかこのコロニーを今まで発見することが出来ずにいた。

そんなコロニーの周辺には多数の戦艦が航行していた。

旧ユニオン製のバージニア級、現在の連邦でも使われている旧式のバイカル級、それ以外にもアレクサンドリア級やヴィクトリア級と言った連邦の主力艦も少数だが見る事が出来る。

「親父……そうとうな数が集まってますぜ……」

「そのようだな。」

その中にバットらの母艦のアレクサンドリア級も存在し、ブリッジクルーはその数の多さに改めて驚いている。

戦艦だけでも100隻を超え、コロニー内に入りきらずにいる。

そこからMSの数を計算するだけでも数百機と予測出来る。

まさに、解放戦線の総戦力とも言える。

「親父！コロニーの方からドックに入るように通達が来たぜ。」

「指示に従え。」

ガイウスの指示でアレクサンドリア級はコロニーのドックへと前進していく。

「艦長、ランデブーポイントに到着しました。」

月面基地でオーバーホールを終えた、メーティアは地上での任務を終えたMS隊を回収すると、司令部から指示された補給部隊とのランデブーポイントに到着していた。

「補給部隊の信号は？」

「確認中です……艦長！高速で接近する機影があります！」

オペレーターの言葉でブリッジに緊張が走る。

敵が補給部隊とランデブーする際の間隙をつくのは良くある事だからだ。

「モニターに出します。」

接近する機影をモニターに出すとアルエットは緊張を解いた。

モニターに映る機影……全身が真紅に塗装され、両肩からは粒子の翼を広げている。

両腕には鉄球付きのシールドを両腰には大剣が装備されている。

モノアイに頭部のブレードアンテナ……その機影はアルエットだけでは無く、ブリッジクルーの全てが見覚えのあるMS

『リベリオンZ』

かつて、第二次ソレスタルビーイング事変の後半にアベル・ウォーカーが搭乗していた伝説のMS。

当時は破格の性能を誇っていたリベリオンZは20年経った今でも最強クラスのMSと言われている。

アベルがソレスタルビーイングに戻った後はアベルと専属の整備士のジェシカともどもソレスタルビーイング所属機となっていたが、アベルが連邦に戻った時に機体はコリニック社に預けられている。

あまりにも有名な機体だが、この機体が第三者が作った模倣品でない事をアルエットは知っている。

リベリオンZは設計者のジェシカが製造すると同時に機体の設計データを模倣されたり、流出されたりすることを防ぐために消去しているため、リベリオンZを複製することも模倣することも不可能とされている。

その半面、予備パーツや部品が初期の製造分しかないため、使う場



面は限られている。

「中将が自ら来る事は聞いていたが……まさか、リベリオンを持ちだして来るとは……」

アルエットは改めて、今回の任務の重大さをかみしめていた。

アベルが連邦に戻り、20年が経つがアベルがリベリオンZを使用するのは今回が初めてのケースで、使わないといけない程の重要な任務だと言える。

「メーティア……聞こえるな。着艦許可を……」

「艦長、リベリオンからの通信です。」

オペレーターが若干、上ずった声でアルエットの伝える。

アベル直属の部隊とは言え、一介のオペレーターがアベルと直接話す事は無いため、緊張するのも無理会ない。

「許可すると伝えてくれ。」

「了解しました。」

オペレーターは緊張しながらも、許可が出た事をアベルに伝える。

そして、メーティアのカタパルトが開くとリベリオンZはメーティアに着艦した。

「なあ、バット良いか？」

本拠地に付いてルシオラを探していたが、見つからずジヨナサンとリーナに声をかけられる。

「何だ…お前たちが……」

今はルシオラを探しているんだが……

「何よ。私達は不満な訳？」

「そうは言っていない。」

あれ以来、ルシオラとはまともに話していない。

どうして、ルシオラがあのような態度を取ったのかを俺は知りたい。

「そんな事よりさ、バットに対するルシオラの態度がおかしいけど、なんかしたのかよ？」

「知るか……」

それは俺が聞きたい。

「アンタが何かしたんじゃないの？まあ…どうでも良いけどさ……最近のルシオラはいるだけで空気が重くなるのよ。アンタのせいなら何とかしなさいよ。」

「俺は何もした覚えはない。だから、理由を聞くためにルシオラを

探している。お前たちは知らないか？」

格納庫にはいなかった、部屋を訪ねても出なかった。

一体、どこに居るんだ……

「俺達も知らないぜ？」

「そうね。私も見てないわ。てか、何でバットはルシオラをそこまで気にかけてるのさ？」

そう言うつもりは無いが……

言われてみれば、リーナの言う通り俺はルシオラの事を気にかけているかも知れない。

アイツは人工イノベーターで俺と同じでイノベーターの紛いものだからか？

だが、家に居た時、同じイノベーターの紛いもののイノベイドのリラには幼い事は姉の様に思っていた時期もあったが、それ以上の感情を懐いた事は無い。

俺にとってアイツは何だ？

ただの仲間か？

戦友か？

それだけでこれほど気になる事は無い筈だ。

ジヨナサンやリーナもそうだが、そこまで気にした事は無い。

……そうか……多分、俺にとって、ルシオラは特別なんだ……

だからこそ、こんなにも気かけてるんだ。

「そうか……ありがとう、リーナ」

俺はそう言い、ルシオラを探して走りだす。

「さて…諸君、これより作戦会議を行う。」

Zを受け取り、メーティアと合流した俺はメーティアが補給をしている間にパイロットやアルエットをブリーフィングルームに集めていた。

「中將がリベリオンを持ちだすと言う事は相当重要な作戦だと予測出来ますが？」

流石はアルエット……

「その通りだ。中佐、今回の作戦は人類解放戦線の本拠地への一斉攻撃だ。」

俺がそう言つとパイロット達が顔に出さなくても驚いている。

「しかし、中將……解放戦線の本拠地は判明してないのでは？」

そう言ったのは……確か、この前シャロンと共に居た……ノマル中尉だったな。

「その通りだが、数日前に本拠地が判明した。」

「それは本当ですか？中將」

「ああ…確定情報だ。中佐」

俺がガディアスの修理の際に取りつけさせた発信器の反応をヴェーダにトレースさせておいたから、まず間違いない。

伝達ミスで改良をされていたが、肝心の発信器の取りつけは出来ていたから、この件は不問にしておいた。

「すでに、宇宙軍が解放戦線の本拠地への攻撃の為にラグランジュ2に集結している。メーティアはその作戦の旗艦として作戦に参加して貰う。」

「敵の総戦力は？情報では相当数の敵が宇宙に上がったと聞いています。」

「それだけじゃない。宇宙の散らばっていた解放戦線も本拠地に集結しているとの情報が入っている。少なく見積もっても、戦艦が100隻、MSが数百機がいると思われる。」

まったく……いつぞやのプレデントの時よりも多いじゃな。

疑似GNドライブを搭載していないMSや旧式が殆どだけど、良く

もまあ…これだけの戦力を集めたもんだ…

「それに対して、こちらの戦力は戦艦が10隻にMSが約50機と言ったところか……」

戦力を総て、集める事の出来る解放戦線に比べて、連邦軍は地上や宇宙に部隊を配置する必要があるため、動かせる戦力が限られている。

戦艦を10隻も投入するのは大作戦だしな。

この状況で動かせる戦力はこれが限界だ。

E L S 戦役の時の様な事態でも起こらない限りはね。

「戦力差は数倍以上……厳しい戦闘になりますね。」

「だからこそ、俺が必勝の策を与えるためにここに来た。」

せつかく、お膳立てをしても連邦が負ければすべてが水の泡となる。

そのために必勝の策を用意した。

「そのような策が？」

「ああ……単純な事だ。俺が単機で敵陣に飛び込み、敵陣を掻き乱し、戦いの流れを掴む。お前たちはその流れに乗り、一気に畳み込めば良い。」

それこそが俺の用意した必勝の策。

俺がそう言つと皆は啞然としている。

「中将……それが必勝の作戦ですか？」

皆の心を代弁して、アルエツトが聞いて来る。

「そうだ。アルエツト……究極の戦術とはなんだか分かるか？それはな……圧倒的な力による力づくだ。それこそ、いかなる戦術をも力で捻じ伏せる圧倒的な力だ。」

戦術も理屈も捻じ伏せる力に対抗するにはそれ以上の力をぶつけるしかない。

元々、リベリオンZはそのための機体だからな。

作られて20年以上も経つがようやく本来の使い方を使う事が出来る。

「そして、俺とリベリオンはそれだけの力を持っている。俺がリベリオンで出る時点で連邦の勝利は確定していると言つても良い。これからお前たちが考えなくてはならないのは、いかに勝つかではなく、いかに生き残るか、いかに被害を抑えるかだ。」

俺が出る戦場に敗北は無いからな。

「作戦は以上だ。パイロットは作戦が始まるまでしっかりと休んでおけよ。」

俺はそう言いブリーフィングルームを出て行く。

作戦会議を終えた俺は食事時を過ぎて人の少ない食堂で一人座っている。

中將の作戦は至って単純だが、あの人ならやっつのけそつだ。

「何をしんみりしてますの？バンさん」

「セシリア……」

俺が顔を上げるとセシリアが俺の隣に座る。

「柄にもなく、緊張してますの？」

セシリアが俺の心中を言い当てて、俺はドキリとする。

次の戦闘は激戦となる事は明白だ。

それもこの前のELS戦よりもだ。

俺はあの戦闘で機体を失っている。

新しい機体は性能が向上しているが、生き残れるかどうか……

軍人として、市民を守って死ぬ覚悟は出来ている。



しかし、俺も人だ。

死ぬかも知れないと分かっけていて冷静でいられる訳がない。

「ワタクシもですわ。」

「意外だな……」

セシリアは俺と違って才能もある。

常に自信を持っているイメージがある分、緊張している事が以外に思える。

「そんな事は無いですわ。今回の戦闘は大佐が御出陣なされるのですわよ。ワタクシ達が出て、大佐の戦いのお邪魔になるかも知れないと思うと……死ぬほど緊張しますわ。」

そっちかよ……

まあ……セシリアらしいと言えらしいか……

「心配ないさ……あの中将が俺やお前如きに足を引っ張られるような人か？」

最強のイノベーターがその程度な訳がないだろ。

それこそ、一人でこの戦闘を勝つても不思議じゃない。

「当然ですわ！大佐は最強のイノベーターですわよ。そんな事はあり得ませんわ！」

「それでこそ、セシリアだよ……」

「それに、さつきからバンさんはウジウジし過ぎですわ。少しは大佐を見習って自信を持ちなさいな。」

そうは言われてもな……

俺は士官学校も平凡な成績で卒業してるしな……

「ワタクシ達は大佐の直属の部隊のパイロットですよ。そのワタクシ達が自信を持たなくてどうしますの？」

「セシリア……」

「自信を持ちなさいな。ワタクシ達が大佐に選ばれたのですわよ。バンさんも大佐のお眼鏡にかなった所があるんですわ。」

選ばれた……

凡人の俺だが、そう言われるとその気になるかもな……

俺とした事が、大規模な戦闘の前にナイーブになっていたかもな。

解放戦線は市民の生活を脅かしている。

俺達は連邦軍の軍人として彼らの暴挙を止めるために戦わないといけない。

「セシリア……ありがとう。目が覚めた。」

「まっ……まっ……分ければ良いですよ。貴方が沈んでいて大佐に迷惑をかける事があれば、申し訳ないと思っただまですわ。」

セシリアはそっぽを向きながらそう言った。

まったく……俺は情けないな。

大きな戦いを前にビビって年下の女の子に目を覚まさせて貰うなんてな。

だが、目は覚めた。

後は全力で戦うまでだ。

「久しぶり。マリア」

作戦会議を終えると、メーティア内の士官室に戻ると俺はトレミーに居る、マリアと連絡を取っている。

「そうだね。連邦の動きが慌ただしいけど、また、アベルが何か動いているの?」

「まあね。そろそろ、解放戦線を叩いておこうと思っただね。」

本当は機密事項だけど、別に構いはしない。

「そう……アベルはメデイと戦うの？」

すでにマリアにはメデイが解放戦線に居る事を知らせている。

「戦わないさ……今のアイツでは俺とは戦いにすらならないからね。」

アイツは俺の存在を否定している。

だが、アイツは解放戦線でパイロットとしている。

アイツは才能があるが、それは誰から与えられた物だ？

無論、俺だ。

アイツが俺を否定すると言う事は俺の血を引く自分自身を否定することにも繋がる。

自分を否定しているアイツには何も守れない、何も背負えない。

俺はロックオンを失いそれに気がついた。

幾ら、強い力を持つと、土台がなければ、踏ん張る事も出来ずに大切な物は手から抜けて行く。

だからこそ、俺はアベル・ウォーカーと言う親から貰った名を使い、仇討ちをするために父さんの名を汚そうと戦う道を選んだ。

今のアイツは昔の俺にそっくりだ。

才能があるから、自分に出来ない事は無いと思っている。

それこそ、俺と超えるのかな……

そんな思いあがっているメデイとは俺の足元にも及ばない。

よって、俺とは戦いにすらならない。

「そっか……アベルも、メデイも死んで欲しくないよ。私……」

「安心しろ……俺もメデイも死なない。約束する。」

息子に対しては放任主義の俺でも息子が死んで良いはずがない。

もし、戦場で出会う事があれば、適当に痛めつけて戦場から離脱させればいい。

今回の作戦は解放戦線の壊滅で殲滅じゃない。

流石にテロリストといえども、殲滅したら、後で市民やマスコミからバッシングを受けかねないからな。

連邦にはアロウズと言う前科があるから、そこまでは出来ないのが現状だ。

「分かった……私達は介入することは無いけど、信じてるから……」

「任せておけ。」

世界を敵に回してもマリアを裏切る事は出来そうにないな。

「ルシオラ！」

俺は艦内を隈なく探しているとようやく、ルシオラを見つけた。

「……………何の用だ？」

ルシオラは相変わらず、素っ気なく俺に言う。

しかし、今はそんな事は関係ない。

俺はルシオラに近づくと抱きしめる。

「なっ！バット！何をする。」

ルシオラが暴れるが、俺はそれでも抱きしめる。

「俺にとってお前は特別な存在だ。」

だから、気になる。

「だから……………俺がお前を守る。」

例え、ルシオラがイノベーターを破壊するために作りだされたとしても関係ない。

それでも俺はルシオラを守る。

相手が誰であること……

「お前が何と言おうと俺が守る。」

ルシオラがなぜ、俺にあんな態度を取るのかは分からないが、それでも俺はルシオラを守ると決めた。

「……私はお前に守られる程、弱くない。」

ルシオラは俺から離れてそう言う。

「だが……私の背中位は守らせてやる。」

ルシオラはそれだけ言い歩いて行く。

だが、今はそれだけで良い。

時間は沢山ある。

ゆっくりとでも良いから、俺とルシオラの距離を縮めて行けばいい。

「守るか……」

私はバットと別れるとそう呟く。

初めてだな……私にそう言い奴は……

私はイノベーターを破壊するために作られた。

それだけで良いと思っていた。

しかし……アイツの言葉は悪くない。

アイツは私が破壊するイノベーターの血を引いている。

だが、アイツは私と同じ紛い物だ。

ならば、破壊する必要はないのではないのか？

屁理屈だが、それで良い。

アイツに抱かれて悪い気はしなかった。

敵に抱かれたら、嫌悪を抱くはずだ。

嫌悪を抱かなかったと言う事はアイツは敵ではないと言う事だ。

我ながら、感情論だな……だが、それも悪くないと思っている自分  
がいる。

一体…私はどうして、しまったのだな……

だが……やはり、悪くない。



「連邦と解放戦線が全面对決か……」

ようやく、私のセイバーの修理を終えて、トレミーは出港している。

今は、ラグランジュ2で連邦と解放戦線との戦いについて話している。

「うん……かなりの規模の戦闘になると思う。」

「連邦の戦力はかなり少ないですね。」

双方の戦力を見てマレールがそう言う。

確かに……連邦の戦力は解放戦線の半分以下……

連邦はこの戦力で勝つ気でいる訳？

「連邦の戦力が少な過ぎるわ。これじゃ……流石に勝てないでしょ。」

「そうだね。だけど、連邦はアベルがリベリオンで出るんだって……」

リベリオン……私も知っている。

アメリカの墓地ですれ違った、あの人……アベル・ウォーカーの愛機で20年前に作られたにも関わらず、私達のガンダムと同性能を持つMS……

私達のガンダムの原型だとジェシカさんから聞いている。

最強のイノベーターに最強のMS……

だから、連邦はこれだけの戦力で解放戦線を叩こうとしている訳ね。普通なら、経った一人でこれだけの戦闘をどうこう出来るとは思わないけど、あの人なら出来そうな気がする。

「それで？俺達はどうします？連邦に加勢しますか？」

「その必要はない。ロックオン……私達はあくまでも中立の立場だ。公にどちらかにつく事は無い。そうでしょう？艦長」

「レムリアの言う通りだね。私達は見守れば良いよ。この戦いを……もしも、どちらかが、必要以上に戦うのであれば、私達は武力介入を行う事だけはみんなも頭には入れておいてね。」

最悪の事態はアベル・ウォーカーとリベリオンと戦う事だけど、流石にないわよね……

「私達は見届けないといけないよ。世界が変革する瞬間を……それが、私達、ソレスタルビーイングの役目の一つだから……」

世界が変革ね……

今の最悪な世界が変わってくれるなら願ったりだけど……

だから、艦長の言う通り見させても貰うわよ……

世界が変革する瞬間って奴をね……

## Mission 19 連邦VS解放戦線

「たく……敵なんて来る訳ないのにな……」

ラグランジュ2にある人類解放戦線の本拠地のコロニーの外を哨戒しているGN-X?のパイロットがそう言う。

「そう言うなよ。これが終われば一杯出来るさ。」

同じ様に哨戒に出ているティエレンのパイロットがGN-X?のパイロットにそう言う。

本来の哨戒任務なら、私語は厳禁だが、彼らは正規の訓練を受けている訳でもなく、コロニーに連邦軍が接近した前例がないため、任務にならない程緩んでいた。

「それにここに攻める奴は馬鹿だけ？何せ、ここには数百機のMSがいるんだ。連邦が一度に動かせる戦力じゃ攻める事は出来ないさ……」

ティエレンのパイロットがそう言っていると、粒子ビームがGN-X?を撃ち抜く。

「なっ！」

ティエレンのパイロットが驚き、事態を把握する前にティエレンも粒子ビームで破壊された。

「悪いな……隠れるのは得意だね……」

アベルはリベリオンズのコックピットでそう言う。

メーティアが先行していた部隊を合流し、アベルは先制攻撃の為に単機で出撃し、先行していた。

「さて、始めるか……」

アベルが飛び出して、解放戦線も敵襲に気づいてMSを発進させる。

「おいおい……そんな数で大丈夫か？」

リベリオンズはコロニーに向かいながら、全火器から一斉掃射をして、斜線上のMSを撃墜していく。

「親父！連邦の襲撃だ！」

コロニーのドックに停泊していたアレクサンドリア級にも敵襲の知らせが届き、ガイウスがブリッジに上がって来る。

「敵の数は？」

突然の奇襲の中で浮足立っている解放戦線の中でもガイウスは実戦経験が豊富なため、冷静に状況を把握しようとする。

「敵は一機……あのアベル・ウォーカーのリベリオンらしい。」

「化け物だよ！たった一機ですでにこっちのMSが50機近く落とされてる！」

「うるたえるな！あのアベル・ウォーカーならその程度は当たり前だ。バット達を出せ！アレクサンドリアを出港させる！今すぐここから離れる！」

それが、ガイウスが出した答え。

アベルがリベリオンズで出て来たと言う事は連邦は本気で自分達を潰しに来ていると言う事。

幾ら、数に差があろうとこの数では足りない事をELS戦役でのアベルの戦いを知っているガイウスが知っている。

だからこそ、ここは撤退すると言う判断を下した。

例え、本拠地を失っても生きていれば、良いとガイウスは判断したのだった。

「その事を僚艦にも言っておけ！バット達にはくれぐれも無理はするなと伝えておけ……」

「了解ですぜ！」

ガイウスの指示をバット達に伝え、アレクサンドリア級はドックから出港していく。

「だってさ……どうする？バット、ルシオラ？」

アレクサンドリアからバット達は出撃し、ジオナサンがそう言う。

「関係あるか……あの男が来ている……今度こそ……俺が……」

バットはそう言い機体を加速させる。

「ちょっと！バット！」

「いつちまったか……ルシオラはどうする？」

「決まっている。イノベーターは私が破壊する。」

ルシオラもそう言い、機体を加速させていく。

「まったく……リーナは？」

「決まってるじゃない。こんなところで死ぬのは御免よ。指示通りに適当なところで撤退するわよ。」

「同感だ。」

ジオナサンとリーナはそう言い散開する。

「俺達はこの宙域を制圧する。敵主力はウォーカー中將が担当して貰えるから、俺達はいつも通りに戦えば良い。」

アスカのGN-X？は防衛のMSにGNミサイルを一斉掃射して、

先手を打つ。

GNミサイルを抜けて来たMSとアスカの小隊が激突する。

アスカのGN-X?はビームライフルでティエレンを撃ち抜き、部下のGN-X?キャノンがGNキャノンで後方に控えている戦艦を破壊する。

「中將が掴んだ、流れに乗るぞ！」

アスカのGN-X?はシールドの裏に装備されているアンカーを打ち出して、GN-X?に打ち込むとGNブレイドを抜いてGN-X?を切り裂いた。

ゴタードのソルブレイヴがトライパニッシャーで斜線上の敵を一掃する。

「このまま一気に押し込む！」

ソルブレイヴはビームライフルをGNキャノンを連射して、敵機を撃墜していく。

「舐めるなよ！連邦の狗が！」

GN-X?がビームサーベルを抜いて、ソルブレイヴに斬りかかり、ソルブレイヴは機体をMS形態に変形させるとビームサーベルで受け止める。



「はやり、この数は面倒だ。」

二機が押し合っているとライトのカイノスがビームライフルでGN-X?を撃墜する。

「余計なお世話だったか？」

「構わん」

カイノスはビームライフルを放ちながら、GNビットを射出して攻撃する。

「シャロンさん！大丈夫ですか？」

「問題ありません！中尉殿！」

セシリアのガラッゾ？はGNバルカンで牽制し、シャロンのシルフィードがGNツインビームクローでGN-X?を破壊する。

「数が多い。離れないように注意して戦うぞ。」

バンのGN-X?がGNキャノンでフラッグを破壊し、バスターソードを抜いて、ティエレンを切り裂く。

「分かってますわ。」

「中尉殿！GN-Xの?型が！」

「あの可変機……」

リーナはGNハンドガンで接近して来たGN-X?を撃墜すると、バン達と遭遇する。

「やば……こんな時に……」

「たく……数で勝ってても、練度は向こうが上か……」

ジヨナサンのガデッサ?はGNメガランチャー?で長距離砲撃をするが、そう簡単には当たらない。

「あれは……イノベーター専用機かよ!」

モニターにはライトのカイノスが映し出される。

「あれはガデッサか……今のうちに叩くか……」

ジヨナサンのガデッサ?を発見したライトは機体をガデッサ?の方に向ける。

「こつちに来やがった!」

ガデッサ?はGNメガランチャーを放つが、カイノスは回避しGNビットを差し向ける。

「畜生！」

ガデツサ？はGNバルカンで応戦するが、ビットからの粒子ビームを受ける。

「終わりだ。」

カイノスはビームサーベルを抜くとガデツサ？に接近し、一閃しガデツサ？を両断する。

「くそ……イノベーターってのは化け物かよ……」

ジヨナサンはコアファイターで離脱すると、戦闘宙域から撤退していくアレクサンドリア級に向かう。

「他愛もない…次だ。」

ガデツサ？を落としたカイノスそのまま、近くのリアルドを切り裂いた。

「この！落ちなさいよ！」

リーナのGN-X？はGNミサイルをシルフィードに放つが、シルフィードは飛行形態でGNビームガンで迎撃しながら、接近し、迎撃しきれないGNミサイルをバンのGN-X？がGNキャノンで迎撃する。

「お行きなさい！ファング！」

セシリアのガラツゾ？からGNソードファンクが射出され、リーナのGN-X？を襲う。

「私はこんなところで死ぬ気はないわよ！」

リーナはバルカンとハンドガンを放ちながら、ソードファンクを回避する。

「シャロンさん！」

「了解！」

ソードファンクを回避したリーナのGN-X？を左右からシャロンのシルフィードをセシリアのガラツゾ？が実体剣を持ち、接近している。

二機は交差するようにリーナのGN-X？に攻撃する。

「何で…何でよー！」

リーナはコアファイターで脱出しようとするが、脱出システムが作動しないで、エラーを伝えるメッセージがコンソールに映し出されている。

「整備不良！こんな時に！」

解放戦線の整備士は連邦の整備士とは違い、正規の訓練を受けている物が殆どいない。

殆どが、ジャンク屋上がりが機械オタクが整備をしている。

当然、完全な整備は無理な上にリーナのGN-X?は以前はバットが乗っていた。

腕に絶対の信頼を得ていたバットは整備において脱出装置の整備は後回しにされていた。

撃墜される事なかったバットはそれで良かったのかも知れない。

しかし、リーナは今、機体を撃墜され脱出装置を使用しようとしていた。

「ウソでしょ……バット……」

脱出装置の不備により、リーナが脱出することなく、リーナのGN

-X?は爆散した。

「次行きますわよ!」

リーナのGN-X?を撃墜しても戦闘が終わる事は無いため、脱出装置を搭載しているにも関わらず、脱出をしていなかった事を考える時間もなく、シャロン達は戦闘を継続させる。

「相手は一機だ! 困んでしまえば!」

リベリオンZの周囲をティエレンやGN-X?が取り囲み、一斉に攻撃する。

「無駄だ。」

リベリオンZはGNウイング?で防ぎ、GN粒子の弾丸を周囲に放ち、囲んでいたMSを撃墜する。

「そろそろ…100機目が……」

「アベル・ウォーカー!」

バットのテンペストがGNメガビームライフルを放ちながら、リベリオンZに突っ込む。

「あの機体……メデイか。」

テンペストはGNロングビームサーベルを抜いて切りかかり、リベリオンZはGNビームザンバーを抜いて受け止める。

「ひさし振りだな。メデイ…元気してたか?」

アベルはテンペストに通信を繋いでそう言う。

「父親面をするな!」

リベリオンZは下がり、テンペストはメガビームライフルを放ち、リベリオンZはシールドで防ぐ。

「それは仕方がない。お前が生まれた時点で俺はお前の親父だからな。」

リベリオンZビームキャノンを放ち、テンペストはかわして、接近してロングビームサーベルを振う。

「俺は認めない！」

「だが、事実でもある。」

リベリオンZはロングビームサーベルをシールドで受け流してバルカンを放つ。

「知った事か！俺はお前を倒す！」

テンペストはGNデیفエンスロッドで防いで、球体状のトライデントスマッシュャーを放ち、リベリオンZはGNバスターブレイドライフルで切り裂く。

「何のために？」

「俺には守りたい人はいる！だから！俺はお前を超える！」

テンペストはランザムを起動して、リベリオンZにメガビームライフルを放ちながら、接近する。

「守るか……笑わせる。」

リベリオンZはテンペストの攻撃をかわすと、メガビームライフルを掴むと手の平からGN粒子を流しこみ破壊する。

「妄想は頭の中だけにしておけ……口に出すと痛いぞ。」

「そうやってアンタは人を見下して！」

テンペストは両手にロングビームサーベルを持ち、バルカンを放ちながら斬りかかる。

「仕方がないだろ。俺が最強なんだから。」

リベリオンズはビームザンバーで受け止める。

「それと、一つ訂正がある。俺はお前を見下してはいない。」

「何をいまさらー！」

「お前は俺の眼中にすらない。目に映らない相手をどうやって見下せる。」

リベリオンズはテンペストを弾き飛ばす。

「今のお前は何も分かってない。何も見えてない。そんなお前を相手にしている程、俺は暇じゃない。一遍、地べたを這いずって出直してこい。」

リベリオンズはテンペストに接近すると、ビームザンバーを振りテンプストの両腕から両足までを両断した。

「ぐっ！」

「所詮…今のお前はこの程度だよ。馬鹿息子」

テンペストは力なく漂い、リベリオンズはその場から去って行く。



「この感じ……あの時の少女か……」

テンペストを大破させた、リベリオンZは再び敵機を撃墜していく。

「見つけたぞ……」

「今度の相手は手ごわそうだ。」

ルシオラのガディアスMK-?はGNメガビームをリベリオンZに放つ。

「そう簡単に当たってはやれないね。」

「そう簡単に逃がすと思っているのか！ファング！」

リベリオンZを曲がる粒子ビームで追撃しつつ、ガディアスMK-?は大型GNファングを射出して、GNメガビームと合わせて、リベリオンZを狙う。

「厄介な攻撃だ……」

リベリオンZはファングの攻撃をかわしつつ、メガビームをシールドのアンチフィールドで防ぐ。

「これで……」

リベリオンZはメガビームがなくなった事でファングからの攻撃を

掻い潜り、ガディアスMK-?に接近すると、ビームザンバーで切りかかる。

「それがどうした!」

ガディアスMK-?はGNビームアックスで受け止める。

「良い反応だ。」

二機は離れると再びぶつかり合う。

そして、何度もぶつかり合う。

「本当に良い腕だ。テロリストにしておくのは勿体ない。」

「流石と言うべきか……」

ガディアスMK-?は両肩のシールドスラスタに内蔵されているGNキャノンをリベリオンZに放ち、リベリオンZは回避しながら、ビームザンバーでファングを撃墜していく。

「くっ!ファング!」

ガディアスMK-?は更にファングを差し向けるが、リベリオンZはバルカンで撃墜し、ビームザンバーで切り裂く。

「中々やるけど、そろそろ終わりにさせて貰う。」

リベリオンZは一気にガディアスMK-?に接近する。

「やらせるか！」

ガディアスMK-？はGNビームガトリングで反撃するが、リベリオンZはGNウイング？で防いで接近する。

そして、GNバスターブレイドライフルを抜いて切りかかる。

ガディアスMK-？もGNフィールドで防ごうとするも、表面にアンチ粒子コーティングをしているバスターブレイドライフルには効果がなく、右肩のシールドスラスタごと、機体の半分近くが切り裂かれる。

「これで、これ以上の戦闘は無理だろう……」

リベリオンZはそのまま、ガディアスMK-？を放置すると、コロニーの方に向かう。

コロニーに向かうリベリオンZの行く手を遮ろうとするGN-X？を切り捨てるとアベルはある違和感を覚えていた。

「何だ……この感じ……」

アベルは足を止めると周囲の気配を探る。

「戦闘宙域からじゃない……何処からだ？この感じは……っ！全機、すぐにコロニーから離れる！」

アベルはオープンチャンネルで戦場のMSにそう伝える。

アベルの指示で連邦のMSなどは言われた通りに離れて行くと、何

処からか放たれた粒子ビームがコロニーを飲み込み、その閃光が戦場を包んだ。

## Mission 20 新たな戦い

閃光が収まり、アベルは周囲を見渡す。

それまで、そこに有ったはずの人類解放戦線の本拠地のコロニーが  
跡形もなく無くなっている。

「あれは……」

コロニーの周囲には攻撃の余波で轟沈した解放戦線の戦艦やMSの  
残骸が漂っている。

「一体、どこからの攻撃だ……」

戦闘は先ほどの一撃で終結している。

連邦軍は事前に聞かされていない一撃で茫然となり、解放戦線は本  
拠地を一撃で消滅させられて、愕然としている結果だろう。

「お父さん……」

「シャロンか……無事だったか。」

アベルが現状を把握していると、シャロンのシルフィードとともに  
バンのGN-X?とセリシアのガラッゾ?がアベルのリベリオンZ  
を見つける。

「中将……これは一体何ですか?」

「これも作戦ですか？」

「分からん……少なくとも、俺は知らん。」

アベルの策はアベルの力押しで本拠地を完全に破壊するものではなかった。

戦後に市民に対して、正当に作戦行動を行った事を印象付けるためにはここまでする必要もない。

「メーティアは無事か……取り合えず、メーティアに帰投しろ。」

アベルの指示でシャロン達はメーティアへと戻った。

「バット！生きてるか！」

戦場から離脱していたアレクサンドリア級の格納庫で大破した後に友軍に回収されていたテンペストのコックピットをこじ開けて、ジヨナサンは中を覗く。

「ジヨナサンか……」

バットは弱弱しく目を開ける。

「生きてる様だな。」

ジヨナサンはゆっくりと起き上がるバットを起こすと肩を貸してコックピットから出る手伝いをする。

「他の連中は？」

「リーナとルシオラが戻ってない……けどよ。大丈夫だろ。あいつらも離脱出来てると思うぜ。」

すでにリーナのGN-X？は撃墜された事が確認されているが、ジヨナサンは体力と気力を限界まで消耗しているバットに伝える事は不味いと判断して、とっさにそう言った。

「そうか……」

「今は休んどけ……」

ジヨナサンはそう言いバットを艦の医務室に連れて行った。

398

「木星から？」

メーティアに帰還し、数時間後には攻撃が何処から行われたのかが判明した。

それが木星……

「ええ……コロニーを破壊した粒子ビームは木星圏からの超長距離狙撃である事が判明しました。」

アルエットはブリーフィングルームのモニターに木星圏の映像を出

した。

「これは……」

「大きいですわ……」

モニターに映されたのはデカイ要塞やコロニーと見間違えかねない巨大な砲塔……

「これが木星圏から粒子ビームを放ち、解放戦線のコロニーを破壊したと思われます。」

「こんな物が木星圏に……」

少なくとも1年や2年やそこらで作れる代物じゃないな……

それに相当な資金を投入されているはずだ。

一体、何処から……

「中佐…次の砲撃までの予想時間は？」

「技研では意見が統一はされてませんが、最短で100日です。」

100日か……

ここから木星までメーティアなら7日あれば行ける。

補給と整備の時間を考えるとギリギリか……



「中佐、メーティアには連戦で悪いが、すぐに補給と整備を終えて、木星圏へ向かい。この巨大兵器の破壊を行ってくれ。」

木星圏から地球圏を狙撃出来る兵器をこのまま、残しておくのは危険だ。

多少、強行軍になるが、やってもらうしかない。

あの一撃で、こっちも余波で被害が出ている。

時間がない以上、すぐに動かせるのはメーティアしかない。

「了解しました。」

どこの誰かは知らないが、あんまり好きにはさせない。

「これは……」

解放戦線と連邦の戦闘は艦長の予想とは若干違う形で終結した。

予想通り、連邦の勝利で終わったけど、何処からかの攻撃で解放戦線のコロニーが破壊されて終結したらしい。

ブリーフィングルームのモニターには戦場の跡地が映し出されている。

「酷いもんだな……」

これじゃあまるで戦争の跡地じゃない……

「一体、どこからの攻撃なんです？」

「木星圏よ。木星から攻撃して来た見たいなの……」

木星圏って地球圏からどれだけ距離があるのよ……

あり得ないわよ。

「マジかよ……流石にその距離の狙撃は俺でも無理だぜ……」

まあ……当然よね。

「それで、艦長……我々はどつするの？」

レムリアが艦長にそう言う。

流石に状況が分かった以上、私達も静観は出来そうにないわ。

「そうだね。私達はこれより、補給を終えた後に量子跳躍にて、木星圏へ向かい、この巨大兵器の破壊ミッションを行います。」

当然よね。

木星圏から地球圏を狙える兵器……残しておく訳にはいかない……

「マイスターは戦闘に備えて休んでおいてね。」

「戦闘って艦長は戦闘になる可能性を考えてるんですか？」

「そうだよ。あれが連邦のでも解放戦線のもないとしても、防衛用のMSを配備している可能性があるから、そうなれば、ガンダムを使う可能性もあるからね。」

確かに……解放戦線の本拠地を破壊しているから、解放戦線の物じゃないし、連邦の物なら、わざわざMS戦を仕掛ける必要はない。

姿を現してから木星圏からの攻撃じゃ動いても間に合わない。

無駄に戦力を消費するかも知れない策を立てる必要もないわね。

最悪……それはつまり、連邦でも解放戦線でも私達、ソレスタルビーイングでもない第4の勢力である可能性が出て来る。

それもあれだけの兵器を作るだけの資金を持ち、製造する事を世界に隠しておける程の技術力を持っている。

まるで、武力介入前のソレスタルビーイングじゃない。

「相手が分からない以上、ガンダム全機を投入するから……みんなもそのつもりでね。」

イノベーターとしての私の感が言っている。

これは相当不味い事になるって……

最悪……

「ようこそ、木星圏へ！」

補給と整備を終えて、量子跳躍で木星圏にあるソレスタルビーイングの基地に向かい、木星圏で巨大兵器の情報を集めて貰っていた。

基地に入ると、木星圏で研究をしていたジェシカさんが私達を出迎えて来てくれた。

ジェシカさんは相変わらずのようだけど、状況が分かっているのかな……

まあ…ジェシカさんはソレスタルビーイングに来た時から変わらないなあ……

「ジェシカさん……例の兵器の情報は？」

どれだけ時間が残されているのか分からない以上、あんまりグズグズしてられないよ。

「こつちに来てよ。ちゃんと情報を集めてあるからさ……」

ジェシカさんにそう言われて、私達は基地ないのブリーフィングルームに向かう。

「これが、頼まれていた兵器だよ。連邦と解放戦線との戦闘中に突如、木星圏に現れて、解放戦線の本拠地を超強力な粒子ビームで超長距離狙撃を試みたんだね。」

「今まで、この基地でも補足は出来なかつたんですか？」

あれだけの巨大な兵器を木星圏の基地なら、補足出来た筈だけど……

「んにゃ、全然だつたよ。私もさ……すつごく驚いてる。今まで影も形もなかつたんだよ。多分、何らかのステルスシステムを使つてたんだと思うよ。」

それこそ、私達、ソレスタルビーイングの目を欺く程の……

「そんで、この兵器はね。超大量の疑似GNドライブを使つての砲台だと思うよ。」

ジェシカさんはそう言いコンソールをいじると別の映像が出る。

それは、巨大兵器が赤く発光している。

「これは、発射寸前の映像だよ。見ての通り、発射時にトランザムを使いあれだけの威力を出してるみたいなんだよ。」

「それで、次の発射までの時間は？」

それが今の一番の問題……

あれだけの威力の兵器だから、連射は出来ないと思うけど、次の攻撃がいつかは分からない上、ゆっくりとは出来ない。

すでにあれから、10日近く経っている。

私の予想ではそろそろ、次の一撃が撃てると思う。

「そうだねえ……疑似GNDドライブの換装や、砲撃時の反動で損傷した部品の交換やその他諸々を考えると大体10日が良いところだねえ……」

10日……すでに10日が過ぎている。

ジエシカさんの予想が正しいなら、すでに撃てる。

「その根拠は？」

「簡単だよ。私はあの兵器を知ってるんだよね。」

「どづい事ですか？」

知っている？

「あの兵器はコリニツク社が大昔に作った兵器を完成させた物だと思うよ。特徴とはが良く似てるしさ……みんなも知ってるでしょ？アベルが一躍、時の人となった事件。」

確か……反政府勢力が起こした大型テロで最後はアベルとティエリアが決めたあの事件だよね……

「あの時に地球に落とされそうになった奴の完成形態だと思うよ。もっとも、当時の奴よりもすっごいデカイけどね。」

「では……これはコリニツク社の仕業で？」

レムリアが険しい表情でジエシカさんにそう言う。

クリニックが関わっているなら、私達も無関係とは言えないけど……

クリニック社の社長のメアリーさんが関わっているとは思いたくない……

「んん…それは無いと思うね。メアリーはそこまで腹芸が得意な訳じゃないからね。アベルや私らを十年以上も誤魔化すのは無理だよ。多分…私のお父さんが関わってると思うよ。」

ジェシカさんのお父さん？

「どづい事です？」

「お父さんはね。第二次ソレスタルビーイング事変の後で行方を眩ませてるんだよね。20年以上もどづかに引きこもってあれと作ってたんだね。」

「それで、アレを破壊する有効な手段は分かりますか？」

あの兵器の事を知っているのなら、有効な対策を知っているかも知れない。

「さあ？そんなの分かんないけど、定石なら、内部に突入しての内部攻撃は有効だと思うよ。姿を現したって事は外壁の防御はある程度してる筈だけど、内部からの攻撃には弱いのは巨大兵器の性だからね。お父さんなら、内部の防御は外部に比べると高くないと思うよ。」

となれば、MSによる内部攻撃で決まりだね。

「分かりました。これより、私達はミッションに入ります。」

「頼んだよ。私はここで見てるからねえ。」

作戦は決まった。

後は作戦を実行するだけだね。

木星圏に突如現れた巨大な兵器にトレミーが接近している。

「巨大兵器を視認しました。」

トレミーのブリッジのメインモニターに巨大兵器の映像が映し出される。

「こうして見るとでかいな……」

モニターに映された巨大兵器にブリッジクルーを代表してラッセがそう言う。

「これより、巨大兵器の破壊ミッションを開始します。ガンダムの発進をお願い。」

「了解です。」



マリアの指示でトレミーのカタパルトが開閉する。

「アクセル、リニアカタパルトに接続、タイミングをアクセルに譲渡」

「了解……まったく……デンジャラスな物を作るよ……アクセルガンダム、マレール・ハプティズム……目標へ飛翔します。」

アクセルが射出されると、カタパルトにコマンドガンダムが移動され、もう片方のフォートレスガンダムの発進シークエンスが始まる。

「フォートレスをリニアカタパルトに固定……射出タイミングをフォートレスに譲渡……」

「了解した。フォートレスガンダム、レムリア・レーベルト……出る。」

フォートレスが射出されると、中央のカタパルトにセイバーガンダム移動される。

「コマンドをリニアカタパルトに接続、タイミングをコマンドに譲渡」

「オーライ……たく……コマンドガンダム、ロックオン・ストラトス………出撃する。」

コマンドガンダムが射出され、セイバーの発進準備が開始される。

「セイバー、リニアカタパルトに固定……」

「装備はウイングユニットを装備します。」

セイバーガンダムの背部にGNウイングシステムを搭載し、機動力に特化した装備にウイングユニットが装備される。

「射出タイミングをセイバーに譲渡します。」

アニエスは目を瞑り、一息つく。

「フウ……セイバーガンダム、アニエス・グラス……行きます。」

セイバーガンダムが射出され、4機のガンダムは巨大兵器へと向って行く。

## Mission 21 共闘

「艦長！巨大兵器からMSです！」

ガンダムを出撃させて、ガンダムが巨大兵器に接近していくと巨大兵器からMSが出て来る。

「映像です。」

トレミーのメインカメラにそのMSが映し出される。

「何だ…この機体……」

「新型？」

モニターに映されているMSは連邦のGN-Xシリーズの物とも旧三国家群の機体とも、ましてやガンダムとも特徴が似ていない。

黒を基調とした紫と赤のボディに機体の大きさが通常のMSのサイズよりも一回り小さい。

頭部のはアリなどを連想させる複眼に触覚、大あごが付いている。

両腕には肘から先に普通のMSなら人間の様なマニピレーターが付いている筈だが、この機体にはそれが無く、直接マシンガンやバズーカ、ロングソード、ミサイルポッドなどの武器が左右の腕にさまざまな組み合わせで付いている。

そして、この機体からはGN粒子が放出されていない。

Z T S T - 0 0 3 5 『ガントミー』

それがこのMSの名前。

ガントミーは巨大兵器から出て来るとガンダムやトレミーに向かっ  
ていく。

「リコッタ、敵の数は？」

「うそ……50…60…まだ増えます！」

「マジかよ……」

リコッタの言葉通り、巨大兵器からはガントミーが数えるのもバカ  
バカしくなる程の数が出て来る。

「一体、どこにこれほどの数を潜ませてんだよ。」

「考えるのは後だよ。ラッセ…数が多いから、トレミーも前線のガ  
ンダムの援護射撃をお願い。リズは敵に取りつかせないようにとア  
レの射線に入り込まないようにね。」

マリアの指示でトレミーから先制の攻撃で戦闘は開始された。

トレミーの砲撃はガントミーを何機も撃墜するが、それでも数が減  
った様には見えない。

「何なの…こいつら…」

セイバーガンダムがGNソード？のライフルモードでガントミーを撃ち落としていく。

「アニエス、後だ！」

セイバーガンダムの背後からガントミーがロングソードで切りかかって来て、コマンドガンダムがGNスナイパーライフル？で撃ち落とす。

「いつの間にな！」

セイバーガンダムはGNソード？をソードモードに切り替えて、近くのガントミーを切り裂く。

「こいつら……あのマントの奴と同じで何も感じない………だけどね！」

セイバーガンダムはGNソードビットを射出して、ガントミーを破壊していく。

「マントの奴に比べれば！」

「くそつたれ！何なんだよ！」

コマンドガンダムはGNスナイパーライフル？でガントミーを狙撃していくが、ガントミーは被弾することをお構いなしにコマンドガンダムに向かっていく。

「粒子残量ゼロ！粒子残量ゼロ！」

「ちい！」

GNスナイパーライフル？の粒子残量が尽きて、ライフル内の粒子の空のカートリッジを排出し、新しいカートリッジを装填している間もガントミーはコマンドガンダムに接近して来る。

「近寄んなよ！」

コマンドガンダムは牽制で頭部のGNバルカンを放つが、ガントミーは気にする事なく前進し、バルカンを受けると、破壊される。

「バルカンで破壊出来るのかよ……ならよ！」

コマンドガンダムは連射の利かない、GNスナイパーライフル？をしまつと、GNガトリングライフル？を構えた。

「こいつで一掃してやるよ！」

ロックオンが引き金を引くとGNガトリングライフルから大量の粒子ビームが撒き散らかされて、ガントミーを破壊していく。

「きりがねえ！」

ガトリングライフル内のカートリッジを使い切り、排出して新しいカートリッジに装填してコマンドガンダムはガントミーを破壊していく。

「数が多いけれど、スピートは無いようですね。」

アクセルガンダムはGNミサイルを一斉掃射してガントミーを破壊する。

「しかし、この数は……」

飛行形態でガントミーからの攻撃をかわし、GNキャノンで前方のガントミーを一掃し、機体をMS形態に変形させると、GNサブマシンガンでガントミーを破壊する。

「厄介と言わざる負えないですね。」

アクセルガンダムは近くのガントミーに接近すると、ガントミーはロングソードで反撃するが、シザーシールドで防ぐと、もう片方のシザーシールドで切り裂く。

「そんな攻撃が！」

フォートレスガンダムはGNフィールドを展開して、ガントミーからの集中砲火を防いでいる。

「幾ら、数を揃えたところで単体の性能が引くければ、無意味だと知れ！」

フォートレスガンダムは拡散ビーム砲でガントミーを破壊し、GNガトリングキャノン？で弾幕を張り、ガントミーを破壊する。

「しかし……これほどの数を何処で……」

戦場にはすでに100機をも超えるガントミーが出現し、ガンダムも数十機を撃墜している。

「それに……」

フォートレスガンダムは接近して来たガントミーをGNガトリングキャノン?の大型ビームソードで貫く。

「こいつらには死の恐怖がないと言うのか?」

ガントミー達の戦術は至って単純、数を活かした人海戦術。

この作戦で先に仕掛けるガントミーは撃墜される危険性どころか、撃墜される事を前提にガンダムに向かっている。

まともな精神の人間なら、死を恐れて躊躇ったりするものだが、ガントミーのどの機体にもその恐怖が見る事が出来ない。

「それにこの動き……」

ガントミーの動きは統一されている。

通常の連携でも、MS各機のパイロットの操縦の癖で同じ動きでも微妙に異なるが、ガントミーの動きはまったく同じでレムリアは何とも言えない奇妙な感覚を受ける。

まるで、すべての機体に同じ人物が乗っているかの様な……

しかし、レムリアはその考えを捨てる。

同じ人間が乗る事自体はイノベイドを使えば可能だが、これだけの数のイノベイドを製造する設備はソレスタルビーイングの母艦でし



かない。

すでにイノベイドの製造がされてない以上、その考えはあり得ない。レムリアは余計な事を考える事を止めて、目の前の敵の殲滅と任務の完遂に神経を集中させた。

「艦長！後方より接近する熱源が！」

戦闘が続く中、トレミーの後方から来る熱源を確認し、香蘭がマリアに伝える。

「早いです……モニターに出します。」

モニターに出た映像にはメーティアが映し出されている。

「あの船は……」

「艦長、すでに戦端が開いている様です。」

木星圏に到達したメーティアのブリッジではソレスタルビーイングとガントミーとの戦闘が補足出来ていた。

「戦闘だと？どこの連中だ？」

「一方はソレスタルビーイングのガンダムですが、もう一方の機体はデータにはありません。」

モニターに交戦しているガンダムとガントミーの映像が出される。

「この機体は……それにこの数は……」

戦場にはガントミーの数がどんどん増えており、ガンダムが撃墜するよりも多いため、当たり前一面はガントミーだらけだった。

「どうします？艦長……」

「MSを出せ。アンノウンを叩かせる。それとハイパーメガビームキャノンのチャージを急がせる。」

「了解しました。」

アルエットの指示でメーティアからMS隊が出撃した。

「何なんですの……あのMSは？」

「分からん。だが、あの数だ油断するなよ。」

メーティアから出撃したMS隊は初めて見るMSに若干、戸惑いながらも交戦を開始した。

ゴタードのソルブレイヴはGNキャノンをビームライフルを放ち、ガントミーを破壊する。

「くそ……数が多過ぎて取りつけん。」

ソルブレイヴはトライパニッシャーでガントミーを一掃すると、機体をMS形態に変形させて、ビームライフルでガントミーを落とす

ていく。

「ふん…幾ら数がいようとその程度の腕ではな！」

ライトのカイノスはビームライフルでガントミーを破壊し、ガントミーのバズーカをシールドで防ぐと接近して、ビームサーベルで切り裂く。

「とはいえ…これだけの数がああ兵器の何処に……」

明らかに巨大兵器に搭載しておける数よりもガントミーの数の多さにライトはそう呟く。

「考えてる暇はないか……」

カイノスはGNビットを射出して、ガントミーを破壊していく。

「何なんだ……こいつらは……」

バンのGN-X?がビームライフルでガントミーを撃墜し、ガントミーからのミサイルをバルカンで迎撃する。

「こんなMS……見た事がない。」

シャロンのシルフィードがGNロングソードライフルでガントミーを切り裂く。

「本当に数が多過ぎですわ！少しは遠慮をして欲しいものですわ！」  
セシリアのガラッゾ?がGNショートキャノンでガントミーを破壊

し、GNソードファンングを射出してガントミーを切り刻む。

「まったくだ。」

GN-X?がGNキャノンでガントミーを破壊し、ガラッゾ?がGNバルカンでガントミーを牽制して、シルフィードがGNツインビームクローを突き刺している。

「中尉殿、このままでは悪戯に粒子を消費して、あの兵器に取りつけません!」

シルフィードはGNビームガンとGNロングソードライフルでガントミーを破壊ながら、シャロンがそう言う。

しかし、ガントミーの数は多く巨大兵器までの道を閉ざしている。

「だが、こいつらを倒さないと先には進めない……」

GN-X?がGNバスターソードでガントミーを切り裂いていると、GNミサイルや粒子ビームでガントミーが破壊されていく。

「何だ?」

「増援ですの?」

攻撃を行ったのはアレクサンドリア級でその前方にはGN-X?などが展開していた。

「何処の機体だ?」

メーティアのブリッジでアルエットがそう言う。

アルエットらは巨大兵器が放たれた後にすぐに準備して木星圏に来ている。

アレクサンドリア級の航行距離ならここまで来れない事もないが、メーティアやトレミーとは違い、木星圏に到達するにはトランザム航行でも相当な時間がかかる。

それこそ、あの後すぐに木星圏に向かわねば、このタイミングでこの場にはいない。

「親父：良かったんですか？あの船を助けるような真似をして……」

アレクサンドリア級のブリッジにはガイウスが艦長席に座っている。

ガイウスらは戦闘宙域から離脱し、あの攻撃があつてすぐに木星圏に向かったために戦闘に間に合っていた。

「構わん。それよりも、アレを破壊する方が優先だ。俺達の戦力よりも連邦やソレスタルビーイングの戦力の方が高いからな……」

アレクサンドリア級にはMSが殆ど搭載されていない。

本拠地での連邦との戦いで艦の主力の中のリーナとルシオラが帰還せず、エースのバットのテンペストは大破している。

強奪したテンペストは予備のパーツは他の機体との共通のパーツしか用意されておらず、アベルとの戦闘で大破したテンペストはもはや、修理は不可能となっていた。

「あの訳のわからん機体を優先させる。」

「了解でさあ」

「バットが休んでる分、俺が頑張らないとな！」

GN-X?に搭乗しているジョナサンがそう言いビームライフルでガントミーを撃ち落とす。

今まではガデツサ?に乗っていたが、機体をライトに落とされて、機体がないため、実力的にそれなりのジョナサンが本来のパイロットの代わりにGN-X?に搭乗している。

GN-X?の装備はビームライフルに左肩にGNシールドと言うシンプルな装備だが、機体性能の極めて低いガントミーを相手では数に圧倒さえされなければ、ジョナサンでも十分に戦えた。

ジョナサンに続き、他のGN-X?や撤退の途中で拾って来たGN-X?やティエレンなども戦闘に参加し、ガントミーを落としていく。

「艦長……連邦と解放戦線も来てますが、どうしましょう?」

トレミーでもメーティアとアレクサンドリア級の艦体を確認出来ている。

「そうだね……リコッタ、オープンチャンネルである二隻と通信が出来ないかな?」

「どつするつもりだ？」

「艦長…繋ぎました。」

リコッタがそう言い、マリアは一息つく。

「連邦軍、並びに解放戦線の戦艦の艦長……私はソレスタルビーイング所属のマリア・ウォーカーです。応答してください。」

マリアがそう言い少しするとメーティアとアレクサンドリア級との通信が繋がり、モニターにアルエットとガイウスの姿が映し出される。

「何の用か？今は戦闘中だ。」

「同感だ。艦長同士、仲良く話している暇はないと思うが？」

アルエットとガイウスがそう言うがマリアは臆せずと言う。

「私達の目的はあの兵器の破壊で共通しています。ですので、バラバラに戦っていても時間を粒子を無駄に使っただけだと思います。」

マリアの言葉に二人の艦長は考え込む。

TGNドライブを搭載しているガンダムとオリジナルの太陽炉を搭載しているトレミーには粒子の制限が殆どない。

それに引き換え、疑似GNドライブ搭載機の連邦軍と解放戦線は戦闘可能な時間がソレスタルビーイングよりも劣る。

「つまりは我々と共闘すると?」

「正気か?」

アルエットとガイウスはマリアにそう言う。

二人からして見れば、ソレスタルビーイングはともかく、もう片方は数日前に戦闘をしていた相手、そう簡単には受け入れる事は出来ない。

「正気です。今、私達は最終戦にすべきはその兵器の破壊の筈です。それは連邦も解放戦線も同じ筈です。今は過去は忘れてあの兵器を破壊する事を考えるべきです。」

「……了解した。」

「ここは一時休戦と行くか……」

アルエットとガイウスの返事を聞き、マリアは一息つく。

「それで、我々に共闘を申し出たからには策があるのだろうか?」

「あります。私達はあの兵器の内部にガンダムを突入させて内部破壊を試みています。しかし、お二人も分かっていると思いますが、数が多過ぎます。」

すでにガントミーが出て来た数は千にも到達しているかも知れない。

「確かに……ならば、我が艦のハイパーメガビームキャノンで血路を開く。ついでにガンダムをシルフィードあの兵器まで連れて行



かせる。他の機体も援護に使えるだろう。」

「ならば、うちの連中にアンタらの船も合わせて、護衛させる。何せ、数で劣る戦いは俺達の専売特許だからな。」

ガイウスは連邦軍であるアルエットを挑発するように言う。

「ほう…ならば、我々を相手に逃げ切った、その実力とやらを期待させて貰おう。」

アルエットはそれを挑発で返す。

「それではお二人ともご武運を……」

マリアがそう言い艦長同士の会談は終わりを告げた。

「みんな、通信で聞いてた通りだよ。」

「艦長、セラヴィーをお願いします。」

アニエスが通信でそう言う。

「分かった。香蘭、すぐにセラヴィーを射出して。」

「了解です。」

「来た……」

セイバーガンダムは両手にGNソード？を持ち、ガントミーを両断している、トレミーからセラヴィーガンダム？が射出された。

アニエスがセラヴィー？と脳量子波を同調させて、コントロールを得るとGNバズーカでガントミーを破壊しながら、機体同士を接近させた。

そして、セイバーガンダムの背部に装備されているウイングユニットをパージし、セラヴィー？をドッキング可能な形態へと変形させるとセラヴィー？を背部にドッキングさせて、Bセイバーガンダムとなる。

BセイバーガンダムはGNビッグキャノン？を放ちガントミーを破壊する。

「聞いてたな。アニエス」

「ええ……」

コマンドガンダムがGNサブマシンガンとGNビームライフルを持ち、セイバーガンダムと合流すると、バンのGN-X？がGNキャノンで道を作り、シルフィードが飛行形態で二機に向かう。

「乗ってください。」

「助かるわ。」

セイバーガンダムとコマンドガンダムは飛行形態のシルフィードの背中に掴まると、シルフィードは加速して巨大兵器へと向かう。

「メーティアが露払いをしてくれるそうだな。」

ゴタードのソルブレイヴがシルフィードの前に出て、GNキャノン  
を放っていると後方に控えていたメーティアがGNハイパーメガビ  
ームキャノンが放たれて、斜線上のガントミーを一掃する。

「すげえ威力だな…おい……」

「まあ…コロニークラスを破壊する武器だからね……」

その威力を目の当たりにしたアニスとロックオンは引き攣った顔  
をするが、メーティアが開いた血路にガントミーの大群が道を塞ぐ。

「まだ…あれだけの数がいるのか…仕方がない。俺も露払いをや  
るか……」

ソルブレイヴはトライパニツシャーを放ち、シルフィードの道を作  
る。

「きりがねえよ。」

ロックオンが呟き、背後からはバンのGN-X？がGNキャノンと  
ビームライフルで、セリアのガラッゾ？がGNバルカンとGNシ  
ョートキャノンで後方支援を行っている。

「これで、少しはシャロンさんの負担が軽くなる筈ですわ。」

「そうだな。これが俺達の今出来る事か……」

「そろそろ、僕たちも行きますか……」

アクセルガンダムは飛行形態に変形するとGNサブマシンガンでガントミーを破壊しながら、フォートレスガンダムに接近し、フォートレスガンダムはGNビッグキャノン？でガントミーを破壊すると、アクセルガンダムに掴まる。

「向こうに比べて、遅れている。」

「分かってますよ。丁寧且つ、スマートにエスコートさせて貰います。」

アクセルガンダムはGNキャノンを放ち、ガントミーを撃墜するが、ガントミーも反撃でマシンガンやバズーカを放つ。

「構うな。私が防ぐ。」

フォートレスガンダムはアクセルガンダムごと、GNフィールドを展開する。

「相変わらずですね。」

GNフィールドで守られているアクセルガンダムがゆく手を遮るガントミーをGNサブマシンガンで破壊しながら進むが数が多くロングソードを装備しているガントミーに取りつかれそうになるが、ライトのカイノスのGNビットが破壊する。

「あれは……連邦のイノベーター専用機か……」

「俺が援護してやる。さっさと行け。」

「サンクス」

カイノスがビームライフルをGNビットでアクセルガンダムに取りつこうとする、ガントミーを撃墜してアクセルガンダムは巨大兵器へと飛翔していく。

「ガンダム各機、巨大兵器への侵攻が開始されました。」

連邦と解放戦線との共闘により、ガンダムをスムーズに巨大兵器へと向かわせる事が出来ていた。

「艦長！巨大兵器が！」

リコッタが叫び、モニターには赤く発光している巨大兵器が映されている。

「……不味い。」

「狙いは何処だ？」

「今、計算しています……」

香蘭が巨大兵器の斜線上から狙いを計算する。

「……出ました……地球です！」

香蘭がそう言い、トレミーのブリッジクルーが考える間もなく、巨  
大兵器の第二射が放たれた。

## Mission 22 新たな敵

木星圏で戦闘が激化している頃、地球圏でも木星圏の巨大兵器に対する策が講じられようとしていた。

巨大兵器と地球との斜線上に大量のGNシールドやリベリオンZに装備されているアンチ粒子シールドの簡易量産タイプやガンダムに装備されていたシールドビットやホルスタービット、ソードビットなどが、大量に散乱している。

その中に真紅のMS、リベリオンZがいる。

「これで防げるかどうか……試してみる価値はあるが、出来なかつた時の対価は俺の命か……」

アベルは機体ないでそう呟く。

コロニーを一撃で消滅させる威力を持つ巨大兵器の一撃を止める方法はそう簡単には見つける事が出来ない。

一番、有力な方法で現在はコロニー国家の象徴とされている、かつてELS戦役で地球に訪れた超大型のELSなら、外宇宙航行艦の巨大砲塔やダブルオークアンタのライザーソードを防いでいるため、もっとも確実な方法だと議会に出されるも、議会としてはELSに借りを作る事になるため、否決されている。

その代わりに対粒子兵器に対する圧倒的に優位に立っているリベリオンZを投入することに決めた。

「これで、何度目だ…俺が地球を救うのはさ……」

アベルはそう言いながらも、ばら撒かれているシールド類と脳量子波を同調させる。

「この一撃を防げれば、後はアルエツトやマリアが何とかしてくれるだろうが、失敗すれば、地球は終わり……たく……この数十年に何回、地球は危機になれば気が済むんだ？」

「中将、シールドの配置完了しました。」

「了解した。君たちも安全圏まで退避してくれ。」

「了解です。ご武運を……」

通信が切れて、配置していた連邦軍の戦艦は安全圏まで退避する。

「さてと……」

アベルは目を瞑ると神経を集中させる。

「来る……トランザム！」

アベルはトランザムを起動させるとリベリオンZが赤く発光する。

そして、木星圏より人類解放戦線の本拠地を消滅させた粒子ビームが地球に向かって来る。

粒子ビームは斜線上に配置されていたシールド類やリベリオンZに直撃する。



本来ならMSサイズなら一瞬で消滅する威力だが、リベリオンZはGNウイングシステム？によるGNフィールドで受け止めていた。

リベリオンZにはトランザムシステム起動時に発動するGNRBシステムが搭載されている。

GNRBシステムとは粒子ビームをGN粒子へと還元し、自機に取り込むシステム。

取り込んだGN粒子をトランザムとGNフィールドに回る事で通常よりも圧倒的に長くトランザムを使い続ける事が出来き、巨大兵器を受け止めるだけの大きさのGNフィールドを展開することが出来た。

「流石にこいつは厳しいぞ……」

GNフィールドで受け止めているが、それでも受け止められないところはばら撒かれているシールド類が防いでいるが、シールド類の耐久力が持たなくなった物から破壊されて行き、その分の負担がリベリオンZへと向かう。

「くそ……流石にコイツは無茶振りだ！」

機体内で警告のアラームが鳴り響く。

幾ら、粒子兵器に対する絶対的な防御力を持っているリベリオンZも、この一撃を受け止めているだけで機体の至るところに負担をかけ、その負担が限界に近づいている。

「生憎と俺はこんなところで死ぬ訳には行かないんだよ。だから……  
もう少し踏ん張ってくれよ。相棒」

アベルがそう言うも、リベリオンの装甲は剥がれ落ちて行く。

装甲が剥がれ落ちて行き、機体のメインカメラが剥き出しになり、片足が吹き飛び、装甲が剥がれたところからは内部に隠されている  
ズリベリオンが垣間見える。

「もう少しだ……もう少し……お前の最後は地球を救って終わりに  
しようや！」

機体のあちらこちらが吹き飛び、原型が分からないくらいにリベリ  
オンZが破壊されていくと、木星圏からの粒子ビームが止む。

「ハアハア……ようやく終わった……今回はマジで死ぬかと思った  
ぞ……」

「中将！ご無事ですか？」

粒子ビームが止まると退避していた連邦の戦艦がアベルの生死を確  
認に戻って来る。

「何とかな……」

「流石です。中将、あれを一人で止めてしまうなんて……」

「俺じゃない……流石なのは、こいつだよ……」

アベルは20年以上もの間、自分の愛機であったリベリオンの機

体内のコンソールを愛おしそうに撫でた。

「攻撃が終わったのか……被害は！」

木星圏で巨大兵器の攻撃が終わるとアルエットは部下に叫ぶ。

「今、情報が……地球は健在の様です！ウォーカー中將が喰いとめたようです！」

オペレーターが地球圏の状況を伝えると、アルエットは肩の力が抜けそうになるが、戦闘中の為、気を引き締める。

「よし！次の攻撃までの時間は気にする事はないが、攻撃を防いだ今が最大のチャンスだ。気を抜かずにMS隊をサポートしろ！」

巨大兵器の攻撃が終わり戦闘が再開された。

ジオナサンのGN-X？がビームサーベルでガントミーを切り裂く。

「攻撃は終わったのか？地球はどうなった。」

「どうやら、無事のようだぜ。」

GN-X？のパイロットがジオナサンにそう言いGNランスでガントミーを貫いた。

「なら、後はガンダム次第って事か……」

ジヨナサンはそう言い、バルカンで牽制する。

「地球はどうなったんですの？」

セリシアのガラツゾ？は両手にビームサーベルを展開してガントミ  
ーを切り裂く。

「中將が防いだみたいだ。」

バンのGN-X？がビームライフルでガントミーを撃ち抜いた。

「流石、大佐ですね。あの一撃を防ぐなんて！」

ガラツゾ？はGNショートキャノンを放つ。

「油断はするな。敵はまだいるんだ。」

ライトのカイノスがGNビットとビームライフルでガントミーを破  
壊しながら、バンとセシリアと合流した。

「ライト！無事だったか。」

「当たり前だ。この程度の雑魚に負ける訳がない。」

カイノスはガントミーのマシガンをかわして、ビームライフルで  
ガントミーを破壊する。

「確かにな。」

GN-X？はバスターソードを抜いて、バスターソードを盾代わりにしてガントミーに接近すると、ガントミーを両断した。

「後はソレスタルビーイング次第と言う訳ですわね。」

アクセルガンダムとソルブレイヴ、シルフィードはガントミーの大量を突破して巨大兵器に接近していた。

「ここまでくれば……」

「後は俺達の出番って訳だな。」

シルフィードに掴まっていたBセイバーガンダムとコマンドガンダムが離れると、シルフィードはMS形態に変形して、追撃して来るガントミーをGNロングソードライフルとシールドのGNビームガンで応戦し、ソルブレイヴもMS形態でガントミーを迎撃する。

「ここは俺達が死守する。」

「貴方達は破壊任務を頼みます。」

「任せたわ。」

「頼む。」

背後を二機に任せて、Bセイバーガンダムとコマンドガンダムは巨大兵器の砲門から内部へと向かう。

「どうやら、僕達は遅れたみたいですね。」

「関係ない。任務が完遂出来ればそれで良い。」

遅れて、アクセルガンダムも到着すると、フォートレスガンダムがアクセルガンダムから離れて、先に進んだ二機を追い、アクセルガンダムはMS形態に変形すると、シルフィードとソルブレイヴに並ぶ。

「僕はここで待ってますから、そっちは頼みます。」

「了解した。私達に余計な手間をかけさせるなよ。」

アクセルガンダムは両腕のGNサブマシンガンでガントミーを破壊していく。

「お前は良いのか仲間と行かないで？」

ゴタードが他の三機が内部に突入するのに、アクセルガンダムだけが残った事に疑問を持つ。

「ええ…初めから、僕が残って足止めをする予定でしたので……」

4機のガンダムの中でアクセルガンダムは機動力に特化している分、火力が一番低い。

そのため、内部破壊ではなく、内部破壊をしている他のガンダムに邪魔が入らないようにもし、敵がいる時は足止めを任せられていた。

「その言う事ですので、僕も手伝います。」

「感謝する。」

三機はありつたけの火力を使い、迫るガントミーを破壊する。

「遅いぞ。レムリア。」

「作戦には問題ない。」

フォートレスガンダムは内部を進むBセイバーガンダムをコマンドガンダムと合流した。

「後は私達が内部からこれを破壊するだけか……」

「その通りだ。今回は遠慮をする必要はない。思いっきり行け。」

「オーライ……久々に暴れるとするか……」

三機のガンダムは散開して、それぞれ任務に取り掛かった。

「そんじゃ行くか……ハ口。」

「ぶちかませ！ぶちかませ！」

コマンドガンダムはGNメガビームライフル？を構えた。

「トランザム！」

コマンドガンダムが赤く発光するとメガビームライフル？から通常の三倍化の粒子ビームが放たれた。

コマンドガンダムの放った粒子ビームは巨大兵器の内部を破壊する。そして、そのままコマンドガンダムは粒子ビームを放ったまま、銃身を動かして、内部を破壊していく。

「カートリッジゼロ！カートリッジゼロ！」

「出し惜しみは無しだぜ！」

コマンドガンダムは最後のカートリッジの粒子が尽きる前に、新しいカートリッジを装填すると、メガビームライフル？の銃身が粒子ビームで焼け尽きるまで放つ。

「お次はこいつだ。」

GNメガビームライフル？の銃身が焼け尽きると、ライフルを捨て、両手にGNバスターライフルとGNガトリングライフル？を持ち、トランザムが限界時間を迎えるまで連射した。

「トランザム限界時間！トランザム限界時間！」

「そろそろ、とんずらするか……その前に、お土産だ。とつときな。」

コマンドガンダムは外に向かいながらも、GNミサイルを放ち、持っていた火器を捨てると粒子残量に関係なく、攻撃出来るNGNバ



ズーカとGNグレネードランチャーを持ち、残弾が尽きるまで撃ちながら離脱していく。

「どこの誰だか知らんが、このような物を残して置く訳にはいかな。トランザム」

フォートレスガンダムがトランザムを起動させると、全身の火器で一斉掃射した。

フォートレスガンダムの粒子ビームは次々と巨大兵器の内部に当たると、破壊されて瓦礫の山を作って行く。

「今回はやり過ぎないように手加減をする必要も、その気もない。徹底的に破壊させて貰う。」

フォートレスガンダムはその名に恥じない火力を持って、内部を破壊していく。

「これだけ、やれば良いだろう。後はアニエスが決めるだけだ。」

レムリアはそう言い、機体を反すと粒子ビームとGNミサイルを放ちながら、来た道を戻る。

「アニエス、我々は外に出る。後はお前の役目だ。」

「了解」

レムリアからの通信を聞きながらも、Bセイバーガンダムは巨大兵器の奥深くに向かいながら、GNビッグキャノン？とGNソード？で内部を破壊していく。

「さてと……最近の私は少し…機嫌が悪いわよ。その鬱憤を晴らさせて貰うわ!」

BセイバーガンダムはGNソード?を持って、左腕に装備されているGNソードビットを射出する。

そして、GNソード?を構えると6基のソードビットはGNソード?に集まり、GNバスターソードを化した。

「トランザム!」

Bセイバーガンダムは赤く発光すると、GNバスターソードとGNビッグキャノン?から強力な粒子ビームが放たれる。

Bセイバーガンダムから放たれる粒子ビームは巨大兵器の壁をぶち抜きながら、突き進んでいく。

「はああああ!」

そのまま、Bセイバーガンダムはバスターソードを動かす。

これは、ダブルオークアンタから受け継いだ武装、ライザーソード。

Bセイバーガンダムはライザーソードを出したまま、機体を動かして、内部から巨大兵器を切り裂いて行く。

Bセイバーガンダムはトランザムの限界時間が近づいたため、ライザーソードをしまい、ソードビットをシールドに戻してビッグキャノン?を放ちながら、撤退を開始した。

「あれは……ライザーソードの……」

トレミーでは巨大兵器の内部から突き出た粒子ビームが見える。

作戦通りに事が進んでいるのであれば、あれはセイバーガンダムのライザーソードである。

ライザーソードが動き、巨大兵器を切り裂いて行くのが、トレミーからは明確に見える。

「どうやら、マイスター達は作戦を完遂したようだな。」

「うん…みたいだね。」

「艦長、内部に侵入していたコマンドガンダム、フォートレスガンダムの脱出を確認しました。」

「セイバーガンダムも脱出を確認しました。」

リコッタと香蘭の報告と崩壊していく巨大兵器を見て、マリアは力を抜きそうになるが、巨大兵器を破壊したとしても、以前としてガントミーの大群はそこに存在している。

「ガンダム各機に通達して、ガンダムはトレミーの防衛に戻りながら、可能な限り敵MSを破壊して……」

「艦長！敵MSが撤退を開始しました。」

マリアが指示を出しているトリコッタの言う通り、ガントミーは撤退を始めている。

巨大兵器から出て来て、トレミーに戻るうとするガンダムには目もくれずに一糸乱れぬ動きで撤退していく。

「…どういう事？」

「さあな……どうする。艦長？」

「引くと言うのなら、無視して構いません。香蘭、もう一度、あの二隻を通信が繋げる？」

「可能です。」

香蘭は再び、二隻と通信を繋ぐ。

「ご協力に感謝します。」

「こちらこそ、助かった。」

「流石はガンダムと言ったところか……」

アルエットとガイウスはマリアにそう言う。

「ありがとうございます。それよりも、この状況をどう思いますか？」

マリアの問いの二人は黙りこむ。

「木星圏から地球圏を狙える兵器を使用した組織は私達でも連邦でも解放戦線でもないのはお二人も分かっているはずです。」

「確かに……俺達にそれだけの力はないな。」

解放戦線にそれだけの力があれば、とつくに連邦に勝利している。

「同感だ。我々、連邦も大量破壊兵器などの製造は連邦法で禁止されている。」

連邦軍はあくまでも、対話をする気のないテロリストなどを牽制するための軍隊の為、武力で威圧する大量破壊兵器の開発を禁止している。

「第4の勢力の可能性があります。一度、私達はお互いの情報を交換する必要があると私は考えます。」

「中立のお前さんは良いが、俺達は連邦の定義するテロリストだ。」

「すでに解放戦線は崩壊している。ここに来たのは、謎の解放戦線のリーダーの指示ではなく、お前たちの意思だろう。この戦闘でお前たちのMSには本艦を守った借りがある。今回は手を出さない事を約束する。」

「決まりですね。近くに私達の基地があります。そこなら、三隻の戦艦も収容出来ますので、そこで会談を行います。」

マリアはそう言い、リコッタと香蘭に基地の宙域図を送った。

「分かった。連邦の基地でないなら、文句はないな。」

「こちらも了解だ。」

二隻はトレミーに続いて、ソレスタルビーイングの基地へと向かっていく。

この時の彼らは地球圏で起きている事態を知ることにはなかった。

「何だ……あれは……」

俺は巨大兵器の一撃を防いで、輸送艦の艦長室で休んでいるとアメリカに至急ブリッジに上がるように言われて、ブリッジに上がるとブリッジのモニターに巨大な構造物が見える。

モニターには全貌が映っていないから、正確な大きさは分からんが、20年前に地球圏に来た超大型のELSと同じくらいか、それ以上の大きさだと推測出来る。

「いつの間に……」

あれだけ大きいとすぐに分かる筈だ。

超大型のELSも木星圏に来た時に地球から補足は出来ていた。

それと同サイズかそれ以上の大きさのアレを見逃すとは考えにく。

今は、あの巨大兵器の監視の為に監視の目は厳しくなっている。

「分かりません。突然、現れたとしか。」

突然だと？

光学迷彩とステルスシステムを使えば、不可能ではないが、あれだけの大きさの物が存在していて、俺の感覚でも分からなかっただと？

木星圏からの粒子ビームを防ぐために精神を極限まで集中していたにも関わらずか？

そう考えると、隠れていたのではなく、突然現れたと考える方が納得がいく。

量子跳躍なら可能だが、あれだけの質量を持った物体を跳躍させる事はソレスタルビーイングでもまだ出来ない。

「中将！構造物の全貌の映像が出ます。」

モニターには巨大な構造物が映し出される。

「これは……城か？」

巨大な構造物を長距離から見て、全貌を確認すると、それは西洋の城の様なものが中央にそびえ立っている。

それを守るかのように城壁の様に俺達が見ていた壁が取り囲み、まるで要塞だな。

「これほどの物を……」

恐らくは、木星圏にあれだけの物を作った連中と同じだろうな、これを作った連中も……

だとすると、とんでもない技術力を持っているな……

冗談だろ……

こういうのを20数年前に旧三国家群も俺達に感じていたんだろうな。

そんな事はどうでも良い。

「アメリカ、巨大兵器を作った奴らの情報は何か分かったのか？」

「いえ……今はまだ……ですが、時期に分かるかと……」

アメリカでも特定出来ない敵か……

流石にコイツはイオリアの爺さんの計画には入っていないんだろうな。

だとしたら、爺さんが何かを残してくれてはいないか……

たく……本当に人類が一つになるまでにどれほどの試練があるんだよ。



## Mission 23 第五のガンダム

巨大兵器を破壊した私達は基地に帰投していた。

連邦軍と解放戦線の戦艦と共に帰還して、今は二人の艦長と会談をしている。

「改めまして、ソレスタルビーイングの多目的輸送艦、プトレマイオスの艦長…マリア・ウォーカーです。」

「アルエット・ルーラー中佐だ。」

アルエットさんはアベルの右腕と言う事で何度か顔を合わせた事がある。

「ガイウスだ。」

解放戦線のアレクサンドリア級の艦長のガイウスさんはそう言う。

やっぱり、空気が思いなあ……

それも仕方がないよね。

連邦と解放戦線は今までは敵同士だったから、そう簡単には受け入れる事は出来ない。

でも、それでも、私の呼びかけに応じてくれた。

「自己紹介も終わったところで、これを見てください。」

私はモニターに基地について、得た情報を出す。

「こいつは……」

「これは私達が巨大兵器の破壊ミッションを行っている時に地球に現れた物です。」

地球に突如、超巨大構造物が現れたと母艦から連絡が来ている。

「大きさは約数万キロはがあると予測されます。」

20年前の超巨大ELSよりも大きい構造物。

「何処の組織だ？連邦でもこれほどの構造物を作るのに数十年はかかるぞ。」

「多分、ソレスタルビーイングでも変わらないと思います。」

巨大兵器はともかく、あれだけの巨大な構造物を作るにはそれこそ、100年近くの時間と労力を使う必要がある。

それは、つまり…私達、ソレスタルビーイングが活動の為にガンダムの開発やテストを極秘裏に行っていた時もこれを作った組織は行動していたと言う事になる。

「それで、こいつらはどこのどいつ何だ？連邦でもなく、ソレスタルビーイングでもなく、無論、解放戦線でもない。」

「分からん。今までにその三勢力以外の勢力は大小確認しているが、

これほどの物を作る勢力は存在していない。」

それはつまり、連邦や私達……ヴェーダの目をも誤魔化せるだけの技術力を持っていると言う事になる。

「それは私達もです。だけど……」

私はこの前の戦闘で入手したマントのMSの映像を出した。

「これは……」

「すでにヴェーダに情報を上げた情報ですが、これは先日、廃棄コロニーの付近での調査で遭遇した所属不明のMSです。この機体はレーダーにも反応しないで、イノベーターでも感知する事が出来ないMSです。」

人が乗っているなら、その脳量子波が感知出来るけど、アニエスはそれを出来ないと言っていた。

「その上、この機体はノーモーションで量子跳躍が可能だと予測出来ます。」

「量子跳躍だと？確か、ソレスタルビーイングの機体でも出来ないと聞いているが？」

「そうです。量子跳躍はオリジナルの太陽炉でのツインドライヴが必須です。現在のガンダムはツインドライヴシステムを搭載していないので、出来ません。出来るのはトレミーと母艦の動力のアザゼルガンダムのみです。」

出力的にはツインドライブと同じだけど、ガンダムにはツインドライブを搭載していないから、量子跳躍が出来ない。

「それに引き換え、この機体の放出しているGN粒子はオリジナルの太陽炉の物ではないですし、粒子量もツインドライブ搭載機の物に遠く及びません。」

「どう言う事だ？オリジナルのツインドライブ搭載機でないと出来ないんだろっ？」

「恐らくは疑似太陽炉でも量子跳躍が可能なシステムを開発した可能性があります。」

ソレスタルビーイングでも出来ない事をこのMSを開発した組織は出来ると言う事になる。

「敵は強大と言う事か……………」

アルエットさんはそう呟く。

「連中の狙いは何だ？」

「分かりません。現在は連邦軍が動いて、この構造物の調査としていると聞いています。」

「まずは、調査隊の報告待ちか……………」

調査隊が何かしらの情報を得てくれると私達も助かる…………

だけど、今まで世界の裏に潜んでいた組織がそう簡単に目的を明か

すとは思えない。

「そうだけど、私達でも出来る事があります。」

「それは？」

「地球圏に戻る事です。ここで議論していても、明確な答えは出ません。情報の交換と共有を終えたのなら、地球圏に戻り、動きがあった時にすぐにでも動けるように準備を整える事です。」

木星圏から地球圏に戻るまでもそれなりに時間がかかるから、事態が急変してから、地球圏に戻ったら手遅れになっている事もあり得るから、今は地球圏に戻る事が先決だと私は思う。

「確かに……」

「だが、俺の船はさっきの戦闘とここまで来るのに相当負担をかけたしまったから、すぐには出せそうにないぜ？」

「そうですね。アレクサンドリア級はここで、整備と補給を終えてからでも構わないと思います。地球圏に戻ってもまともに戦闘出来なかつたら、意味がないですから。」

「良いのか？俺達はテロリストだぞ？」

確かに……

解放戦線は一般的にはテロリスト……だけど……

「構いません。解放戦線も元を正せば、地球……ひいては人類の為に

行動を起こした人達です。やり方を全面的に認める事は出来ませんが、私達には完全に否定する権利はありません。」

起こした行動の規模やそれによる犠牲者は私達、ソレスタルビーイングの方が断然多いから……

「地球の為にここまで来た、ガイウス艦長を私は信じます。」

地球圏から木星圏に単艦で来るのは並大抵の覚悟では来れない。

私達や連邦軍は木星で補給と整備を出来る設備を有しているけど、解放戦線は木星圏には拠点を持っていないから、木星圏に来ても帰れなくなる可能性もあるのに、この人達はここまで来た。

「そうかい……」

「私達は量子跳躍で地球圏に戻ります。」

量子跳躍を使えば、時間はほとんどかからないしね。

「了解した。我々も遅れながら、地球圏に向かう。」

「こっちは、ゆっくりと行かせて貰うとするか……」

今後の方針も決まり、私達はお互いの持っている情報を交換して、会談を終えた。

「ずいぶんとまあ……おかしな光景もあつたもんだな。」

基地に戻つて艦長達が会談を行っている間、待機している。

待機室には私達ソレスタルビーイング勢だけでなく、連邦軍のパイロットや解放戦線のパイロットもいる。

確かにロックオンの言う通り、おかしな光景かも知れない。

「まあ、俺達は今まで敵同士だつからな。」

解放戦線のパイロットがそう言う。

「私達は中立だから、どちらの敵でもなければ、味方でもないけどね。」

私達は特定の国家に味方をする訳じゃない。

もつとも、結果として、連邦政府に有利に働くように動く事が多いのは否定できないけどね。

一応は連邦が行き過ぎた武力行使をすれば、私達が武力介入をすると言う話は聞いているけど、連邦は私達が武力介入を必要とする行動を取っていないから、私達が連邦と交戦したこと今のところ無い。

「それにしても……」

連邦軍人の中でガタイの良い、目に見えて軍人タイプな方が私を見て言う。

「ガンダムのパイロットが君のように若い女の子が乗っていたのは流石に予想外だったな。」

「まあ…私はイノベーターだしね。」

「ほう……お前もね……」

壁際で腕を組んでいたもう一人の連邦軍人がそう言う。

この感じ……彼も私と同じイノベーター……

「そっちだって、同じだろ？」

ロックオンはそう言い、連邦の女の人を見る。

片方は軍人には見えないお嬢様の様な人と、もう片方は私より少し年上そうな、多分…私達を運んだ可変機のパイロットの人だろう。

「私ですか？」

どこかで見た事があるような……

「彼女はあのアベル・ウォーカー中将のご令嬢ですよ。そこいらの若い方と同じにして貰っては困りますわ。」

お嬢様の方がそう言う。

アベル・ウォーカー……アリスアのお墓参りのすれ違った化け物の

……



「つまり、うちの艦長の娘って事が……良く似てるな。」

「確かに……」

そう言えば、あの時はアベル・ウォーカーに気を取られていたけど、一緒に居たように思う。

「父からも良く言われます。」

言われてみれば、艦長に似ていると言われれば似ているかも知れない。

「それよりもさ……これから、どうするのよ。私達？」

地球圏には巨大な構造物が出現したって話だし……

「さあな……恐らくは一度、地球圏に戻り、事態を把握すると言ったところか……」

今まで、会話に参加をする気は無かったレムリアがそう言う。

「巨大な構造物ですか……ずいぶんとクレイジーな展開ですね。」

本当にそうよ。

私達はアレを作った連中を戦う羽目になりそうだし……

最悪よ……連中のMSは性能こそは大した事はないけど、数が異常過ぎる。

さっきの戦闘でも1000機近い数が出て来てたしさ……

一体、どれだけの戦力を有しているのか分かったもんじゃない。

それを相手にしないといけないのよね……

「だが、連中の目的が分からない以上、俺達が戦うしかない。」

「だな…俺達の立場としても、無視は出来そうにないしな。」

こっちはガンダムが4機しかないとのにさ……

本当に最悪……

木星に現れたと言う巨大兵器とやらの破壊が終わり、どうやらソレスタルビーイングの基地に来ているようだ。

俺は母艦から出て、基地を適当に歩いている。

怪我は大した事はないが、じっとしている気にはなれなかった。

テンペストも大破して部品が足りずに直す事が出来ないらしい。

「メデイー！」

俺が歩いていると声をかけられる。

何で…俺の名前を……それにこの声……

「良かった。見つかった……」

母さんは俺のところによって来る。

「何で……」

「メデイが解放戦線に居た事はお父さんから聞いてるから……」

あの男か……

「それで？俺に何の用だよ。」

「うん……久しぶりだと思ってね。」

確かに……もう数年も家に帰ってないからな……

「お父さんと戦ったんだってね。」

「俺はアイツを父親だと認めた訳じゃない。」

俺はアイツのせいで英雄の息子として見続けられた。

誰も俺を俺として見てくれた事はない。

「メデイ……」

「俺はイノベーターでも無く、人間でも無く半端な存在だ。」

結局のところ、俺は半端な存在だ。

守ると決めたのに守る事も出来なかった。

アイツに手も足も出なかった。

「それは違うよ…メデイ…メデイは半端な存在じゃないよ。」

「そんな気休めは良い……」

母さんが何を言おうと、俺が人間とイノベーターのハーフでどちらでも無い存在。

「気休めじゃないよ。メデイって名前はね……お父さんがつけてくれたんだよ。」

あの男が？

「メデイって名前にはね。人間とイノベーターのかけ橋になって欲しいからそう名づけたんだよ。メデイは人間の私とイノベーターのお父さんの間に初めて生まれたハーフィノベーターなんだよ。だから、メデイには人間とイノベーターとの間に入って、両者が本当の意味で分かり合うために……」

俺の名前にそんな意味が……

「メデイがどんな人生を選ぼうとそれはメデイの人生だから、私も

お父さんも止めはしない……だけど、メデイの名前の意味を忘れな  
いでよ。」

母さんはそう言い歩いて行く。

俺の名前……その意味……

「どうしたんだい。そんなしょぼい顔をして……」

母さんに俺の名前の由来と聞いて、それからどう歩いたのか覚えて  
ない。

適当に歩いていると、基地の格納庫で出ている。

どうやら、ソレスタルビーイングの技術者の様だけど、どこかで……

「久しぶりだね。メデイ君」

どうやら、向こうは俺の事を知っているみたいだ。

「俺を知ってるのか？」

「まあね。君が生まれた時から知ってるよ。」

生まれた時から……

「私はアベルとは長いからね。」

あの男と？

「そうか……それよりも……こいつは？」

この格納庫にMSが置いてある。

格納庫が暗いから良くは見えないが……

「良くぞ、聞いてくれました！」

技術者の人はそう言い、ライトをつけた。

「ガンダム……」

格納庫には一機の黒いガンダムが置かれていた。

見た事の無い機体だ。

ぱっと見だが、固定の武装は背部に8枚の羽根の様な物が付いている以外は普通のガンダムの様に見える。

「そう……GNT-0006 ファントムガンダム……それがこの機体の名前だよ。」

「ファントムガンダム……」

新しいガンダムか……

「この機体はね……君の為のガンダムなんだよ。」

「俺の？」

どう言う事だ……

何で、ソレスタルビーイングが俺のガンダムを作ってたんだ？

「傍迷惑な話だよねえ……TGNドライブはようやく7基目が完成したってのに、その中の一つを私用で使うなんてさ……」

「私用？話が見えないな。」

「この機体はね。アベルが君の為に私に作らせたんだよ。」

あの男が……俺に？

「君がこの力ガンダムが必要な時に使えるようになってさ……私はそのお陰でここ数年は地球と木星を言ったり来たりだよ。」

「アンタは……何もんだ？」

幾ら、アイツの命令でもガンダムを作ったりはしないぜ？

「私はジエシカって言うの。まあ、アベルとは幼馴染でアベルの専属のメカニックってところだよ。」

あの男の専属のメカニック……

「そんで…メデイ君はこのガンダムで何をしたいの？」

俺のしたい事……

「アベルはね……ガンダムで世界を変えたよ。」

世界……

「俺は……」

俺はあの男を超える……

仲間を守る……

「君はどうしたいんだい。メディ・ウオーカー君」

「俺はアイツを超える。」

俺はそのためにガンダムで戦う。

聞くところによれば、地球ではとんでもない事が起こっているらしい。

ならば……俺はこのガンダムで戦う。

「なあ……ジェシカさん……頼めるか？」

「何をだい？」

「この機体の色を……俺の……養親父の色に……赤い色に出来ないか？」

今度は当てつけじゃない。



赤い機体で……俺は超えてやる……バット・スカーレットじゃなく  
て、メデイ・ウォーカーとしてあの糞親父を超えてやる。

ガンダムと共に……

## Mission 23 第五のガンダム（後書き）

### 新MS設定

GNT-0006 『ファントムガンダム』

CBが開発したTGNドライヴを搭載した新型のガンダム。

アベルの依頼でジェシカがメデイ専用機として調整がされている。

アベルが乗っていたアルヒス系統の流れを継いでおり、ビット兵器によるオールレンジ攻撃と高い隠密性能を持っている。

他のガンダムは強化Eカーボンの下に相転移装甲の二重装甲だが、本機は相転移装甲の下に強化Eカーボンの二重装甲になっており、相転移装甲は表面の色を相転移することにより機体のカラーをパイロットの任意で変える事が可能となっており、光学迷彩を使う事無く、周囲に同化することが可能となっている。

第6世代の中でも開発が遅れていたため、基本性能は他の第6世代のガンダムよりも高性能となっている。

### 武装

・GNビームサイズ？

アルヒス系統のビームサイズの流れをくんでいる。

先端にはビーム刃の発生装置とGN粒子の放出させるスラスタが搭載されており、加速して攻撃することが可能。

また、ビーム刃をビームチャクラムとして放つ事も可能。

・GNツインビームガン

両腕に内蔵されているビームガン

片方の二門内蔵されており、威力はビームライフルに匹敵する。

・GNビット

背部に8基装備している。

今までのビットとは違い、ガンダムアルケミーに装備されていたタイプのビットを大型化し、背部に8基を羽根の様に装備している。

使用しない時はスラスターとして使われる。

- ・GNビームサーベル

両腕に内蔵されているビームサーベルで他のガンダムと共通の物を使用している。

- ・GNバルカン

頭部に二門装備されている。

- ・GNビームシールド

両腕の甲に発生装置が装備されている。



## Mission 24 失われた記憶

地球圏に突如、現れた巨大な構造物……その中央にそびえる巨大な城の中にそれはあった。

巨大なコンピュータとも取れるそれは、特定の人物なら分かる。

それはソレスタルビーイングの根源とも言える大型の自立演算コンピュータ『ヴェーダ』

「それで…ヴェーダ。君はどうするつもりかな？」

その機械の前で仮面をつけた者がそう言う。

「人類は力のみを求めて、間違った進化の道を進んだ……」

その部屋には仮面の男しかいない。

しかし、別の人物の声が部屋に響く。

「そうか…では、ヴェーダ……予定通りに計画を進めれば良いのだな？」

仮面の男がそう言う。

仮面の男が話している相手…それこそが200年以上前にイオリアが仲間とともに作り上げたすべてのヴェーダのターミナルユニットの元となったオリジナルヴェーダ。

オリジナルヴェーダにはイオリアの頭脳を結集して作られた自立学習型AIが搭載されている。

それにより、オリジナルヴェーダは自分で考え、進化して来た。

今まで彼らがヴェーダの情報網に引つかからなかったのは、このオリジナルヴェーダの力があつたからだ。

オリジナルヴェーダはすべてのヴェーダのターミナルユニットの情報管理、統括している。

その力を使えば、自分達に関する情報を隠蔽することなど、造作もない。

「ああ……まずは手始めに間違つた進化を辿りし血を行く者からだ。」

「成程……ナンバーズを動かすか？」

「それには及ばん……回収した紛い物を使えば、事足りる。」

オリジナルヴェーダがそう言い、仮面の男は思いだす。

数日前に極秘裏に回収した物を……

「成程……貴方も酷な事を考える。」

「間違つた進化を進もうとする者達に対してそれ相応の罰を与えるだけだ。」

オリジナルヴェーダは無機質な言葉でそう言う。

「まあ…良い。ナンバーズはガンダムにとって置けば良いからな。」  
仮面の男はそう言い、部屋から出て行く。

「イオリア…どうやら、人は間違った道を進んでしまったようだ…だから、私は決めた。人類を一度、リセットする必要がある。そして、新しい世界ではこの私が人類を正しい進化へと導こう。」  
オリジナルヴェーダは誰もいなくなった部屋でそう言った。

「ジェシカさん…ガンダムの調整はどうですか？」

私がファントムの調整をしているとメディ君が状況を確認に来る。

これで何回目かな…

自分の機体が気になるのは分かるけど、そう何度も来られてもなあ…

こう言うところはアベルとそっくりだね…

アベルも機体の調整中は落ち着かなかったしね。

と言うか、アベルも素直じゃないなあ…



息子が心配ならガンダムを与えないで、そう言えば良いのに……

まあ…アベルはいい加減で適当だけど、変なところで頑固だったからなあ……

その頑固が活かされる事は今の今までも無かったけどさ……

その上、私を息子のお守に押し付けるとかさ……

「どうなんだよ？」

「もう少しかかるよ。ようやく、君の戦闘データが入手出来たから、それを機体に反映させてるところだよ。」

「そうか……それでさ…アイツは……何で俺にガンダムを？」

アイツね……

今の今まで一方的に恨んでて、複雑なんだろうなあ……

まあ…アベルはあんなんだから、良く誤解されがちなんだけどね。

「知らないよ。そう言う事は本人に聞けば？」

私は息子が力が必要な時の為に用意しておいたと考えているけど、あのアベルだからねえ……

「ああ……地球に戻ったら、一度帰って聞いてみる。」

「そうしなよ。」

もっとも、アベルの性格を考えると素直に本音を言うとは思えないけどねえ……

アイツはマリアちゃんやシャロンちゃんには素直だけど、息子には素直じゃないからねえ……

そこは男の子同士、複雑なのかねえ……

私には分からない領域の問題だね。

「ああ…調整を頼む。」

メデイ君はそう言い、格納庫から出て行く。

「親父！例のMSがこっちに近づいて来るぜ！」

ソレスタルビーイングの基地に大量のガントミーが接近している事を基地内に停泊していたアレクサンドリア級が補足していた。

「数は？」

「大量だ。」

ガイウスが艦長席に付き、敵戦力を把握しようとする、部下がそう言う。

事実、ガントミーの数は圧倒的な数が接近している。

「どうします？連中は迷わずこっちに来てますぜ？」

基地は当然のことながら、周囲からばれない様にカモフラージュしている。

だから、ガントミーの大群は基地を目指している訳ではなく、ただ単に基地を目指している訳ではなく、基地と方向が同じだけなのかも知れない。

しかし、ガイウスはそれを希望的憶測と判断し、敵は基地を目指していると仮定して判断を下す。

「すぐに基地から離脱する。ガンダムは出せるか？」

ガイウスがそう言うのとガンダムを搬送した格納庫のジェシカと通信が繋がる。

「問題ないよ。強いて言えば、メデイ君がガンダムの操縦に慣れてないってところかな？」

ガンダムの操縦系統は連邦のMSとは違うため、メデイはまだ慣れていない。

「親父……俺は行ける。」

格納庫で待機していたメデイがガイウスにそう言う。

ガイウスとメデイは暫く、睨み合い……やがて、ガイウスは決断を下

す。

「……分かった。バット……いや……もう、メデイと言うべきか……お前に任せる。」

「ああ！了解した。」

メデイはそう言い、通信を切り父より与えられたガンダムに向かう。

「野郎ども！メデイが道を切り開く！俺達はその道から離脱し、地球に向かう！」

「おう！」

アレクサンドリア級はソレスタルビーイングの基地から出ると、迫るガントミーに対し、先制の粒子ビームを放つ。

「MSを出せ！一点突破だ！」

アレクサンドリア級はGNフィールドを展開しつつ、MSを出撃させる。

「バット……お前のガンダムが要だ。機体してるぜ？」

出撃し、ジオナサンがメデイにそう言っているとメデイはむずかゆくなる。

今まで、父への当てつけで名乗っていた名前だが……いざ、父と向き合うと決めてからは妙に恥ずかしく感じる。

「よせよ……」

「何だよ。気につてたんじゃないのか？バット」

ジオナサンはメデイをからかうように偽名で呼ぶ。

「たく……」

「冗談はここまでだ……死ぬなよ。メデイ……」

「ああ……お前もな……ジオナサン」

メデイはそう言い、ガントミーに向かっていく。

ファントムガンダムはGNビームサイズ？でガントミーを何機も同時に薙ぎ払う。

「GN-Xともテンペストとも反応速度が違う……これがガンダムの力が……」

メデイはガンダムの性能を感じていると、ガントミーがマシンガンやバズーカで攻撃して来て、ファントムはビームシールドで防ぐ。

「行ける……このガンダムなら！」

ファントムガンダムはGNビットを射出して、ガントミーを破壊していく。

「すげえな……」

ジヨナサンのGN-X?はビームライフルでガントミーを破壊し、  
メデイとファントムガンダムの戦闘を見てそう言う。

「確かに……流石、俺達のエースとガンダムだ。」

友軍のティエレンのパイロットがそう言う。

「俺達は楽出来そうだな。」

GN-X?のパイロットがGNランスでガントミーを破壊してそう  
言う。

「馬鹿言ってるなよ。俺達も負けてられないだろ?」

ジヨナサンはそう言い、ビームサーベルを抜く。

「アイツ一人に良いカッコさせるかよ。」

GN-X?はビームサーベルでガントミーを切り裂く。

「悪いが……このまま押し通させて貰うぞ!」

ファントムガンダムはGNビームサイズ?でガントミーを薙ぎ払い、  
道を切り開いていると、粒子ビームが飛んで来て、ファントムはビ  
ームシールドで防ぐ。

「粒子ビームだと!新手か!」

ガントミーに粒子ビーム兵器は搭載されていない。

粒子ビームが放たれたと言う事は新しい機体が出て来たともメデイは判断した。

「あいつか……なっ！あの機体は……」

メデイは攻撃して来た機体を見つけて言葉を失う。

メデイにはその機体に見覚えがあり、見間違う事に無い機体だったからだ。

「ルシオラ？」

メデイは無意識のうちにその機体に乗っている筈の少女の名を口にしていた。

その機体は数日前の連邦軍との戦闘でアベルに敗れて行方知れずだったガディアスMk-?。

アベルとの戦闘で破壊された左腕にはガデツサ？のメガランチャー？が腕に直接つけられており、シールドスラスタは新しい物が、左足は若干、装甲が増設されている。

「ルシオラ！」

メデイはすぐにガディアスMk-?に通信を繋ぎルシオラの名を叫ぶ。

「通信だと？それになぜ、ガンダムのパイロットが私の名を……」

通信からは間違えようの無い、ルシオラの声が聞こえ、メデイはル

シオラが言っている事などは頭に入っていなかった。

「ルシオラ！生きてたんだな……」

「何を言っている……貴様はなぜ、私の名を知っている。」

しかし、ルシオラからの返答はメディの予測をはるかに上回っていた。

「何言ってるんだ……俺だ。バットだ。ガンダムに乗っているが、仲間のを忘れたのかよ？」

「仲間？何を言っている。私にガンダムに乗る仲間など存在しない。」

ルシオラはそう言いメディは更に混乱する。

「ふざけてんのか？今はそんな時ではないんだぞ。」

「ああ……そうだな。今はそんな時では無かったな。」

ルシオラはそう言い、ガディアスMK-？はファントムガンダムに左腕のGNメガランチャーを構えて放つ。

「今は戦いの時だ！」

ファントムはガディアスMK-？の攻撃をかわす。

「ルシオラ！止める！」



「断る！私はガンダムを破壊する！私はそのための存在！」

ガディアスは右腕のGNビームガトリングでファントムを攻撃し、ファントムはビームシールドで防ぎながら、交代する。

「どうしたんだよ！」

「今更、敵の言葉など聞く耳持たん！」

ガディアスMK-？はGNビームトマホークを持ち、斬りかかり、ファントムはGNビームサイズ？で受け止めた。

「俺とお前は敵じゃない！そうだろ！」

「違う！ガンダムは私の敵だ！」

ガディアスMK-？はGNメガランチャー？でファントムを殴り飛ばして、ビームガトリングで追撃する。

「ルシオラ！」

「終わりだ！ガンダム！」

ガディアスMK-？はGNメガランチャー？の先端からビームソードを出して、ファントムに斬りかかる。

「メデイ！」

ジヨナサンのGN-X？がガディアスMK-？に横から突っ込み、ガディアスMK-？はGN-？と共に軌道を反らされる。

「ジオナサン！」

「メデイ：お前は母艦に帰投しろ！お前のお陰でアレクサンドリアは逃げ切る事が出来る。」

メデイのファントムガンダムにガントミーの攻撃が集中していたお陰で、アレクサンドリア級はすでに安全圏まで離脱しており、ファントムの機動力なら、ガントミーを振り切り、帰投することも可能だ。

しかし、ガディアスMK-?を振り切る事はファントムでも出来ない。

「お前はどつする気だ？」

「俺か？俺はルシオラを口説いて後から二人で戻るよ。」

「ジオナサン……」

「俺はお前よりも、女の扱いに慣れてんだぜ……行けよ。」

メデイは軽く言う、ジオナサンの真意を理解していた。

ジオナサンは自分を行かせて、ここで足止めをするつもりなのだ

……

ファントムがアレクサンドリアに帰投するまでの時間を稼げば、アレクサンドリアはトランザム航行でガディアスMK-?を振り切る事が出来る。

しかし、それはジョナサンをこの場において行く事となる。

そうならば、その先は死しか待っていない。

「お前……」

「超えるんだろ？最強のイノベーターをよ……お前なら出来る。なんせ、俺の親友なんだぜ？」

「……分かった。約束する。俺は超えてやる……今度こそ……最強のイノベーターの糞親父に！」

メデイはそう言い、トランザムを起動させると、アレクサンドリアへと帰投した。

「親父……」

アレクサンドリアに帰還したメデイはブリッジに通信を繋ぐ。

「……何も言うな……俺達は地球に帰投する。今、戻れば、ジョナサンの覚悟を侮辱する。」

「ああ……分かってる……分かってるさ……」

メデイも頭では分かっている。

誰かが残って犠牲にならなければ、全滅すると言っ事も……

頭では理解出来ても、心が納得出来ない。

「ジョナサン……俺は強くなる。強くなってルシオラを取り戻す。そして、糞親父を超える……」

メデイは残して来た友に対してそう堅く誓った。

「邪魔をするな！」

ガディアスMk-?は取りついているジョナサンのGN-X?を蹴り飛ばす。

「ぐっ……そうカッコしなさんなよ……せっかくの美人が台無しだ。」

「戯言を……」

ガディアスMk-?はビームトマホークで切りかかり、GN-X?は何とか、ビームサーベルで受け止めるも機体の出力の差で押されている。

「なあ……どうしちゃったか知らないけどよ……そう簡単に……俺達を……バットを忘れる事が出来るのかよ！」

「何を……私は作られた存在……仲間など！」

「それでも！バットはお前を大切に思っていた！お前を守ろうとしていた！」

「何を……」

……お前が何と言おうと俺が守る。

「何だ…今は……」

ルシオラは連邦との決戦の直前にメディ…バットに言われた言葉がフラッシュバックする。

「ルシオラ…?」

「私は……私は！私はガンダムを破壊する！貴様もガンダムか！」

ガディアスMk-?は無茶苦茶にビームトマホークを振り回す。

「くそ！無茶苦茶だな！おい！」

「私はあああああ！」

ガディアスMk-?のGNメガランチャーからビームソードを出して、斬りかかる。

「悪い……メディ……約束は守れそうにないわ……」

ガディアスMk-?の一撃はGN-X?を貫いた。

そして、GN-X?は爆発する。

「ハアハアハア……私は……」

ルシオラが息を整えるとガントミーと共に宙域を離れて行った。

## Mission 25 ナンバース

「やはり、紛い物ではこれが限界か……」

巨大構造物の中で、仮面の男はチェス盤の上の黒い駒を白い駒を倒す。

「まあ…これで、ポーンは封じたも同然か……」

「次はどうでる？」

オリジナルヴェーダは仮面の男にそう言う。

「まだ、キングを取るには早い……次はナイト……」

「ソレスタルビーイングか……」

「ああ…たった4機とは言え、ガンダム力は強大……今の内に潰しておきたい。今回はナンバースを投入する。」

ナンバース……それこそ、彼らの切り札。

「ほう……ナンバースを投入するか……」

「01と07を投入する。ローゼンクローイツァーとパラディオンは完成している。性能テストも兼ねて実戦に投入する。」

「成程……良かるう。」

オリジナルヴェーダがそう言い、仮面の男は盤上の黒いナイトの駒を倒す。

「映像で見るよりもデカイな……」

「うん……」

地球圏に戻ったトレミーは地球圏に突如、現れた巨大構造物に接近していた。

巨大な構造物とトレミーは比較にならない程の大きさに差があり、遠くから見るとトレミーが豆粒のようにも見える。

「香蘭、リコッタ…出来るだけ、この構造物をスキャンしておいて…後で役に立つかも知れないから……」

「艦長！巨大構造物からMSです！」

モニターには大量のガントミーの機影が映し出されている。

「……あのMS……」

「巨大兵器を守って奴らだぜ……」

「やっぱり、二つを作ったのは同じ組織って事だね……ガンダムを

出して。すぐに現宙域を離脱します。」

トレミーはガンダムを出撃させると、GNフィールドを展開して、戦闘に入る。

「地球圏に戻った途端、これかよ……」

「同感……本当に最悪よ。」

「無駄口は後だ。」

出撃したガンダム4機はトレミーに接近するガントミーの迎撃を開始する。

「先制攻撃をさせて貰うぜ！」

コマンドガンダムはGNスナイパーライフル？でガントミーを狙撃して撃ち落とす。

「僕も行かせて貰いますよ。」

飛行形態のアクセルガンダムはGNミサイルを放ち、ガントミーの大群にGNキャノンとGNサブマシンガンを放ちながら、突っ込んでいく。

「あれだけ落としたと言うのにこれほどの数を用意しているのか……」

フォートレスガンダムはGNガトリングキャノン？でガントミーを



「掃っていく。」

「この！鬱陶しいのよ！アンタ達は！」

セイバーガンダムは装備していたザンライザーのGNバスターソード？を両手に持ち、ガントミーを切り裂く。

「成程……あれがガンダムか……機体の性能だけでなく、マイスターの腕も良いようだ。」

その戦闘を構造物から見ている二機のMSがいた。

白と基調とし、右手には大型のランス「グングニール」を持ち、左腕には円形状のシールドを装備している。

もう一機は赤を基調とし、右手に真っ赤で身丈程の長剣「レーヴァテイン」を装備し、右肩には薔薇の刻印がついている。

どちらも、量産性重要視したガントミーとは正反対の凝った外装をし、西洋の騎士の甲冑を身に包んでいるようにも見える、頭部はガンダムと同じツインアイを採用している。

「確かに……これなら、我らナンバーズを投入するのも理解出来る。無人機では荷が重いか……」

赤いMS……ローゼンクロイツァーのパイロットのローズ・ローゼンハガントミーとガンダムとの戦闘を見てそう言う。

「そつでなければ、我々が戦場に出向いた意味がない。」

白いMS…パラディオンのパイロットのユーク・テンブルが楽しそうにそう言う。

「では…行こうか…戦争をしにな！」

二機は構造物から、ガンダムが交戦している戦場と向かっていく。

「艦長！敵の増援です！数…二機です！」

「二機だけ？」

「どついつつもりだ？」

敵の新たな増援が二機だけな事にトレミーのクルーは不信に思う。

今までの敵の戦術はガントミーによる圧倒的な物量作戦のため、増援が二機なのは今までとは違う。

「映像です。」

トレミーのメインモニターには二機のMS、ローゼンクロイツァーとパラディオンが映し出される。

「新型？それにあのGN粒子は…」

新型と思われる二機だが、その驚くべきところは外見だけじゃない。

その放出されているGN粒子にもあった。

二機から放出されているGN粒子は疑似GNドライブから放出されている物ではなく、ガンダムに搭載されているオリジナルのGNドライブと同じ色をしていた。

そして、現在オリジナルのGNドライブの製造方法はソレスタルビーイングの独占技術だから、自分達以外の陣営が保有している筈が無かった筈だが、現にこの二機はオリジナルのGNドライブを搭載しているのは明らかだった。

「そのあの粒子量は……」

二機から放出されているGN粒子の量はマリアらが知っているよりも遥かに多い。

まるで、ツインドライブを搭載しているかのように……

事実、この二機にはツインドライブシステムが搭載されている。

「ローズ…私はイノベーターが乗る青いガンダムと戦う。」

「好きにしる…」

ユーグはそう言い機体をセイバーガンダムの方に向ける。

「何……あのMSは……」

セイバーガンダムは向かって来るパラディオンにGNソード？のライフルモードを放つ。

「甘いな」

パラディオンはシールドで粒子ビームを受け止めると、シールドの表面がスライドして複数の砲門が見える。

「まずは…小手調べだ。」

シールドから、無数の粒子ビームが放たれて、セイバーガンダムを襲う。

「何なのよ!」

セイバーガンダムは粒子ビームの隙間を縫うように回避した。

「良い反応だ!それでこそ戦い甲斐があると言つものだ!」

パラディオンはグングニールを高速で回転させて、セイバーガンダムに突き出す。

セイバーガンダムはシールドで受け止めて、距離を取るとGNソード?の粒子ビームで応戦するが、パラディオンはかわして、グングニールの付いている銃口から粒子ビームを放つ。

「この機体…強い……」

セイバーガンダムはシールドで防ごうとするが、先程の一撃ですでにシールドに輝が入っており、シールドとしての効果を発揮すること無く、破壊される。

「さあ！どうする！ガンダム！」

「最悪！」

パラディオンはグングニールを突き出して、セイバーガンダムはGNバスターソード？を抜いて受け止めようとするが、バスターソード？はグングニールに砕かれて、そのままセイバーガンダムの右肩に突き刺さる。

セイバーガンダムの右肩はそのまま、グングニールが突き刺さり、破壊される。

セイバーガンダムは腰のGNソード？のライフルモードでパラディオンを牽制して後退する。

「あれか……」

「新手か！」

フォートレスガンダムは接近してくるローゼンクロイツァーにGNキャノン放つが、ローゼンクロイツァーは回避する。

「その程度の砲撃がこの私に通用すると思うな！」

ローゼンクロイツァーは持っていた真っ赤な長剣「レーヴァティン」を振つ。

GN粒子でコーティングされているレーヴァティンをGNフィールドで防ぐ事は出来ない判断して、フォートレスガンダムはGNガ

トリングキャノン？の先端からビームソードを出して受け止める。

「良い判断だ……流石は同胞と言ったところか……」

「何だ……このMSのパイロットは……」

フォートレスガンダムは拡散ビーム砲を放ち、距離を取ろうとするが、ローゼンクロイツァーはレーヴァティンを盾代わりとして、攻撃を防ぎながら、フォートレスガンダムに斬りかかる。

「その様な逃げの一手など、私の剣で一捻りにしてくれるわ！」

「まだだ！」

フォートレスガンダムはローゼンクロイツァーの一撃を紙一重でかわすが、完全にかわしきれずに足に掠り、足の装甲にローゼンクロイツァーのレーヴァティンの後が残る。

「良くぞかわした！しかし…安心するのはまだ早い！」

ローゼンクロイツァーはフォートレスガンダムとは距離があるが、レーヴァティンを振うとレーヴァティンの刃は幾つもの刃に分かれて、フォートレスガンダムへと向かう。

複数の刃と化したレーヴァティンの刃は縦横無人に動き、フォートレスガンダムを襲う。

「くっ！」

フォートレスガンダムはGNフィールドを展開するが、それも一時

的な時間稼ぎでしかなく、レーヴァテインの刃はフォートレスガンダムを切り刻んで行く。

「このままでは……」

「言った筈だ！逃げの一手など私の剣で一捻りにすると！」

ローゼンクロイツァーは分散化して事で細身の剣となっていたレーヴァテインでフォートレスガンダムにきりかかり、フォートレスガンダムのGNガトリングキャノン？を切り裂いた。

「所詮はこの程度か…ガンダム！」

「ナンバーズ相手に中々粘るな……」

巨大構造物の中で仮面の男は戦況を見て素直に関心していた。

「手間どっているようだな。」

「相手はガンダムだ。この程度の手間は想定範囲無いだ。それよりも、ソレスタルビーイングを完全に仕留める。力を貸してくれないかな？」

「承知した。」

オリジナルヴェーダが仮面の男の要請に答えると、オリジナルヴェーダの本体が稼働し出す。

そして、同時刻、それは起きた。

「スメラギさん！ヴェーダが！」

光学迷彩で姿を隠していた外宇宙航行母艦「ソレスタルビーイング」に置かれているヴェーダの本体でそれは起きていた。

「どうしたの？フェルト、ミレイナ？」

「ヴェーダに何者かが外部からハッキングを行っています！」

「ハッキングが止まりません！」

フェルトとミレイナが状況をスメラギに伝える。

「ヴェーダが？」

ヴェーダは世界最高峰の大型自立演算型の量子コンピュータ。

それに対して、ハッキングを行うのは至難の業でそれを管理しているソレスタルビーイングの後方支援要員はフェルトやミレイナをはじめとして、優秀な人員ばかりだ。

それに対しハッキングを行うのは神業で事実上、不可能とも言えるが、スメラギは過去の出来事からもヴェーダは絶対的で無い事を知っている。

「フェルト達は、出来るだけ時間を稼いで…ミレイナは重要なデータを別の端末にバックアップをお願い。」



スメラギの指示が意味するのは、ヴェーダが情報戦において敗北すると言っ事……

ヴェーダの情報戦における絶対的な優位を知っているソレスタルビーイングの構成員達はその指示に驚くがすぐに言われた通りの行動を起こす。

「今すぐに本艦は光学迷彩を維持しつつ、現宙域を離脱します。」

ヴェーダのシステムが落とされた場合、次に考えられる手としては、この母艦を強襲してヴェーダの本体を奪うと言っ可能性。

トレミーが出払い、支援要員のライルやアレルヤは地上で待機しており、現在、この船には戦闘能力は皆無なため、MS一機ですらまともに防衛出来ないため、敵に位置を特定される前に宙域を離脱し、隠れるという判断を取った。

「艦長！ヴェーダからのバックアップが！」

戦闘を行っていた、トレミーではヴェーダからのバックアップが途切れていた。

以前にも同じ事が起きていたためにヴェーダからのバックアップが途切れた時の対処として、途切れた瞬間にヴェーダとリンクしていないシステムがガンダムとトレミーには組み込まれていたために、混乱は起きなかったが、ヴェーダとのバックアップが途切れたと言っ事はヴェーダの本体に何か起きたと言っ事でもある。

「うるたえないで！ガンダム各機はトレミーの防衛に！」

「そうは行ってもな！」

コマンドガンダムはビームマグナムでガントミーを何機も同時に破壊する。

「敵機接近！敵機接近！」

「またかよ！」

コマンドガンダムはビームマグナムのカートリッジを装填して、接近して来るガントミーを破壊する。

「流石に……これは……」

アクセルガンダムは何とか、トレミーの防衛に付けたが、ガントミーの数が多く攻撃を防いで僅かな隙で反撃を行うが、数が多過ぎるため、焼け石に水だった。

「……総員に告げます。」

戦闘が続く中、マリアは決断する。

「総員は今すぐに小型艇へと向かって下さい。」

「……どういふ事？」

「本艦を破棄して現宙域から離脱します。」

マリアの言葉にクルーは驚く。

マリアの決断は母艦を捨てると言う事……

クルーにとって家にも等しいトレミーを捨てるマリアは判断した。

「このまま戦っても、無事に離脱出来る保障は無いから、トレミーのツインドライブを暴走させて、自爆させます。私達とガンダムはその爆発に紛れて、離脱します。香蘭、リコッタ……ガンダム各機に伝えて、ガンダム各機は爆発に紛れて、独自の判断で離脱するようにと……マイスターはTGNドライブとガンダムと、自分の命を最優先にするようにと……」

「……了解しました。」

香蘭とリコッタは反論することが出来ずに、マイスターにそれを伝える。

「ラッセはツインドライブを暴走させて、自爆するようにセットをお願いします。リズは先に格納庫でミリシアとともに脱出用の小型艇の準備をお願いします。」

「分かった。」

「……了解。」

マリアは指示を出し終わると、俯きながら、一息ついた。

「みんな……私達は生き残るよ。例え、トレミーを犠牲にしても……誰一人かける事無く……マスターもいつかきつと……また、揃うから……その時まで！」

「ウソでしょ……」

パラディオンと交戦しながら、アニエスはトレミーからの通信を聞いていた。

「どうした！ガンダム！動きが鈍っているぞ！」

パラディオンの粒子ビームをセイバーガンダムはGNソードビットでGNフィールドを形成して防ぐ。

「艦長からの指示です……マスターはTGNドライブとガンダムと自分の命を最優先にするようにとも……」

「了解……」

セイバーガンダムはGNソードビットをパラディオンに差し向けて、GNソード？のライフルモードで牽制する。

「小賢しいな！」

パラディオンはグングニールでソードビットを破壊していく。

「まだ……まだよ……まだ持たせる！」

セイバーガンダムはトランザムを使い、ありったけの火力でパラディオンを牽制する。

「これで終わりにさせて貰うぞ！ガンダム！」

パラディオンはグングニールを構えて、セイバーガンダムに突進する。

グングニールがセイバーガンダムを捉える前にトレミーが大量のGN粒子をばら撒き爆発した。

「何だ…母艦が自爆したのか？」

大量のGN粒子はパラディオンやローゼンクロイツァーの視界を遮る。

「くっ……ガンダムは？」

視界がクリアになり、ユージュはセイバーガンダムを探すがすでにそこにセイバーガンダムはいなかった。

「逃げたか……」

「まあ良いだろう。こちらの目的は果たした。」

「そうか……ならば、帰投する。」

パラディオンはセイバーガンダムを追撃することなく、巨大構造物へと帰投して行った。

「親父…地球圏に着きましたぜ。」

木星圏から辛くも離脱した、アレクサンドリアはトラブルも無く、地球圏に戻っていた。

「静かだな……」

ガイウスは長年の感から、何か意味知れぬ静けさを地球圏から感じていた。

「親父！前方のMSだ……こいつは…ガンダムだ！」

モニターに映し出されたのは片腕を失い、ポロポロのセイバーガンダムが力なく、漂っている。

「どついう事だ……今すぐに回収しろ。」

ガイウスは事態こそは飲み込めないが、ガンダムをあそこまでポロポロに出来る相手がいた事に背筋が凍る思いだった。

セイバーガンダムはアレクサンドリアに回収された。

この日、ソレスタルビーイングは謎の一団に完敗し、壊滅的な打撃を受けた。

M i s s i o n 2 6    テスタメント

「ソレスタルビーイングは壊滅したか……」

オリジナルヴェーダは仮面の男にそう言う

仮面の男はチェス盤のナイトの駒を倒す。

「ガンダムの撃墜は確認できていない。」

「確かに……だが、ヴェーダを失った彼らに何が出来ると?」

「さあ…だが、今はこちらが優先だ。」

仮面の男は駒でキングの周りの駒を倒す。

「キングを取るのか?」

「ああ……彼には10をつけている。確実に仕留める前に……」

「04と08を使うか。」

「それが妥当なところか……」

そして、仮面の男はキングの駒の前に持っていた駒を置く。

「そして、キングにチェックを決める。」

「どういう事ですか……この命令書は？」

木星圏から戻り、調査隊からの情報を得ようと月面基地に帰投した私達へ、リード中將が命令書を持って来た。

しかし、その内容は納得出来るものではなかった。

ウォーカー少尉と初めとしたメーティアのクルーの役半数近くの移動命令が出ていた。

「私に言われても困る。この命令に関しては私も疑問に思っている。事態は急を要していると言っのに……」

「どういう事ですか？何か動きでも？」

巨大構造物の出現だけなら、そこまで急を要するとは思えない。

「数日前に、巨大構造物付近で戦闘が行われた。戦っていたのはソレスタルビーイングと思われる。」

「それで？」

「その戦いで巨大な爆発を確認している。MSサイズの物ではなく、戦艦サイズの爆発だ……それに、その少し前からヴェーダが使用できなくなっている。その意味が分かるな。ルーラー中佐」

つまり……ソレスタルビーイングは…彼女達は負けたと言う事か？



信じられん……幾ら、数で圧倒されようとも、そう簡単にガンダムが負けるとは思えん。

「信じられんと思うが事実だ。ソレスタルビーイングが壊滅した以上、地球圏における最大戦力はメーティアだ。認めたくはないがな……その戦力を低下させるような命令などありえんと私も上に申告したが、未だに回答が来ない。」

リード中将は解放戦線よりでウォーカー中将とも中が良い訳ではないが、恐らくは事実だろう。

艦の半数近くが変えられてしまうと、新しいクルーが艦のシステムに慣れるまで時間がかかる。

この状況でそんな事をしている時間は無い。

それなのに……一体、どういう事だ？

「それで、この事に関してウォーカー中将は何と？」

「何度も連絡を取ろうと思っているのだがな……ヴェーダが使えない以上、連絡が取れんし位置も特定出来ん。」

くそ……最悪だ。

中将と連絡が取れば、何とか出来るかも知れないが肝心の中将と連絡が取れないばかりか、居場所も分からないだと……

「分かっていると思うが、納得のいかない命令とは言え、正式な命

令だ。」

「分かっています。」

軍人である以上、命令には従わなければならない。

それが例え、納得のいかない命令だとしても……

一体、何がどうなっている。

世界はどうなって行くと云うのだ……

「今までお世話になりました。」

月面基地に帰投した俺達に下された命令は艦長達も納得のいかない物だったが、軍人である以上、従うしかなく、数日の内にウォーカ―少尉を始めとしたクルーの転属の準備が終えていた。

「地上でもお元気で……」

「はい……メーティアで学んだ事は忘れません。」

セシリアは半泣きで少尉の手を握る。

「地球のどこに居てもワタクシ達はチームですわ。」

「ああ……そうだな。少尉、元気でな。」

「お二人も……」

こうして、少尉は地球行きの TRAIN に乗車する。

「さて……俺達も戻るか……」

「……そうですね。」

セリシアはそんなに少尉と別れたのが寂しかったのか、元気がない。

「これから……どうなってしまうの?」

確かにな……

巨大兵器に始まり、巨大構造物……

せっかく、解放戦線との戦いに終止符が打てると思っていたが……

「分からん……だが、俺達のすべき事は一つだ。」

「そう……ですね。」

そうさ……俺達は世界がどうなるかと市民を守るだけだ。

「それで……増員はまだでしょう?」

命令を受理して、クルーを送り届けてすでに数日が経過している。  
今のメーティアのクルーは運用するのに必要最低限以下のクルーしか乗っていない。

こんな状況で戦闘は愚か、まともな航海すら危うい。

「分からん……幾らなんでも遅すぎる。」

リード中将もこの事態に苛立っているようだ。

「この命令はまるで……」

私はここまで言いかけて止まる。

そう……この命令はまるで……

「君たちを破滅させようとしているみたい……かい？」

私が言おうとした事を別の人物が答える。

そう……その言葉通りだ。

だが、それは政府が私達を切り捨てると言ったと同じ事だ。

そんな事はありません。

だが、今はそんな場合ではない。

私はこの声を知っている。

ずいぶん懐かしい声だが、この声を聞く事はありません。

なぜなら、この声の主はすでに死んでいる筈だからだ。

「どうしたんだい？そんな信じられない物を見たような顔をして……」

「リボンス……アルマーク……」

そう……そこには20年以上も前に中將によって倒された筈のリボンス・アルマークが立っていた。

「何だ！お前は！」

リード中將がそう言っていると、武装した兵士達が私達を取り囲む。

「久しぶりだね。アルエット……いや……僕と会うのは初めてだったね。」

「一体……お前は……」

生きている筈がない。

聞くところによれば、ゼロ距離でコックピットを破壊したらしい。

リボンスの意識データは厳重に管理しているから予備の体に意識データを入れる事は不可能だ。

「死んだはずかい？確かに22年前にリボンス・アルマークは……」

いや…自分がリボンス・アルマークだと思っていたイノベイドはアベル・ウォーカーによって討たれたね。」

……つまりは、私を雇い、中將に討たれたアルマークは自分がそうだと思っただけだったと言う事か……

「理解出来たようだね。」

「お前の目的は何だ？」

こうして、出向いたんだ。

何か目的があると見て良い。

「なに…君の役目は終わったんだよ。アルエット・ルーラー……」

アルマークは私に銃を向けるが、引き金が引かれる前にリード中將がアルマークに突進して倒す。

「行け！ルーラー中佐！」

「しかし！」

「ここに来たと言う事はウォーカーの方にも何かしらの動きがあるはずだ。悔しいが現状を打破出来るのはあの男しかない！お前は奴の右腕だろう！」

「……了解」

私はリード中將が時間を稼いでいる間に部屋から脱出する。

逃げる時に発砲されて、腕に当たるが、今は止まる訳にはいかない。

私は痛む、腕を抑えつつもメーティアを指した。

「いつまで待機が続くんだ？」

「さあな」

メーティアに帰投すると、艦長がリード中将に増員の件を問いただしに言っているため、俺達は基地の待機室で待機している。

それにしても、メーティアの人員が半分近くにされて、ずいぶんと寂しくなっていたな。

「とにかく、艦長が戻るまで俺達も下手に動けんだろつ。」

隊長がそう言うが、じっとしてあいられないだろ……

訳が分からん事が続いている。

俺だけじゃない。セリシアもみんなも不安に思っている。

だが、一方で隊長の言っている事の方が正しい。

俺達は一介の軍人に過ぎない。

俺達が勝手に動いたところで、事態が悪くなる事があっても、良くなる事は無い。

「あら……」

すると、セリシアが何かを見つけてそう言う。

セリシアの視線の先には子供がいた。

ここは軍事基地だが、軍人の家族も住んでいる。

だが、ここは民間人が、それも子供が入って来て良いようなところではない。

「坊や…どうしましたの？ここは坊やの様な子供が来るようなところではなくてよ。」

セリシアは子供にそう言いながら近づく。

「五月蠅いよ。下等種が……」

「え？」

子供がそう言うと銃声が鳴り響き、セリシアが倒れる。

何が起きた……

セリシアの軍服の腹部の当たりが赤く染まっている……

撃たれたのか……この子供に……



その証拠に子供の手には銃が握られている。

「動かないでよ。下等種」

子供は俺達に銃を向けると、俺達は動くに動けない。

セリシアが撃たれたのは、腹の辺り……微かに呻いているから、死んでは無い。

だが、このままでは不味い。

早いところ、医務室に連れて行かないと……

ここからだ、基地の医務室よりもメーティアの医務室の方が近いな……

しかし……この状況では……

「僕はね……君たち下等種には興味無いんだよ。あるのは君だよ。ライト・クルーガー……」

子供はそう言いライトの方を向く。

「俺だと？」

「そうだよ。君は純粹種らしいね。僕達の上の人がさ……君を同士として向かえ入れたいんだってさ。」

「つまりは俺をスカウトしに来たって事か？」

「そうだよ。」

馬鹿な……この子供がどこの組織から来たかは知らないが、ライトが軍を裏切る訳がない。

ライトは自信家なところがあるが、仲間を裏切るような真似はしないはずだ。

「……良いだろう。」

しかし、ライトの答えは俺の予想を裏切っていた。

「ライト……」

何の冗談だ？

「どづいつ事だよ……」

「どうもこうもない。俺は俺を一番、高く買った方につく……それだけだ。」

それだけ……それだけ……

「……おい……おい！バン！」

隊長の言葉で俺は我に返る。

すでにそこにはライトも子供もおらず、俺と隊長と横たわるセシリアだけだった。

「隊長……」

「何、情けない顔をしてんだ。お前はセリシアをメーティアの医務室に……俺はあいつらを追う。」

「……分かりました。」

そくだ……今はセシリアを医務室に連れて行く方が先決だ。

隊長は二人の後を追い、俺はセリシアを抱きかかえるとメーティアへと急いだ。

「これはどういう冗談だ？」

巨大構造物の調査に来ていた俺はどういう訳か、艦内のクルーに銃を向けられていた。

銃を構えるクルーの中心にはアメリカがいる。

「見ての通りですよ。中将。」

「俺を裏切ると？」

まあ……こいつに関しては怪しい事は幾らでもあったから、今更驚く事もないだろう。

ようやく、本性を出したと言う事か……

「裏切る？いいえ…裏切る訳ではないですよ。」

「この状況で良く言う。」

「私は裏切った訳ではありません。元の所属に……テストメントに戻っただけです。」

テストメント……それがアメリカの所属している組織の名前か……

確か、テストメントとは聖なる契約だったな……

ずいぶん大きく出たな……まあ…ソレスタルビーイング…天上人も大差ないか……

「成程ね。」

「驚かないんですね。」

「まあね。お前の目的は俺の監視と利用ってところか……」

こいつらが、何をしようとしているのかは知らんが、何を仕出かすにしても俺が最大の壁になるのは明らかだからな。

「ええ……そうです…とりたいのですが、予定よりも貴方は早く解放戦線を潰してくれました。せっかく、武器や情報を流し、廃棄コロニーの拠点を与え、ガディアスの強化やテンペストを奪わせて戦力を補強したと言うのに……私の予定では連邦の戦力を大きく削って連邦に倒される予定でしたのに……」

こいつか……解放戦線の謎のリーダーってのは……

連中も哀れだね……人類の解放を謳っていたのにリーダーは人間じゃないってさ……

「貴方は私の予想を上回る程優秀過ぎました。」

「それは何よりだ。」

誰かに踊らされるだけは御免だからな。

「それで？俺をどうするつもりだ？」

「貴方は我々と同行して貰います。」

「殺さないのか？千載一遇のチャンスだが？」

流石にこの状況は面倒だ。

MSがあれば、何とかなるが、今はないからな……

「ええ……私も貴方はここで始末しておいた方が、貴方を生かすよりもリスクが低いと思いますけどね……貴方を利用するにはリスクが大き過ぎる。」

俺をここで殺せば、暴動が起きるからな。

人は時に感情で動くからな。

もし、俺を殺せば俺の仇を取るために、勝算を無視して最後の一人

まで戦いそうだからな。

それに引き換え、俺を生かしておけば、軍はそうそう動く事は出来ない。

下手に動く事も出来ないし、従順に従うしかなくなる。

「お前も大変だねえ……」

「ええ……仮の上司も本当の上司も無茶を言いますからね。」

「そいつは……」

「なので、抵抗をお願いします。抵抗すれば、貴方を殺しても上からは何も言われなと思いますので……」

まあ……流石に抵抗を受けても、生け捕りにする理由は無いと言う事か……

さて……どうするべきか……

連中……テストメントとやらの戦力は未知数。

何が目的で行動を起こしたのも不明。

俺を利用すると言っていたが、何のために？

「やだね。抵抗はしてやんないよ。」

「……そうですか……残念です。」

ガンダムマイスターに軍人、英雄に父親に夫……いろいろな立場を経験して来たが、囚われの王になるのは初めてだ。

面白い。」

精々、俺を生かした事をどこのどいつかは知らんが、後悔させてやるよ。

「艦長！その腕は！」

「構わん。すぐにメーティアを発進させる。」

私はメーティアに戻るとそう言う。

クルーの半数を失い、まともに動かせる状況ではないが、今、ここに居るのは危険だ。

基地に武装した兵を送りこめると言う事はすでにこの基地が敵の手に落ちていると見て間違いない。

「パイロットは？」

ゴタード達は基地の待機室で待機していたはずだ。

「ノマル中尉とベルシュタイン中尉は乗艦しますが、ベルシュタイン中尉は負傷しています。」

つまりは、出せるMSはバンのGN-Xだけか……

「艦長、敵の追撃は俺が足止めします。」

モニターにゴタードが映し出される。

背景からして基地の格納庫からか？

「済みません。敵に逃げられました。今、基地の格納庫に居ますから、適当にMSに乗って時間を稼ぎますよ……バンはいざと言う時に温存しておいて下さい。」

やもえんか……

状況が不明瞭な以上、バンを出して戦力を消耗させる訳にはいかない。

「何……俺も死ぬ気は無いですよ。適当に時間を稼いだら逃げますよ。」

ゴタードなら引き際を間違える事も無いか……

「了解した。頼む……」

「艦長！港の隔壁が閉まります！」

「構わん！主砲でぶち抜け！」

私の指示でメーティアの主砲が火を噴き、前方の隔壁を吹き飛ばす。



強引な手だが、仕方がない。

今は手段を選んでいる余裕はない。

メーテアが動きだすと背後の隔壁が次々と締め、追手の時間を稼いでくれる。

恐らくは、基地の管制から隔壁を下してくれているのだろう。

「機関最大！」

「了解！」

そして、私達は基地から脱出する。

「随分と舐めた真似をしてくれたね。リード中将」

俺は基地の管制室で座りこみ、ルーラー中佐にリボンス・アルマーケと呼ばれた男が俺に銃を向けている。

「ふん……貴様がどこの誰だかは知らんが、そうそう好きに事が運ぶと思うなよ……」

「強がり……」

確かにな……ルーラー中佐を逃がすために少々無理をした。

その時に脇腹を撃たれて、助からんだろうな……

だが、隔壁を閉鎖して、時間を稼げればそれで構わん。

ソレスタルビーイングが敗れた今、地球での最高戦力はメーティアだ。

あの男の直属の部隊を頼りにせんと行かんとは俺も焼きが回ったな

……

だが、それで地球が人類が……救えるのであれば、俺のプライドなど関係ない……

いや……あの男……アベル・ウォーカーに与した時点で、そんな物はゴミ屑以下だな。

「まあ良い……こうなる事は想定の範囲内だ。」

「ねえ……リボンス……僕のケントウリアを出しても良い？」

もう一人の子供がそう言う。

「そうだね……良いよ。セル、行っておいて。」

「やったあ！」

子供は新しい玩具を与えられた様に楽しそうに出て行く。

「……お前たちの目的は何だ？」

これだけの事が出来る組織……

それなりの目的があるはずだ。

死にゆく身で知ったところでどうにかなる訳ではないが、何も知らずに死ぬよりかは言い。

「そうだね。本当は言う必要も無いのだけれども、冥土の土産と言  
う奴で教えて上げるよ。僕達、テストメントの目的……それはイオ  
リア計画の補完。」

「イオリア計画だと……」

イオリア・シュヘンベルグ……

ソレスタルビーイングの創設者と目されている男の計画だと……

「今のイオリアの計画は歪んでいる。僕達はその歪みを正すのさ……」

「そのためにこれだけの事を……」

「そうだよ。変革には痛みが付きまとう。それにね……彼らはイオリ  
ア計画を間違っ  
て行っている。それだけで罪だ。だから、これは罰  
何だよ。可能性を間違っ  
た方向に使い共存と言う名の従属を強制し  
ている世界へのね。」

こいつら……

「僕達はそのために行動を起こしている。だっておかしいだろ？ ELSに敵意は無い。それなのに信用しないのは？」

馬鹿げている。

敵意がない？

それが何だ。

奴らは20年前に多くの命を奪っている。

それは誤解から来た物で納得がいく訳が無い。

あの戦いで俺は多くの仲間を失っているんだ。

仲間だけじゃない。

俺の掛け替えのない妻をも失ったんだ。

そんな奴らをそう簡単に受け入れる事など出来はしない。

「君は…… ELSとの共存に反対派だったね。」

「当然だ…… 化け物との共存など認めてなるものか……」

ELSは敵意が無いとこいつは言った。

敵意が無く、あれだけの命が奪える化け物との共存など……ありえん。

俺達は市民を守るのが仕事なんだ。

そんな危険な生物との共存など認める事などあってはならない。

その為なら、俺は喜んで悪となろう。

それで守れると言つのなら……

「悲しいね……世界には君の様な人が多い。だから、僕達が行動を起こさないといけなくなつたんだよ。」

勝手な理屈だ。

「さて……無駄話はここまでだ。」

リボンス・アルマークは銃を構える。

……どうやら、俺はここまでのようだ。

済まない。

父さんは先に母さんのところに行く……お前は幸せになれよ。

そして、銃声とともに俺の意識は潰えた。

## Mission 27 世界の敗北

「艦長！高速で接近する機影が！」

月面基地を脱出するが、それを追撃する機体がある。

ライトイエローを基調として、両肩にGNキャノンを装備し、通常のMSの一回りの大きさの巨大に両腕には三連装の爪「ズメイ」を装備している。

そして、この機体もパラディオンやローゼンクロイツァー同様ツインアイを採用している。

機体名、ケントウリアそれがこのMSの名。

「ようやく、追いついたよ。この機体：火力は高いんだけど、遅いんだよなあ……」

セルはそう言うが、ケントウリアの機動力は通常のMSよりも遥かに高い。

この機体もまた、ツインドライブシステムが搭載されている。

「さてと……MSが出て来ないとつまらないけど、終わりにさせて貰うよ。」

ケントウリアはメーティアにGNキャノンを向ける。

ケントウリアがGNキャノンを放とうとするが、粒子ビームが遮る。

「何……」

「外したか……はやり、自分用の調整がされてない機体では狙いが甘いな……」

ゴトードはGNロングビームライフルを構えて、GN-X?のコックピットでそう言う。

「何だよ……量産機か……せめて、ガンダムクラスの相手が良かったな。」

ケントウリアがGN-X?を無視して、メーティアに接近しようとするもGN-X?がロングライフルで牽制する。

「邪魔すんなよ!」

ケントウリアは全身の装甲がスライドすると、装甲内にはビームガンが内蔵され、無数の粒子ビームが放たれた。

「おいおい……そんなのありかよ!」

GN-X?は両肩のGNシールドで粒子ビームを防ぎながら、粒子ビームを回避する。

「こいつでもくらいな!」

GN-X?はバックパックのGNミサイルを放ち、ケントウリアに接近する。

「そんな子供騙しが利く訳ないだろ！」

ケントウリアは全身のビームガンでGNミサイルをビームガンで破壊していく。

しかし、GN-X?は爆風に紛れて、ケントウリアに接近しており、ビームサーベルで背後から斬りかかる。

「単純な手に引っ掛かるな。小僧」

GN-X?はビームサーベルを突き出す。

GN-X?の一撃をケントウリアはかわそうとするが、かわしきれずに肩の装甲を掠る。

「ちっ……浅いか！」

GN-X?は追撃の一撃を振り下ろすが、ケントウリアの腕のズメイで受け止められる。

「この……雑魚が良い気なってるなよ！」

ケントウリアはGN-X?を弾き飛ばす。

「雑魚は僕達に落とされて、撃墜スコアを稼がせれば良いんだよ！」

ケントウリアの両腕のズメイからGN粒子が放出され、両腕に粒子の爪が形成される。

「馬鹿な……」



ゴタードはそれを見て驚く。

連邦でもソレスタルビーイングでもGN粒子を直接攻撃に転用することは少ない。

GNドライヴ搭載機の技術が発達しても、GN粒子の形状はGNフィールドのように自機を中心とした炎上か、シールドに一方方向のみの壁状、GNウイングシステムの様な形状ですべてに共通しているのは形状が単純な形状だと言う事だ。

しかし、ケントウリアはGN粒子を爪の様な複雑な形状で展開している。

これは、テストメントが連邦やソレスタルビーイングの技術力を上回っている事の証明ともいえる。

「戦艦落とすのは後回しだよ。先にお前を八つ裂きにしてやるよ！」

ケントウリアはズメイを構えて、GN-X?に斬りかかる。

GN-X?はシールドで受け止めようとするが、ケントウリアのズメイのGN粒子が高温の熱を帯びているため、シールドは溶解されて、切り裂かれる。

「くそ！」

GN-X?はロングライフルを捨てると、GNバルカンとGNサブマシンガンで応戦するが、ケントウリアのズメイで防がれる。

「無駄無駄無駄あ！量産機でこの僕のケントウリアに勝てる訳ないんだよ！」

ケントウリアの連続攻撃はGN-X?を攻撃する。

「この糞ガキが！」

GN-X?はビームサーベルを振うが、ケントウリアはGN-X?の腕を切り落とす。

「さつさと死ねよ！量産機！」

ケントウリアはズメイを突き出すが、GN-X?はそれをギリギリのところかわして、ケントウリアに取りつく。

「何すんだよ！」

ケントウリアは機体を動かして、GN-X?を離そうとするも、GN-X?は離れ無い。

そして、GN-X?は赤く発光する。

「お前ええ！」

「小僧……確かにお前の機体の性能は高い……だが、それだけで戦いは決まらないんだよ。お前の敗因は機体性能の驕りだ……お前も一緒に地獄に落ちて貰う。」

GN-X?は大量のGN粒子を撒き散らして、ケントウリアを飲み込み爆発する。

爆風が晴れると、そこには無傷もケントウリアが存在していた。

「自爆ね……ああ……やだやだ、機体の性能を戦い方でどうにか出来ると思ってるのかな？無理なのにね。戦いで重要なのは、機体性能とパイロットの能力……どちらも劣る雑魚じゃ命を賭しても僕には傷一つつける事は出来ないのにな……成程……こういうのを犬死にって言っただね。勉強になったよ。犬死には惨めだって事をさ……」

「セル、聞こえるかい？」

「何だよ。リボンス……」

ケントウリアがメーティアの追撃に戻ろうとすると、リボンスからの通信が入り、ケントウリアは足を止める。

「今から、戦艦の方を沈めに行くから、用なら後にしてよ。」

「その事だけど、もう良いよ。」

「どういう事だよ。」

セルはあからさまに不機嫌そうな声でリボンスに言うが、リボンスはそれを気にする事無く話を進める。

「その船は放っておいて構わないそうだよ。」

「ヴェーダがそう言ったの？」

「そうだよ。」

「分かったよ。僕も雑魚には興味無いしね。」

セルはそう言い機体を月面基地の方に向けた。

「起きたかい？」

アニエスはアレクサンドリアの医務室で目を覚ましていた。

「ジェシカさん……ここは？」

「アレクサンドリアの医務室だよ。ほら、木星圏で共闘した解放戦線の……そんな事よりも、何があったの？ガンダムがあそこまでやられるなんてさ……」

ジェシカにそう言われて、アニエスは先の戦闘を思い出す。

圧倒的な物量だけでなく、圧倒的な性能と能力を持った新型機……

それと戦い、完敗した事を……

「とりあえず、起きたのなら艦長さんのところに行こう。話はそれからでも構わないでしょ。」

ジェシカはアニエスをブリッジへと連れて行く。

そして、アニエスはガイウスやメデイ達に事の顛末を話した。

「信じられんな……」

ガイウスがアニエスの話を聞いた第一感想はそれだった。

敵の圧倒的な物量はすでに巨大兵器での戦闘で経験しているため、驚くどころか、あれも同じ勢力が作ったと知り、納得が行くが、ガンダムを圧倒した二機については信じられなかった。

ガンダムはソレスタルビーイングの最新の技術を最大限に投入したMSで、現在存在するMSの中でも性能は最強と言っても過言じゃない。

そのガンダムを上回る性能を持った機体の存在など、到底信じる事が出来ない。

「だけど、事実よ。私達は負けたの……」

アニエスの表情からそれが、ウソや適当なデタラメで無い事はガイウス達にも伝わって来る。

「それで……他の連中は……母さんはどうなった？」

メデイがそう言い、アニエスは視線を落とす。

「知らないわ。私はトレミーの自爆に合わせて、言われた通りに宙域を離脱したから……だけど、艦長もクルーも自爆の前に小型艇で脱出する手筈だから、多分……生きてるとは思っけど……私には分からないわ。」

「そうか……」

メデイはそれ以上何も言わなかった。

アニメスがこの状況でウソをつく必要性は無いため、問い詰めても無駄だろうし、アニメスを責めるのも

お門違いなため、メデイは拳を握り締めるくらいしか、行き場の無い感情を向ける事は出来なかった。

「ガンダムを超える機体ねえ……」

重い空気の中、ジェシカはブリッジを出て行きそう呟いていた。

ジェシカの表情はブリッジの連中の様な沈んだ表情ではなく、とても楽しそうな表情をしていた。

ジェシカにとって、テストメントの製造したMSはとても、興味深いものでジェシカの技術者としての何かが燃え始めていた。

「面白いじゃん……私のガンダムをあそこまで破壊出来るなんてさ……こうなったら、アレを完成させるしかないっしょ……」

ジェシカはそう言い、格納庫へと向かって行った。

「後続の機影は？」

「ありません……」

メーティアはセントウリアの追撃を逃れて通常航行に移行している。

「そうか……」

アルエットはそう言い目を瞑る。

後続の機影が無いと言う事はテストメントの追撃が無い……しかし、それを同時にゴタードもメーティアに向かって来ていないと言う事にもなる。

戦闘で何かしらの事態が起きて、メーティアに向かえない可能性があるが、高確率で戦死した可能性が高い。

相手はソレスタルビーイングを壊滅させたかも知れない相手……

通常のカスタムのされていないGN-X?で勝つのは不可能に近い。

「了解した……このまま本艦は前進して、体勢を整える。」

なので、アルエットはゴタードが戦死としたと言う前提の判断する。

現状でのメーティアは艦のクルーが半数近くを転属で失っている。

そのため、戦闘は愚か、通常航行ですら支障が出て来る可能性がある。

戦力は現在メーティアには4機のMSが搭載されている。

GN-X?、ガラツゾ?、ソルブレイヴ、カイノス……

しかし、ガラツゾ？のパイロットのセシリアは負傷し戦闘不能、ソルブレイヴのパイロットのゴタードは恐らく戦死、カイノスのパイロットのライトは敵側に付いたと報告を受けている。

そのため、現在のメーティアで出せるMSはバンのGN-X？一機しかない。

その上、バンは単機で戦果を出せるタイプのパイロットじゃない。

戦場ではセシリアとコンビを組んで戦闘を行うため、単機では戦果が見込めない。

そのため、今はアベルの安否を確認して、行動することは自殺行為に等しい。

アルエットが出来る事はアベルの生存を信じて、力を蓄える事しかない。

アベルなら、テストメントに好き勝手にさせておく性格ではないため、必ず反旗を翻す。

その時にアベルの右腕である自分が、アベルの直属の戦力であるメーティアを失う訳には行かない。

そのためには今は体勢を整えるしかない。

「艦長！全世界のネットワークがジャックされます！」

オペレーターが叫び、アルエットは我に返る。



「どづいつ事だ？」

全世界のネットワークは膨大でそれをジャックすることの出来るのはヴェーダ位しか思いつかない。

しかし、ヴェーダは現在稼働が停止しているのか、使用不能となっている。

「連中か……」

そのため、それだけの事が出来る勢力は限られる。

そして、モニターに強制的に映像が映し出される。

映像には仮面の男が映し出されている。

それは、メーティアだけに留まらなかった。

全世界のあらゆるメディアのネットワークが掌握されて、同じ映像が映されている。

「我々はテストメント……イオリア計画を体現するものだ。」

仮面の男はそう切り出す。

「テストメント？それにイオリア計画だと？」

「イオリア・シュヘンベルグが提唱した計画は連邦政府とソレスタルビーイングによって歪められた。我々はそれを正すために動きだした。まずは手始めに計画を歪めた根源のソレスタルビーイングに

制裁を加えた。」

アルエットはリード中將が言っていたソレスタルビーイングが壊滅したかも知れないと言う情報の信憑性が出て来たと確信している。

「だが、我々は諸君らを縛るつもりはない。我々の目的はE L Sやイノベーターとの真の共存にある。」

「これだけの事をしてにおいて良く言っ……」

アルエットには仮面の男が到底信用できなかった。

彼らは共存を謳うが、解放戦線との戦闘でアベルが気づかなければ、連邦にも大きな被害が出ていた。

「20年前のE L S戦役はE L Sと人類との間の誤解により起きた物だ。その誤解が解けて、E L Sに敵対する意思が無いにも関わらず、連邦政府はE L Sの能力のみを利用している！そんな事が許される筈がない！我々の目的は人類とE L Sの本当の意味での共存だ！」

問答無用でコロニーを消し飛ばしたテストメントの言う『真の共存』はアルエットには信用に足る言葉には聞こえなかった。

「それを阻害しようとする者は真の共存を勝ち取るために我々は戦う。」

「何を馬鹿な……人間とE L Sが共存するには早すぎる……」

人類とE L Sの間の溝は20年経っても埋まっていはいない。

誤解による戦いだとしても、連邦軍の軍人や地上で起きた事件で人が死んでいる以上、人類側の感情としてはE L Sを完全に受け入れる事は出来ない。」

「我々はそれこそが、人類が新たなステージに進み、より良い未来を作りだすものだと考える！その未来を勝ち取るために我々は戦う！我々は種によって差別はしない！我々の理念に共感する者は我らに力を貸して欲しい！」

「……通信が切れました……」

映像が途切れるとアルエットはアームレストを強く叩く。

「何を馬鹿な事を！」

「艦長……どうします？」

オペレーターは不安そうにアルエットの指示を仰ぐ。

「……決まっている。奴らを叩く。奴らの行動は世界の秩序を乱す。連邦の軍人として見過ごす事は出来ん。」

仮面の男の演説を聞いてそう確信した。

彼らの理念は危険過ぎると……

「これより、本艦はテストメントを打倒すべく行動を起こす。皆も覚悟を決めて欲しい。」

アルエットの言葉にブリッジクルーは無言で頷く。

メーティアのブリッジクルーはテストメントを倒し、世界を守ろうと決意していたが、あの映像が流れてすぐに宇宙、地上問わず連邦の基地や施設、連邦議会は突如、現れたガントミーによって制圧されていた。

連邦も防衛するが、ガントミーの数の暴力に成すすべは無かった。

この日、世界はテストメントによって敗北した。

## 人物設定

民間人

シンク・ウオーカー

(CV代永 翼)

15歳(男)

アベルとマリアの息子でメディとシャロンの弟。

ハーフィンノベーターだったが、幼いころに純粋種のイノベーターと  
なっている。

性格は内気で気も弱い。

現在はコロニーの学校に通っている。

ミリィ・コーネル

(CV神田 朱未)

15歳(女)

気の弱いシンクとは反対で気が強く、シンクをリードしている。

シンクに対しては気の弱さから、イライラすることも多いが、何か

と世話を焼いている。

シンクと同じ学校に通っている。

ロイド・ルクス

(CV 木村 良平)

15歳(男)

シンクの友人でシンクと同じ学校に通っている。

シンクと何かと気が合うのか、いつも一緒にいる。

大のMSマニアでもあり、連邦製のMSや旧三国家群製のMSなどのMSに関してはかなりの知識を持っている。

テストメント

ゼロ

テストメントの実質的な司令官で常に仮面をかぶっている。

本名や素性は一切不明で、ナンバーズを上回る実力を持っている事から、No.0と言う意味でゼロと名乗っている。

オリジナルヴェーダ

イオリアが製造した最初のヴェーダ。

後の製造されたヴェーダの本体やターミナルユニットの原型で、ヴェーダのターミナルユニットの情報を管理、統括している。

また、自立学習型AIを搭載し、自らの意思を持っている。

ナンバーズ

テストメントで製造されたイノベータータイプのイノベイド。

通常のマイスタータイプのイノベイドの能力を遙かに上回る能力を持っている。

マイスタータイプとは違い、明確な性別などが存在している。

ナンバーズにはそれぞれ、ナンバーが割り当てられており、そのナンバーが小さい方が総合能力が高いが二桁のナンバーズは戦闘能力よりも特殊な能力に特化している。

ユীগ・テンプル

(CV 子安 武人)  
肉体年齢25歳(男)

No.01を与えられており、最強のナンバーズ。

常に強者と戦う事を最上の喜びとしている。

ローズ・ローゼン

(CV 小清水 亜美)  
肉体年齢16歳(女)

No.07を与えられている。

騎士道精神を重んじており、テストメントの計画に対して誇りを持っている。

リボンス・アルマーク

(CV 古谷 徹)  
肉体年齢16歳(男)

No.04を与えられている。

かつて、イノベーターを名乗り連邦を影から操っていたリボンス・アルマークのオリジナル。



態度こそはその時のリボンズとは違い、人類の持つ可能性を認識している。

セル・セルベリア

(CV 三瓶 由布子)

肉体年齢12歳(男)

No.08を与えられている。

外見は子供だが、高い能力を持っている。

性格も子供そのもので、戦いも遊びの延長上としか考えていない。

アメリカ・ニューレイズ

(CV 生天目 仁美)

肉体年齢26歳(女)

No.10を与えられている。

元はアベルの部下だったが、テストメントからのスパイで解放戦線にMSなどの武器を極秘裏に流し、解放戦線に指示を出していた。

情報統率能力に特化した能力を持ち、通常のヴェーダとほぼ同等の

情報処理能力を持っている。

ルギアム・ギリアム

(CV 関 智一)

肉体年齢18歳(男)

No.09を与えられている。

性格は残忍で目的の為なら手段を選ばない。

地球連邦軍

ラディウム・ライオット

(CV 高橋 広樹)

26歳(男)

地球連邦軍所属ヴィクトリア級航宙戦艦「ヴィクトリア」の艦長で階級は少佐。

元は副官だったが、解放戦線との戦闘後の艦長に就任しているため、艦長としての経験はほとんどない。

もてる事は無いが、部下に女性が多く良く女性絡みで不運に見舞われる事が多い。

フリム・マリアージュ

(CV 後藤 邑子)

20歳(女)

地球連邦軍所属ヴィクトリア級航空戦艦「ヴィクトリア」の副長で階級は少尉。

士官学校を卒業したばかりですがすぐにヴィクトリアに配属されたため、指揮経験も実戦経験も無い。

ヴァルキリー小队

ヴィクトリアに配属されているMS小队で女性のみで構成されているためにそう呼ばれている。

配備されている機体はGN-X?のみだが、それぞれが専用のカスタムをされている。

アスカ・ウェルキン (Reyさん投稿キャラ)

(CV 渡辺 明乃)  
28歳(女)

地球連邦軍所属のパイロットで大尉。

解放戦後に再編されたMS小隊「ヴァルキリー小隊」の小隊長を務めている。

ルビィ・アールム  
(CV 折笠 富美子)  
27歳(女)

地球連邦軍の軍人でヴァルキリー小隊の副隊長で階級は中尉。

中世的な容姿をしており、良く男性を間違われる。

アスカ同様、女性に良くもてるが、本人はアスカ程気にはしていない。

アスカとは部隊の再編時からの付き合いで、上司と部下と言うよりも相棒に近い関係を築いている。

ルキノ・ユリエス

(CV 寿 美菜子)

21歳(女)

地球連邦軍の軍人でヴァルキリー小隊所属のパイロットで階級は少尉。

異性には興味が無く、アスカやルビィの様な女性を好み、たまに二人の関係を妄想したりしている。

ルイ・シヨーン

(CV 伊藤 静)

21歳(女)

地球連邦軍の軍人でヴァルキリー小隊所属のパイロットで階級は准尉。

ルキノとは同期で親友だが、同性愛好者のルキノとは違い、シヨタコン。

## MS設定

ソレスタルビーイング所属機

GNT-0005R 『リベリオンR』

ソレスタルビーイングが極秘裏に製造していたTGNドライブ搭載機。

リベリオンシリーズをベースにしており、背部には初代リベリオンと良く似た大型の推力偏向スラストターが装備され、頭部にはリベリオンZと同じブレードアンテナが装備されているが、メインカメラはガンダムと同じツインアイを採用し、その上からバイザーでツインアイが隠されている。

機体カラーはリベリオンシリーズ共通の真紅で統一されている。

本機は連邦により定められた条件に完全に違反しているため、秘匿されていた。

また、ジェシカにより特殊な機能が搭載されている。

## 武装

・GNビームサーベル

通常規格のビームサーベルで両腕に内蔵されている。

・GNビームトンファー

両腕に取り付けられているビームサーベルで通常のビームサーベルより高出力となっているが、腕に固定されているため、外して使う事は出来ない。

・GNビームマグナム

リベリオンRのメインの火器で連邦製のビームマグナムを改良し、威力が向上している。

・GNバルカン

通常規格の武装を頭部に二門装備されている。

・アンチ粒子シールド

リベリオンZに搭載されていた物を流用しているため、シールドの裏にビームガトリングやNGNバズーカが装備出来る。

・GNビームザンバー

リベリオンZに搭載されていた物を改良されており、両腰に一基つ

づ装備されている。

#### テストメント所属機

ナンバーズ専用機は全機に共通して、ダブルオークアンタに搭載されていたツインドライヴ専用にカスタムされたオリジナルのGNドライヴとツインドライヴシステムが搭載されている。

外見的特徴として全機がガンダム同様のツインアイを採用されている。

それぞれに専用の武装が一つ以上、装備されガンダム以上の性能を持っている。

#### GN T S - 0 0 1 『パラディオン』

ユーグ・テンブル専用機で白を基調とした近接戦闘用MS

No.01のユーグ専用の機体と開発されたため、ナンバーズ専用機の中で最強の戦闘能力を有している。

#### 武装



・グングニール

パラディオンのメインの武装でGN-X?に装備されていたGNラ  
ンスと酷似しているが、攻撃力は段違いの威力を誇る。

先端を回転させる事で攻撃力が増し、ガンダムの武装や装甲も易々  
と貫く威力を持つ。

また、先端に銃口が内蔵されているため、高出力の粒子ビームを放  
つ事も可能。

・GNシールド

左腕に装備されている円形状のシールド

シールド内部に拡散ビーム砲が内蔵されており、表面の装甲がスラ  
イドして拡散粒子ビームを放つ事も可能で、収束粒子ビームを放つ  
事が可能。

また、シールドとしての性能も高く、表面にアンチ粒子フィールド  
の展開も可能で高い防御力を誇る。

・GNバルカン

ガンダム同様、頭部に二門装備されているが、使用頻度はほとんど

ない。

GNTS-007 『ローゼンクローツァー』

ローズ・ローゼン専用のMSで赤いを基調とし、右肩には薔薇の刻印が刻まれている。

CB戦に初めて投入されるも、その時は機体がロールアウトしただけで、武装はレーヴァテインのみだったが、後に武装も完成している。

近接戦闘がメインだが、あらゆるレンジに対応が可能となっている。

## 武装

### ・レーヴァテイン

ローゼンクローツァーのメインの武装で刀身が赤く、機体同じ程の長さを持つ長剣。

本体は細身の実体剣にソードビットのように複数の実体剣が一つになっており、刀身を分裂させて、ビット兵器のように使う事も可能。

また、刀身の合わせ方を変える事で鞭の様な剣としての使用も可能。  
未使用時はバックパックの右側に装備されている。

・GNビームキャノン？

ローゼンクロイツアーのバックパックの左側に装備されている長距離砲撃用のビームキャノン。

かつてはコリック社製MS『アテナ』に装備されていたビームキャノンを改良し、射程と威力、連射速度の向上だけでなく、折りたたむ事で未使用時にも邪魔にならないようになっていた。

・GNビームライフル

GN-Xシリーズのビームライフルを改良している。

手持ち式ではなく、右腕に取り付けられており、レヴァアティンを持った状態でも使えるように改良されている。

また、銃口の先端からビームサーベルを展開することも可能。

・GNシールド

左腕に装備されているシールドで、ビームシールドやビームブレイドの展開も可能となっている。

・GNバルカン

ガンダム同様、頭部に二門装備されている。

GNTS-008 『ケントウリア』

セル・セルベリア専用のMSでライトイエローを基調とし、通常のMSよりも一回り大型となっている。

機体は巨漢だが、通常のMSよりも高い機動力と至近距離での自爆でも傷一つ付かない防御力を持つ。

## 武装

・ズメイ

機体の両腕に装備されている三連装の爪で、そのまま普通に使う事も出来るが、GN粒子で巨大な爪を形成することで攻撃範囲が格段に広がる。

・GNキャノン

両肩に二門装備されている。

対艦攻撃用の武装なため、通常のMSよりも遥かに上回る火力を有している。

・GNビームガン

全身の装甲に内蔵されている。

装甲をスライドさせる事で全方位に対して同時に攻撃することが可能。

威力は小さいがそれでも通常のビームライフル並みの威力を持っている。

・GNバルカン

ガンダム同様頭部に二門装備されているが、機体の火力が高いため使われる事は無い。

ルギアム・ギリアム専用機で黒を基調としている。

近接戦闘を得意とし、両腕には巨大なシールド型の武器『サーベラス』を装備している。

## 武装

### ・サーベラス

両腕に装備されているシールド状の武器。

両腕を隠す程の大きさを持っている。

最大の特徴は武器自体が左右と上に展開し、内部には牙の様な実体剣が並んでおり、まるで猛獣の口のように展開すると、相手を食べるかのように破壊する。

また、内部にGNキャノンが内蔵されており、火器としても使う事が可能。

### ・GNビームサーベル

両足に装備されている。

アルケーガンダムのように蹴りに合わせて展開することで攻撃の間合いを掴ませないように出来る。

・GNバルカン

ガンダム同様頭部に二門装備している。

Z T S T - 0 0 3 5 『ガントミー』

テストメンを保有する量産型MS。

ナンバーズ専用機とは反対で量産性を追求し性能は度外視しているため、機体性能は極めて低い。

通常のMSよりも一回り小型でGNドライヴを搭載していない。

無人機なため、有人機では出来ない撃墜前提で人海戦術を基本戦術としている。

また、OSに自立学習システムが搭載し、ガントミー全機がその情報を共有しているため、戦闘を重ねるごとに機体の動きの速度は増していく。

量産性の向上の為に機体の四肢が取り外す事が可能で武装は直接取り付けられるようになっていたため、マニピレーターが存在していない。

自動稼働とナンバーズが脳量子波での遠隔操作と二種類の操作方法

がある。

## 武装

### ・マシンガン

ガントミーの数ある武装の中でももつとも装備数が多い火器。

高い連射速度を持つが、威力はそれほど高い訳ではなく、現在のMSに対しては至近距離で放たないと目に見えた効果は出ない。

### ・ヒートソード

ガントミーの唯一の近接戦闘用の武器。

刀身が熱を帯びる事で切れ味が向上している。

### ・バズーカ

ガントミーの火器の中でも高い火力を持っている。

連射速度と弾数は少ないが、至近距離で放てば、現在のMSを撃墜することも可能。

### ・ミサイルポッド



ボックス型のミサイルポッドで6発のミサイルが搭載出来る。

ミサイルの種類は多数あり、GNミサイルの搭載も出来るがミサイルを撃ち尽くすを何も出来なくなる。

・リニアライフル

旧ユニオンのフラッグが装備していたリニアライフルを改良しており、マシンガンとバズーカの中間の装備。

使い勝手は良いが、装備している数が少ない。

『ガントミー宇宙戦用機』

ガントミーのバリエーション機で両足がGNZシリーズで装備されていたブースター改良し装備している。

GN粒子の代わりにジェットエンジンが搭載されている。

『ガントミー陸戦用機』

ガントミーのバリエーションで両足がジェットエンジンが搭載された専用の脚部を装備し、地上をホバーリングするように滑走する。

地球連邦所属機

ルビイ専用GN-X?キャノン

ルビイ専用にカスタムされた指揮官用GN-X?で機体カラーは緑色をしている。

近接戦闘に特化し、アスカのGN-X?が高機動戦闘を得意としているに対し、本機は一撃の威力を重視したカスタムがされている。

武装（追加装備のみ）

・GNバスターソード

両肩に装備されているGN-Xシリーズの通常規格のバスターソード。

・GNソード

かつて、ソレスタルビーイングが所有していたガンダムエクシアに装備されていた物を再製造して装備されている。

・GNキャノン

キャノンユニットの標準装備で両肩に一門ずつ装備されている。

ルキノ専用GN-X?キャノン

ルキノ専用カスタムされたGN-X?で長距離攻撃を得意としている。

頭部に追加で高感度カメラが搭載され、射撃精度が向上している  
機体カラーは通常機から変えていない。

武装（追加のみ）

・GNスナイパーライフル?

かつて、ソレスタルビーイング所属のケルディムガンダムが装備していた物を再製造して装備している。

・GNシールド

両肩に装備されている。

ルイ専用GN-X？

ルイ専用カスタムされたGN-X？で砲撃支援を得意としている。

バックパックには大型のGNコンデンサーとGNフィールド発生装置が搭載されている。

火力と防御力にGN粒子を回しているせいで機動力はほとんど無く、主に後方からの砲撃支援とルキノのGN-X？の護衛を任せられている。

機体カラーは通常機から変えていない

武装（追加）

・GNバズーカ

かつて、ソレスタルビーング所属のガンダムヴァーチェに装備していた物を再製造した物を装備している。

## Mission 28 反逆の一步

テストメントが世界にその存在を知らしめて1年、テストメントは連邦議会を事実上、掌握し連邦軍もほとんど機能していない。

反抗する戦力は多々存在するが、テストメントに圧倒的な数と武力で殲滅されて行っていた。

テストメントと唯一、対抗出来る可能性を持つソレスタルビーイングもヴェーダに機能を停止させられた上で壊滅状態へと追い詰められており、現在は世界から完全に消えている。

ラグランジュ4のコロニー『リトルガーデン』

地球連邦政府直轄のリゾート系コロニー。

そこに一隻の戦艦が接近していた。

ヴィクトリア級航宙戦艦『ヴィクトリア』

テストメントの反旗を翻している数少ない連邦軍の戦艦である。

しかし、ヴィクトリアのところどころが被弾し、装甲が禿げている。

「艦長、リトルガーデンの管制から入港の許可が出ました。裏側の三番ゲートから入港するようにと……」

ヴィクトリアのブリッジでオペレーターがそう言い艦長席についているラディアム・ライオットは一息つく。

「はあ……取り合えず、何とか言ったと言うところか……流石に連中もコロニー内まで追いかけては来んだろ。」

ヴィクトリアの後方、数キロのところにはテストメントの戦艦がヴィクトリアを追尾するかのようについている。

「ですね……コロニー内で時間を稼いで、艦の補修を急いで貰わないとですね。」

副官席に座るフリムがそう言う。

「これで、一息つけるな……。」

ラディウムもそう言う。

コロニー内での戦闘行為は三国家群時代から御法度とされている。

「よし……艦の補修を急がせる。」

「了解」

「何……連邦の戦艦がコロニーに入港しただと？」

ヴィクトリアの後方数キロのところまで追尾していたテストメントの戦艦ウラル級大型輸送艦改が停泊している。

連邦製のウルル級大型輸送艦を改良した母艦をテストメントが運用している。

「はい。そのようです。」

ブリッジでイノベイドがそう言い、艦長席に偉そうに座っているルギアム・ギリアムはつまらなそうにする。

「それで？」

「コロニーに入港した以上、出て来るまで手が出せません。」

イノベイドがそう言うのとルギアムが更につまらなそうにする。

「はあ？何を言っている。敵はコロニーに入港して身動きが取れない。絶好の機会じゃないか。」

ルギアムはそう言いやりと笑う。

「しかし……」

「連邦の戦艦を入港させた時点であのコロニーも我らに敵対する勢力だ。我らに反旗を翻す者たちは皆、世界を乱す悪だ。それを撃つ事が正義ではないのかな？」

ルギアムは心にも思っていないがそう言う。

「はあ……」

「すぐにガントミーを出せ。」

「ルギアム様自ら出ないんですか？」

「当然だろ？この程度の連中に俺が出る必要もないだろ。さっさと出してコロニーごと片づけてこい。」

ルギアムがそう言うと戦艦に搭載されているガントミーはコロニーへと向かっていく。

戦端が開かれかけた事をいざ知らず、コロニー「リトルガーデン」ではいつもの日常がそこにあつた。

「シンクー！ゲーセン寄ろうぜ。」

リトルガーデン内にある学校で髪を茶髪に染めて、軽そうに見える少年がシンクと呼ばれたもう一人の少年に後ろから接近して首に腕をかける。

「ロイド……」

シンクは少し来るしそうだが、嫌そうにはせずに茶髪の少年、ロイドの方を見る。

「そつだね……」

「何言ってるのよ。もうすぐ試験でしょ？」



シンクがそう言っているとツインテールの少女が二人の前に仁王立ちしている。

「んだよ。別に良いだろ？ミリィ」

「良い訳ないでしょ！」

「二人とも落ち着こうよ……」

危うく口論になりかけた二人とシンクが止めようとしていると突如、コロニー全体が揺れた。

「何？」

「地震？」

「んな訳無いだろ！」

ミリィに対してロイドがそう言う。

コロニーで地震が自然に発生するなどあり得ない。

あるとすれば、何かしらの事態によって引き起こされる。

そして、その場合考えられる可能性の一つにコロニー外部からの攻撃……

この時、コロニー「リトルガーデン」の平穩は崩れ去った。

「コロニーに攻撃だと？」

リトルガーデンの宇宙港に入港していたヴィクトリアでもテストメントの攻撃の知らせは届いていた。

「みたいです！すでに敵MSがコロニー内に侵入したみたいです。」

「外からも敵MSが来ます。」

ラディアムは士官室から急いでブリッジに上がると艦長席に着く。

「まさか……コロニー内で仕掛けて来るとは……コロニー内の民間人の避難状況は？」

「避難は開始していますが、完全とは言えません。」

「ヴィクトリアが出港するまで、まだ時間がかかります。」

「MSを出せ！コロニー内のMSはアールムに、外の敵はウェルキン達に叩かせる！」

ラディアムが指示を出して、戦闘が開始される。

「停泊中を狙うか……」

ヴィクトリアから出撃し、機体内でアスカは呟く。

「やってくれるな……」

緑色の塗装がされているGN-X?のコックピットでルビイがそう言う。

「俺達は外の敵を掃討する。ルビイはコロニー内部に入り込んだ敵を頼む。」

「了解した。外の敵は多い……死ぬなよ。」

「ルビイもな……」

二人はそう言いルビイのGN-X?はコロニー内へと侵入し、アスカのGN-Xは二機のGN-X?を引き連れてコロニーの外に出る。

「相変わらず……数だけが多いな。」

アスカのGN-X?はコロニーから出るとビームライフルでガントミーンを撃ち落とす。

「ルキノ、ルイ、援護を頼んだぞ。」

「了解」

アスカのGN-X?はGNブレイドを抜いて、ガントミーンに斬りかかる。

「隊長の援護をするわよ。ルイ！」

「分かってるわよ。ルキノ！」

ルキノ専用のGN-X？キャノンはGNスナイパーライフルを構える。

「これだけ多いと狙いをつけるのも楽よね。」

ルキノ機から粒子ビームが放たれて、ガントミーを貫く。

「だけど…多いから落とした気にはなれないわよ!」

ガントミーがマシンガンやバズーカで応戦すると、ルイ専用のGN

-X？がGNフィールドを展開して間に入り攻撃を防ぐ。

「サンキュ！ルイ!」

そして、ルイ機はGNバズーカを構える。

「数が多いなら、こいつで一掃してあげるわ!」

ルイ機から強力な粒子ビームが放たれて射線上のガントミーを一掃する。

「悪いが…これ以上はやらせない!」

アスカ機はGNブレイドでガントミーを切り裂き、シールドに仕込まれているアンカーでガントミーの頭部を破壊すると、左腕のGNサブマシンガンで破壊する。

一機のガントミーがヒートソードで切りかかって来て、アスカ機はGNブレイドで受け止めると腕に内蔵されているGNビームサーベルを出して、ガントミーを切り裂く。

「幾ら、性能が低かろうと……この数は厄介だ。」

アスカ機は背部のGNミサイルを一斉掃射すると、ビームサーベルとGNブレイドの二刀流でガントミーを切り裂いて行く。

「内部にはそれほど、入りこまれた訳ではないな……」

ルビイのGN-X？はコロニー内に侵入すると、内部に入りこまれた敵戦力を把握していた。

「これなら、すぐに方が付く。」

ルビイ機はGNソードを展開して、ガントミーを切り裂く。

ガントミーはマシンガンで応戦するも、ルビイ機は方のGNバスターソードを盾にして防ぎながら、接近してGNソードで両断する。

「悪いが時間をかけるつもりはないのでな！」

ルビイ機はGNソードをライフルモードにして、ガントミーを粒子ビームで破壊する。

「何なのよーアレ……」

「連邦のGN-Xのカスタムタイプにもう片方はテストメントとか言う連中の……」

「テストメント……」

コロニー内で戦闘をシンク達は避難しながら、見上げていた。

「糞！こっちはダメだ！学校の方に逃げるぞ！」

ロイドがそう言い、ミリイとシンクも来た道を戻り学校の方に向かうと、ルビィ機が両断したガントミーが校舎に墜落する。

「うわぁー！」

ロイドがとつさにミリイを押し倒して、地面に倒れこみ、シンクも頭を押さえて地面にうつ伏せに倒れこむ。

「ウソだろ……」

三人が顔を上げると校舎はガントミーに押しつぶされている。

「何なのよ……」

「ねえ……アレ……」

シンクが指を指すとそこには、地面に大きな穴が開いている。

「穴？」

「この下……何かあるぞ。」

「何かって何よ?」

穴の中を覗き込むとそこには下に続く階段が見える。

「行ってみよう……」

「だな…地上を当てもなく逃げるよりかはマシか……」

シンクがそう言い、ロイドも同調すると、二人は空いている穴からゆっくりと、中に入りミリイもそれに続く。

「何でコロニーにこんなところがあるのよ?」

「さあな……俺に聞くなよ。」

「このコロニーにこんな構造は無かったよね。」

穴の中は外の騒音が殆ど聞こえずに静かでシンク達の声だけが響く。

「ああ……」

「だったらやばくない?」

「だろうな。何処のどいつが作ったかは知らないが、コロニーにこんなところを作れるんだ。相当の権力者が軍関係の機密エリアか…  
…分かんないけど、進むしかないだろ……」

ロイドがそう言い先頭で進むと開けた場所に出る。

「今度は何よ……」

「MSの格納庫か何かか？」

その空間はMSが置ける程の天井の高さがある。

「ねえ……アレ……MSかな？」

シンクがそう言い二人が見るとそこには一機のMSが寝かされていた。

「あれって……リベリオンか？」

その機体は全身が赤く塗装され、頭部にはブレードアンテナや背部のスラスターなどリベリオンと酷似している。

「リベリオン？」

「知らないのか？シンクの親父さんの代名詞の最強のMSだぜ？」

「でも……どうしてここに？」

「さあな……でも、あれが動けばここから逃げられるかも……」

ロイドはそう言いリベリオンRに近づいて行く。

「待ってよ。ロイドー！」

シンクとミリィもロイドについて行く。



「ラッキー！コックピットが空いてるぜ！」

リベリオンRのコックピットまでよじ登ると、コックピットハッチが空いていた。

「怪しくない？」

「考えてる暇は無いだろ？」

普通に考えれば、コックピットを空いたまままで放置しておくのはおかしいが、今はそれを考えている暇は無く、ロイドはリベリオンRに乗り込んで、シートに座る。

シンクをミリイもコックピット内に入るとシートの後ろで掴まる。

「動かせそう？」

「内装は連邦のMSとは違うけど……ダメだ……ウンともスンとも言わねえ……」

ロイドがコンソールのスイッチを押したり、レバーを動かしたりするも、リベリオンRはまったく動かない。「

「粒子の残量が無いのか？それとも、機体が未完成なのか……シンク、変わって見る？」

「ええ！僕が？」

突然の指名にシンクは驚いているが、ロイドは気にする事無く、シートからどいて変わりにシンクを座らせる。

「ロイドでも無理だったのに…僕が動かせる訳無いだろ……」

「わかんねえだろ。この機体はシンクの親父さんの機体なんだぜ？息子のお前なら出来るかも知れないだろ？」

「無茶苦茶な……」

シンクは半ば諦め半分でレバーを握る。

すると、今まで何の反応も無かったリベリオンRのシステムが起動し、コックピットハッチが閉じる。

「動いた……」

「すげえぞー！シンク！」

ロイドは興奮気味にシンクにヘッドロックをかける。

「興奮してる場合じゃないわよ。次はどうすんのよ？」

「そうだな……シンク、その辺のスイッチを押してみろ。」

「大丈夫なの？」

「大丈夫だろ……変なところを押したら警告とかが出る筈だから。」

あまりにもフォローになってないロイドの言葉を呆れつつもスイッチを押していると、コックピット内の周囲がクリアになり、外の様子が映し出された。

「次は……レバーを握ってペダルでも踏んでみる。」

「分かった……」

シンクが指示通りにすると、リベリオンRからGN粒子が噴き出して、機体が起き上がるのがコックピットの動きで体感出来る。

「凄いじゃない。たまにはロイドのMSオタクを役に立つじゃない。」

「MSってのは大抵は動かし方は同じだからな。」

ロイドがそう胸を張っているとリベリオンRは半身を起き上がらせる。

そして、寝かされていた台から降りて立ち上がる。

「フウ……」

シンクはレバーを強く握り締めて、一息ついてレバーを動かす。

すると、リベリオンRはゆっくりと第一歩を踏み出す。

それは新たな<sup>リベリオン</sup>反逆が動きだした瞬間だった。

## Mission 29 受け継がれる物

「これで…あらかた片付いたか……」

ルビー専用のGN-X？はGNバスターソードでガントミーを両断する。

「あれは……」

ガントミーを破壊すると、リトルガーデン内に設立されている学校の校庭が開き、下から赤いMSが出て来る。

「テストメントの増援か……違う…あのMSは……リベリオンなのか？」

地下から出て来たのは真紅のMS……リベリオンR。

「地上に出て来たの？」

「下に降りて上がれば、地上だろうよ。」

「とにかく…この状況を何とかしないと……」

地下でリベリオンRに乗り込んだシンク達は地下でリベリオンRが通れる道を進んでいたら、地上へと出る事の出来るリフトで地上に出て来ていた。

「ちょっと！シンク！何か来てるわよ！」

ミリイが叫び、モニターにはマシンガンを放ちながら、ガントミーがリベリオンRに向かって来ていた。

「何とかならないの!」

「シンク!何か武器はないのか?」

「分からないよ!」

シンクがコンソールを適当に操作するが、武器らしい物が見つからない。

それもその筈である。

現在のリベリオンRは武装していない。

「何でも良い!適当に押せばどうにかなる!」

「またそれ!」

シンクが言われた通りにレバーについているボタンを押すとリベリオンRの頭部からGNバルカンが放たれる。

「バルカンかよ!」

バルカンは見当違いなところに飛び、ガントミーのマシンガンがリベリオンRに直撃するが、リベリオンRの装甲は無傷だった。

「何ともない……!」

「あの機体は多分、量産性を重視してるから、攻撃力が低いんだ。行けるぞ……シンク！」

「うん……」

シンクはフットペダルを踏むと、リベリオンRの背部のスラスタからGN粒子が噴射されて、リベリオンRは舞い上がる。

そして、ガントミーにバルカンを放つ。

「当たらない！」

「相手をロックしてないんだ！」

バルカンはガントミーに当たる事は無いが、別方向からの粒子ビームでガントミーは破壊される。

「そのMS……聞こえるか…所属と姓名を言え。」

モニターにはライフルモードのGNソードを構えていたルビィ機がリベリオンRに接近していた。

「連邦のGN-Xだ……」

「助かったの？」

「多分な……」

ルビィ機と回線を繋ぐとロイドが事情を説明して、リベリオンRはヴィクトリアへと移送された。

「艦長……あの少年達が言っていたところから、あの機体の武装と予備パーツと思われる物を発見したそうです……どうします?」

何とか、テストメントを退けた我々は、あの子供達が赤いMSを見つけたと言っていた施設に捜索隊を出している。

テストメントもすぐに第二波を送って来るとは考えにくい。

「回収させる。」

今の我々には戦力が不足しているから、あのMSを戦力として運用出来れば良いが……

「それで……あの赤いMSのデータは取れたのか?」

俺がそう言つとフリムが整備班からの報告を確認している。

「それがですね……あのMSがウォーカー中将のリベリオンの系統の機体だと言う事は分かったんですが……機体のメインシステムがまったく反応がないみたいなんですよね。」

だが、アールムの報告ではあのMSを子供達が動かしていたと聞いている……

「恐らくは、バイオメトリクス認証がかけられていると思われるそうです。」

「解除は可能か？」

「無理だそうです。」

つまり……あの赤いMS……便宜上リベリオンとしておくが、リベリオンをこちらの戦力として使う事は出来ないと言う事が……

「一体……どこで作られたんでしょうね。」

「考えられるのはソレスタルビーイングか……」

出所は分らんが、あそこならMSを開発する資金と技術を持っていてもおかしくは無い。

あのリベリオンから出ていたGN粒子はガンダムのGN粒子と同じだったからな。

「でも、それって……」

「ああ……条約違反だな。」

ソレスタルビーイングの所有出来るMSはガンダムに限られている。

尤も……そのソレスタルビーイングはテストメントによって壊滅させられているから、今更だな……

「今はそんな事はどうでも良い。問題は子供達の処遇か……」

「コロニー内の住人は脱出ポッドですでに脱出をしています。です



が……今から、ポッドまであの子達を送って行くと……」

「確実に敵の攻撃を受けるな……」

連中はコロニーに対して勧告も無く攻撃して来たんだ。

民間人の脱出ポッドが近くにあっても平気で仕掛けて来るだろう。

そうならば、守り切るのは不可能か……

「かといって、あのMSで出て行けって言う訳にも行きませんしね……」

「どちらにせよ……暫くはヴィクトリアに乗艦して貰うほかないか……」

「成程……少しは出来るようだな。」

ガントミーを40機程差し向けてみたが、それを退けたか……

「ですが、敵の戦力を把握することは出来ました。ルギアム様」

艦のメインモニターにガントミーのカメラから得た戦闘の様子が映し出される。

指揮官用のGN-Xが二機、一般兵用のGN-Xが二機……

4機とも、カスタムがされているが、所詮はGN-X……俺が出るまでもないか……

「それと……このような機体の映像も……」

「ほう……」

モニターに映された赤いMS……

「リベリオンか……」

リベリオン……連邦における最強のMSの名称。

もっとも、そのパイロットはすでにこちらの手に中だと聞いている。

「どうしますか？ローザ様の増援を待ちますか？」

ローザ……あの女か……

女の癖して俺よりも上のナンバーを持っている。

アイツの事は前々から気に入らなかつたんだ。

良い機会だ。俺とアイツのどちらが上かこの際、はっきりとさせるのも悪くない。

「ナベリウスを出す。」

「ルギアム様自らお出になるのですか？」

「そうだ。何か問題があるのか？」

リベリオンとは言え、所詮は人間だ。

この俺の敵じゃない。

だが、リベリオンを仕留めたとすれば、俺の地位も上がると言っただけだ。

1年前にまんまとガンダムに逃げられた間抜けな女とは違つと言つるところを見せてやる。

「了解しました。残りのガントミーを準備させます。」

さあ……この俺を楽しませて見せるよ……リベリオン。

「すつげえな……本物の軍艦の中にいんだぜ！」

「少しは落ち着きなさいよ。」

僕達は今、連邦の軍艦に保護されている。

「良いだろ。別に……なあ、シンク？」

「そうだね……」

状況が状況だけにMSを勝手に動かして戦闘をするのは不味いと思うんだよね……

「元気そうだな。」

ロイドがはしゃいでいると、聞き覚えのある声がする。

確か……僕達をここまで連れて来てくれたMSのパイロットの人の声だ。

「ええっと……」

「ルビィ・アールム中尉、ヴィクトリアのMS隊の副隊長をしている。」

ルビィさんはそう言った。

「いきなりの戦闘で少しは参っていると思っていたが、元気で何よりだ。」

「そんな事ないっすよ。これでも一杯一杯なんすから。」

とてもそんな風には見えない。

「それで……あのMSを動かしていたのは？」

「……っすよ。」

ロイドはそう言い、僕の背中を思いっきり叩いて、僕はルビィさんの前に出される。

「どうも……」

「君が……」

ルビィさんがマジマジと僕を見る。

……凄く恥ずかしいよ。

「シンク・ウォーカーです……」

とりあえず、僕も自己紹介をしておいた。

「ウォーカー？」

「そっなんすよ。こいつ、あのアベル・ウォーカー中将の息子なんですよ。」

「成程……それなら、MSを動かした事も頷ける……」

僕はお父さん程、MSの操縦が上手い訳じゃないよ。

ロイドと良く行くゲームセンターのシュミレーターのゲームでも負けてばかりだし……

幾ら、イノベーターだってMSの操縦が上手い訳でもないと思うんだよな……

「それで…僕達はこれから、どうなるんですか？」

「君達には悪いが、暫くはヴィクトリアに乗っていて貰う事になりそうだ。」

「やっぱり……」

「だが、安心してくれ、君達をどうこうするつもりはない。あくまでも保護をするだけだ。ここで下しても危険なだけだからな。せめて安全なところまで送り届けると艦長から聞いている。」

「そうですか……」

少なくとも、ロイドやミリィを危険な目に合わせる事も無くなるかな……

「総員に告げます。第一種戦闘配備！繰り返します。第一種戦闘配備！」

警報とともに艦内にそう響き渡る。

第一種戦闘配備……戦闘になるって事？

「戦闘になるんですか？」

「そのようだ。君たちはノーマルスーツに着替えて艦の中央に向かってくれ。」

ルビィさんはそう言って部屋から出て行く。

「仕掛けて来たか……敵の数は？」

リベリオンRの物資を回収を終えていたヴィクトリアはリトルガーデンの宇宙港から出航していると、テストメントのガントミーが立ちふさがっていた。

「目算で役50機、増援の可能性あります。」

「その中に見確認のMSが！」

モニターには両腕に巨大なシールド状の武器を持つ、ツインアイを採用し、大量のGN粒子を放出している機体「ナベリウス」が映されている。

「何だ……あの機体は……」

「どうします……艦長？量産機はともかく、あの機体の速度では振り切れません。」

フリムがそう言い、ラディウムは考え込む。

すでにヴィクトリアの戦力でガントミーを50機と戦うのは難しい。

その上で見確認のMSまで出て来ている。

しかし、ナベリウスの機動力を振り切る事は出来ない。

となれば、出来る事は限られて来る。

「MS隊を出せ！あの見確認機をウエルキンとアールムに仕留めさせる！ヴィクトリアは最大速度で宙域から離脱する！」

ヴィクトリアからMSが射出されると戦闘が開始される。

「ルイ、先制攻撃だ。」

「了解です。隊長」

ルイ専用のGN-X？がGNバズーカを放ち戦端が開かれた。

ルキノ専用のGN-X？キャノンがGNスナイパーライフルで攻撃を開始して、アスカ専用のGN-X？とルビィ専用のGN-X？がナベリウスに向かっていく。

「あの新型を落とすぞ。」

「分かっている。」

アスカ機がGNビームライフルでナベリウスを攻撃し、ナベリウスは腕に装備されているサーベラスで防ぐ。

「ちっ……雑魚が二機か……リベリオンを出せよ！」

ナベリウスはサーベラスに内蔵されているGNキャノンで二機を攻撃して、二機は散開して回避する。



「こちらは二機だ。挟みこむぞ。」

アスカ機はGNビームトンファアを展開し、ルビィ機はGNソードを展開し、ナベリウスを挟みこんで斬りかかる。

「……つまらん戦術だ。」

ナベリウスはサーベラスで受け止めた。

「二人かかりなら、この俺と戦えると思っているのか！」

ナベリウスは二機を弾き飛ばす。

「なんて出力だ！」

アスカ機はビームライフルを、ルビィ機はGNソードのライフルモードで粒子ビームを放つが、ナベリウスには効果がない。

ナベリウスはサーベラスを開閉させて、ルビィ機に接近し、ルビィ機はGNバスターソードで対応しようとするも、ナベリウスのサーベラスはルビィ機のバスターソードをまるで噛み砕くかのように碎いた。

「化け物が！」

ルビィ機は後退しながら、GNソードのライフルモードでナベリウスを牽制するも、ナベリウスは気にする事無く、蹴り上げて来る。

ナベリウスの足の先端からビームサーベルが展開して、ルビィ機の

左腕を肩から切り落とした。

「ルビィ！」

アスカ機はナベリウスにGNミサイルを一斉掃射して、ナベリウスはルビィ機から離れてバルカンでGNミサイルを迎撃する。

そして、アスカ機はビームサーベルを抜くと、ナベリウスに斬りかかり、ナベリウスはサーベラスで受け止めた。

「さっきからこの船揺れてばかりじゃない！」

戦闘が開始されたのか、船が何度も揺れている。

多分、敵の攻撃で被弾したんだと思う。

「大丈夫なのかよ……この船……」

ロイドが心配そうにそう言う。

流石にロイドもこの状況では落ち着く事は出来ないんだね。

だけど……その反対に僕はなぜか、冷静でいられる。

どうしてだろう……

「沈んだりほしないよね……」

「わかんねえよ！そんな事！」

何となくわかる。

このままでは、この船が沈む……

理由も確証も無いけれど、漠然とそう感じるんだ。

……どうしよう。

このままじゃ、僕もロイドもミリィも艦の人達も死んじゃう。

そんなのは嫌だ……

こんな時……お父さんなら……

「行かないと……」

「シंकク？」

「行かないと……」

こんな時、お父さんなら迷わない。

「隊長達はまだ落とせないの！」

ルキノ機はGNスナイパーライフル？を三連バルカンモードに切り替えて応戦し、ルイ機もGNフィールドを展開して、腕のGNサブマシンガンで応戦している。

「艦長！敵MSが来ます！」

「迎撃しろ！取りつかせるな！」

ヴィクトリアの主砲が火を噴き、射線上のガントミーを破壊する。

「くそっ！数が……」

「艦長！格納庫より通信が！」

「艦長、例の子供がリベリオンで出るって言ってますが……どうします？」

格納庫からの通信で劣勢で頭を悩ませているラディウムを更に悩ませる。

「何だと……」

「お願いします。僕を出させて下さい。」

モニターには整備班長以外にシンクも映し出されている。

「班長……リベリオンは戦えるのか？」

「一応、武装はしておきましたが……」

「良いだろう。許可する。」

ラディアムはそう言い、一方的に通信を切る。

「良いんですか？民間人の少年を戦いに出しても……」

フリムは少し避難の視線をラディアムに向ける。

「知るか。自分で出ると言いだしたんだ。俺の責任じゃない……それにこの状況だ。英雄の息子にあやかれるなら、あやかりたい……」

「艦長……」

「何をグズグズしているんだ。早くリベリオンの出撃の準備をさせる。MS隊にも連絡を入れてフォローをさせるよ。」

「了解です。」

フリムはそれ以上、言う事は無かった。

「操縦方法は分かってるな？」

「大丈夫です。一度動かしてますから……」

ヴィクトリアのカタパルトに移動するまで、シンクは格納庫からの

整備班長と通信で軽く操縦の説明を受けている。

連邦製のMSとソレスタルビーイング製のMSはコックピット内の内装は違うが、元を正せばどちらもコリック社製なため、基本的なシステムは変わらない。

そのため、何も説明をしないで戦場に出すよりかは、生存率が上がると整備班長は考えており、時間が許す限り、シンクにレクチャーしていた。

「ビームマグナムは弾数制限は厳しい。むやみに撃つなよ。」

「はい」

「連中は無人機を使っている。落としても人は死なん。躊躇うな。」

「はい」

シンクは強くレバーを握り締めて、返事をしていると、リベリオンRはリニアカタパルトに到着した。

「やれる……僕はやれる。僕はお父さんの息子だ……やれるはずだ……」

シンクは自分に言い聞かせるように何度もそう呟く。

「リベリオン、発進準備完了……」

「了解……」

シンクはしっかりと目を開いてカタパルトハッチが開閉し、外の宇宙を見る。

そこにはいつもの、気弱な少年の面影は無い。

「リベリオン、シンク・ウォーカー……行きます!」

シンクの言葉とともにリベリオンRは射出された。

「何？戦闘をしているだど？」

ルギアムへの増援のガントミーを運んでいる私にもたらされたのはルギアムが連邦の戦艦に仕掛けたとの報告だった。

ルギアムは先刻、コロニーに対して無勸告の攻撃をしている。

我々はテロリストではない。

その様な事が許される訳がない。

そのため、ルギアムは当分、私の指揮下に入る事になっている。

「早まった真似を……」

あの男はやり過ぎる。

我々の目的の為に多少の血が流れるのは致し方がないが、あの男は必要以上に血を流すところか、望んで血を流す節がある。

「ローズ様……如何しますか？」

相手が連邦である以上は咎める事でもない。

しかし、ガントミーからの映像であの戦艦にはソレスタルビーイングが開発したと思われるリベリオンを搭載している可能性が高い。



ドクターはソレスタルビーイングの開発した新型のGNドライブに興味があるらしく、その回収も私の任務だ。

あの男なら、回収するどころか破壊しかねん……

「ローゼンクロイツァーを出す。」

ならば、私自ら出向くしかあるまい。

ルキノ専用のGN-X？キャノンがGNキャノンでガントミーを吹き飛ばし、ルイ専用GN-X？がGNフィールドでヴィクトリアへの攻撃を防いでいる。

数は半数近くまで減らす事が出来たが、二機もGN粒子を大量に消費しているため、粒子ビームの威力もGNフィールドの出力も目に見えて落ちている。

「隊長達はまだなの……」

「隊長と副隊長の二人がかりでも落とせないの……」

ルキノとルイは極度の緊張と疲労、機体の粒子残量から次第に諦めムードになって行く。

しかし、ヴィクトリアの方向からの粒子ビームがガントミーを薙ぎ

払う。

「あれって……」

ヴィクトリアからはリベリオンRが出撃しており、GNビームマグナムを構えている。

「これには人が乗ってないだ……乗ってないんだ。」

リベリオンRはビームマグナムを仕舞うとビームサーベルを抜いてガントミーを切り裂く。

「だから……僕は！」

TGNドライブを搭載しているため、通常のMSよりも大量のGN粒子を放出しているリベリオンRは目にもとまらない速さでガントミーを破壊していく。

「凄……」

「この機体……動く……」

リベリオンRの中でシンクはリベリオンRが自分の手足のように動く事を実感していた。

「これなら……行ける。みんなを守る事が……出来る！」

リベリオンRはガントミーの大半を落とすと、GNビームマグナムを持ち構える。

そして、シンクはアスカ機とルビィ機と交戦しているナベリウスにGNビームマグナムを構えて引き金を引く。

「ちい！」

二機と交戦していたナベリウスはリベリオンRからの攻撃をかわす。

「ようやくお出ましか！リベリオン！」

ナベリウスはサーベラスでアスカ機を弾き飛ばすと、二機に興味を失ったかのようにリベリオンRに向かう。

「あの機体からは……気配を感じる………だけど！」

リベリオンRはナベリウスにビームマグナムを連射するが、ナベリウスは回避する。

「良いなあ！そうでないとなあ！」

ナベリウスはサーベラスに内蔵されているGNキャノンで応戦すると、リベリオンRはシールドで防ぎ、ビームマグナムのカートリッジを換装する。

「お前を仕留めればなあ！」

ナベリウスはサーベラスを展開し、リベリオンRに喰らいつこうが、リベリオンRはかわして、腰のGNビームザンバーを抜いてナベリウスに斬りかかる。

「何でこんなこと!」

リベリオンRの一撃をナベリウスはサーベラスで受け止める。

「俺も上に行けんだよ!」

ナベリウスは足の先端に装備されているビームサーベルを展開して蹴りかかり、リベリオンRはシールドにアンチフィールドを展開して攻撃を受け流す。

「もう止めるよ!」

リベリオンRはそのまま、ビームザンバーをナベリウスの肩に突き刺す。

「てめえ!良くも!」

ナベリウスの右腕はそのまま、破壊されるが、ナベリウスは左のサーベラスでリベリオンRに攻撃しようとする、リベリオンRとナベリウスの中に粒子ビームが割り込む。

「ああん?」

「もう一機!」

そして、更に粒子ビームがリベリオンRを襲い、リベリオンRはシールドで防ぎながらナベリウスとの距離を取る。

「引け」

「ふざけんな！こいつは俺の獲物だ！」

ルギアムはローズからの命令に対して噛みつく。

「私は引けを命じている。貴様に拒否権は無い。」

しかし、ローズはそう切り捨てる。

「私の邪魔をするという事は敵とみなして排除するぞ。」

「……ちっ」

ルギアムは納得がいかないが、ローズの反論を許さない口調でそれが、ハツタリで無い事を理解しているため、素直に撤退を開始する。

「それで良い……さて…私は私の任務を遂行させて貰う。」

ローゼンクロイツァーはリベリオンRにGNロングキャノン？を構えて放つ。

以前にソレスタルビーイング戦に投入されたローゼンクロイツァーは武装が未完成だったため、最低限の装備で出撃したが、この1年で武装も完成して完全な状態で出撃して来ていた。

「この機体……さっきのより強い……」

リベリオンRはシールドでローゼンクロイツァーの攻撃を防ぐ。

「お前に搭載しているGNドライブを奪わせて貰う！」

ローゼンクロイツァーは背部のレーヴァティンを抜くと、リベリオンRに突っ込む。

リベリオンRはGNバルカンで応戦するが、ローゼンクロイツァーは回避してレーヴァティンを振う。

「強い！」

リベリオンRも辛うじて、ビームザンバーで受け止めた。

「何だ……」

「この感じは……」

二機がぶつかり合った瞬間に二人の脳量子波が干渉し合うが、二機がすぐに離れた上、戦闘中の為に二人は気にする事なく戦闘は継続される。

「11のー！」

リベリオンRはビームマグナムを持ち、ローゼンクロイツァーを攻撃するが、ローゼンクロイツァーは回避して接近すると、レーヴァティンを振う。

リベリオンRはその一撃をかわして、ビームマグナムで反撃する。

それを二機は何度も繰り返す。

「逃げの一手か……だが、この私から逃げられると思うなよー！」

リベリオンRはビームマグナムで攻撃しているが、ローゼンクロイツァーはかわしている。リベリオンRのビームマグナムの残弾が無くなり、カートリッジを換装する隙にローゼンクロイツァーはレーザーテインを振う。

「躊躇ったら駄目だ。躊躇っていたら負ける……」

リベリオンRはトランザムを起動させると赤く発光をする。

「このタイミングでトランザムか……逃げの一手を打っているには思い切りの良い。ならば！トランザム！」

ローゼンクロイツァーもトランザムを起動させると、赤く発光した二機の機体は高速でぶつかり合う。

ローゼンクロイツァーはレーザーテインで、リベリオンRはビームザンバーで何度もぶつかり合う。

「やるな……本当なら一騎打ちをしたいところだが……私には任務があるのでな……先に言っておく。無粋な真似をして済まない。」

ローズはリベリオンRと通信を繋いでいる訳でもないが、そう言う。

そして、リベリオンRがローゼンクロイツァーにビームザンバーを突き出す。それがローゼンクロイツァーに突き刺さる事は無かった。

シンクは目の前のローゼンクロイツァーに集中していた上に無人機でイノベーターでも気配や殺気を感じ取る事の出来ないガントミーガリベリオンRの周囲を囲んでいた。

リベリオンRを囲んだガントミーは一齐にリベリオンRに取りつくと自爆していく。

「うああああ！」

ゼロ距離での爆発の衝撃をシンクはもろに受けている。

「GNドライヴさえ、無事ならば機体とパイロットはどつでも良い……」

爆風が終わると、リベリオンRが力なく宙を漂っている。

「ほう……以外と頑丈に出来ている。」

ローズは感心しながらも、リベリオンRを掴むと後方に控えている母艦へと連れて行くこととする。

「行かせるか！」

それを見ていたアスカ機はローゼンクロイツァーにビームライフルを放って追撃する。

「お前たちの相手までは任務に含まれていない。命拾いしたな。」

ローゼンクロイツァーは残っていたガントミーをその場に残していくと、今度こそリベリオンRを母艦に連れて行く。

「くそ！」



アスカ機はローゼンクローツァーを追おうとするも、ガントミーの捨て身の攻撃に対応するのが精一杯で追撃することが出来ない。

「粒子残量が……」

「ここは引くぞ……」

アスカ機にルビィ機が通信を繋いでそう言う。

「しかし！」

「この状況で追っても何も出来ない……今は引いて体勢を整える。」

アスカはルビィに反論しようとするが、ルビィの言い分の方に理があるため、反論出来ない。

「……済まない。」

「良しさ……お前が馬鹿を仕出かさないようにフォローするのが私の役目だ。」

アスカ機とルビィ機はガントミーを破壊しながら、ヴィクトリアへと帰還していく。

「っ……」

僕が目を覚ますと、知らない場所で寝ていた。

確か……僕はリベリオンで出撃して……

赤いMSと戦ったんだ。

そして……

「起きていたのか。」

僕が考えていると声がする。

「あの衝撃で生きていたとはな。見かけによらずタフなのだな。」

声の方向を向くとそこには女の子が腕を組んでいた。

真っ赤な長い髪と真っ赤な目をしていて、年は僕よりも少し上かな  
……

「君は……」

「人に名を訪ねる時は自分から名乗るのが筋ではないのか？」

確かに……

「シンクです。シンク・ウォーカー」

僕は彼女に言われた通りに名乗る。

すると、彼女は少し驚いていたが、すぐに引き締まる。

「成程な……そう言う事なら得心も行くな。」

彼女は一人で納得しているみたいだけど……

一体何を納得したんだろう。

それに……

「あの……」

「これは失礼した。私はローズ・ローゼン、君と戦ったローゼンク  
ロイツァー……赤いMSのパイロットと言えば分かるか？」

赤いMS……あのMSに乗っていたのがローズさん……

つまり、ここはテストメントの……

「案ずるな。捕虜の扱いに関してはそちらの流儀に乗っ取る。手荒  
な真似をするつもりはない。」

僕達のコロニーを攻撃した人たちの仲間だけど、不思議をローズさ  
んの言葉をすんなり信じる事が出来る。

「重傷でないにしろ、負傷している。今はここで休んでいる。逃げ

ようとしなければ、けが人として扱つように言つてある。」

そう言えば、体のあちらこちらが痛いな……

「済みません……」

「ではな……」

ローズさんは出て行き、僕は再び横になる。

どうしよう……あの船の人たちはどうなったのかな？

今の僕にはどうすることも出来ない。

「如何でした？リベリオンのパイロットは？」

私がブリッジに戻ると部下がそう言う。

「私を相手にあそこまで戦つたパイロットには見えんよ。」

そう……あの少年、シンクは強くは見えなかった。

しかし、私を相手に戦えた事も事実。

恐らくは才能か……

ファミリーネームから考えるに、あのアベル・ウォーカーの血縁の

者である可能性がある。

それならば、天性の才を持っていても不思議じゃない。

「ローズ様、ルギアム様から通信が……」

まったく……五月蠅い奴からの連絡が来たか……

「繋げ」

だが、無視をしたら何を仕出かすか……

「おい！どういう事だ！リベリオンを鹵獲しただと！」

「耳が早いな。」

どこから聞きつけたんだか……

「そんな事はどうでも良い！納得のいく説明をしろ！」

「お前を納得させる必要はない。」

ルギアムが納得をしようとしまいと、関係ない。

私は私の任務を遂行したのみだ。

「ふざけんだよ！」

「吠えるな。弱く見えるぞ。」

相手を恫喝して威嚇する。

それは自分が相手よりも弱者だと認めているようなものだ。

弱いから相手よりも強く見せたがる。

もつとも、私はルギアムよりも上位に位置しているからルギアムの行動はあながち間違いではない。

「その辺で黙れ……お前は黙って指示に従って行動すれば良い。俺がお前の役目である事を忘れるな。」

「ちっ……」

「お前は当分、私の指揮下で行動して貰う。拒否は認めない。」  
我々は上からの指示に従えば良い。

そのための我らナンバーズなのだから。

「……分かったよ。だが、戦えるんだよな？」

「無論だ。お前の能力だけは認めている。」

やり方はともかく、こいつの能力は認めざる負えないからな。

「なら良い」

ルギアムはそう言い一方的に通信を切る。

「まったく……騒々しい奴だ。」

「ですね……ローズ様、鹵獲したリベリオンのデータがおおよそ取れたそうです。」

「そうか……データを出してくれ。」

私がそう言いモニターにデータが映し出される。

「ほう……」

「なかなか興味深いデータですよ。」

格納庫から技術班長がそう言う。

「この機体のGNドライブは一基でツインドライブに相当する粒子量を放出出来る見たいです。」

「詳細なデータは取れそうか？」

「無理ですね。ここの設備では……一応データを取りましたが、実物を解体してみないと量産は難しいかと……」

流星はソレスタルビーイングと言ったところか……

独自にその様な物を作るとはな……

それだけに残念だ。

道を誤ってしまうとは……

道さえ間違っ事がなければ同士になれた物を……

「そして、この機体の性能もかなりの物ですね。第6世代のガンダムよりも、かなり高性能ですよ。パラディオンには完全に劣ってますが、ローズ様のローゼンクロイツァーよりも少し下ってところですかね。」

ローゼンクロイツァーよりも下……ならば、ルギアムのナベリウスを圧倒出来ても不思議じゃない。

しかし……私のローゼンクロイツァーよりも機体性能の低い機体で私と互角に戦ったと言う事が……

つまり、それは単純にパイロットとしての能力で私が劣ったと？

シンクの才能はそれ程と言う事が……

「ですけど、この機体構造に関してはほとんど分かりませんでしたよ。」

「どういう事だ？」

「この機体の構造は独自過ぎて簡単に手が出せませんでした。下手に手を出して、壊すとデータの収集に支障が出る可能性もありますから……」

あのリベリオンにはまだ、何か隠されていると言う事が……

シンクの才能と言い、今の内に回収出来て良かったのかもしれないな



……

「分かった。出来る範囲で構わんから、データの収集を頼む。」

「了解です。」

そして、格納庫との通信が切れる。

「ローズ様……」

「何だ？」

「姫様がお部屋にいらっしやらないようで……」

あのお転婆が……

また、勝手に部屋を抜け出したのか……

まったく……しつこいから仕方がなく艦に乗せてやったと言つのに……

「如何します？」

「放っておけ……どの道、この艦から出る事は出来んのだ。好きにさせておけ、気が済んだら部屋に戻るだろう。」

どうせ、無理に連れ戻したところでアレは勝手に抜けだす。

ならば、好きにさせてお行けば良い。

当然、戦闘になる事もないだろうしな。

「やっぱり駄目だ……」

ローズさんが出て行ってから、僕はここを抜けだそうとしてたけど、やっぱり無理だった。

やっぱり、専門の訓練を受けてない僕では抜けだす事が出来ないみたい。

当然の事ながら、扉にはロックがかけているし、宇宙船だから、窓も無い。

だから僕に抜け出せる事は出来ない……

ロイドやミリイや船の人達の無事も分からないし、ローズさんは僕を捕虜と言っていた。

つまりは、僕にまだ利用価値があると言う事だね。

「どっしり……」

僕が考えていると、扉が開く。

しかし、扉が開いているのに誰も入ってこない。

僕がそう思っていると、ひょこつと女の子の顔が扉の影から出て来

る。

ローズさんと同じ赤い髪に赤い目……少しローズさんと似ているけれども、年は僕とそんなに変わらないように見える。

「あの……捕虜の方でしょうか？」

女の子は僕にそう言う。

「そうだけど……」

僕は軍人って訳ではないけれど、ローズさんは僕を捕虜だと言ったから間違いないと思う。

「そうですか！」

僕がそう言うのと女の子は顔を輝かせた。

「貴方を探していたんですよ。この船は大き過ぎて道に迷いましたし……でも、見つける事が出来て良かったです！」

女の子は一人ではしゃいでいる。

とりあえず、分かった事はこの子は僕を探していた？

「あの……」

「御免なさい！私はシレーヌと言います。貴方は？」

「シंक……です。」

なぜ、自己紹介になったのか良く分からないけれど、向こうが名乗ったから、僕も名乗る。

「では、シンク……改めてお願いします。」

シレーヌさんは僕とすっかり向き合って、先ほどまでとは少し雰囲気が違う。

「私と駆け落ちして下さい。」

あまりにも真剣な表情をしていたが、僕はその内容の唐突さになんて返事をすれば良いのか分からなかった。

駆け落ち？

流れるに僕とシレーヌさんが？

「……駆け落ちですか？」

「はい。駆け落ちです。」

僕の聞き間違えでは無いみたい。

「どうして……僕となんですか？」

「貴方はここから逃げたくは無いですか？」

「そりゃ……」

ここに居れば、あの船の人に迷惑がかかるかも知れない。

そんなのは嫌だ。

「私は貴方のMSが置かれているところも知ってます。」

「どうして、君は僕を逃がしてくれるの？」

この船で自由に動けると言う事はローズさん達の仲間の筈……

だったら、捕虜の僕を逃がすのは不味いと思うんだけど……

「私もこの船から出たいんです。だけど、出れません。けど、シンのMSがあれば、ここから出る事が出来ます。」

シレーヌさんは僕を逃がす代わりに自分もここから出たいって事だね。

それなら納得がいく。

「ですから、シンク……私と駆け落ちしてください。」

なぜ、駆け落ちになるのかは分からないけど……

でも……これはチャンスかも知れない。

「分かったよ。」

もう迷ってはられない。

僕はみんなのところに帰るんだ。

部屋を抜け出した僕とシレーヌさんはリベリオンのおいてある格納庫を指している。

不思議と艦の人とは鉢合わせにならない。

「あの……シレーヌさん、聞いても良いですか？」

「何ですか？それを私の事はシレーヌで構いません。それに敬語も必要ありません。」

「分かった。どうして、シレーヌはここから出たいの？」

見たところ、僕と同じで捕虜と言う訳でもないし……

「私は作られてから一度も外を見た事がないんです。」

「外を？」

「はい。私はテストメントの中でも特殊な個体らしく、代えが利かないので損失しないように嚴重に保管されていました。」

薄々気が付いていたけど、シレーヌはイノベイド……

「しかし……計画が動きだして、私は外の世界が見たくなりました。でも……周りはそれを許してはくれませんでした。なので、私は飛び出す事にしたんです。」

凄いな……

僕には真似できない事だ。

「分かった。行こう」

「はい！」

そして、僕達は無事に格納庫に辿りつく事が出来た。

「誰もいない……」

格納庫の中を覗いて僕たちは中の様子を窺うが、格納庫には誰もいないみたいだ。

「ガントミーは無人機ですし、戦闘中に不備が起きても構いませんので、整備は必要最低限しか行われてません。なので、格納庫に常時誰かがいる訳ではないのです。」

「成程……」

確かに…僕との戦闘でも特攻させてたから、あの機体は使い捨てが前提なんだろう。

「行きましょう。」

中に誰もいない事を確認すると、僕とシレー又はリベリオンへと乗り込んだ。

「何だと？間違いないのか？」

「間違いありません。」

シレーヌの次はシンクが部屋を抜け出したらしい。

やられたな。

大人しそうだったから、部屋をロックするだけで監視をつけていなかったのが仇となったか……

「奴は恐らくMSを奪う筈だ。格納庫の隔壁を閉鎖しろ。」

MSさえ奪わせなければ、この艦内では袋のねずみだ。

「ローズ様！捕虜はすでにMSに！」

「何だと！」

馬鹿な……

この船の大きさは相当な物だ。

それこそ、MSの格納庫を見つけるのも至難の業と言える。

偶然か？

どちらにせよ、シンクがMSに乗ったと言う事実は変わらない。



「ハッチを開ける！」

「よろしいので？」

「構わん。破壊されるよりはマシだ。」

逃げるとしたら、ハッチを破壊していくのが一番簡単な方法だ。

すでにシンクはリベリオンに乗っている。

だから、ハッチを破壊して逃げる事は造作も無い。

「すぐに私のローゼンクロイツァーの出撃準備をさせる！」

シンクを相手にこの間に搭載されているガントミーでは荷が重い。

時間がかかれば、連邦の戦艦がこの機に乗じてシンクとリベリオンの奪還に動く可能性が高い。

ルギアムのナベリウスの修理が終わらない以上、戦闘は得策では無い。

ならば、私が出るのが一番手っ取り早い。

「どこに向かっているのですか？」

テストメントの戦艦から抜け出したリベリオンRの中でシレーヌが  
そう言う。

「僕を保護してくれた連邦の戦艦を目指している。連邦の戦艦だけ  
ど、良い人ばかりだと思うから、君の事も悪い様にはしないと思う  
……………」

「構いません。私も連邦軍の軍人をこの目で見たいと思ってますか  
ら………… 本当に淘汰されないといけない人たちなのか……………」

「分かった。」

二人が話していると、不意に背後から気配を感じて機体を動かすと  
粒子ビームが横切る。

「追って……………」

「逃げた癖にずいぶんとのんびりしたもんだな。」

「ローズさん……………」

ローゼンクロイツァーはGNビームキャノン？を戻すとリベリオン  
Rの前を取り、レーヴァテインを抜いて切りかかる。

「逃げた以上、少し痛い目を見て貰うぞ！」

ローゼンクロイツァーは切りかかり、リベリオンRはビームトンプ  
アーを展開して受け止める。

二機は距離を取るとローゼンクロイツァーは右腕のビームライフルを放ち、リベリオンRはシールドで防ぐ。

「くっ……ローズさん……」

「止めてください!」

「なっ……シレーヌか!」

二機が交戦していると、シレーヌがリベリオンRのオープンチャネルを開く。

「もう止めてください。お姉さま。」

「お姉さま?」

「なぜ…お前がそこにいる。」

ローズは思わぬ相手が出て来て、同様するがそれを隠して問う。

「私に頼んで、連れ出して貰いました。」

「どついう事だ?お前は自分が何をしているのか分かっているのか?」

「分かっています。私は私の目で世界を見たいと思っています。世界は本当に間違ってしまったのか……私はそれを知りたいと思っています。」

シレーヌがそう言い、二機の戦闘が止まり、暫く沈黙が流れる。

「良かるう……」

ローズが沈黙を破り、レーヴァティンを収めた。

「お前の好きにしろ……ただし……中途半端では戻って来るなよ。」

「お姉さま……」

「行くならさつさと行け！」

ローズはそう言い機体をリベリオンRに背を向ける。

「シンク・ウォーカー……シレーヌに傷一つつけてみる……その時はお前を八つ裂きにしてやる。」

「分かりました……約束します。」

シンクはそう言い機体を動かしてその場を去る。

「……何をしてるんだろうな……私は……」

ローズはそう言い、機体を母艦へと帰投させる。

「現在、リベリオンを鹵獲したMSが帰還した戦艦は巨大構造物への帰路についている。」

戦闘が終わったが、結果は何とも言えない結果となっていた。

ヴィクトリアが沈まなかったが、その代わりにリベリオンが鹵獲された。

「艦長、少年の救出作戦は行つたのですよね？」

ウエルキンが俺にそう言う。

本音を言えば、このまま状況を立て直して戦力を補強したいのだが、民間人の少年に助けられてそのまま見捨てると言うのも軍人として大人として出来そうもないし、ウエルキンもその気である上にこの艦には少年の友人もいる。

見捨てるとは言えない空気だ。

「無論だ。しかし、現状の戦力でそれが不可能に近いのも事実だ。」

こちらの戦力はGN-Xが4機……しかし、アールムのGN-Xは先の戦闘で破損して現在は修理中だ。

実質的に動かせる機体は3機……それで、あいつらと戦うのは自殺行為だ。

「ですが……」

「落ち着け、艦長もやらないとは言っていない。」

「そうだ。連中はリベリオンを撃墜しないで、鹵獲した。」

あの状況で撃墜をしなかったと言う事はそれなりの理由があったからと考えられる。

あの機体は彼のバイオメトリクスが無いと起動が出来ないから、下手に殺される事は無い。

「つまり、シンクが無事である可能性がある」と艦長は言いたいんですね。」

「希望的憶測だがね。」

「となれば、やはりネットクは戦力不足か……」

そうなるな……敵はリベリオンを鹵獲出来る程の性能を持っている。

それを相手に3機で少年を救出する方法か……無理だろ。

そんな策を考え付けば、戦艦の艦長で収まっている訳がない。

「艦長！」

俺が考えていると、ブリッジに残していたマリアージュがブリーフイングルームに連絡を入れて来る。

これ以上の問題は御免だぞ……

「どうした？」

「それが……戻って来ました。」

戻って来た？

ひょっとして、テストメントが我々に止めを刺すべく、戻って来た  
とでも言うのか？

「敵の数は？」

「いえ…そうではなく…戻ってきたのはシンク君です。」

「何だと！」

その言葉にウエルキンが俺を押しどける勢いで通信が変わる。

「本当なのか？それは！」

「はい…すでに通信で無事を確認しています。」

どうやら、自分でどうにか出来たようだな。

頼りなさそうな感じの少年だったが、以外を喰わせ者だったのか？

まあ良い…どちらにせよ、戦闘は避けられたと言う事か……

「分かった。リベリオンを収容し次第、最大船速で現宙域を離脱す  
る。」

「了解です。」

「MS隊は有事に備えて機体で待機しておけ。」

「了解しました。」

リベリオンが逃げたとなれば、敵の追ってが来るかも知れない。

だったら、その前に逃げてやる。



Mission 31 自由への逃亡（後書き）

新キャラ設定

シレーヌ・ローゼン  
（CV 中原 麻衣）  
肉体年齢14歳（女）

ローズと同じ塩基配列パターンを持ち、製造順からローズの妹に当たる。

ナンバーズではないが、テストメント内で重要な位置付けでナンバーズ以外からは「姫」と呼ばれている。

博識だで行動力があるが、ずれた知識を披露することが多々ある。

Mission 32 東の間の平穩

「シンク！お前、無事だったのか！」

ヴィクトリアに戻り、僕とシレーヌはブリーフィングルームに案内されて、ロイド達と再会出来た。

「うん……」

「無事で何よりだ。こちらにも救出作戦を実行する手間が省けたよ。」

艦長さんがそう言う。

「それで……そちらの彼女は？」

「シレーヌ・ローゼスと言います。」

「彼女が僕を逃げ出す手伝いをしてくれたんです。」

僕はテストメントの母艦であった事を話す。

「成程……事情は分かった。君がテストメントで重要な位置付けである事は分かったが……一体、どのような役目を負っている？」

艦長さんはシレーヌにそう言う。

「分かりません。私はまだ知る必要がないと言われていましたので……」

「そうか……まあ良い。取り合えず、君の扱いはシンク達と同様で構わないかな？」

良かった……

シレー又はテストメント側の人だったから、どうなる事かと思っただけけど、これで一安心。

「私はこれで構いません。」

「シンク君も今後をどうするかは後で考えるとして、今はゆっくりと休むが良い。」

「はい。ありがとうございます。」

艦長さんはそう言い部屋を出て行く。

「良かったんですか？」

シンク君との話が終わり、ブリッジに戻る途中でマリアージュがそう切り出す。

「ああ言うしかないだろう。」

マリアージュの言いたい事はシンク君がテストメントから連れて来た少女の事だ。

敵のそれも重要は位置にいる彼女を野放しにする手は無い。

人質として十分な価値があるのは間違いない。

「下手にもめると彼が協力してくれなくなるかもしれない。」

こちらの戦力は厳しい。

今は少しでも戦力が欲しい。

例え、それが民間人の少年でもだ。

本人が自分の意思で協力をしてくれると言っているのだ。

それを下手に事を荒立てて非協力的になられたら敵わん。

「ですが……」

「なるようにしかならんさ……」

状況が最悪なのは今に始まった事じゃない。

今更、足掻いたところであるようにしかならんよ。

シレーヌが脱走して、私はその事の報告をしている。

流石に、報告をしないのは不味いが、所々は省いている。

「成程ね……それで君はみすみすシレーヌを連れ去られた訳か……」  
リボンは私にそう言う。

私の権限では直接ゼロに報告することが出来ず、その代わりにリボ  
ンズに報告をすることになっている。

「ああ…弁明のしようも無い。」

どんな理由があれ、シレーヌを行かせたのは私だ。

言い訳をするつもりは毛頭ない。

「君程のナンバーズがね……」

「返す言葉も無い。」

シレーヌがシンクとともに艦から脱走した事は完全に予想外の事態  
だった。

それに関しては完全に私の過失だ。

「どんな処罰も受ける覚悟だ。」

「その必要はないよ。ルギアムのナベリウスの修理が終わらない今、  
君を処分するのは戦力の低下に繋がる。僕に君を処分する気はない  
よ。その事に関してはゼロも同意見だ。」

「分かった。全力でシレーヌの救出を行う。」

そうなれば、少しは時間も稼げるだろう。

その間にシレーヌが外の世界とやらを見る時間が作れる。

「いや……その事はすでに手を打ってある。」

シレーヌの事を報告文で送ったのはついさっきの事だ。

すでに対策を取っただと？

一体何を考えている……

「君はこのまま、連邦の戦艦をトレースしてくれ。」

「……了解だ。」

いまいち納得がいかないが、命令である以上、従うしかないか……

「それで、僕達は何処に向かっているんですか？」

戻って少し休んだ僕達はルビィさんに今後の事を聞いている。

少なくとも、ロイドやミリィがこの艦に居る間は僕はリベリオンで戦うと決めた。

その後の事はまだ、考えてないけれど、今後の事はきちんと考えておかないといけない。

「我々は現在ラグランジュ3の方向に進路を取っている。」

ルビィさんは宙域図を出して、説明してくれる。

「どうして、ラグランジュ3方面なんです？距離的にラグランジュ2のコロニー国家の方が近いですよ。」

確かにロイドの言う通りだ。

ラグランジュ3へ行くには地球を超える必要がある。

それに引き換え、月方面のラグランジュ2の方が断然近い。

「現在、月基地はテストメントの支配下にある上に、現在のコロニー国家を完全に信用するのは危険だ。」

「それって、コロニー国家がテストメント側についているかもって事ですか？」

「可能性の話だ。」

可能性……それでも、その確立が高いから、わざわざ遠回りをするんだと思う。

「元々、コロニー国家代表のブリッジ氏には権限など名だけで肝心なところで政治や軍事には関わらせてはいない。しかし、テストメントは人類とELSを差別しないと公言している。表立った発言は

控えても内心ではテストメント側が本心だろうな。今までの連邦政府は連中が言う通り、共存など名ばかりだ。文句は無かったが、面白くは無かっただろうからな。」

確か……コロニー国家の代表に与えられている権限は議会への参加権と議会での発言権……決定権も拒否権も与えられてない。

ELSは母星が滅ぶから、宇宙を旅していったって話だから、ようやく得た定住の地を追われるくらいなら、従順を決め込んでいるとお父さんから聞いた事がある。

「だから、権限を与えてくれる、テストメント側についても何も不思議じゃない。」

「一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

今まで、話を聞いていたシレーヌがルビィさんに尋ねて来た。

「何だ？」

「テストメントではELSは人類に敵意は無いから共存しないのはおかしいと言っていました。敵意がないなら、どうして連邦はそのような事を？」

「簡単な事だ。20年前の戦いで多くの軍人が死んだ。それだけじゃない……民間人でも死傷者は出ている。それを敵意がないとか、誤解から始まった戦いだつたとかで矛を収める事が出来ても、感情は納得がいかないだろう。死んだ者にも家族や友人、恋人もいただろう。それら遺族の感情を考えると、それは出来ないのだ。」



何となくわかる気がする。

あの戦いで僕の親戚の人のお父さんも亡くなったって聞いている。

「それに敵意がないELSがあればほどの被害を出したんだ。他にどんな生態があるのか分からない以上、危険な事になりかねない。だからこそ、政府は隔離した状態で生態を把握した上で安全だと分かるまで、今までのような体勢を取るつもりでいた。ELSの能力を利用していたのも、いずれ来る共存の時にELSの能力が人類に有益である事の実際のデータがあれば、国民を納得させやすいと大統領が判断したからだ。」

ELSを使つてのコロナー開発の裏にはそんな思惑があつたのか……

大統領つて事はお婆ちゃんだよね、考えたのは……

「もっとも……今回の一件でコロナー国家がテストメント側につけば、この20年がふいになるかも知れないがな。テストメントの主張は機械的で急ぎ過ぎている。信頼と言うのはそう簡単に作れるものじゃない。去年にソレスタルビーイングに潰された教会がその最たる例だ。あれはお互いがお互いの事を安易に信用したから起きた事だ。相手を疑う事と信じない事は別だ。疑うからより相手の事を知り、その結果信用が生まれる。その過程を省けばいずれ歪みが生じる。」

「成程……そう言う事ですか……難しいですね。人間つて……」

「そうだな。私達は君やシンクのように脳量子波が使えないからな……信頼を築くにも時間がかかる。」

だけど、イノベーターは万能じゃない。

幾ら、脳量子波が使えても出来ない事は多い。

結局のところ、イノベーターも人間と何も変わらないんだと思う。

「でも……分かり合えると思います。いつかきっと……」

「そうだな……そうありたいな。」

必ず、分かり合える筈だ何だ……

あの人……ローズさんとも……あの戦闘の時に確かに感じた。

「あの小娘は上手く丸めこめたようだな。」

ローズとの通信を終えると、今まである機体の調整をしていたイサン・アンダーソンがやって来る。

彼は22年前にスカウトした科学者だ。

「まあね。完全に納得が言っている訳でもないみたいだけど……それよりも、ガンダムに搭載されているGNドライブの方はどうだい？」

「大したものだ……データを見る限りではこちらのオリジナルタイプのGNドライブよりも高出力だ。しかし、あれを量産するには時間

が足りない。すでに確認されているガンダムは5機、リベリオンを含めてあのGNドライブは6基……恐らく、後一基あるかないかだろうな。」

最大で7基か……それなら問題はなさそうだね。

「そうか……それで、ドクターはそれを製造は可能かな？」

「データが足りんから、時間がかかるな。お前の機体の完成の方が先になるだろう。」

と言う事は僕の専用機はまだ、完成してないと……

下位のナンバーズと最上位のユーグの専用機が優先に製造されているからね。

順番的に僕の専用機が遅れるのは仕方がないか……

それまではあのMSで我慢するとするか。

「分かった。セイレーンは？」

「機体は完成してある。後はセイレーンシステムの調整だけだ。だが、その前に……」

「分かっているさ……それはこちらで用意する。そのための手も打っている。」

そうさ……ローズはあれで爪が甘い。

すでに次の手が用意してある。

リベリオンを始末する手筈もね。

後は連中が網にかかるのを待つだけだ。

## MISSION3 セイレーンの唄

「補給が受けられるかと？」

ラグランジュ3を目指していた我々に遂に吉報がもたらされた。

友軍の一隊と連絡がつき、そこから補給物資が譲渡してくれるとの事だ。

「はい。ニューレイズ大佐が我々に補給をと……」

ニューレイズ大佐：確か、ウォーカー中将の右腕と言われている人だったよな。

「そうか……助かるな。」

度重なる戦闘でこちらも疲弊している。

物資が底を尽きかけている。

食糧に関しては、リトルガーデンで若干の補給が出来たが、敵の襲撃で完全とは言えない。

「大佐より、ランデブーポイントが指定されています。」

マリアージュがモニターに指定ポイントを出す。

「フム……地球に近いな……」

指定されたポイントは地球にかなり近い場所だ。

こんなところで戦闘をすれば、下手をすれば地球の重力に捕まりかねない。

「どうします？ヴィクトリアは大気圏での行動は出来ません。下手をして地球の重力に捕まれば終わりですよ。」

ヴィクトリアはGNフィールドを展開出来るからスペック上は大気圏を突入することが可能だ。

しかし、艦の構造は完全に宇宙での活動用に設計されている。

地球に降りても動く事もままならないだろう。

「だが、我々の物資が底を尽きようとしているのも事実だ……受けるしかないだろう。」

テストメントに追尾されているが、補給を受けるだけだ。

「了解しました。進路を指定されたポイントに向けます。」

とにかく、今は補給を受ける事が先決だ。

「なあ……シンクはどうするつもりだ？」

ロイドが僕に尋ねる。

シレーヌはローズさんの母艦とは違うヴィクトリアに興味深々で艦内を探索している。

僕達は食堂で一息ついている。

「どつって、何が？」

「今後の事よ。私達は安全なところで下して貰えるけど、シンクはどうするつもりなの？」

そう言えばそうだった……初めはロイドとミリィを守るためにリベリオンに乗った。

だから、安全なところまで行ければ、リベリオンから降りるつもりだった……

だけど、今はそれも言えない。

ローズさんと約束したから……

「分からない。でも……僕はあの人と約束したから……シレーヌを守るって……」

約束をした以上、途中で投げ出す事はしたくない。

思えば、誰かとそんな約束をした事は初めてかも知れない。

だから…僕はその約束を守りたい。

そのためにリベリオンは必要なんだと思う。

「だから…僕は戦うよ。僕が戦ってどうなるって訳でもないけど…  
…それでも、その約束だけは守りたいと思うんだ。」

ローズさんは僕に任せてくれた。

僕の事を信用してくれたと思いたい。

だから…僕はその信用に応えたいと思った。

これはそのための戦い。

世界とかは関係ない…僕の戦い。

「しゃーねえな…俺も付き合ってやるよ。つっても俺が何か出来る  
って訳でもないけどよ。」

「あんたねえ…無責任な事言わないでよ。戦うのはシंकよ。」

ロイドもミリイも僕の為にそう言ってくれる。

本当は二人を巻き込みたくないけれど…物凄くうれしい。

「だからって、俺達だけ安全なところに逃げる訳にもいかねえだろ  
？」

「それは…そうだけど…」



「ロイド…ミリィ…ありがとう。僕に手を貸してくれる？」

それは二人を戦いに巻き込む言葉だ。

だけど…この二人の存在は心強い。

この二人が支えてくれれば僕は折れる事がないと思う。

「当たり前だ。友達だろ？」

「仕方がないわね…今回きりよ。」

「うん……」

何だかんだで二人はいつも僕を助けてくれる。

だから…僕が守るんだ。

進路を地球方面に変えて、大佐とのランデブーポイントに接近している。

テストメントの攻撃も無く、無事に補給にありつける。

「艦長、大佐の補給艦を補足しました。」

「補給艦と通信を繋げ」

「了解」

大佐の補給艦との通信回線が開かれて、モニターにニューレイズ大佐の姿を映し出される。

「今回の補給を感謝します。大佐」

「気にするな。少佐：それよりも貴官の船にウォーカー中将のご子息を保護していると聞く。」

情報が早い…流石は中将の右腕か……

「はい。お恥ずかしながら、彼のお陰でここまで無事来る事が出来ました。」

「流石は中将のご子息と言ったところか……補給物資は用意してある。補給艦とのランデブーを急がせる。」

「了解です。大佐」

テストメントの母艦がこちらをトレースしている以上、時間をかけるのは敵の攻撃の機会を与えるような物だからな。

大佐はそう言い通信を切る。

「聞いての通りだ。速やかに補給の受け入れ態勢を取れ。」

「補給ですか？」

ロイド達に僕の決意表明を行い、暫くすると、僕はパイロットの人達と待機している。

「そうらしい。その為、俺達は待機命令が出ている。」

「補給時はどうしても無防備になるからな。敵として見れば、攻撃するにはうってつけのタイミングと言う訳だ。」

隊長さんにルビイさんも同調する。

成程……だから、僕達パイロットはここで待機と言う訳なのか……

それにしてもなんだろう……

この感じ……

「これで少しは楽になりますね。」

「ああ…食糧や水は深刻だったからな。」

何か、変な感じがする。

「どうしたの？シンク君」

ふと、ルイさんが僕にそう言う。

「え？」

「何か深刻な顔してるけど？何か気になる事があるの？」

そんなに深刻な顔をしてたんだ……

「そうなのか？何かあるなら言ってる。イノベーターの感は鋭いと聞いている。些細な事でも役に立つかもしれん。」

隊長さんがそう言うけれど、確信がない。

「いえ……そう言う訳では……」

僕がそこまで言うとな後は確かに何かを感じた。

これは……脳量子波？

でも、この艦にイノベーターやイノベイドは僕とシレーヌ以外にはいない筈だよな……

だったら、これは……

それに今の脳量子波には微弱ながら、悪意の様なものが感じられた。

なぜだかわからないけれど、嫌な予感がする。

僕はそう感じて待機室を飛び出す。

「シレーヌ！」

さっきの脳量子波を辿るとそこには連邦の軍服と来た女の人とその人に捕まえられているシレーヌを見つけた。

「シンク！」

「意外と早い……流石と言ったところね。」

女の方はそう言っていると後ろからルビイさんが来る。

どうやら、事情も言わずに飛び出した僕を追って来た見たい。

「ニューレイズ大佐ですね……なぜ、このような事を？」

ルビイさんはいつもとは違い低い声でニューレイズ大佐と言われた人に銃を向ける。

「彼女を帰して貰いに来ただけよ。その代わりに補給物資を持って来たから、物々交換ね。」

「彼女は物ではありません！」

僕はとっさにそう叫んでしまう。

この人がシレーヌを物として扱っている。

そんなのは嫌だ。

「いいえ。これは物よ。私達テストメントのね。」

「連邦を裏切るつもりですか？」

「裏切る？それは中將にも説明したけれど、私は元々テストメントの所属……裏切る訳ではないわ。」

ニューレイズさんはそう言いシレーヌに銃を向ける。

「何の真似ですか？彼女はテストメントで重要な役割を持っているのでは？」

「そうね。でも……これが必ずしも私達に必要な物と言う訳でもないの。連邦において置くくらいなら、この場で処分しても構わないわ。」

この人は本気だ。

脳量子波を伝ってそれが分かる。

例え、自分が捕まろうともシレーヌを殺すつもりだ。

「ルビィさん……この人、本気です。」

「そう言う鋭いところは父親譲りと言うべきだけれども……父親とは違い、甘いわね。」

ニューレイズがそう言うと、通路に強い光が覆う。

「くっ！閃光弾！」

光が収まるとすでに二人の姿がなかった。

「逃げたか……」

「MSの格納庫の方に向かっています。」

あの人とシレーヌの脳量子波が移動しているのが分かる。

今日は妙に感覚が冴えている。

「そうか……私はブリッジに報告する。お前は先にMSに向かえ。」

「分かりました。」

約束したんだ。

シレーヌを守るって……

僕はルビイさんに指示に従い格納庫を目指した。

「シンク！何か騒がしいけれど、何かあったのか？」

格納庫につくと、ロイドがやって来る。

「ロイド……どうして君が？」

保護されていると言っても、格納庫には入る事は許可されていないのに……

「お前だけに頼る訳にはいかないからな……俺は整備を手伝う事にしたんだよ。つっても、雑用だけだな。」

そう言う事が……

雑用とはいえ、本当に心強いよ。

「シレーヌが攫われた。リベリオンで出るよ。」

「マジかよ……分かった。班長に伝えて来る。」

ロイドはそう言い、僕はリベリオンに乗り込む。

「やられたな……」

ヴィクトリアのブリッジでラディウムはそう言う。

アメリカを艦内に入れる事を許可したために、シレーヌが拉致された。

シレーヌがテストメント内で重要な位置にいるため、テストメントも何らかの奪還作戦を遂行することは予測できたが、完全に裏をかかれていた。

「リベリオンを先行させる。他のMSも随時発信させる!」



「はい……聞いたわね。シンク……」

ブリッジのオペレーター席についているミリィがリベリオンRに乗っているシンクにそう言う。

彼女もまた、シンクの力になるためにリベリオンR専属のオペレーターをかまされている。

「ミリィ……何で？」

「それは後……すでに敵のMSが確認されてるから、気をつけなさいよ。」

「うん……分かった。」

シンクはそう言い、リベリオンRを出撃させる。

出撃したリベリオンRはヴィクトリアに接近するガントミーにNG Nバズーカを向ける。

リベリオンRのビームマグナムは弾数に制限があるため、多数の相手を相手にするには向いていないため、ビームマグナムに加えてGN-X用のバズーカと、シールドの裏にビームガトリングを装備して来ている。

リベリオンRはバズーカを放ち、ガントミーを撃墜する。

「シレーヌは……あれか！」

シンクはアメリカがヴィクトリアに乗艦する際に使用した小型艇を発見すると、その方向に向かう。

しかし、その道を塞ぐかのようにガントミーがマシンガンを放ちながら、邪魔をする。

「くっ……」

リベリオンRはバズーカで応戦するが、その間に小型艇との距離が離されていく。

「シレーヌ！」

リベリオンRは強引に突破しようとするも、ガントミーの捨て身の攻撃で思うように前に進めない。

「シンク君！援護するわ。」

「ルイさん！」

後方から、出撃した来たルイとルキノのGN-X？が粒子ビームでガントミーを破壊する。

「ここは俺達が抑える。お前は小型艇を追え。」

「分かりました。」

アスカにそう言われて、リベリオンRは加速して小型艇に向かう。

「彼にああ言った手前、無様な戦いは出来ないな。隊長」

「分かってるぞ……」

アスカ機はビームライフルをルビィ機はGNバスターソードを構えると、戦闘を開始する。

「もう少し……」

リベリオンRが小型艇に接近して、手を伸ばそうとするとローゼンクロイツァーがリベリオンRに突撃する。

「あのMS……ローズさん！」

「シンク……悪いが、邪魔をさせて貰う！」

ローゼンクロイツァーはレーヴァティンを抜いて、リベリオンRに斬りかかる。

「ローズさん！止めてください！」

リベリオンRはその一撃をかわすとオープンチャンネルを開く。

「シンク……」

「何でこんな事を！シレーヌは僕に任せてくれたんじゃないんですか！」

「事情が変わったのだ！」

ローゼンクロイツァーはGNビームキャノン改を展開して、粒子ビームを放つ。

リベリオンRはそれをシールドで防ぐ。

「だからって！」

「シレーヌを守ると言つのなら、私を倒してから行け！」

ローゼンクロイツァーはレーヴァテインの刃を分散させる。

「くっ！」

リベリオンRはバルカンで応戦しながら、バズーカを放つがローゼンクロイツァーはシールドで受け止める。

「その程度では到底、シレーヌを守れんぞ！」

ローゼンクロイツァーはシールドの先端からビームソードを出して、切りかかりリベリオンRはシールドで受け止める。

二機が押し合いをしていると、不意に二人の両目の虹彩が輝く。

「これは……」

「この脳量子波は……まさか！」

そして、ヴィクトリアの防衛戦で自体が急変する。

ヴィクトリアを防衛していた4機のGN-X?からGN粒子の放出が止まり、機体も動かなくなっていた。

「何だ…」

「機体の機能が停止されただと……」

アスカ達はいろいろと機体を動かそうとするが、機体の反応は無い。

「セイレーンを起動させたと言うのか!」

戦場で唯一、事態が理解出来たローズが叫ぶ。

そして、戦場の後方に一機のMSがいる事にシンクが気がつく。

「あのMSは……一体…あれから妙な脳量子波が出ているのか……」

シンクは知らないが、その機体はかつて、ソレスタルビーイングが武力介入の時に使用していたガンダムヴァーチェに隠されていたガンダムナドレに酷似していた。

GN TS 0014 『セイレーン』

テストメントがガンダムナドレをベースとして開発されたMS。

この機体は戦闘能力こそ、ガントミーにすら劣るがある特殊なシス

テムが搭載されている。

『セイレーンシステム』

そのシステムが発動すると戦場に存在するすべての疑似GNドライブの機能を停止させるシステム。

それにより、オリジナルのGNドライブを搭載しているリベリオンRとローゼンクロイツァー、GNドライブ自体を搭載していないガントミー以外のMSの疑似GNドライブの機能が停止させられた。

その機体にはヴィクトリアから連れ去られたシレーヌが乗っており、シレーヌは虚ろな目をしており、その両目の虹彩が輝いている。

「馬鹿な！こんな話は聞いてないぞ！」

ローゼンクロイツァーは機体を反すと母艦に戻って行く。

「ローズさん！」

「シンク！待ちなさい！」

リベリオンRがローゼンクロイツァーを追おうとするが、ヴィクトリアからの通信が入る。

「艦長からの指示で動かなくなった機体を回収するために敵の量産機を相手して」

「でも…」

「大丈夫よ。シレー又は向こうにとっては重要なんだから無事よ。それよりも、今はMSを回収しないと……幾ら、攻撃力が低くても、いつまでも持たないから」

シンクはミリィに諭されると、追撃を諦めて、ヴィクトリアの方に戻りガントミーを掃討する。

ガントミーを掃討したリベリオンRは機能が停止されたために動けないMSをヴィクトリアへと搬送した。

## MISSION33 セイレーンの唄（後書き）

### 新MS設定

GNTS 0014 『セイレーン』

テストメントがガンダムナドレをベースとして開発されたMSで外見はナドレに酷似している。

セイレーンシステムと呼ばれる特殊なシステムを搭載しており、そのシステムが発動されると戦闘宙域内に存在する疑似GNドライヴの機能を停止させる。

この機体はそのための機体の為、一切の武装はされていない。

ナンバーズ専用機とは違い、この機体にはオリジナルのGNドライヴが一基しか搭載されていない。



## Mission 34 リバース

「どういう事だ！」

母艦に帰投した私はリボンスに通信を繋ぎそう叫ぶ。

シレーヌを奪還したのは良い。

しかし、セイレーンの使用は聞いてない。

あれのシステムと機体自体は完成している。

だが、機体の戦闘能力はガントミー以下で実戦で使うにはリスクが多き過ぎる。

「どうもこうも、見ての通りだよ。」

リボンスはあっけらかんと答える。

「君に黙ってセイレーンを使ったのは悪かったと思っているよ。」

どうだか……

リボンスの表情からはリボンスの内心は窺えない。

「それに君も疑似太陽炉の存在は良く思っていないはずだ。」

確かに……元々太陽炉は異種との対話の為に開発された物だ。

それをガンダム……機動兵器に搭載するのは良からう。

その方が対話もやりやすい。

しかし、連邦の所有している疑似太陽炉は完全に戦闘用だ。

対話の為に作られた太陽炉を戦闘の為に使うのは容認しがたいのも事実……

だが……そうそう納得がいく事ではない。

「そして、今はその事を議論している時ではないのでは？」

「どづいつ事だ？」

「連邦も無能ではない。疑似太陽炉の停止の原因がセイレーンである事に気づかない訳がない。連中に見れば、セイレーンを是が非でも破壊したい筈だ。幸い、あの連邦艦にはセイレーンシステムの領域内でも動ける機体がある。」

シクスのリベリオンか……

あの機体には新型ではあるが、オリジナルのGNドライブが搭載されている。

セイレーンシステムでは止められない。

「リボンスは来ると思っているのか？」

「来るさ……もたもたしていると、こちらが増援を呼んで手が出し

辛くなる事は明白だからね。」

連邦艦で使える機体はシンクのリベリオン一機……

幾ら、リベリオンとは言え、友軍機の援護も無くこちらの大軍を相手にするほど愚かではないか……

「だが、こちらの戦力を相当削られているぞ。」

「関係ないさ……リベリオンを数で圧倒してもガントミーでは大した効果は無い。今回は僕も出る。それにルギアムのナベリウスの修理も出来ている。そして、君のローゼンクロイツァーの三機でかかれば、例えリベリオンとは言えど落とせない事も無いさ……」

リベリオンの性能は私のローゼンクロイツァー以下だと聞いている。それにナベリウスとリボンズの機体を合わせれば勝てない相手ではないか……

「了解した。」

単機を相手に三機でかかるのは正直、気が進まないがこれも作戦だ。

シンク……悪いが今回で終わりにさせて貰う。

動かなくなつたMSを回収して、ヴィクトリアの整備班がその原因を特定していた。

やはり、あのガンダムタイプのMSが原因らしい。

「それで、GN-Xは動きそうなのか？」

艦長さんがそう言つと、整備班の班長さんと思われる人が首を横に振る。

「どうやら、外部からの何らかの影響を受けていると考えられます。パイロットを外に出す事ですら、コックピットハッチを破壊させられましたしね。」

「だが、なぜリベリオンは何ともない？」

僕のリベリオンは帰投後に検査して貰ったけど、目に見えて以上は無いらしい。

「分かりません。GN-Xとリベリオンの違いは搭載しているGNドライヴの違いでしょうが、何せ…リベリオンに搭載されているGNドライヴは連邦で使用されているGNドライヴとは違いますからね。恐らくソレスタルビーイングが開発したんでしょうね。連中の方がGNドライヴの技術は連邦の何歩も先を行ってますよ。」

「などすると、現在出撃出来るのはリベリオン一機か……」

今、この船を守れるのは正真正銘、僕だけ……

「あのガンダムタイプのMSを破壊すれば、GN-XのGNドライヴも使えるようになると思います。」

「そうか……シンク君、君にお願いがある。君のリベリオンであの

ガンダムタイプを破壊して欲しい。」

艦長さんは僕をまっすぐ見てそう言う。

「これは命令ではなく、俺個人のお願いだ。」

「……分かりました。」

それに、あの機体から放たれている脳量子波……あの機体にはシレーヌが乗っているような気がする。

もし、テストメントでシレーヌの役目があれば、あの機体を破壊すれば、シレーヌはテストメントから解放されるかも知れない。

あのMSさえ破壊すれば……

「済まない……」

艦長さんは僕にふかぶかと頭を下げた。

「良い、シンク……今回の戦闘はシンク一人で戦う事になるわ。ヴィクトリアからの援護も機体出来ないわよ。」

「分かってる。」

シンクはリベリオンRの中でゆっくりと頷く。

ヴィクトリアの疑似GNドライブもセイレーンシステムの影響で停止されている。

現在はGNコンデンサーの粒子で最低限の生命維持などを行っている状態で戦闘を行う程の余裕はない。

「だから、無視はしないでよ。危ないと思ったら引きなさいよ。」

「うん……」

ミリィにそう返事をするも、シンクにはそんなつもりは毛頭なかった。

必ず、シレーヌを助けて連れ帰る。

シンクの頭の中にはそれしかなかった。

「リベリオン……シンク・ウォーカー、行きます！」

リベリオンRは射出されて、セイレーンへと向かっていく。

「やはり……出て来たか……」

ローズはローゼンクロイツァーの中でそう呟く。

すでにテストメント側でもリベリオンRの射出を確認している。

対するテストメント側の防衛は三機のみである。

ローズのローゼンクロイツァーにルギアムのナベリウス、そしてリボンズが搭乗している機体はリボーンズガンダム<sup>リベア</sup>R

リボンズのリボーンズガンダムRは22年前の第二次ソレスタルビーイング事変のソレスタルビーイングとイノベーターを名乗ったイノベイド勢との最終決戦に投入されて、ダブルオーライザーとの死闘の時に大破して乗り捨てられた機体をテストメントが極秘裏に回収して修理している。

外見こそは当時のままだが、唯一違うのは両腕に搭載されているGNドライヴが当時は疑似GNドライヴに対して今は、オリジナルのGNドライヴになっている。

「相手は一機だが、油断は禁物だ。相手はリベリオンと純粹種である事を忘れないでよ。」

「関係ないな！相手が誰であろうと、ぶっ殺すまでだ！」

ルギアムはそう言い機体をリベリオンRへと加速させる。

「やれやれ……ローズ」

「了解した。」

ローゼンクロイツァーもナベリウスに続いて行く。

「出て来た……三機だけ？ だけど……」

リベリオンRはNGNバズーカを戦闘のナベリウスに放つ。

「そんなトロイ攻撃に当たるかよ！」

ナベリウスは両腕のサーベラスに内蔵されているGNキャノンを放ち、リベリオンRは回避する。

しかし、その回避先にはローゼンクロイツァーがレーヴァティンを振りかぶっていた。

「ローズさん！」

「悪いが、手加減は出来んぞ！」

リベリオンRはバズーカを放ち、ローゼンクロイツァーに直撃するが、ローゼンクロイツァーは無傷で突っ込んで来る。

「そんな武器が！」

リベリオンRはバズーカを手放すと、GNビームザンバーで受け止める。

二機は互いに弾き合い、距離を取っているとリボーンズガンダムRはリボーンズキャノンRへと変形しており、収束した粒子ビームを放つ。



「三機目！」

リベリオンRはとっさにシールドを掲げて受け止めるが、アンチフイールドを展開する余裕も無く、シールドは破壊される。

「シールドが……」

「余所見してんなよ！」

ナベリウスが接近してサーベラスを突き出し、リベリオンRはビームマグナムを右手に、ビームザンバーを左手に持ち、ビームザンバーを振う。

「僕は……シレーヌを助けるんだ。」

リベリオンRはナベリウスから離れて、ビームマグナムを構えるがローゼンクローイツァーがレーヴァティンを振り邪魔をしたために放つ前に回避する。

「良い反応だ。でもね……」

しかし、その回避先にリボーンズガンダムRはバスターライフルを放ち、リベリオンRは無理な体勢でかわすと、ローゼンクローイツァーが回り込んでおりレーヴァティンを振りリベリオンRはビームザンバーで受け止めた。

「やはり、お前でも三対一はきつかるう。無理をしないで楽になれ！」

ローゼンクローイツァーはリベリオンRを蹴り飛ばして、ビームライ

フルを構える。

「これで終わりだね。」

それに合わせるようにリボーンズガンダムRがバスターライフルをナベリウスがサーベラスを構えている。

「やられるのか……僕は……僕は……まだ……やられる訳にはいかない  
」！  
」

シンクがそう言うとシンクの両目の虹彩が輝き、それは起きた。

突如、リベリオンRのブロック状の装甲が浮き上がると、反転していく。

真紅の機体は次第に黒くなって行く。

そして、完全に黒くなると、頭部のブレードアンテナが割れてV字のアンテナとなり、頭部のバイザーが中央から割れてバイザーに隠されていたツインアイが露わになる。

マスクが割れると完全にその顔はガンダムとなる。

背部のスラスタースライドして、巨大な粒子の翼を形成する。

GNT-0005 『リバースガンダム』

それがこの状態の名前である。

三機からの粒子ビームがリバースガンダムに放たれると、その機体

の真髓が明らかとなる。

三機の放った粒子ビームは明らかに不自然な方向に曲がり、リバーズガンダムには当たる事は無く、ローゼンクロイツァーの放った粒子ビームに至っては完全に反射されていた。

この機体の特徴の一つはこの『GNリフレクター』にある。

かつて第二世代のガンダムアストレアF2に搭載されていたGNリフレクションを改良した機能で粒子ビームを屈曲させて、ビームライフルクラスの粒子ビームなら反射し、バスターライフルやGNキヤノンクラスの威力の粒子ビームですら、屈曲させて殆ど当たる事は無い。

「ガンダムだと言うのか……あれは……」

「まだ……行けるのか？ 僕は……」

シンクがペダルを踏むと、数回の搭乗でリベリオンRの加速に慣れている筈のシンクも一瞬、息が詰まる程の加速を見せた。

「何だっつてんだよ！ リベリオンの次はガンダムか！ 舐めやがって！」

ナベリウスがGNキヤノンを連射するが、リバーズガンダムには掠る事すら出来ない。

「くっ……凄い加速だ……でも…耐え切る！」

リバーズガンダムはビームサンバーでローゼンクロイツァーに斬りかかり、ローゼンクロイツァーはレーヴァテインで受け止める。

「例えガンダムであろうと……私は負けん！」

二機は押し合うところか、加速して勢いのあるリバースガンダムがローゼンクロイツァーを圧倒する。

「圧倒されているだと！私のローゼンクロイツァーが！」

「後ろがから空きだあ！」

ナベリウスがリバースガンダムの背後からサーベラスを構えているが、リバースガンダムはローゼンクロイツァーから離れると、ビームザンバーをナベリウスに投げつけて、ナベリウスの頭部に突き刺さる。

「くそつたれ！」

頭部を破壊された事で一瞬、モニターがブラックアウトするが、すぐにサブカメラの映像に切り替わるが、リバースガンダムは両腕にGNビームトンファアを展開して振りかぶっていた。

リバースガンダムの一撃はナベリウスの両腕を切り裂いた。

「これで……下がってよ！」

リバースガンダムは戦闘不能のナベリウスをそのままにしてリボーンズガンダムRに向かう。

「中々やるね……フィンファング！」

リボーンズガンダムRはフィンファンングをリバースガンダムに差し向けて、粒子ビームを放つがリバースガンダムのGNリフレクターで反射されて効果は無い。

そして、リバースガンダムのバルカンやビームザンバーでフィンファンングは全滅する。

「大したものだ……この機体では限界か……ローズ、後は任せるよ。」

リボーンズガンダムRはリボーンズキャノンRに変形すると収束粒子砲を放ち、後退していく。

「勝手な事を……だが、私も引けんのだ！」

ローゼンクロイツァーはリバースガンダムにレーヴァティンで切りかかるが、リバースガンダムは一瞬で背後の回る。

「引いてください！ローズさん！」

リバースガンダムはローゼンクロイツァーの背後を蹴り飛ばす。

「ぐっ！」

そして、リバースガンダムはそのままセイレーンのところに向かっていく。

「シレーヌ！」

すでにリバースガンダムはリベリオンRに戻っており、セイレーン

に取りついていた。

リベリオンRはセイレーンに胸部のコックピットハッチを無理やり剥がしていく。

「シレーヌー！」

すると、コックピット内が見えて、中にノーマルスーツを来ているシレーヌが見えた。

「やっぱり……」

リベリオンRはコックピットをセイレーンのコックピットに接近させると、コックピットハッチを開ける。

「シレーヌー！僕だよ！シンクだ。助けに来たよ！」

シンクがそう言うがシレーヌは反応しない。

「シレーヌ……？」

シンクは反応のないシレーヌを不信に思うが、セイレーンのコックピットの中からシレーヌを出して、リベリオンRの中に連れ込む。

「もう安心だ……シレーヌ……ヴィクトリアで見て貰おう。」

シンクはハッチを締めて、レバーを握る。

「その前に……この機体はあっちゃいけないんだ。」

リベリオンRはビームザンバーを握り締めて、セイレーンに振りかぶる。

セイレーンは抵抗することなく、両断されて爆散する。

「これで……シレーヌは解放される……」

リベリオンRはそのままヴィクトリアへと帰投して行く。

「セイレーンは破壊されたか……」

巨大建造物の一室でゼロはそう言う。

「構わん。あの機体は所詮はテスト段階の試作機……」

オリジナルヴェーダはゼロにそう言う。

「確かに……シレーヌの個体が無事だっただけで良しとするか。」

「だが、連邦の手にある。連中も馬鹿じゃない。前と同じ手は通用しない。」

オリジナルヴェーダの言葉にゼロの仮面の下の口が歪む。

「構わんさ……アレを奪還する手など、幾らでもある。それに今すぐ必要な個体でもない。しらばくは連邦に預けておく……」

「ウム……その前のデウス・エクス・マキナの完成の方が先か……」

「そうだな。それも少し時間がかかるから、シレーヌの奪還は後回しで構わない。デウス・エクス・マキナを動かせる個体はすでに確保してある。シレーヌを使うよりもテストには適切な個体がね……」

そう言うゼロにいる部屋には無数のカプセルが並べられている。

殆どのカプセルが空だが、その中の一つだけ液体が充満している。

その中に人影が見える。

「この個体ならば、シレーヌ以上の成果を出してくれるだろう。」

ゼロはそう言い、カプセルを撫でる。

「良からう。デウス・エクス・マキナの完成とこの個体の調整を急がせろ。」

「分かってるよ。ヴェーダ」

ゼロはそう言い部屋を出て行く。



## Mission34 リバーズ（後書き）

### 新MS設定

GNT-0005 『リバーズガンダム』

ソレスタルビーイングが開発した第6世代のガンダム。

通常時はリベリオンRの状態だが、機体の装甲を反転させて、頭部とバックパックのスラスターを变形させた状態。

TGNドライブを常にバースト状態にしているため、他の第6世代のガンダムに比べて圧倒的な出力を誇るが、その状態を維持するとTGNドライブへの負担が大きいため、通常時はリベリオンRの状態となっている。

装甲はリベリオンRの時は真紅だが、リバーズガンダムの状態では全身が黒い。

バックパックのスラスターがスライドしてGNウイングを形成しているため、圧倒的な起動性能を持つ。

全身の装甲にGNリフレクターと呼ばれる機能があり、粒子ビームを屈曲させる事が可能でビームライフルクラスの威力の粒子ビームは完全に反射することが出来る。

高い戦闘能力の反面、装甲を反転させるために装甲とフレームの間に隙間が出来ており、初代のリベリオン程にないしろ、防御力の低さが明らかとなっている。

武装はリベリオンRの時と共通。

## Mission 35 大気圏の攻防

セイレーンを破壊されて、戦闘は我々の敗北で終わった。

まさか、リベリオンが変形してガンダムになるとは完全に予想外の事態であった。

そして、その事を報告すべく、私はゼロに事の次第を伝えていた。

「6機目のガンダムか……ソレスタルビーイングは6機のガンダムを武力介入の際に使用していた。今までに確認していたガンダムは5機、6機目のガンダムが存在していても不思議ではないな。」

「返す言葉も無い。」

可能性としてはあった筈だ。

あのリベリオンはソレスタルビーイングが開発したと思われる。

ならば、あの機体もガンダムである可能性は十分の考えられた。

「まあ良い。ローズ、君には連邦艦への攻撃命令を下す。」

「あの船にはシレーヌが乗っています。」

シンクはセイレーンを破壊する前にシレーヌを機体から出しているのを確認している。

「リボンスからの報告で聞いている。君の役目はあの連邦艦の足を

暫くの間、止めさせる事とあのガンダムの性能調査だ。」

「今の戦力では難しいかと」

現在の戦力は私のローゼンクロイツァーとガントミーが数機……

連邦もGN-Xが使えるようになってきている筈だから、数で圧倒することが前提のガントミーでは荷が重い。

それにあのガンダムを相手に余計な援護をされたのでは勝算は無い。

「それに関しては宇宙型のガントミーを100機程送る。」

それだけあれば、余計な連中を私とシンクとの戦いの邪魔をさせずに連邦艦の足を止めさせる事も可能か……

「ガンダムに関しては君に任せる。好きにして構わない。」

「了解しました。」

補給が済み次第、仕掛けさせて貰うぞ。

「それでシレーヌの容体はどうですか？」

ヴィクトリアに帰投すると、すぐにシレーヌを船医さんに見せた。

今は医療カプセルに寝かされている。

「正直なところ分からんよ。この艦にイノベイドは乗っていないからな。乗っていれば、それ相応の設備があるけど……」

シレーヌは一向に目を覚まさない。

「だが、生命活動はしている。何らかの不可で意識をシャットダウンさせていると言う見方が正しいんだろうね。」

「そうですか……」

取り合えずは一安心だけど、このまま目を覚まさない事だっでありうる。

「今は医療カプセルに寝かしておくしか手は無いよ。」

「分かりました。」

船医さんにそう言われてしまえば、僕に出来る事なんてない。

「後はお任せします。」

僕がここに居ても何も出来ない。

だったら、僕は僕が出来る事をするだけだ。

シレーヌが起きるまで、僕がこの船を守る。

「まさか、ガンダムだったんですね……アレ」

「そうだな。」

ブリッジにて、先の戦闘を検証している。

追い詰められたリベリオンは装甲を反転させてガンダムとなっていた。

整備班も何かと謎の多い機体だとは言っていたが、まさかガンダムだったとはな……

「ソレスタルビーイングはあの機体が明るみになった時はこれでガンダムだと言い張るつもりだったんですかね。」

「さあな……俺に聞くなよ。」

それ以前にガンダムの定義自体が非常に曖昧だしな。

どんな形状をしていても、ソレスタルビーイングがこれはガンダムだと言い張ればそれまでだ。

だが、どちらにせよ、当のソレスタルビーイングはもういない。

今更言ったところでどうにもならん。

「でも凄いですね。三対一で勝っちゃいましたよ。」

相手はテストメントの量産機とは性能が段違いだ。

しかし、あのガンダムはそれを圧倒している。

「でも……それだけの性能なら、何ですっとガンダムにしないんですかね？」

「何か制限があるのか、それとも……別の目的があるのか……」

どちらにせよ、あのガンダムは敵にとっては相当な脅威となるはずだ。

あのGNドライブを停止させる機体も破壊した以上、こちらのGN-Xもすでに修理を終えている。

あのガンダムを脅威として、手を出さないでくれるか、それともすぐに排除に来るか……どちらにせよ、相当な時間は稼げる筈だ。

「艦長！敵艦よりMSの発進を確認しました！」

「数は！」

「不明です！」

テストメント艦がヴィクトリアを追尾しているのは補足していたが、早すぎる！

こちらもかなりの数を仕留めたんだ。

あの船の大きさから積載出来るMSの数は100機前後……

だが、出て来ているMSの数は今までに破壊した数を含めるとそれを遙かに上回っている。

いつの間に補給を受けていた？

「MSを発進させる！」

今はそんな事を考えている暇は無い。

敵の中に赤いMSもいる。

「MSをですか？無茶ですよ！下手をすれば地球の重力に捕まります！」

すでにヴィクトリアは地球の重力に捕まるギリギリの高度で航行している。

敵が迂闊に仕掛けられないようにこの高度で航行していたが、敵はお構いなしのようだ。

「だからと言ってこのままではやられる！MS隊には高度に十分注意するようにと伝えておけ、重力に捕まったら終わりだな！」

GN-Xには大気圏の突入能力は無い。

運が良ければ、大気圏を突入出来るが、完全に運任せで地上にテストメントのMSが待ち構えていたらアウトだ。

「了解です！」



こんな状況での戦闘は初めてだが、やるしかないな。

「MS各機、聞いた通りだ。あまり地球に近づき過ぎると重力に捕まる。常に自分の高度の確認を怠るなよ。」

ヴィクトリアから5機のMSが出撃して、アスカが他の4機にそう言う。

「私達はともかく、シンク君の機体はガンダムなんだから、大丈夫ですよ。」

「だが…地球に落ちたら、回収が出来んぞ。」

「分かってます。」

「来るぞ！」

アスカの一言の後にガントミーからミサイルが放たれる。

「あの機体……いつものとは違いますね。」

ガントミーの両足は大型のブースターに換装されている。

それにより、機動性が通常のガントミーより向上している。

「シンク君、赤いMSは君に任せるが、決して無理はするなよ。」

「分かりました。」

シンクはそう言い機体をローゼンクロイツァーに向けて行く。

「我々はヴィクトリアの防衛行動を行う。シンク君に後れを取るなよ。」

アスカはそう言いビームライフルでミサイルの迎撃を開始する。

「こいつら…いつものより速いじゃない!」

ルキノ機はGNキャノンとGNスパイパーライフル?で迫るガントミーを迎撃していく。

「それに数はいつも通りに多いつて!」

ルイ機はGNバスターカを可能な限りに連射する。

「確かにな……だが、所詮は数だけの相手だ。」

ルビイ機はGNバスターソードでガントミーを両断する。

「いつも通りに戦えば良い。」

「その通りだ。」

アスカ機は両手にビームライフルを持ち応戦する。

「シンク君が敵の大将を叩けばこいつらも引くだろつ。」

「ローズさん！」

「はやり、お前が来たか！シンク！」

ローゼンクロイツァーはレーヴァテインを抜いてリベリオンRに向かい、リベリオンRはビームマグナムを放つ。

ローゼンクロイツァーはリベリオンRからの攻撃をかわすと、接近してローゼンクロイツァーを振うとリベリオンRはGNビームザンバーを抜いて受け止める。

「ローズさん！軍を引いてください！」

シンクはオープンチャンネルを繋いでそう言う。

「それは出来ん相談だ。」

「どうしてですか！」

「命令だ。だから、私はお前を倒す！」

ローゼンクロイツァーはリベリオンRを蹴り飛ばすと、GNビームキャノン？を展開して粒子ビームを放つ。

リベリオンRはシールドにアンチフィールドを展開して攻撃を防ぐ。

「そんなに命令が大事なんですか！」

「無論だ！私達はのために作られたんだからな！」

ローゼンクロイツァーはビームライフルを放ちながら接近して、レ  
ーヴァティンを振りリベリオンRはビームザンバーで受ける。

「そんなのおかしいですよ！」

「だが、それが私達だ！」

二機はそのまま押し合う。

「さつさとガンダムになれ！リベリオンの状態のお前にいつまでも  
遅れは取らんぞ！シンク！」

「ローズさん！」

ローゼンクロイツァーはレヴァティンの刃を分散させて、再び戻  
して鞭のような形態に変えて振う。

「そう何度も、勝てると思うなよ！」

「っ……」

シンクの両目の虹彩が輝き、リベリオンRの装甲は反転して行き、  
そしてリバースガンダムとなる。

「ようやくか…ガンダム！」

「また、終わらせませす!」

リバースガンダムは高速で移動しながら、ローゼンクロイツァーに接近する。

「言った筈だ。何度も勝てると思うなと!トランザム!」

ローゼンクロイツァーはトランザムを起動すると、リバースガンダムと同じとまでは行かなかったが、高速で移動し何度も二機はぶつかり合う。

「これなら、圧倒もされまい!」

「だからって!」

リバースガンダムは至近距離でGNバルカンを放つが、ローゼンクロイツァーは機体を下げる。

「甘い!」

ローゼンクロイツァーはレーヴァティンを振り下ろす。

「ビームを曲げるなら、直接叩くまでだ!」

リバースガンダムはそれをビームザンバーで受け止める。

リバーズガンダムとローゼンクロイツァーの戦闘が激化していく中、  
ヴィクトリアの防衛戦も窮地に立たされている。

宇宙型のガントミーは通常機よりも機動性が高い分、ヴィクトリア  
への特攻に近い前進を4機のMSで防ぐには限界がある。

「艦長！敵MSが来ます！」

「迎撃を急げ！取りつかせるなよ！」

ヴィクトリアも火器で応戦するも、ガントミーは被弾しながら接近  
してバズーカやミサイルを撃ち込む。

ヴィクトリアもGNフィールドを展開出来るが、距離が近ければそ  
の分防げなくなる。

「艦長！右舷に被弾！」

「GNフィールドの出力30%低下！」

「MS隊に応戦させる！」

アスカ機がGNブレイドでガントミーを切り裂く。

「ルビィ！母艦の方を任せる！ルイはとにかく、敵の多いところを  
狙え！ルキノは私の援護を頼む！」

アスカの指示でルビィ機はGNソードのライフルモードを放ちなが  
ら、ヴィクトリアに取りつかうとするガントミーを破壊しながら戻

り、GNソードをソードモードに切り替えて切り裂き、腕のGNサブマシンガンで牽制する。

ルイ機はGNバズーカの出力を上げてガントミーが集中しているところに放つ。

ルキノ機はGNスナイパーライフル？でアスカ機を援護して、アスカ機はGNブレイドでガントミーを切り裂いて行く。

リバースガンダムとローゼンクロイツァーは激しくぶつかり合うがそれも遂に終わりが来る。

ローゼンクロイツァーはトランザムの限界時間を向かえ、リバースガンダムのTGNドライブも負荷によりリミッターが働きリベリオンRに戻る。

「くっ……トランザムの限界時間か…しかし、いつまでもガンダムではいられないようだな。」

「元に戻った……だけど！」

リベリオンRはビームザンバーで攻撃し、ローゼンクロイツァーはレーヴァテインで受け止める。

「思ったよりもやるな。シンク」

「こんな戦いは終わりにしてください。」

「言った筈だ。それは出来んな。」

二機が押し合いとしていると、両機のコックピットでアラートが鳴り響く。

二人はすぐに機体のコンソールを調べて、原因を突き止める。

「ぬかったな……地球の重力に捕まったか……」

「高度が……」

二機は激しい高速戦闘をしていたために自機の高度を確認している余裕も無く、戦っている内に完全に地球の重力に掴まっていた。

二機はすぐに離脱しようとするが、思うように高度は上がらない。

「トランザムを使ったせいか……」

「ドライブの出力が上がらない……」

ローゼンクロイツァーはトランザムで粒子を限界まで使っており、リベリオンRもリバーズガンダムとなり、TGNドライブに負荷をかけていたせいで出力が上がらずに地球の重力を振り切る事が出来ない。

「このまま、地球に降下するしかないか……」

ローゼンクロイツァーは重力を振り切る事を諦めて、大気圏の突入体勢に入る。



「あの馬鹿は何をしている！」

ローズが横目でリベリオンRを見ると未だに重力を振り切ろうとしている。

しかし、その甲斐も空しく、重力を振り切る事が出来ずに大気圏に突入していく。

「世話のかかる！」

ローゼンクロイツァーは機体をリベリオンRに寄せて行く。

「ローズさん！」

「何をしている！お前も大気圏の突入体勢を取れ！」

「そんな事急に言われても出来ませんよ！やった事ないですし！」

シンクがそう言いローズは更に機体をリベリオンRに接近させるとリベリオンRを抱きかかえる。

「このまま降下する。」

「ローズさん……」

「お前には借りがある。それをここで返させて貰うだけだ。」

ローゼンクロイツァーはリベリオンRを抱きかかえたまま、シールドを前方に突き出して、大気圏に突入していく。

「艦長！リベリオンが地球に！」

ヴィクトリアでもリベリオンRが地球の重力に捕まった事を補足していた。

「どうします？」

ミリィが不安げにラディウムを見る。

「今からMSを向かわせても間に合わん。彼の機体もガンダムだ。無事に降下出来るだろう。」

ラディウムにその確認は無いため、そう願うしかない。

「それよりも、MS隊は本艦の防衛をさせる！赤いMSも重力に捕まっている。その内敵も引くだろう。」

「俺達では何も出来ないか……」

アスカ機はガントミーをビームサーベルで両断してそう言う。

「ああ……今に始まった訳でもないがな。」

ルビィ機はGNソードを振う。

「今は信じるしかない。彼が無事に地上に降りて、無事に再会出来る事を……」

ルビィがそう言い、リブリオンRとローゼンクロイツァーは地上に  
落ちて行く……

## Mission 36 新たな旅路

「艦の破損状況は？」

戦闘を終えMSが帰投してもブリッジは休まる事は無い。

戦闘の被害を把握して、敵の次の手に備える必要がある。

今回の戦いでリベリオンが地上に落ちた以上、ヴィクトリアでは回収出来ない。

「相当やられましたよ。宙域に留まるので精一杯ですね。これじゃまともに航海も出来ません。」

敵の狙いはヴィクトリアの足を止める事か……

「敵艦は撤退して、すでにこちらでは補足出来ません。」

幸いなのは敵の隊長機を思いき赤いMSも一緒に地上に落ちてくれた事だ。

指揮官を失った敵は大きく後退している。

「艦の修理はどのくらいかかる？」

「修理以前に資材乏しいですからね……」

大佐の補給は武器や弾薬よりも食糧に重点を置かれていたからな。

当分、クルーが飢える事は無いが、ヴィクトリアの修理には時間が  
かかりそうだ。

そこまで計算して補給を用意していたとすると、この状況は敵の思  
うつぼなのかもしれないな。

「分かった。敵がいつ攻撃を仕掛けるか分からん。MSの整備を優  
先させて、襲撃にも備えさせておけよ。」

「了解しました。」

とにかく、今は体勢を整えて生き残る事を考えなくては……

「直接会ったの何年ぶりだろうね。メアリー……いや、今はコリンズ社  
長と言った方が良かったかな？」

「メアリーで構いませんよ。マシューさん」

コリニック社に日本支部の一室でマシューさんが私にそう言う。

軍を退役したマシューさんはコリニック社でテストパイロットの教  
官として雇っている。

今回は私の私用で日本まで呼び出している。

「それにしても懐かしい面々だね。同窓会でもするつもりかい？」  
現在、この部屋には私とマシューさん以外にはリタとオリビアさんがいる。

確かに、これで、アルエツトさんが揃えば、元Z.E.U.SのMS隊が揃う事になる。

だけど、私が三人を呼んだ理由はそんな微笑ましい用事ではない。

「残念ですけど、違います。」

「そっか。残念だよ。でもあーちゃんとかは来ないと思うけどね。」  
アイツはこういう時に面倒臭いとかで絶対来ないけど、今はそんな事を言っている場合じゃない。

「ボク達をこんなところに呼んだのはやはり、テストメント関連の事ですね。」

「そうよ。その前にリタ、第7世代のガンダムの開発はどうなっているの？」

第7世代のガンダム……ソレスタルビーイングがいざと言う時にために極秘裏に製造していた新型のガンダム。

情報が漏れる危険性からヴェーダにすらその情報は上げられていない。

情報によればテストメントの機体の中でオリジナルの太陽炉を搭載

し第6世代のガンダムを圧倒出来る性能を持っているとの報告が来ている。

だとすれば、私達に残された希望は開発中の第7世代のガンダムしかない。

「イクシード、ドラグーン、ジェノサイドはほぼ完成してる。でもイクシードは太陽炉もマイスターもないし、ジェノサイドはマイスターがない。ドラグーンは後は最終調整だけ。」

三機中、一機か……

流石に厳しいわね。

「レイジングは？」

「レイジングガンダムはすでに完成している。デュアルツインドライヴシステムも稼働を確認したってジェシカから聞いている。」

レイジングガンダム……それは現状は愚か、過去に作られたすべてのガンダムを凌駕する最強のガンダム。

それが完成すれば、テストメントの新型機とも互角以上に戦える。

「でも…肝心のマイスターのアベルの行方が分からない。」

レイジングガンダムはアベル専用として設計開発されている。

そのため、性能は圧倒的だが操縦性に難があり、人間は愚か並みのイノベーターでもまともに動かせない。

そんなもって肝心の馬鹿が行方不明と来てる。

「ボクの方でも探してはいるけれども、行方がまるで掴めない。」

「構わないわ。あの馬鹿は探すだけ無だよ。」

アイツの事だから、その内ひょっこりと出て来るでしょう。

心配するだけ時間の無駄よ。

「こっちのR2はほぼ完成しているわ。後はリバースの太陽炉を移植すれば良いだけよ。」

「リバースは確か宇宙だよな。ボク達に取りに行くの？」

「その必要はないわ。」

私は先日、独自の情報網で手に入れた写真を見せる。

「これは…リベリオンみたいだけど……中将のゼータとは違いみただいね。」

「それに赤いMSも一緒だよ」

それは大気圏を突入したりベリオンRとテストメントの赤いMSの写真。

「これは……どうしてこの機体が…まさか、シンクが？」



「でしょうね。あの機体はシンク以外のバイオメトリクスには反応しないようにロックがかけられているから」

シンクは戦場に出る様な気概はないと思っていたけど、やっぱりアベルの息子ってことね。

何だかんだで戦場に関わって来る。

血は争えないって事かもね。

「それで、マシューさん達にはリベリオンRの回収をお願いしたいの。」

「すでに戦場から身を引いたロートルを使ってでもかい？」

「ええ…テストメントを相手にするのは今の連邦のパイロットは若すぎるわ。実戦経験も絶望的な戦いの経験もね。マシューさん達はE.L.S戦役をも生き残っている歴戦の勇士、今こそその力を再び振う時だと思っただけよ。」

もっとも、それは少しの本音と多くの建前だけだね。

向こうの数はあまりにも多い。

それに対抗するためには少しでも戦力を投入する必要がある。

少なくとも第7世代のガンダムが全機完成するまでは……

「そう言う事しておくけれど、俺達のMSは？」

「それはすでに用意してあるわ。」

そのためにわざわざアメリカから日本に来たのよ。

「この日本支部の倉庫にあるバリスタを三機分、組ませ置いわ。」

「バリスタ……ずいぶん、懐かしい機体だ。と言っか実在していたんだな。」

マシューさんが驚くのは無理もない。

ある意味、幻の機体とも言えるのだから。

バリスタは第二次ソレスタルビーイング事変にリベリオンの支援機として設計開発が進んでいたけれど、技術者や資金の大半をジェシカのリベリオンZに回されて、そのゼータがリベリオンの弱点を完全にカバーしていたから、バリスタの存在意義がなくなりその上、アベルが戦死で行方不明となりアロウズは解体された。

バリスタのベースはアヘッドだった事もあり生産が中止されたため、初期に製造されたのがパーツの状態で20年以上も日本支部で眠っていた。

それを倉庫から掘り出して、何とか三機を組み立て、それをカタギリさんにカスタムをお願いしてある。

テストメントが軍をあれだけ早く掌握出来たのは軍内部に大量の内通者を送り込んでいたからだと思うから、連邦のMSを唯一製造しているコリニツク社にもテストメントと繋がっている人がいてもおかしくは無いから、信用のおける人材だけでそれもテストメントに

気取られないように慎重に行動する必要があったから、かなり時間がかかってしまった。

でも、何とか間に合わせる事も出来た。

「マシューさん達にはバリスタを使ってリベリオンRの太陽炉とそのパイロットのシンクの回収を頼みたいの。」

22年前にはバリスタはリベリオンの支援機として日の目を見る事は無かったけれど、22年の歳月を経てようやく本来の役目で表舞台で顔を出す。

因縁深いわね。

「分かった。それと……アルエットの行方は？」

「少し前に連絡が取れたわ。戦力が不足しているみたいだから、都合して貰えないかって。この仕事の後は、メーティアへの増援としてマシューさん達にはメーティアに行って貰うつもりだから」

「そうか……それはなによりだ。」

そうなれば、それこそ元ZEUSの同窓会になるわね。

もっとも……そこにかつてのメーティアのクルーもいないし、私とアベルもジミーもいないけれどね。

「そんな訳だから、あまり時間をかける訳にはいかいの。シンクの足取りが掴め次第、すぐに出て貰うから、その間にバリスタの機体特性を把握しておいてね。」

バリスタは三機が三機とも違うカスタムがされている。

その上、癖が強いから実戦経験の豊富なマシユーさん達をパイロットとして使う理由の一つでもある。

一番の理由はテストメントと繋がっている可能性が低いから信用が置けると言っところだけだね。

「了解だよ」

さて……第7世代のガンダムの完成がこの戦いを分けるカギになるわね。

ガンダムが完成した時が私達の反撃の時よ。

707

「……」

「起きましたか？ローズさん」

意識を取り戻した私にシンクが声をかける。

確か……シンクのリベリオンを抱えて大気圏に突入したまでは良かったが、トランザムで粒子を使い切った私のローゼンクロイツァーでは二機分の重量を軽減しきれずに地上に落ちたのだったな。

私はその時の衝撃で気を失っていたのか……

「シンクか……」

私は起き上がり辺りを確かめる。

「ここは？」

何分、不足の自体で地上に降下したため、地上の何処に落ちたのかは分からん。

「詳しい位置は……オーストラリアのどこかだと思います。」

オーストラリアか……

確か、この辺りはまだ完全にテストメントが制圧していなかったな。

私から見れば十分敵地か。

「それで、なぜお前は私を助けた。」

地上に降下したとは言え、私達は戦闘中にあった。

戦闘中に意識を失う事は致命的だ。

「ローズさんも僕を助けてくれました。」

シンクは躊躇う事なく私をまっすぐ見てそう言う。

「言っただろう。お前には借りがあると」

シンクは命をかけてシレーヌを救おうとした。

その行為は例え敵であろうと称賛に値する。

だからこそ、私はシンクを助けたに過ぎない。

「それでも……僕は目の前で傷ついている人を見捨てる事は出来ませんよ。」

「お前もシレーヌから聞いているだろう。私はイノベイドだ。この体は行動を起こすための器に過ぎない。例え、失おうとも代わりは幾らでも用意出来る。」

所詮は私達はイオリアの計画を修正して正しく計画を実行するための道具に過ぎない。

「そんな事はありませんよ！イノベイドだって人間と変わりませんよ。僕は小さい頃はイノベイドの人に育てられました。だから分かります。イノベイドだって人間と同じです。」

不思議な奴だ……

私とシンクは敵同士の筈だ。

なのに、私はコイツを殺す気にはなれん。

少なくともこの場では……

この距離なら幾ら、イノベーターであろうとも仕留める事は出来なくもない。

シンクは完全に油断している。

しかし、私はその気にはなれんな……

「私の事はさておき、お前はどつするつもりだ？シレー又は連邦の戦艦の中だろう。」

「はい。何とかして宇宙に上がってヴィクトリアに戻らないと……」

「どの道、この町に出て情報を集めんと、どこに向かえば良いのかは分からんぞ？」

少なくともオーストラリアには宇宙に上がる施設は無かったと記憶している。

「私も同行しよう。」

私がそう言うと流石にシンクも驚く。

「驚く事も無かるう。私も宇宙に上がらねばならん。私とお前の利害は一致しているはずだ。」

「でも……良いんですか？僕と行動すれば、ローズさんの仲間から見れば裏切りに見えるかもしれませんよ。」

この後に及んで私の心配か……

「問題は無い。私の使命はイオリア計画を阻害する物の排除だ。その目下の敵は連邦軍だ。お前は戦いこそはしたが連邦軍ではない。それに私の現在の任務はお前のガンダムの性能調査、それならばお

前と行動をともしにするのが効率が良い。」

完全に詭弁だな。

確かにそれもあるが、一番の理由は私がシンクに興味があるからだ。戦場ではあれだけの戦いをしておきながら、戦場を離れるとまるで人が変わったかのようなようだ。

私はもう少し、シンクを近くで見たい。

そんな気持ちになっている。

私もテイエリア・アーデみたく人間に当てられたか？

笑えない冗談だな……

「分かりました。ローズさんが一緒ですと心強いです。」

シンクはそう言う。

まったく……こいつは……

こうして私とシンクの奇妙な旅路が始まった。



## Mission37 シンクの戦い

「お帰りなさい。ローズさん」

私とシンクが行動をともにして数日が経つ。

運よく降下した近くに町を見つけた私達は情報収集を行う事にした。

しかし、忘れがちだったがシンクはついこの間まで民間人だった。

それ故に諜報活動などの経験は無い。

テストメントでの諜報活動はフィルかアメリカの担当で私は戦闘指揮が担当の為、得意ではないがシンクに比べればマシと判断して私が単独で町で情報を集めて来た。

シンクはその間、私のローゼンクロイツァーを見ていて貰っている。

ただでさえ、戦闘用MSは目立つ上に私とシンクの機体は赤い。

赤いMSは連邦の英雄、アベル・ウォーカー専用機しか公式には存在していない。

そのため、悪戯に目立ってしまう。

だから、MSで町に接近する訳にもいかず、私が数キロを歩いて町に向かった。

「それで、何か情報はありましたか？」

「ああ、面白い情報を耳にした。」

私は町で耳にした情報をシンクに話す。

それはこの近くの連邦軍の基地でテストメントに対する抵抗活動をしているとか。

それに対しテストメントが数度に渡る攻撃を繰り返しているとか。

この辺りにも部隊を派遣していたと言う事が……

私が地上に降りて数日だが、かなり動いていると見た。

攻撃の仕方から指揮官はルギアムと言ったところか。

数日もあれば、ナベリウスを直すのは容易だろう。

その上、私が地上に落ちた為にそれを口実として地上に降りて来たんだらう。

「そうですね……」

「私の見立てではその基地はもうじき落ちるだらう。」

数日持ったのは基地が戦力不足を補うために傭兵を雇っているらしい。

しかし、それもここまでだらう。

「どうして分かるんですか？その基地は数回も攻撃を凌いでいるのでしょうか？」

「だからこそ、もうじきなのだ。シンク：攻撃の仕方から指揮官はルギアムだと推測出来る。奴は戦いにおいて手段を選ばない。手段を選ばないと言え、小物のように感じるが実際は手段を選ばないと言う事は裏を返せばあらゆる手段の中から最も効率が高く確立の高い方法を選ぶと言う事でそれは絶対的強者の証とも言える。」

ルギアムの基本的な戦いはガントミーを数度に分けて仕向けて敵の戦力を把握した上で自分が出て行き確実に止めを刺すと言うものだ。状況に応じてやり方を変えるが基本的な戦術はそれが多い。

それにより、ガントミーは数百単位で失うが。ガントミーは常に生産されており我々が保有している量子跳躍ゲートを使えば補給の間もかからない。

そのため、ガントミーを切らす事なく、攻撃を行う事が可能だ。

「そうなんですか……」

「個人的にはルギアムの戦い方は好かんが、私でも戦闘レベルでの戦いでは勝てるが戦場レベルでの戦いでは奴には勝てんだろうな。」

私は戦闘レベルでの戦闘に特化したタイプだからな。

「我々ナンバーズはナンバーによってその序列が決まっているがそれは個人能力の有無で判断されているが、絶対ではない。」

1〜4のユーグ、姉上、クロイツ、リボンスはナンバーズの中でも別次元だ。

それ以下のアーン、ノルン、私は指揮官タイプで戦場では自分の美学や戦い方で戦う事が多い。

それはテストメントがテロ組織だと思われないために綺麗に戦うためのものだ。

だが、セルとルギアムは違う。

その二人は効率良く戦いに勝利するために作られている。

セルは精神年齢を子供にすることで遊び感覚で戦闘をしている。

それは一見、戦いを舐めていると思われがちだが実際は敵を殺す事にも自分が殺される事にも一切の感情を持っていない。

戦場で敵を殺す事に罪悪感を持ち躊躇ったり、己の死に恐怖したりすることは戦場では命取りだ。

それを無くし、敵を葬るには子供の精神が最も都合が良い。

子供は命を奪う事に対して躊躇いが無い。

セルは子供が小さい虫を殺すかのごとく敵を殺せるから強い。

そこには一切の迷いも躊躇いも存在しない。

ルギアムも戦場で勝つ事を優先した戦い方は残虐で低俗だが、もっ

とも確実だ。

だから、例えナンバーが私よりも低くても自分の得意とする戦い方で戦えば上位のナンバーズ以上の戦果を出せるのがこの二人だ。

「それでも……基地の人だって守りたい物があつて抵抗しています。だったら、そう簡単に負ける事はありません。」

シンクはそう断言する。

そう言うシンクは何処までもまっすぐな目でそう言う。

しかし、現実はお前程優しくは無い。

人は守りたい物の為なら強くなれると言うがそれはまったくのデタラメだ。

精神論を否定するつもりはないが、それは本人の元から持っている才能を引き出すためのキーでしかない。

幾ら、想つてもMSの性能は向上しないし、才能以上の実力を出す事は不可能だ。

それこそ、人の想いで強化されるシステムを搭載したMSを使うくらいしかない。

そんなのは夢物語で実際には存在しない。

「そう簡単な話じゃないんだ。シンク……戦いにおいて勝利に必要なファクターは細かく言えばそれこそ無限に等しいが、大まかに分

けると使用兵器の性能、それを使う兵の能力と経験、それを使った戦術だ。」

それは兵器が戦車や戦闘機からMSに変わった今でも相異は無い。

「使用する兵器の性能は比べるまでも無い。我々の機体を上回る機体は連邦に存在しない。」

あるとすればソレスタルビーイングのガンダムだが、ガンダムがその基地に居たり、付近で見かけたと言う情報は無い。

「兵の能力はもた。我々は純粹種のイノベーターに匹敵するスキルを持っている。連邦のパイロットで我々を上回る能力を持っている兵は存在しない。」

その可能性を持っていたライト・クルーガーはこちら側についた。

最強のイノベーターのアベル・ウォーカーはこちらの手に落ちていく。

よって、この可能性もあり得ない。

「兵の経験は論外だ。我々はヴェーダに記録されている戦いの記録を自分の経験として身に染み込ませている。」

ヴェーダが作られて2000年、その間に様々な戦いが起きている。

第一次ソレスタルビーイング事変に始まり。

二度に渡るプレデントのテロ。

第二次ソレスタルビーイング事変。

E L S 戦役。

人類解放戦線との戦い。

私達はそれらを自分の経験としている。

その経験はアベル・ウォーカーをも勝っている唯一の事だ。

それに対して相手の経験は多くても数十年だ。

実戦経験では天地の差がある。

だからこそ、私達はそれなりの経験のパイロットの動きは容易に読める。

経験の豊富なパイロット程、私達との相性は悪い。

そう言う意味では経験の不足しているシンクの戦い方はまるで素人で戦いにくい。

素人の動き程、無意味で訳の分からない行動は無い。

しかし、シンクは親譲りの天性の才能を持っている。

ただの素人では先を読まずとも取るに足らんが、シンクの場合は素人だが才能と機体性能で私達と互角以上の戦いが出来る。

シンクは私達、ナンバーズと余程相性が良いらしい。

シンクのガンダムを作らせた奴はそこまで考えていたのなら、感心を通り越して恐怖すら感じるな。

「戦術に至ってはルギアムの専売特許だ。」

何かを守るために戦う者は大抵は守るために恥じない戦いをしたがるか、自分の心を殺してまでも手段を選ばない戦い方をする。

しかし、ルギアムは躊躇う事なく効率の良い戦いをする。

それは手段を選んでいる奴よりも自分の心を殺している奴よりも躊躇いがない分、上を言っている。

「それらを総合して考えると、基地の連中に勝機は0%だ。」

例え、奇跡が起きても覆る事のない絶望的な数字だ。

それを覆す唯一の方法は基地を放棄して撤退をすることくらいか……

そうすれば、運が良い奴は逃げ延びる事が出来るやもしれん。

それでも0%が1%になる位の確立だが、それでも0%よりかはマシだ。

それが今の現実だ。

「だったら……このままにしておく訳にはいきませんよ。」



「どうするつもりだ？」

「助けに行きます。」

シンクはそう言う。

こいつは……私の話を聞いていなかったのか？

シンクがルギアムを相手に圧倒出来た最大の理由はルギアムの策が最後の仕上げの自ら出撃して仕留めると言う段階だったから、把握されていなかったイレギュラーのシンクによってルギアムの策が半ば破綻していたからだ。

今から行けば、同じ状況に見える。

しかし、ルギアムも無能じゃない。

一度、起きた事を二度起きないを思っている訳ではない。

前の失敗を次に活かして来ているだろう。

「お前はなぜ助けに行く。」

連邦艦にはシレーヌのように守る対象がいたから、シンクは戦っていたのだろう。

数日間でシンクの性格は大まかに把握している。

「壊滅すると分かっている見捨てる事は出来ませんよ。」

「それが答えだとも言うのか？」

「そうです……僕は今までイノベーターと言ってもお父さんの様な事は出来ませんでした。それは今も変わりませんが、前とは違い僕にはこのガンダムと言う力があります。僕はこの力で少しでも誰かを守りたいんです。」

それが、シンクの戦う理由か……

力があるからそれで弱者を守るか……

子供の意見だな。

だが……子供故に力のもつとも正しい使い方を言っているとも言える。

「面白い……お前の戦いを私に見せてみる。」

本当なら、宇宙に戻る手段を最終戦にさせるべきなのかも知れんが、シンクの戦いを最後まで見る事が今の私に必要な事だと私の感がそう告げている。

オーストラリアの一面に存在している連邦軍の基地に大量のガントミーが進軍している。

進軍しているガントミーは大きく分けて三種類存在していた。

脚部を改良してホバー走行をしている陸戦型のガントミー、通常の二足歩行で陸戦型の後方からついて来ている通常のガントミー。

それに加えて上空からは背部に簡易的なフライトユニットを装備し、両足が付いていない空戦型のガントミーが合わせて約100機程が進軍している。

「相変わらず、数ばかり揃えてたか……」

GN-X?に搭乗するゼロ・バージュは敵の数を見てそう言う。

彼は元々はソレスタルビーイングのサポート組織の一つに属していたが紆余曲折を経てフリーの傭兵としてこの基地に雇われている。

「逃げるなく最後の一兵まで戦えか……基地の司令官殿も厄介な仕事を押し付ける。ま、その分報酬は上乘せしてもらおうが……」

ゼロはそう言いながら操縦桿を握る。

「それもこいつらを片づけてからだな。」

ゼロは機体をガントミーの大群へと向ける。

それを合図として、基地の防衛のMSもガントミーに攻撃を開始する。

ゼロのGN-X?は左型にGNバスターソード、右肩にGNシールドを装備してGN-X?に装備されていたGNランスを装備した近接戦闘用のカスタムがされている。

それ故に敵陣に粒子ビームを撃ちながら突撃する。

「妻子持ち舐めんなよ。幾ら数が多くてもな！」

セロはガントミーからの攻撃を避けながら、GNランスの一撃で確実にガントミーを落としていく。

「新型と言ってもこの程度か」

セロはガントミーの性能をそう評価する。

ガントミーは新型のMSと言えるがその性能は旧三国家群のMSと比べてもそれ程差は無い。

最大の脅威は一度の戦闘で常識外の数を平気で投入出来る量産性と無人機故の死を恐れない戦い型と完全に統率されたフォーメーション。

しかし、第一次ソレスタルビーイング事変からの実戦経験を持つセロにとってはそれほどの脅威とは言えず、ガントミーは成すすべなく撃墜されていく。

「今回も無策での特攻か……何を考えている。」

セロがそう考えていると、ガントミーは引いて行く。

「引くのか……どういう事だ？」

ガントミーが完全に引くと今後は両腕に巨大な盾「サーベラス」を

装備しているナベリウスが出て来る。

「あいつは……雑魚では落とすきれないと見て、大将自らお出ましか……上等だ。」

ゼロは機体をナベリウスに向ける。

「向かって来るのはGN-X機か……この程度の戦力など取るに足らんぬ。」

ゼロのGN-X?はGNランスを捨てるとバスターソードを持つ。

「一撃で決める。今、俺にできる最良の策だ。」

「生意気だな。人間風情が!」

ナベリウスはサーベラスを突き出すが、GN-X?はかわしてナベリウスの内側に潜り込んでバスターソードの一撃をナベリウスに喰らわせる。

GN-X?の一撃はナベリウスを直撃すして、ナベリウスを地上まで吹き飛ばす。

「良い事を教えてやる。機体の性能だけで勝てるほど戦場は甘くないんだな、これが」

地面に叩きつけられたナベリウスにGN-X?は地上まで降下して、ナベリウスの両腕の上に着地してナベリウスの両腕の動きを封じた。

「どんな強力な機体でも突っ立ってるだけなら楽に一撃を入れる事

が出来る。お前の敗因は自分の能力を過信した事だ。」

GN-X?はナベリウスにGNバスターソードを突き刺そうを構える。

「くつくくくつ……」

ゼロが止めの一撃を入れようとするとゼロのGN-X?に通信が繋がれて、ナベリウスの中で笑うルギアムの声が聞こえた。

「何がおかしい。」

「いや…何…この状況で勝った気でいるお前が実に滑稽だな。」

「強がりはやせ。お前は完全に詰んでいる。」

ゼロがそう言いながらも、周囲を警戒するが周囲に敵の伏兵やトラップの痕跡は見られない。

「良い事を教えてやる。どんなに足掻こうが、人間が俺に勝てる訳がないんだよ。」

ルギアムがそう言うと突如、周囲にガントミーが出て来る。

出て来たガントミーの両腕は通常のガントミーの様な武装ではなく、通常のMSの様なマニピレーターをしている。

そのガントミーはGN-X?に取りつく。

「馬鹿な…伏兵はいなかった筈だ。」

確かにセロが警戒していた時はそこにはガントミーは存在しなかった。

出て来た時にそこに現れたからだ。

このガントミーはテストメントのナンバーズ専用機の特異な機能のテストの為に開発された特殊な機体で1年前に単機でソレストルビーイングの第6世代のセイバーガンダムとコマンドガンダムを追い詰めていた。

MS単体でのノーモーションでの量子跳躍を可能としたガントミーはセロの警戒範囲外で待機しており、あのタイミングで跳躍して来ていた。

「さて……この状況ですることと言えば、無能な人間でも分かるよな？」

「てめえ…俺を道ずれにするつもりか！」

ルギアムの言葉でセロはガントミーのすることを理解出来たが、すでに遅かった。

GN-X？に取りついていたガントミーはナベリウスをも巻き込む爆発を起こした。

「くそつたれ……」

爆風が晴れるとそこには無残なGN-X？いた。

シールドを装備していたため、右腕は無事だったが左腕や脚部は吹き飛ばされており、装甲をとどころどろが吹き飛んでまともに戦える状況でない事は明白だった。

「だが…あの爆発なら防御の出来ない奴は助からないだろう。戦いつてのは最後まで立っていた奴の勝ちだ。俺をはめたとは言え、アイツは死んだ。俺の勝ちだ。」

しかし、煙が完全に晴れるとそこには無傷のナベリウスが何事も無かったかのように立っている。

「無傷だと……」

「そう言う事だ。人間」

セロはその事実には驚くが、GN-X?の装甲はEカーボンを使用しているが、ナベリウスの装甲にはGN粒子を内包することで強度を高めている強化Eカーボンを使用している。

強度で劣るEカーボンの装甲のGN-X?がああ爆発で完全に破壊されていないため、それ以上の装甲を持つナベリウスがGN-X?よりもダメージが少ないのは当然の事だったが、無傷なのはそれ程テストメントの技術力の高さ故だった。

「お前たちなど、所詮はその程度なんだよ。それが俺に勝つただと？ 驕るなよ。人間」

ナベリウスはサーベラスを構える。

「まったく、こんな時レイが居れば……」



セロは完全に勝機がない事を悟り、かつて進む道が違ったために敵対し、自らの手で葬った友の事を思い出し覚悟を決める。

「待って下さい！」

ナベリウスの止めの一撃が入る前にオープンチャンネルでシンクが叫び、粒子ビームが飛んで来てナベリウスをGN-X?から引き離す。

「何だ？」

「これ以上の戦いは無意味です！」

シンクのリベリオンRはGN-X?の前に降り立ち、その後ろからはローズのローゼンクロイツァーがついて来ている。

「リベリオンだと？アベル・ウォーカーじゃないな…どこのどいつだ？」

「この人はもう戦えません。力のない相手をこれ以上、攻撃するのは止めてください。」

「お前には関係のない事だ。これは俺とコイツの戦いだ。邪魔をするな。」

セロはそう言いシンクは言い返す。

「だからって見捨てる事は出来ません。」

「これは遊びじゃない。戦場に出る以上、敵を殺して敵に殺される覚悟をしてんだ。お前の行動はその覚悟を侮辱している。そこをどけ、この状況だろうと俺は最後まで戦い抜くだけだ。」

「そんなのは覚悟は間違ってます！死んで良い人なんて何処にもいません！」

シンクの言葉にゼロが反論しようとするが、その前にローゼンクロイツァーがGN-X？の残っていた右腕をレーヴァテインで両断した。

「ローズさん！」

「戦場では強者の良い分が絶対だ。敗北した弱者は黙っている。」

「お前……生きていたのか？リベリオンと一緒に言う事はテストメントを裏切るってことか？」

「違うな。私の任務はその機体の戦闘データの収集だ。そのためにはそいつと行動を共にする事が一番だ。」

ローズはそう言い、ルギアムは鼻で笑う。

「そうかい。そんなら、俺の邪魔だけはするなよ。」

「無論だ。男の勝負に水を差すような無粋な真似はしないさ……シンク、お前の戦いを貫いて見せる。」

「分かりました……行くよ……ガンダム」

シンの両目の虹彩が輝くとリベリオンRはリバースガンダムへと変形を始めた。

「ガンダム…この餓鬼、ソレスタルビーイングか？」

「いきなりガンダムか……そう来ないとな！」

二機は上空へと舞い上がり、激突する。

## Mission 38 圧倒的な力

リバースガンダムとナベリウスの交戦が始まり、リバースガンダムはGNビームザンバーを抜いて接近する。

ナベリウスはサーベラスに内蔵されているGNキャノンを放ちリバースガンダムはかわしながら接近してビームザンバーを振う。

「お前さえ倒せば！」

ナベリウスはサーベラスで受け止めて、もう片方のサーベラスを突き出す。

「くっ！」

リバースガンダムはシールドでサーベラスを弾き距離を取るとバルカンで牽制する。

「んな攻撃が利く訳ないだろ！」

ナベリウスはリバースガンダムの攻撃を無視してリバースガンダムに接近して、足の先端についているビームサーベルを展開して蹴りかかり、リバースガンダムはビームザンバーで受け止める。

「後ろがから空きだあ！」

ナベリウスはリバースガンダムの背部をサーベラスを突き出してリバースガンダムを殴り飛ばす。

「まだ！」

リバースガンダムは弾き飛ばされながらもGNビームマグナムを構えて放つ。

「ちい！」

ナベリウスはサーベラスで防ぐ。

サーベラスはビームマグナムを防ぐが、完全に防ぐ事が出来ずに表面が焼け焦げている。

「僕だつてやれるんだ！」

リバースガンダムはビームザンバーを持ちナベリウスに接近して行く。

ナベリウスは足の先端のビームサーベルで蹴りかかり、リバースガンダムはシールドのアンチフィールドを展開して防いで斬りかかる。

「何度も好きにやれると思っでんじゃねえよ！人間が！」

ナベリウスはサーベラスで受け止めるで、もう片方のサーベラスを突き出す。

リバースガンダムはシールドで受け止めて、押し戻してビームザンバーを振りそれをサーベラスで受け止めた。

二機はしばらく押し合うが、ナベリウスがリバースガンダムを蹴り飛ばしてGNキャノン放つ。

リバースガンダムは粒子ビームをシールドで防ぎながら、持っていたビームザンバーをナベリウスに投げつけた。

「しゃらくさいんだよ！さっさと落ちろよ！ガンダム！」

ナベリウスはビームザンバーをサーベラスで弾き飛ばした。

「そこだ！」

しかし、ビームザンバーを弾いた隙にリバースガンダムは腕のビームトンファアを展開してナベリウスに接近してビームザンバーをナベリウスの腕に突き刺す。

「ちい！」

ナベリウスは右腕を方から切り裂かれる。

「僕の勝ちです。」

リバースガンダムはナベリウスにビームトンファアを突き付けてシンクはそう宣言する。

「僕の勝ちだから、この戦いは終わりです。引いてください。」

シンクがそう言っていると二人の戦いを見ていたローズのローゼンクロイツァーが急に飛び上がり、ナベリウスの背後に来てシールドを掲げた。

「ローズさん？」

すると、粒子ビームが飛んで来てローゼンクロイツァーがビームシールドで防ぐ。

「どついう事だ……答える！クロイツ！」

「あのMSはクロイツのウインドブルム……だが、どついう事だ？」

GNTS-003 『ウインドブルム』

それが攻撃を行ったMSの名前。

ナンバーズのNo.3のクロイツ・ヴォルム専用に開発されたMSで緑を基調として、他のナンバーズ専用機に比べると機体の全身が細身で背部には翼状の大型スラスターを二基と二対の粒子ビーム砲『ドレイク』を装備しているのが特徴的なMS。

その右手にはビームライフルを左腕には小型シールドも装備している。

「どつもこつもない。人間に負けるような奴はナンバーズに必要ない。」

ウインドブルムのコックピットでクロイツ・ヴォルムがそう言う。

クロイツはパイロットスーツを着ておらず、その容姿はソレスタルビーイングの前ガンダムマイスターが見れば驚愕していただろう。

その容姿はあまりにもガンダムマイスターの一人、ティエリア・アーデヤイノベイド勢に属していたリジエネ・レジェッタに酷似して

いた。

テイエリアとの違いはテイエリアはメガネをかけて短髪だったが、クロイツはメガネをかけておらず、髪も長髪になっている。

二人が似ているのも当然の事だった。

テイエリアもクロイツもリジエネも同じ塩基配列パターンを持つ同タイプのイノベイドだからだ。

「それが仲間に言うセリフか！」

「仲間？違うな。弱者は俺の計画に必要な。」

「俺の計画だと？クロイツ…てめえ、計画を乗っ取るつもりだとも言うのか？」

ルギアムの言葉をクロイツは鼻で笑う。

「くだらないな。イオリア・シュヘンベルグの計画など、所詮は不完全な人間の愚かな妄想に過ぎない。完璧な存在の我らが、それにつき合う義理はない。」

クロイツがそう言っているとローゼンクロイツァーがビームライフルを放ち、ウィンドブルムはシールドで防ぐ。

「黙れ…それ以上しゃべるな。」

ローゼンクロイツァーはレーヴァティンを抜いて構える。



「愚かな……」

「愚かなのは貴様だ。己の本分を弁えろよ。我らは計画を正しく遂行するための存在……それ以上でもそれ以下でもない。」

「ローズさん……」

「悪いな。シンク……コイツを野放しにしておく訳にはいかないのだから。お前の力を借りたい。」

「……分かりました。」

リバースガンダムはビームトンファーを構えて、ウインドブルムに突撃する。

「そいつが6機目のガンダムか……見極めさせて貰う。」

ウインドブルムはビームソードを抜くと、リバースガンダムに斬りかかりリバースガンダムはビームトンファーで受け止めた。

そして、リバースガンダムはバルカンを撃ちながら距離を取ろうとするが、ウインドブルムとの距離を離す事は出来ない。

「成程……高機動とは聞いていたが、ウインドブルムと相手にここまで距離を保てるとは流石と言ったところか……」

「ガンダムの状態でも引き離せない！」

「貰った！」

リバーズガンダムの進路上にはローゼンクロイツァーが待ち構えており、リバーズガンダムを追いかけていた、ウインドブルムにレーヴァテインで迎え撃つ。

「成程ね。速さで敵わないと分かっているから、こちらの軌道上に待ち構えていると言う事が。」

「そういう事だ！」

ローゼンクロイツァーはレーヴァテインを振うが、ウインドブルムはそれを回避する。

「避けただと！」

「速さで勝ると言う事は当然、攻撃を回避するのも造作ない。」

ウインドブルムはビームソードを振り、ローゼンクロイツァーの左腕を切り落とした。

「次は右腕を貰う。」

ウインドブルムがもう一度ビームソードを振るおうとするが、それをナベリウスがGNキャノンを放つ。

「ルギアムか？」

「裏切り者を庇うか……」

「裏切り者はてめえも一緒だろ！」

ナベリウスはGNキャノンを放ち、ウインドブルムは回避する。

「ガンダムよりてめえの方が面倒だ。先に潰させて貰うぞ！」

ナベリウスはサーベラスを突き出す。

「その程度の速さでこのウインドブルムを捉えようとは俺も舐められたものだ。」

ウインドブルムはかわすとビームライフルを構えるが、リバーズガンダムがビームマグナムを放ち回避する。

「どうして貴方は仲間を撃てるんですか！」

リバーズガンダムはビームザンバーでウインドブルムに斬りかかる。

「仲間だとは思ってないからだろうな。」

ウインドブルムはビームソードで受け止めると、ローゼンクロイツアーがレーヴァテインで斬りかかる。

「その武器を片手で振りまわすのは些か無理が過ぎるな。ローズ」

リバーズガンダムを弾き飛ばして、ローゼンクロイツアーの一撃をかわすとウインドブルムはビームソードでローゼンクロイツアーの右腕を切り落として、蹴り飛ばすとローゼンクロイツアーを地上に蹴り飛ばす。

「うぐう！」

「ローズさん！」

「三人の中で君が一番厄介のようだね。」

リバースガンダムのビームザンバーの一撃を避けると、ウインドブルムは背部に装備されている『ドレイク』を展開する。

「あれは…ドレイク！シンク！そいつは必ずかわせ！お前のガンダムでもそれは防げん！」

展開された二対の粒子砲「ドレイク」から粒子ビームが放たれて、リバースガンダムは回避しようとするも、かわし切れずに右足に掠る。

掠った右足は次第に溶解されて右足は膝から下がなくなる。

「そんな！」

「ドレイクが掠ってそれだけの被害とは…粒子ビームに強いと言う報告は事実のようだ。」

ウインドブルムはバランスを崩しているリバースガンダムに照準を合わせる。

「だが…これで終わりだ。」

ウインドブルムのドレイクが放たれてリバースガンダムに迫るが、リバースガンダムに直撃する前に粒子ビームは弾かれた。

「防いだ……ドレイクの粒子ビームを？」

「これは……」

リバーズガンダムはリベリオンRに戻り、リベリオンRの前には10基のアンチ粒子シールドが展開していた。

「シンク…まだ生きてる？」

「リタ……どうして、君が？」

リベリオンRのモニターにはリタ・リバーズの姿が映し出されている。

そして、粒子ビームがウィンドブルムを襲いウィンドブルムは回避する。

「とりあえず、無事で何より。」

「話は後にしてくれ、今はアイツを何とかする方が先だ。」

マシユーが通信に割り込みそう言う。

GNC-000 『バリスタ』

コリニック社が20年以上前に開発したリベリオンの支援機。

メアリーが対テストメント用の戦力として日本支部にてパーツのままで寝かされていた機体を組みあげた機体をカスタムされている。

頭部はかつて、アロウズの隊長機として運用されていたMS、アヘ

ツドの物を使用しており、脚部には追加装甲とともにGNコンデンサーが共通して追加されている。

マシユール機には右肩にGNビームキャノン左肩にNGNレールガンを両肩のサイドには大型のミサイルポッドが装備されており、両腕にはGNディフェンスロッドが装備され、右手にはGN-X用のビームライフルが持たれている。

マシユールの一号機はリベリオンの機動性を優先して武装が最低限しか装備されていなかったために切り捨てられた『火力』を補う役目が持たされている。

リタ機には両肩と両腰、両腕にアンチ粒子シールドが装備されており、背部にはコンテナ状のスラスタが装備され、リベリオンRを守った10基のアンチ粒子シールドが搭載されていた。

腕のシールドには棘付きの鉄球が付いており、胸部と両肩にはスサノオに実装されたトライパニッシャーの発射口が追加されている。

脳量子波でアンチ粒子シールドを操作するためにより遠くに脳量子波が飛ばせるように頭部にブレードアンテナが追加されている。

リタの二号機のはりベリオンの機動性の為に切り捨てられた『防御力』を補う役目を持たされている。

オリビア機は背部にはアヘッドのスラスタが二機分が上下逆さに装備され、両肩にはガンダムスローネドライ同様のステルスフィールドを展開することの可能なGNシールドを装備している。

両手にはGNビームガトリングライフルが持たれている。

リタの三号機はリベリオンの『拡散攻撃』を補うとともにリベリオンが戦いやすいように敵を分散させたりステルスフィールドでリベリオンの敵への接近や撤退を補助する役目が持たされている。

22年前は様々な事情により、日の目を見る事の出来なかった機体が遂に本来の役目の為に戦場に舞い戻って来た。

MISSION38 圧倒的な力(後書き)

新キャラ設定

クロイツ・ヴォルム

(CV 速水 奨)

肉体年齢28歳(男)

NO.3を与えられているイノベイド。

テイエリアとリジエネと同じ塩基配列パターンをつっているため非情に容姿が似ている。

ナンバーズの中でもイオリアの計画を遂行するつもりはなく、独自に動いている。

ナンバーズでも高い能力を持っている。

新MS設定

GNTS-003 『ウィンドブルム』

テストメントが開発したクロイツ専用の高機動型MS。



機動力を優先したために機体の装甲が薄い、機動性能はリバー  
スガンダムに匹敵する。

パイロットの能力と相まってリバーガンダム、ローゼンクロイツ  
アー、手負いのナベリウスの三機がかりでも圧倒する性能を持つて  
いる。

## 武装

### ・ドレイク

背部に装備されている二対の粒子ビーム砲

高出力を誇り、粒子ビームに対して圧倒的な防御力を持つリバー  
ガンダムの装甲ですら掠っただけで破壊することが出来る。

また、高い威力を持っている上に数発ならば連射も出来る。

### ・GNビームソード

両腰に二基装備されている。

通常のビームサーベルよりも高い威力を持っている。

### ・GNビームライフル

ライフル事体は専用開発された物だが、威力は驚くほど高い訳ではなく連射を重視されている。

・GNシールド

左腕に装備されているシールドで通常規格よりも一回り小さくなっている。

・GNバルカン

頭部に二門装備されている。

他のナンバーズ専用機と同じ物を搭載している。

GN C - 000 『バリスタ』

コリニック社が2年前に開発したりベリオンの支援機。

さまざまは理由から開発は途中で中断して数機分のパーツだけがコリニック社日本支部の倉庫に寝かされていた物を引っ張りだして来て組みあげている。

製造されたのが20年以上も昔の為、性能面で不安が残っていたが、ビリー・カタギリの手によってカスタムされており、性能面でも十分に現代のMSに対抗出来る性能となっている。

#### 一号機

マシユーが搭乗し、火力を重視したカスタムが施されている。

#### 武装

##### ・GNビームキャノン

リベリオンZに装備されたビームキャノンのプロトタイプでリベリオン?でのテスト中に発覚した問題をビーム砲内に疑似GNドライブを搭載する事でクリアされている。

##### ・NGNレールガン

リベリオンZに装備されていたレールガンのプロトタイプでリベリオンZに搭載された物とは違い、GN粒子で弾丸がコーディネートされている訳ではない。

##### ・GNビームサーベル

アヘッド同様両肩の装甲に内蔵されている。

当時の物では出力が低いため、GN-X?の物が搭載されている。

・GNビームライフル

開発当初は装備する予定がなかったが、機体をより実践的にするために装備されている。

・GNディフェンスロッド

両腕に装備されている。

・GNバルカン

頭部に装備されている物で当時の物を使用されているため、威力は極めて低い。

・ミサイル

両肩に装備されている大型のミサイルコンテナに内蔵されている。

一  
二  
号  
機

リタが搭乗し、防御力を重視したカスタムがされている。

また、脳量子波を使う事が前提の為、頭部にブレードアンテナが追加され、機体の一部の装甲に強化Eカーボンが使われている。

武装

・アンチ粒子シールド

機体の両腕と両肩、両腰、背部のコンテナスラスターに10基、計16基装備されている。

背部のコンテナスラスターに搭載されている物は脳量子波で遠隔操作が可能でシールドビットとして使う事が出来る。

両肩と両腰の4基は直接機体に取りつけられている訳ではなく、アームによって防御出来る範囲が広がっている。

両腕に装備されている物は戦端にGNハンマーが、内側にはNGNバズーカが二基つづ装備されている。

・トライパニッシャー

スサノオの予備パーツが使われている。

・GNバルカン

頭部に装備されている物で当時の物を使用されているため、威力は極めて低い。

### 三号機

オリビアが搭乗し、リベリオンの戦闘をサポートするためのカスタムがされている。

#### ・GNビームガトリングライフル

両手に装備されているガトリングガンで威力よりも連射速度を重視されている。

#### ・GNビームサーベル

アヘッド同様両肩の装甲に内蔵されている。

当時の物では出力が低いため、GN-X?の物が搭載されている。

#### ・GNバルカン

頭部に装備されている物で当時の物を使用されているため、威力は極めて低い。

・GNシールド

両肩に装備されているシールドでGN-Xシリーズの物に比べると分厚い。

シールドからスローネドライ同様のステルスフィールドの展開が可能となっている。

## Mission 39 これから

三機のバリスタが戦場に介入すると、ウィンドブルムも様子見に徹している。

「シンク、まだ動ける？」

「うん。片足が破壊されて、すぐにガンダムになれないけど……まだ戦える。」

「分かった。ボク達、三機が援護する。シンクが決めて」

リタがそう言うとマシューのバリスター一号機がGNビームキャノンとNGNレールガンを連射する。

「ようやく、再開か……だが！」

ウィンドブルムは一号機からの攻撃を回避する。

「早いな……」

「だけどね〜」

オリーブアの三号機がウィンドブルムの進路を塞ぐようにビームガトリングライフルを放つ。

「ほう……こちらの進路を予測して攻撃するか……」

ウィンドブルムはシールドで防いでいると、リベリオンRがビーム



トンファアで切りかかる。

しかし、ウインドブルムはリベリオンRの攻撃をかわすと、背部のドレイクをリベリオンRに向ける。

「悪いけど、やらせないよ。」

ウインドブルムのドレイクの一撃をリタの二号機のアンチ粒子ビームシールドを間に入れて防ぐ。

「厄介なシールドだ。」

アンチ粒子シールドが散開すると、リベリオンRがGNビームマグナムを構えている。

リベリオンRがビームマグナムを放ちウインドブルムは回避するが、一号機がビームキャノンを放ちシールドで防ぐがウインドブルムのシールドは破壊される。

「やるな……先程とは違い。性能と実力の差を連携で埋めるか……」

戦力事体は先ほどまでの三機の方が断然高い、しかしウインドブルムを相手にここまで戦えるのも三機のバリストはもとよりリベリオンの弱点を補い、リベリオンの能力を最大限に引き出すための機体。

その機体に己がエースパイロットとして戦場で戦うよりも、エースをサポートする戦闘が多かったマシユー、オリビア、リタが搭乗することでその機体特性を引き出している。

そして、三人はかつてはアベル・ウォーカーの部下だったために圧

倒的強者を相手にする事に慣れている。

それらが相まって性能とパイロットの技能を埋めていた。

「シンク！」

リベリオンRはビームザンバーを抜いて一気に接近して振う。

「厄介なのはシールドだけではないと言う事が……」

ウインドブルムはビームソードで受け止める。

「今回はウインドブルムとドレイクのテストが優先だ。これ以上の戦いはこちらのデータを流出する危険性があるか……」

ウインドブルムはリベリオンRを押し戻すと機体を返す。

「逃げるのか？」

「違うな。奴の力がこの程度である訳がない。見逃して貰えた言っただ方が正しいな。」

ウインドブルムはそのまま、完全に撤退していく。

「何とかなったみたいだね。シンク、ボク達と来て貰うよ。」

「そっちのテストメント機も同行して欲しいのだが？」

「知るか。クロイツが消えた以上、お前らとの共闘も終わりだ。」

ルギアムはそう言い機体を宙に浮かせる。

「一人で行くのか？ 奴の事だ。我々はすでに裏切り者にされている可能性が高い。」

「だろうな。でなきゃ、これだけの行動はおこなねえよ。」

「だったら…僕達と来ませんか？」

シンクがそう言いルギアムは答える。

「ふざけんな。お前たちも俺の敵だ。クロイツを撃つた後はお前たちだ。せいぜい覚悟しておけ。」

ルギアムはそう言い飛び去って行く。

「気にするな。アイツはああいう奴だ。」

「それで、君は同行してくれるかな？」

「構わん。こちらもこの機体状況で単独行動をしたくはないからな。」

ローズのローゼンクロイツァーは立ち上がる。

「了解した。それと、向こうのGN-Xはどうする？」

「あれは連邦の基地の機体だ。基地は無事だから放っておいても構わんだろう。」

「そうか……近くに我々がここまで来た輸送機が待機している。君たちの機体を収納するスペースも空いている。速やかに帰投するぞ。」

マシューがそう言い、シンクのリベリオンRとローズのローゼンクロイツァーはマシュー達とともに輸送機へと向かい、日本へと向かった。

「さて……ローズと言ったね。いろいろと君に聞きたい事がある。」

辛くも戦闘が終結し、私はシンクとともに戦闘に介入して来た者たちの輸送機の中にいる。

輸送機の型から、コリニック社関係の者たちだろう。

その中にはリタ・リバースの姿も見える。

確か、アベル・ウォーカーの監視の為にリボンスの紛い者に宛がわれていたが、アベル・ウォーカーの側についていたイノベイド。

その判断は正しいかったが、よもやこんなところで出会う事になるとは……

「私の話せる範囲でなら構わん。それ以外の事は死んでも話すつもりはない。」

どの道、かなりの情報をシンクに話しているからな。

完全に秘匿すべき情報こそは話してないが、助けられた手前、完全に黙秘することも出来んだろう。

そして、私はシンクに話した内容に少し足した程度の事を彼らに話す。

「信じられないな……君たちがイオリア計画を修正すると言っのか？」

「その通りだ。」

「ボク達、イノベイドはそのような事は聞いてないよ。」

「当然だ。お前たちには必要最低限の情報しか与えられてない。その理由は私が説明する必要もないだろう。」

所詮、彼らは偽物のリボンズによって使われるだけの存在。

私達が計画の修正するための存在であるようにな。

「君たちの目的は分かった。それであればどういう状況だったんだ。見たところ、テストメント同士でも戦っていたみたいだが？」

「私が聞きたい。」

クロイツがなぜ、あの様な行動に出たのか私にも見当がつかない。

私達には明確な自我があるため、ナンバーズ同士で性格の不一致も

多々ある。

私がリボنزの事が気に入らなかったり、ルギアムやセルの戦い方が好きじゃなかったりな。

だが、それでも私達の行動の根源にはイオリア計画の成就があった。それはリボنزもルギアムもセルも…そして、クロイツも同じ筈だった。

それなのに……なぜ、奴はルギアムを……

仲間に銃を向けた。

あの状況では裏切り者に見えたのは私の方の筈。

なのに、ルギアムを狙っていた。

裏切り者の排除でなければ一体……

「私にも分からんし、今は少し混乱している。少し時間をくれ……」

「そうか……分かった。シンク君、彼女は任せて良いかい？」

「はい……構いません。」

そう言いマシユーと名乗った男は出て行き、私とシンクだけになる。

「大丈夫ですか？ローズさん……」

「ああ……心配はいらない。」

とは言え、考える事が多過ぎるし、それ以上に訳が分からない。

私自身がこれからどうすべきなのかもまるで分からない。

どの道、私は戻る事は出来そうにもないだろうしな。

だからと言って、私は私の作られた意味である計画を捨てる事も出来ない。

「そうですね……」

「済まない。」

シンクはそれ以上は何も言わずに私の隣に座る。

その後、私もシンクも一言もしゃべる事なく、静かに時間だけが過ぎて行った。

「どうですか？カタギリさん」

リバーズとシンクを回収した輸送機が戻り、日本支部のMSハンガーにリバーズが搬入されている。

リバーズは損傷こそはしているが、GNドライブは無事みたい。

その隣にはリバーズ以上の損傷をしているテストメントの赤い新型機が置かれている。

「そうだね。GNドライブは無事だったから、それを取り外してR2に移植して、後は少し手を加えるだけでR2は完成すると思うよ。」

リバーズガンダムの後継機として開発されていたR2ガンダム。

取り合えずは間に会ったと見てもいいかしらね。

「そうですか…それで、赤いMSの方は？」

「テストメントの方がいい？少し見たところではこの機体の機体構造はリバーズをはじめとした第6世代のガンダムに似ている。恐らくはテストメントの技術はコリニック社から流れた物を独自に発展させた可能性が高いと見ている。」

お父さんが社長をしていた時はいろんなところに作った兵器を売っていたから、あり得ない話ではないわね。

「それで直りそう？」

「直すのかい？」

カタギリさんは少し驚いている。

まあ……敵側の機体でデータが取れない程破壊されている訳でもないしね。



「……出来ない事も無いと思う。今、言ったみたいに機体の構造はコリニック社製のMSと大差はないからね。それにMSの構造自体は可変機でない限りはどれも大差ないから、出来ない事も無いけれど……良いのかい？」

「構いませんよ。その代わりにこの機体の隅から隅まで、データを取っておいて下さいね。」

この機体のパイロットはどういう訳がシンクと仲が良いみたいだから、場合によつてはこちらの戦力として使えるかも知れない。

そうでなくてもこの機体の詳細なデータを取る事が出来たのならば、そのデータは必ずテストメントとの戦いに役に立つ事が出来るしね。

「分かったよ。R2の方と合わせて、1週間で間に合わせるよ。」

「頼みます。」

1週間か……短いようで長いわね。

メーテアへの増援はその後になりそうね。

1週間は持ち堪えて貰わないとね。

後は他のガンダムか……

そちらに関しては私が出る事は何も無いわね。

まったく……考える事が多過ぎるわね。

だけど……私達は前に進むしかないのよね。

その為にも第7世代のガンダムを完成させないと……

## Mission 40 コードネーム

4年前……

ソレスタルビーイングが保有している外宇宙航行艦のMS格納庫にロールアウトしたばかりの第6世代のガンダムの一機、コマンドガンダムが置かれていた。

「こいつがお前の乗るガンダムだ。クレイ」

「これがね……」

クレイと呼ばれた少年はコマンドガンダムを見上げる。

「こいつは兄さんのデュナメスや俺のケルディムとサバーニヤの戦闘データとクレイのシュミレーションのデータを使って開発されている。」

ロックオン・ストラトス……ライル・ディランディはクレイにそう言う。

「でも良いですか？俺がこのガンダムに乗っても？」

「生憎と俺も歳でね。そろそろ、マイスターを引退しようと思っただところだ。すでにお前の狙撃の腕は今の俺以上だからな。」

ロックオンがそう言うとクレイは照れ臭そうにする。

「そんでクレイさえ良ければ、俺のコードネーム……ロックオン・ストラトスもクレイに継いで欲しいんだが？」

「俺がですか…無理っすよ。」

「そう言っつなよ。まずは形だけで構わないからよ。」

「それじゃ意味ないんじゃない？」

クレイは苦笑いをしながらそう答える。

「良いんだよ。それでもよ……俺の時もそうだった。」

そして、ロックオンはクレイに自分がガンダムマイスターになった経緯を明かす。

元々は双子の兄、ニール・ディランディの代わりとしてスカウトされた事。

スカウトに応じたのは当時所属していた反政府ネットワーク『カタロン』からのスパイだった事を……

「俺は兄さんの意思を継ぐとか言っておきながら、形だけしか継いでなかったんだよ。」

「でもそれなりに今はガンダムマイスターなんですよ？どうしてですか？」

「女だよ。」

ロックオンがそう言い切るとクレイは一瞬、コケそうになる。

「滅茶苦茶不純ないっすか？」

「悪いか？」

「悪くはないですけど……俺も男なんで女は大好きですけど……」

「だろ？俺はその女との出会いと別れを経てな、人と人が分かり合える事が出来るって思えるようになった。それだけじゃない……イノベーターやイノベイド、ELSとだってそうだ。いつかは分かり合えるって……」

ロックオンはそう言いながら、思い出す。

運命の悪戯によって出会い、散って行ったアニュー・リターナーの事を……

その出会いから別れの事を……

「お前にもそう言う出会いがあればお前もその名を使う事に抵抗がなくなると思っぜ。だからさ……ガンダムマスターとして戦ってんなら、俺や兄さんの想いも引き継いでくれ……今日からお前がロックオン・ストラトスだ。」

その日、クレイはガンダムマスターとなり、ロックオン・ストラトスのコードネームを受け継いだ。

ロシアの一画でテストメントとそれに対するレジスタンスとの戦闘が行われている。

テストメント側の戦力は通常、テストメントが投入する戦力から見れば圧倒的に少ない約30で地上型のガントミーが15機に飛行型が15機。

それに対するレジスタンス側の戦力は約10機。

その大半がティエレンやフラッグの様なGNドライヴを搭載していないMSでその中に一機だけフラッグのソニックライフルを持っているGN-X?がいるだけで戦局はテストメント側が有利に見える。しかし、そのGN-X?が目まぐるしい戦果を挙げており、戦局はレジスタンス側に傾いている。

「クレイ！上空の敵は？」

「あらかた片付いた。すぐに地上の援護に行けるぜ。」

GN-X?の中でクレイと呼ばれた青年が答える。

幾ら、性能が低いガントミーを相手だとしてもGN-X?で戦えるのは彼の腕前によるものだった。

レジスタンスの大半は民間人でまともな訓練を受けている訳ではないため、敵の的にならないように移動しながら、闇雲に火器を放つだけだったが、彼の乗るGN-X?は敵からの攻撃を避けるとの確

な射撃で一撃でガントミーを落としている。

それは訓練の受けていない民間人には真似出来ない事だった。

それもその筈、クレイは1年前まで、施設武装組織ソレスタルビーイングにおいてロツクオン・ストラトスと言うコードネームでガンダムマイスターをしていた。

1年前の戦いで母艦のトレミーを失い、チリジリに逃げたが、ロツクオンは辛くも地上に降下することが出来ていた。

それから、ガンダムを近くに隠した上で近くの町のレジスタンスに用心棒として戦っていた。

クレイのGN-X?はビームサーベルでガントミーを切り捨てると、地上に向かう。

「手伝いに来たぜ。」

「クレイか!」

ひざま付きながらも応戦するティエレンのパイロット、アイザック・バルスコフがそう言う。

地上に降りたGN-X?はリニアライフルでガントミーを破壊する。

「助かるわ。」

もう一機のティエレンのパイロットのターニャ・オルロフがまともには動けないアイザック機を援護する。

「数が少ないが、こっちの戦力はそれ以下かよ……」

GN-X?はビームサーベルを持ちながらガントミーに接近して切り裂く。

ある程度の数が撃破されたところでガントミーは牽制を交えつつも後退していく。

「撤退していくのか?」

「逃がすかよ!」

アイザック機が撤退していくガントミーを追おうとするも脚部の破損により転倒する。

「アイザック、その機体状況で追撃は無理だぜ?止めとけよ。」

「くそ!」

クレイがそう言い、アイザックは悔しさで機体内のコンソールを力の限り殴った。

戦場から少し離れたところに撤退したガントミーが集結していた。

その中に一機だけ明らかに違いMSが存在している。

暗い緑を基調とした迷彩カラーに全身の装甲が角ばっており、頭部



はツインアイだが右目には眼帯にも見えるスコープがついている。

そして、左型には戦端に実体剣の取りつけられている長いライフル『ロンギヌス』が装備されている。

GNTS - 006 『ドラグノフ』

テストメントが開発した狙撃型MS。

その機体内でパイロットスーツを着用せずに黒髪で長髪にアップアラウンド型のサングラスをつけている20代中盤に見える女性、ノルン・レミントンがガントミーからの情報を整理していた。

「今回の戦いでも出て来てないか……ヴェーダの予測では地上に降下したガンダムの一機はこの辺りに潜伏している可能性が高いが……」

ナンバーズのNo.6を与えられているノルンが辺境の地に来ている理由、それは1年前の戦いで消息が経ったソレスタルビーイングのガンダムが地球に降下し、この辺りに潜伏していると踏んでのことだった。

「やはり……ガントミーでは焙り出す事は出来ないと言っわね。仕方がないわね……次の戦闘は私も出ましよう。」

「今回もずいぶんと派手にやられたもんだな。」

テストメントが撤退して、敵の攻撃が終わった事を確認すると俺はGN-X?から降りた。

1年前の戦いで敗北して、艦長の命令通りにガンダムの太陽炉を守ってはいるが、艦長や他のマイスターの状況も分からないし、この辺りのソレスタルビーイングの拠点も知らないから下手に動く事も出来ずにすでに1年が経過していた。

その間、ガンダムを隠した場所の近くで抵抗活動が行われており、成り行きから俺が用心棒代わりをすることになっていた。

「クレイ！今回も大活躍だったじゃない。」

ターニヤが俺に手を振りながら、よって来る。

ターニヤは余所者の俺に町の用心棒を頼んだ張本人だ。

「まあな。あの程度なら余裕だったの。」

それでもガンダムマイスターだったんだぜ。

幾ら二世代も前のGN-Xでもあの程度の数なら楽に仕留める事が出来る。

問題があるとすれば、GN粒子の供給源が万全でないため、粒子を節約して使う必要がある。

今回の戦闘でも仕方がなく近接戦闘でビームサーベルを使っちゃったからな。

ガンダムとは違い、疑似太陽炉はGN粒子を機体内で生成する事が出来ねえから不便で仕方がない。

ガンダムを出せば、連中にガンダムの存在がばれるかた使えねえしな……

俺達が並んで歩いているとニコライの爺さんがアイザックのティエレンを直している。

「直せんのか？爺さん」

アイザックが爺さんにそう詰め寄っているが、爺さんの顔色が暗い。

「どうした？」

「クレイとターニヤか……アイザックのティエレンの事だよ。」

「直せそうにないの？」

「損傷事体は大した事はないんだが……肝心の部品がないんだよ。」

部品がないね……ソレスタルビーイングに居た時はあり得ない事体だな。

つつてもティエレン事体の製造がすでにされてないから、部品事体は裏ルートで流れているジャンクパーツを探して来るしかないか……

「このままでも使えない事も無いが、歩けないぞ。」

「それでも固定砲台代わりにはなるか……」

動けないんじゃない。仕方がない。

それでも火器が使えるだけマシか……

火器も使えず、動けないんならただの的としか使えないからな。

「冗談じゃねえぞ！」

「俺に当たるたよ。動けないのは事実で直せないもの事実だ。それよりもだ……どうすんだよ。これから？」

「どうするって？」

「今回の戦闘でもこっちの戦力は削がれた。増援の目処がない以上、消耗戦になれば勝ち目はない。」

こっちには疑似太陽炉を搭載しているのは俺が使っているGN-X一機しかないからな。

先の事を考えれば、勝ち目はない。

「クレイは考えがあるの？」

「ないね。あるとすれば、町を放棄して逃げるくらいしかねえよ。」

俺はパイロットで艦長やスメラギさんみたいな戦術を立てる事は出来ない。

勝てない事が分かっていれば、逃げれば良い。

1年前の俺達のようにな。

艦長のその判断のお陰で俺はこうして生きている。

「んな事が出来つかよ！ここは俺達の故郷なんだ！訳の分からない連中に好き勝手させられるかよ！」

アイザックはそう言って俺に掴みかかる。

故郷ね……

そう思える場所があるのは羨ましい限りだ。

だけど、俺はそんな物の為に勝てない戦いをする気にはなれないな。

「止めなつて、アイザック。ここでクレイに言ったってどうしようもないでしょ。」

「くそ……」

ターニヤにそう言われて、アイザックは手を離してどっかに行く。

「ごめんね。アイザックに悪気があった訳がないから……」

「分かってるね……」

アイツの気持ちは何となく分かる。

アイツも悔しいんだろうな。

力がなくて……昔の俺のように……

「それでさ…クレイはこれからどうするつもり？」

「そっぴゃ考えてないな……」

艦長からの支持は太陽炉とマイスターの命を守る事。

そのためには迂闊な行動は出来ないから、こうして身を潜めて来た。

「考えてないな……」

「だったらさ……このまま、この町に……」

ターニヤがそこまで言うとは何やら慌ただしくなって俺達は詰所に向かった。

「マジかよ……」

詰所に向いそこで知らされたのはテストメントのMSがかなりの数、押し寄せているとの情報だった。

地上から約50機のMSが一気にここを目指している。

「どっぴするっ？」

「決まってるだろ！迎え撃つだけだ！」

アイザックがそう言うがそいつは無理だ。

こっちのMSではこの数を相手には出来ない。

俺が出てもそれは変わらない。

「無理だな。勝ち目はないぜ。」

「クレイ！」

「冷静になれよ。こっちの戦力はとても勝ち目はない。死にたくないなら、町を放棄して逃げるか、武装を解除する事だな。」

連中は自分達に敵対しない相手には攻撃はしないと聞く。

勝てないなら、それも一つの手だ。

もともと、俺はガンダムの太陽炉を守る必要があるから逃げるけどな。

「それでも！ここは俺達の故郷だ。逃げる訳にはいかないんだよ。」

そうは言ってもこの戦力差じゃな……

「クレイ…これは私達の戦いよ。関係のないクレイはこれ以上、関わる必要はないわ。」

ターニヤが俺にそう言う。

確かにな……

俺がこいつらを戦っていたのは成り行きからだしな。

「今までありがとう。戦闘になるまで、まだ時間があるからクレイはその間にどこか遠くに逃げて。」

「そうだな……そうさせて貰う。」

俺には太陽炉を守る役目があるんだ。

こんなところで死ぬ訳には行かない。

俺はターニヤに言う通りに町を離れた。

「ロックオン！ロックオン！」

町を離れた俺は近くに見つからないように隠していたガンダムに乗り込む。

俺が乗り込むとハロが出迎える。

「久しぶりだな。ハロ」

俺はそのまま、機体のシステムを立ち上げる。

ここに来る途中で戦端が開かれていた。

ターニヤ達が負けるのは時間の問題だ。



その前にここを離れないとな……

俺はシステムを立ち上げてレバーを握る。

後は敵に見つからないように離脱するだけだ。

敵と交戦するよりも楽な事だ。

そんな事は分かってる。

だけど、そんな意思に反して体が動かない。

あいつらは自分達で死地に残った。

俺は忠告したぜ？

もう、俺には関係ない。

だけど……俺の頭の中がモヤモヤする。

良いのか？これで……

ターニヤはいきなり町に流れ着いた俺の事を対して詮索することなく、受け入れてくれた。

少々、気が強いが中々良い女だ。

そいつを見捨てて逃げて良いのかよ……

考えるまでも無い。

答えはNOに決まってる。

「しゃねえな……行くぞ……ハ口」

すみません。

艦長……艦長に言われた命令を破るかも知れません。

だけど……俺は惚れた女の為に戦いますよ。

テストメントとレジスタンスとの戦端が開かれたがすでにレジスタンス側の戦力の大半は削られていた。

殆どの機体は足や頭部を破壊されて、戦場に倒れている。

「ガンダムは出て来ないか……旧世代のMSを相手では張り合いがないわね。」

ノルンは機体内に搭載されているデュナメス系統のガンダムに搭載されている専用のガンコントローラーから敵に狙いを定めている。

「これじゃ、私が出る必要もなかったかしら。」

ノルンはそう言い引き金を引く。

「アイザック！」

ドラグノフの放った粒子ビームはクレイの代わりにアイザックが乗っているGN-X?の頭部を撃ち抜いて、GN-X?は倒れる。

「頭部が!」

倒れている隙にガントミーがヒートソードを振り上げている。

「ちくしょう!」

ガントミーがヒートソードを振り下ろそうとするが、その前にガントミーは粒子ビームに撃ち抜かれる。

「何だ……」

「助っ人は必要かい?」

「クレイ…なの?」

コマンドガンダムはGNスパイパーライフル?を構えて、ガントミーを狙撃していく。

「ガンダム……どうして…クレイがガンダムに?」

「説明は後だ。」

コマンドガンダムは可能な限りの連射でガントミーを破壊していく。

「あいつは……狙撃型のガンダム…やはり、この辺りに潜んでいたのか。」

ノルンはコマンドガンダムを視認するとロンギヌスで狙撃する。

「ロックオン！ロックオン！」

八口の警告でとっさに機体を動かしてコマンドガンダムは攻撃を回避する。

「向こうにもスナイパーがいやがる……上等だ。」

ロックオンはすぐに戦場の周囲の地形図を出して、先ほどの狙撃の方向から敵の位置を予測する。

そして、ドラグノフからの第二射をかわす。

「かわした……一度目はまぐれだとして、今はこちらの位置を大まかに把握したのか……狙撃型のガンダムに乗るだけあって、スナイパーの戦い型は分かっていると言う事か……面白い」

「あそこか……」

コマンドガンダムでも完全にドラグノフの位置を割り出してモニターにその姿が映し出されている。

「こちらを補足したか……だが！」

ドラグノフはロンギヌスを構える。

「悪いが……ロックオン・ストラトスのコードネームを引き継いだ身としては狙撃で負ける訳にはいかないんでね。」

「コマンドガンダムもスナイパーライフル？を構える。」

「殺せて貰う！」

「だからさ……狙い撃つぜ！」

「二機の狙撃型のMSから粒子ビームが放たれる。」

「二機の放った粒子ビームは掠り、両方の軌道がそれる。」

「ドラグノフが放った粒子ビームは軌道がそれた為にコマンドガンダムを掠るだけだったが、コマンドガンダムの放った粒子ビームは軌道がそれて、ドラグノフのロンギヌスの銃口に直撃し、そのままロンギヌスが破壊された。」

「馬鹿な……こんな偶然が……奴はこれを狙ったのか……」

「俺の勝ちだな。お嬢さん」

「オープンチャンネルで回線が開かれた。」

「ガンダムマイスターか……」

「その声……やっぱ、パイロットは女か？」

「なぜ、分かる……」

「アンタの放った攻撃は狙撃されたMSの倒れる角度や勢いを調整して、パイロットへの衝撃を最小限にとどめている。そんな気遣いを野郎には出来ないぜ。」

ロックオンはそう言い切る。

実際、ノルンの狙撃で死者は出ていない。

「それだけの事で……ふっ……狙撃主としての腕の差か……」

ロックオンの放った一撃は互いの粒子ビームが接触して互いに軌道を変える事を計算して上での狙撃だった。

「生憎と俺は相手が女なら殺さない主義でね。行けよ……それ以上、戦うなら惚れた女を優先にさせてもらわねえといけない。」

ロックオンはそう言い、スナイパーライフル？をドラグノフに向ける。

「了解した」

ドラグノフは撤退していく。

「ふう……何とかなるもんだな。」

ドラグノフの撤退でガントミーも引き上げて行った。

「まあ……その、何だ……無事で何よりだ。」

戦闘が終わってターニャ達に前に出たが良いが、微妙に気不味い。

まあ、今まで俺の素性を黙ってたんだ、仕方がないか……

「クレイはソレスタルビーイングだったんだ。」

「まあな」

「だったら、あの腕前も納得ね。ガンダムで世界と戦ってたんだし……」

主にテロリストとの戦いだけだな。

「悪かった。黙ってた……」

「そんな事より、お前どうするつもりだ。まさか、ここに留まるつもりじゃないだろうな？」

「んな訳には行かないだろ。」

ガンダムの姿を晒した以上、ここに留まるのは危険だ。

すぐにでも、逃げないと不味い。

「ちよつくら、あいつらを狙いつて来る。」

「そっか……」

「それで、その後はここに帰って来る。」

1年だったけど、ここの居心地は中々捨てたもんじゃない。

何よりここにはターニヤがいるしな。

平和な世の中なら永住しても良いくらい居心地が良い。

「クレイ……」

「その代り、すべてを終わらせて来い。これ以上面倒事を持ちこむな。」

アイザックも素直じゃねえな。

「分かってるさ……」

今回の事で俺の腹も決まった。

俺は奴らを……テストメントを狙い撃つ。

ソレスタルビーイングのガンダムマイスター、ロックオン・ストラトスとしてな。



## Mission40 コードネーム(後書き)

### 新キャラ設定

ノルン・レミントン

(CV 伊瀬 茉莉也)

肉体年齢25歳(女)

ナンバーズの一人でNo06を与えられている。

戦闘スタイルは相手の脚部や頭部を狙撃して極力、相手を殺さない戦い方をしている。

### 新MS設定

GNTS-006 『ドラグノフ』

テストメントが開発したノルン専用の狙撃型MS。

狙撃能力に特化している分、他の能力はある程度捨ている。

他の機体とは違い、右目に狙撃用のスコープが取り付けられている。

また、コックピットにはデュナメス系統のガンダム同様に専用のガンコントローラーが搭載されている。

## 武装

- ・ロンギヌス

ドラグノフのメインの武装。

狙撃用のライフルで戦端に実体剣が取り付けられているため、銃剣としても使う事が出来る。

使用しない時は左型に装備されている。

- ・GNミサイル

機体の全身の装甲に内蔵されている。

- ・GNバルカン

頭部に二門装備されている。

- ・GNビームサーベル

両腕に一基つづ内蔵されている。

## Mission 41 竜騎兵

敗北から一年、あの戦いで敗北した私達は命からがら地上に降りていた。

あの戦いでマレールのアクセルとフォートレスの太陽炉を回収して今は地上にある廃棄されたコリック社の施設に潜伏している。

ここは表向きは廃棄された施設だけれども、実際は私達ソレスタルビーイングの地上の拠点でもあり、ここには極秘裏に新型のガンダムが開発されている。

「新型のガンダムの方はどうです。ウォーカー艦長」

「そうですね。一機は完成まじかですが他の二機に関しては問題が解決出来ずにいます。マネキン中将」

テストメントの目から逃れる途中で自分の部下とともにテストメントから逃れていたマネキン中将と合流してともに潜伏している。

ここに来た時は殆ど完成はしていなかったけれども、この一年でミリシアが組み上げてくれた。

ミリシアはシステム関係は専門外なのでかなり手間取っていたけれども、中将の部下の手も借りてどうにかここまで仕上げている。

マレールのドラグーンガンダムはほぼ完成しているけど、ロックオンのイクシードガンダムには太陽炉が搭載されていないし、レムリアのジェノサイドガンダムには太陽炉を搭載しているけれども、マ

イスターのレムリアが不在。

レムリアは恐らくは太陽炉をパージしているところから、あの時に逃げる事が出来ずにせめて太陽炉だけでもと言う事なんだと思う。

レムリアに関しては母艦にサブボディが用意してあったと思うし、意識データのバックアップはリアルタイムでバックアップしている。だから、今はレムリアの事はひとまず置いておいても構わない。

サブボディでは今まで通りの能力は出せないけれども、レムリアは死んだ訳じゃなから……

「そうですね……」

「私達はドラグーンが完成したら宇宙に上がります。」

宇宙に上がり母艦に帰投すれば、レムリアにジェノサイドを渡す事も出来ると思うし、何よりも戦力の補強するには母艦が一番だしね。

上手く行けば、ロックオンとも合流が出来るかも知れない。

そのためにすでに第七世代のガンダムの搬送は完了している。

「戦力的に不安がありますが、地上に残っていても消耗戦になるだけです。」

「成程……確かにそうですね。地上の主だった連邦軍の基地は壊滅状態が籠城戦……連邦議会も決断を先延ばしにして時間を稼いでま

すが、大統領が奴らに与するのは時間の問題……」

それにすでに市民はテストメントを受け入れるムードが漂っている。彼らは連邦軍の基地や施設を中心に攻撃をしているため、市民に対しては殆ど被害が出ていない。

そのため、市民もテストメントを支持すれば自分達は安全となるため支持をしているところが出て来ているらしい。

「そうです。その前に地上を離れて体勢を整えます。」

「切り札は新型のガンダムと言う訳か……分かりました。我々もソレストルビーイングが宇宙に上がるための支援を行います。それと……そちらの戦力不足を補うために私の部下のウォーカー少尉をつけましょう。」

そう言えば、シャロンは今の中将の指揮するMS隊に配属されていたっけ……

「よろしいので?」

戦力が増えるのはありがたいけれども、私達に戦力を回すと言う事は中将の指揮下のMS隊の戦力が低下する事になる。

「構いません。少尉のシルフィードは通常規格のMSではないため、我が隊で運用するのは手間でしたからね。その点、そちらの方が扱いやすいでしょう。パイロットも含めて」

中将の言う通りだね。

シャロンの機体はコリニック社の試作機だったよね。

あの機体を正規の部隊で運用するには整備班も、その機体の整備マニュアルを覚える必要が出て来る。

その分、私達の整備の大半はカレルがやってくれるため、整備のミリシアの覚える事は連邦軍の整備班の人達よりも圧倒的に少ない。

パイロットのシャロンも私の娘だから、艦内に馴染むのもそう難しい事でもないって事か……

「助かります。」

「艦長！施設に接近するMSを確認！テストメントのMSです！」

アラートとともに施設内にアナウンスが鳴り響く。

「くっ……ここも見つかったか？」

「でしようね。」

この施設に潜伏している事自体が1年もばれなかった事が奇跡とも言える。

「見つかった以上、隠れても無駄か……ウォーカー艦長は宇宙に上がる準備をお願いします。ここは私の部下で時間を稼ぎます。」

「その後はどうするつもりですか？」

「連中の狙いは恐らくはガンダムです。貴女方が宇宙に上がれば、敵もそれ以上の戦う理由は薄くなる。それに私達もここを死守する理由もなくなりますので、この機密を保持しつつ施設を破棄して脱出します。」

テストメントがここを強襲する理由は中将の言う通り私達なんだろう。

だとすると、私達が宇宙に上がってしまえば敵の目的は無くなるかも知れないけれども、残りの戦力の掃討戦に切り替えるかも知れない。

「心配は無用です。私達はプロです。引き際を誤ったりはしません。」

どの道、現状で取れる策は限られている。

マネキン中将はスメラギさんに匹敵する戦術予報士……

私よりも上手く出来ると思う。

だから、私のすべきことは中将に従う事だけ……

「分かりました。でも、打ち上げまでに時間がかかりますので、それまでガンダムを出します。」

「助かります。」

「それではご武運を……」



私はそう言いその場を中将に任せた。

テストメントのガントミーが施設に接近した事で施設内に隠されていたMSが迎撃に出ている。

その数は10数機だが、いずれも連邦軍で運用されている主力MSが揃っている。

「たくよ……こちらら、現役を退いてんだ。いい加減にして欲しいぜ……」

ライルはケルディムガンダムの中でガンコントローラーを覗きながらそう言う。

「そうは言ってももらえないよ。」

アレルヤがアクセルガンダムの中でそう言う。

アクセルガンダムはTGNドライブを後継機のドラグーンガンダムに移植しているため、TGNドライブの代わりにアリオスガンダムに搭載されていたオリジナルのGNドライブが搭載されている。

TGNドライブではないため、機体出力が大幅に低下しているが、それでもアリオスガンダムよりも高性能なため、アレルヤが搭乗することになっている。

「だよな……久しぶりに狙い撃つぜえ！」

ライルは引き金を引いてケルデイムのGNスナイパーライフル？から粒子ビームが放たれる。

ケルデイムの粒子ビームはガントミーを貫く。

飛行形態のアクセルガンダムは敵陣に突っ込むとGNミサイルを一斉掃射する。

「お前ら！ガンダムにはかり良いカツコをさせるなよ！」

アクセルガンダムの後方から、パトリック・コーラサワー率いるMS隊が粒子ビームを放ちながら戦闘を開始する。

「シャロンはガンダムと宇宙に上がって言われてっから出過ぎんなよ。」

「了解」

パトリックのGN-X？は粒子ビームを放ち、ガントミーを撃ち落とす。

「無敵のコーラサワー様のお通りだ！」

パトリック機はガントミーを撃墜していくが、ガントミーはパトリック機にバズーカを放ちパトリック機に頭部に直撃する。

「おわっ！効くかよ！」

パトリック機の頭部は多少焦げただけで破損はしておらず、パトリック機はビームライフルで反撃する。

「聞いてはいたけれど、数が多い！」

アクセルガンダムはGNキャノンとGNサブマシンガンでガントミを蹴散らす。

「前に出過ぎると戻れねえぞ！アレルヤ！」

ケルデームはスナイパーライフル？でアクセルを援護する。

「分かっているけど……」

「準備はまだかよ！」

「私も援護します。」

シャロンのシルフィードが飛行形態でアクセルの背後を取ろうとしていたガントミをロングソードライフルで撃ち落として、アクセルに並ぶ。

「助かる」

アクセルとシルフィードが互いをカバーしつつ応戦していると、施設の地下から粒子ビームが放たれて射線上のガントミを薙ぎ払う。

そして、地下から一隻の戦艦が出て来る。

CBS - 742 プトレマイオス2改

20年前のELS戦役時にソレスタルビーイングが母艦として運用していた戦艦で、その時にELSに汚染されていたが、その後汚染区画を新しいものに代えて、予備の母艦としてこの施設の地下に隠されていた。

「ケルデイルとアクセル、シルフィードを回収します。ドラグーンの射出をお願いします。」

マリアがそう言い、トレミーのハッチが解放される。

そこには最終調整を終えた第七世代のガンダム、ドラグーンガンダムが固定されている。

GNT 0008 『ドラグーンガンダム』

キュリオス系統の可変機構を受け継いだ第七世代のガンダム。

全身をオレンジを基調としたカラーリングで、今までのガンダムに比べると細身で鋭角的なフォルムをしている。

右手にはGNソードライフル？が装備され、左腕にGNシザーシールド？が装備されている。

腰には推力偏向スラスターが背部にはGNウイングが搭載されている。

「ドラグーンガンダム、リニアカタパルトに固定…タイミングをドラグーンに譲渡します。」

「了解……ドラグーンガンダム、マレール・ハプティズム。ミッシェルを開始します。」

ドラグーンガンダムが射出されると、GNウイングが展開して脅威的な加速で戦場に向かう。

「くっ……大した加速性能だ……」

戦場に到達したドラグーンはGNソードライフル？でガントミーを撃墜する。

「ここは僕が抑えます。父さん達はトレミーに戻ってください。」

「よっやくお出ましか！ここま任せる！」

ケルデイル、アクセル、シルフィードは戦線を離脱してトレミーに帰投して行く。

「ここからは僕のターンで行かせて貰いますよ。」

ドラグーンはシザーシールド？をソードライフル？と合わせ、機体の両足が短く置かれるとシールドとライフルが一体化したものを胸部で固定して機首にして飛行形態への変形を行う。

腰の推力偏向スラスタが機体と水平になるように置かれると完全に飛行形態となる。

飛行形態となったドラグーンは更に加速する。

ドラグーンがガントミーとすれ違う時に腰の推力偏向スラスタに

隠されているGNカッターですれ違いざまにガントミーを両断する。ガントミーも反撃するが、背部のGNウイングを機体の周囲にまとわせる事で速度を緩める事なく防ぐ。

「これが…新型のガンダムの性能ですか……大したものです。」

ドラグーンの機首のシザーシールド？が開閉すると、ガントミーに突っ込んで両断する。

ガントミーを両断すると、ドラグーンは旋回して両腕に内蔵されているGNツインビームガンでガントミーを撃墜していく。

「あれが新型の性能か……」

「艦長、ケルディムとアクセルのGNドライブとの接続が完了しました。」

トレミーでは大気圏を離脱するためにケルディムとアクセルに搭載されているGNドライブと接続が完了していた。

「トランザムを始動して、大気圏を離脱します。リス」

「……了解」

「ラッセは敵を取りつかせないようにお願い。」

「おつねー」

トレミーは機首を上げてトランザムが起動すて、高度を上げて行く。追撃しようとするガントミーにGNミサイルで迎撃してトレミーは上昇していく。

「トレミーは無事に離脱出来そうですね。後は連邦軍に任せるとしますか。」

ドラグーンはトレミーの方向に上昇していく。

「トランザム！」

赤く発光するドラグーンも次第に加速していき、トレミーとともに大気圏を離脱していく。

「どつやら、上手く上がったようだな。」

その様子を施設の指令室からカティは確認する。

「こちらの目標は達成した。施設の機密保持を行いつつ、我らは施設を破棄して撤退を始める。」

カティの指示で部下は施設に残されていた第七世代のガンダムのデータなどを破棄して施設を放棄した。

テストメント側もトレミーを逃がした時点でそれ以上の追撃を行う事もなく、緩やかに撤退をして行く。

地上での戦闘が収束していく中、トレミーとドラグーンは大気圏を離脱して宇宙へと上がって行った。



## Mission 41 竜騎兵（後書き）

### 新MS設定

GNT 0008 『ドラグーンガンダム』

キュリオスの流れを汲む第七世代のガンダム。

機動性能と加速性能を追求したために、火力や防御力がアクセルガンダムに比べて低下はしているが、それ以上に機動性能と加速性能が大幅に向上している。

### 武装

・GNソードライフル？

ドラグーン専用開発されたビームライフルで実体剣に銃身が内蔵されているため、武器を変える事なく、射撃と格闘を行う事が出来る。

飛行形態でも使用することが出来る。

・GNシザーシールド？

アクセルのシザーシールドを改良したもの。

攻撃力や見た目に変化はないが、ソードライフル？と合わせる事が出来る。

飛行形態時は機首となり、速度を落とす事なく相手に突進して挟み切る事が出来る。

・GNツインビームガン

フロントムガンダムに搭載されているものが搭載されている。

・GNカッター

両腰の推力偏向スラスターに内蔵されている。

飛行形態時に展開され、敵とすれ違いざまに相手を両断することが出来る。

・GNウイング

背部に装備されている。

MS形態時に展開され、飛行形態時には機体の周囲を覆うGNフィールドとして使われる。

・GNビームサーベル

両腕に内蔵されているビームサーベルで見た目こそは代わりはないが、新型のビームサーベルで威力が向上している。

・GNバルカン

頭部に二門装備されている。

## Mission 42 奪還

「完成しましたか？」

シンク達を回収してから数日……

カタギリさん達は殆ど不眠不休でR2の完成とローゼンクロイツァーの修理を終えた。

第七世代のガンダムでリバースガンダムの後継機であるR2ガンダム。

リベリオンの高機動とリバースの加速性と粒子ビームの反射能力を合わせたガンダム。

全身をリベリオン同様の赤で統一されている。

バックパックにはリバースのものを改良して装備し、腰にはビームザンバー…左腕には当初の予定にはないローゼンクロイツァーのシールドを追加し、右手にはR2専用のビームライフルが装備されている。

このガンダムは高速白兵戦においてその能力を最大限に発揮する。

もう片方のこれまた赤いMS……ローゼンクロイツァー改

回収時に破損していた両腕をリバースの両腕を使い修理した機体で左腕にはリバースのアンチ粒子シールドを腰にメーザーバイブレーションソード二基、背部のビームキャノン用のコンデンサーにビー

ムザンバーを追加している。

それ以外の実体剣やビームキャノンは修理前からのをそのまま装備しているが、両腕のビームトンファーなどで近接戦闘に特化して機体となっている。

「まあね……もう若くも無いって言うのに何日か徹夜してしまったよ……」

カタギリさんは心底疲れた表情をしている。

「御苦労さまです。後はゆっくりと休んでください。」

「そうさせて貰うよ……」

何とかR2が完成したわね。

後はシンクがこの機体でどうするかってところね。

あれから数日、私は結局これと言った答えを出せずにいた。

何度考えても私にはクロイツの行動が理解出来ない。

「ローズさん……僕達の機体が出来たみたいです。」

「シンクか……分かった。」

よもや、数日で私のローゼンクローツァーを直してしまつとは……

コリニック社は噂に違わぬ技術力と言つたところか……

アレを開発したドクターも元コリニック社の技術者と言つ話だしな。

「それで……ローズさんはこれからどうします？僕はリタ達ともに宇宙に上がるために一緒に行くけど……」

宇宙か……

クロイツが何を企んでいるのかを知るためには宇宙に戻る必要があるやもしれん……

だが……戻つてどうする？

イオリア計画を完遂することは未だに私の使命と言つても良い。

今のやり方を否定するつもりもない。

しかし……我々は今のままで良いのか？

連邦を敵と定めて撃つ。

それはE.L.Sを認めない連邦と同じではないかと思つている自分がいる。

私達が本当に撃たねばならんのは連邦ではなく、もっと深いものではないのか？

「私も同行する。」

宇宙に上がる必要があるのも事実。

「良いんですか？僕達と来ると言う事はローズさんの仲間と戦う事になるかも知れませんよ。」

「覚悟の上だ。」

どの道、私は裏切り者にされているだろうしな。

例え裏切り者の汚名を着せられても私は私の役目を真つ当する。

そのためには今一度、確かめる必要がある。

「そうですね……」

「お前が気に病む必要はない。これは私が私が私の意思で決めた事だ。」

私は私の意思で戦う。

私の作られた理由の為に……

「私に何の用だ？ゼロ」

テストメントの拠点に真つ赤な髪をなびかせた女性、ルージュ・ローゼンがゼロに呼び出されている。

その容姿はローズやシレーヌと似ている。

それもその筈、ルージュは二人と同じ塩基配列パターンを持ち、製造順から見れば二人の姉に当たる。

「お前のロツソノーブレスが完成したから、実戦テストを兼ねてやってほしい事がある。」

「我らを裏切った愚妹の始末か？」

ルージュは刺々しくそう言う。

「それは後回しでも構わない。もっとも、妹絡みである事は正解と申しておこう。」

「ならば、シレーヌか？」

ルージュがそう言うとゼロは頷く。

「シレーヌは連邦の元にいるが？それにローズが捕縛した個体があれば問題はない筈だ。」

「確かにルージュの言う通りだ。しかし例のシステムを使う上でシレーヌの存在は必要不可欠……あの個体では出来るかどうかは分からないからな。あの個体とシレーヌでは設計コンセプトが同じでもシレーヌはシステムを使うための調整がなされている。あのシステムを使う時には失敗は出来ない。だからこそ、シレーヌを回収する



必要がある。」

「ゼロはあのシステムを使う可能性がある？」

二人の言うシステムとはテストメントの生命線とも言えるシステム。それを使うと言う事はそれだけ重要な局面である事を指す。

「そうやって人類を過小評価して破滅したのがリボンスの影武者だと言う事を忘れるなよ。私達はイオリア計画における最後の砦……失敗すれば計画の破綻だけではなく、人類全体の損害である事を分らないお前ではないだろう。」

「確かに……我らに敗北は許されない。良いだろう……すぐに出る。」

ルージユはそう言い完成した専用機の方に向かう。

「そう……私達は負ける訳にはいかない。人類の未来の為に……  
そうでしょ……イオリア」

ゼロの呟きがルージユが出て行き、静かになった部屋に木霊した。

地球の低軌道ステーションから少し離れた位置に連邦軍のヴィクトリアが停泊している。

シンクのリベリオンRが地球に降下した後も、安全を確保してその宙域に留まっていた。

「艦長！本艦に高速で接近する機影があります！数1！」

それまで、敵の攻撃を受ける事なく停泊していたヴィクトリアのクルーに緊張が走り、クルーは所定の位置に着く。

「一機だと？」

「みたいです。機種の特定は出来ません……」

その報告にラディウムは背筋を冷やす。

機種が特定出来ないと言う事は今まで戦場に投入していない機体……即ち新型機と言う事になる。

「モニターに出します！」

ヴィクトリアのメインモニターに赤いMSの映像が映される。

GNTS-002 『ロツソノープルス』

テストメントがルージュ専用開発した白兵戦用のMS

ローズのローゼンクロイツァーよりも濃い赤い装甲を持ち、背部からはGNウイングが展開し巨大な大剣『エクスカリバー』を背負っている。

「やはり、新型か……MS隊を出せ！」

「了解です。」

ヴィクトリアからMSが射出されて戦闘が開始される。

「敵は一機だが新型だ。油断するなよ。」

アスカがそう言いルキノのGN-X？がスナイパーライフル？で先制攻撃を行う。

「他愛もない」

ロツソノールブルスはその攻撃をいとも簡単に回避する。

「早いな……ルビィ、行くぞ。」

「ああ」

アスカ機はビームライフルを持ちながら、ロツソノールブルスに向かいルビィ機もバスターソードを持ち加速する。

「GN-Xが4機か……私の愛機の初陣には物足りないがこれも任務だ。」

ロツソノールブルスは背部のエクスカリバーを手にすると向かって来る2機に応戦する。

アスカ機からの粒子ビームをロツソノールブルスは腕に搭載されているビームシールドで防ぎ、接近しエクスカリバーを振う。

ロツソノールブルスとアスカ機の間ルビィ機が入りバスターソードで受け止めようとするも、バスターソードはいとも簡単に両断され

てルビィ機の右腕も同時に両断される。

「くっ！なんて切れ味をしてるんだ！」

「ルビィ！離れる！」

ルビィ機が離れるとアスカ機はGNミサイルを放つ。

「小癪な……」

ロツソノーブルスは頭部のバルカンでGNミサイルを迎撃する。

GNミサイルを迎撃した爆風の中からGNブレイドを持ったアスカ機が飛び出して来てGNブレイドでロツソノーブルスに斬りかかるが、ロツソノーブルスはそれを回避する。

「その程度が私に通用すると思うなよ。」

ロツソノーブルスはアスカ機にエクスカリバーの一撃で機体の下半身が両断された。

「後二機か……」

下半身を失い宙を漂うアスカ機をそのままにして、ロツソノーブルスはヴィクトリアに向かう。

「隊長達がやられたの！」

「……」

ルイ機がGNバズーカをロツソノーブルスに放つが、ロツソノーブルスはエクスカリバーでルイ機からの粒子ビームを両断した。

「ウソでしょ！」

「粒子ビームを切り裂いた……」

二機は粒子ビームをロツソノーブルスに放つが、ロツソノーブルスは速度を緩める事なく接近する。

「当たらない！」

ロツソノーブルスはルキノ機の懐に潜りこむとエクスカリバーでスナイパーライフル？を両断すると、ルキノ機の頭部を掴み、後に投げつけた。

「ルキノ！」

ルイ機がGNフィールドを展開してGNバズーカを放つが、ロツソノーブルスはエクスカリバーで粒子ビームを切り裂きながら、接近するとGNフィールドごとGNバズーカを切り裂く。

「この！」

ルイ機はバルカンで反撃するも、ロツソノーブルスに効果はなく、横っ腹を蹴り飛ばされる。

「そんな……まだ、戦闘が始まって数分しかなくていないのに……」

ヴィクトリアのブリッジではロツソノーブルスの驚異的な戦闘能力

を目の当たりにして驚愕していた。

以前にナンバーズの専用機のナベリウスと交戦した時はもっとねばれていた。

しかし、ロツソノーブルスは4機のMSとは戦いにすらならなかった。

4機のMSを無力化したロツソノーブルスはヴィクトリアに取りつき、エクスカリバーをヴィクトリアのブリッジに突き付ける。

MSは無力化され、距離が近過ぎるため、ヴィクトリアの火器も使えないため、ブリッジクルーが死を覚悟していると、通信が入る。

「地球連邦艦に告げる。貴艦で保護しているシレーヌ・ローゼンの引き渡しを要求する。」

それはヴィクトリアのブリッジにエクスカリバーを突き付けているロツソノーブルスからのものだった。

「要求が受け入れられない場合は貴艦を撃沈する。」

その言葉に更にブリッジの空気が凍りつく。

「どっしします…?」

「私が戻れば良いんですね。」

その言葉にブリッジクルーは声の方を向く。

そこにはつい先ほどまで医務室で寝ていたシレーヌがブリッジに上がっていた。

「私は構いません。それで皆が助かるなら……」

シレーヌがそう言いブリッジの空気が重くなる。

そんな中、ラディウムが意を決して通信に応じる。

「その要求に応じるのならば、艦とクルーの安全を保障して貰いたい。」

「艦長……」

フリムがラディウムを非難するかにそう言うがすぐに口をつぐむ。

MSが無力化されて火器が使えない現状で自分達が生き延びる唯一の可能性がそれしかなかったからだ。

「良いだろう。その場合は今回のみは見逃してやる。」

「分かった……要求に応じよう。」

「了解した。貴官の理解ある行動に感謝する。」

ルージュはそう言い通信が途切れる。

「済まない」

「構いません……今までお世話になりました。シンクが戻った時に

お礼を言っておいて下さい。」

シレーヌはそう言いブリッジを出て行く。

「格納庫……小型艇を出してやれ……」

ラディウムは格納庫にそう指示を出して通信を切るとブリッジに無言の静寂が流れる。

しばらくすると、ヴィクトリアの後部ハッチからシレーヌの乗った小型艇が出ると、それを回収したロツソノーブルスはヴィクトリアから離れて行く。

完全にロツソノーブルスの機影をロストしたが、ヴィクトリアのブリッジの空気は重く誰一人として口を開くものはいなかった。



Mission 42 奪還（後書き）

新キャラ設定

ルージュ・ローゼン

（CV ゆかな）

肉体年齢20歳（女）

ナンバーズのNo.2を与えられている。

ローズとシレーヌとは同じ塩基配列パターンを持ち、二人の姉に当たる。

性格はローズに輪をかけたように堅物で計画の為なら姉妹をも切り捨てる非情さも兼ね備えている。

新MS設定

GNT-0010 『R2ガンダム』

リバースの後継機の第七世代のガンダム

リベリオンRとリバースガンダムの両方の特性を持った高速白兵戦用のガンダムで機体のカラーはリベリオンRと同じ赤で統一されている。

機体の装甲にはリバース同様のGNリフレクターを実装しており、リバースよりも強力な粒子ビームを反射出来るように改良されている。

## 武装

### ・GNビームライフル

コリニック社がR2ガンダム専用開発した新型のビームライフル銃身は通常規格のビームライフルよりも長く、通常の粒子ビームとマグナム弾の二種類を使い分ける事が出来る。

内部にはビームマグナムと共通のカートリッジが内蔵されている。

### ・GNビームザンバー

両腰に装備されているものでリバースと同じものを装備している。

### ・GNビームサーベル

両腕に内蔵されているものでドラグーン同様に新型のものを装備し

ている。

・GNシールド

ローゼンクロイツァーに装備していた物が装備されている。

・GNバルカン

頭部に二門装備されている。

GN T S - 0 0 7 C 『ローゼンクロイツァー改』

ウインドブルムとの戦闘で小破したローゼンクロイツァーをコリニツク社がリバーズの予備パーツを使い修理した機体

修理時に近接戦闘に特化したカスタムや機体の至るところに追加のスラスターが増設されている。

武装

・レーヴァテイン

修理前からのものを回収して装備している。

・GNビームキャノン？

修理前からのものを装備している。

・GNビームトンファー

リバースの腕を使っているため、両腕に追加されている。

・GNビームサーベル

リバースの両腕に内蔵されている。

・アンチ粒子シールド

左腕に装備されているものでリバースの予備のものを装備している。

・GNビームザンバー

リバーズに装備していた物を背部のGNビームキャノン？用のGNコンデンサーに一基取り付けられている。

・メーザーバイブレーションソード

両腰に追加された実体剣でかつて、初代リベリオンに装備されていた物を装備している。

・GNバルカン

修理前からの物。

GN T S - 0 0 2 『ロツソノーブルス』

テストメントがルージュ専用に開発した白兵戦用MS

ローズのローゼンクロイツァーとは兄弟機に当たるため、良く似た外見をしている。

ナンバーズの専用機の中でも最強クラスの機体性能を持っている。

## 武装

- ・エクスカリバー

ロツソノーブルスのメインの武装の大剣。

表面のアンチ粒子コーティングがなされており、粒子ビームを切り裂く事が可能。

高い切れ味を誇り、実体剣をも易々と両断することも可能。

- ・GNウイング

背部に装備されており、標準的な物を装備している。

- ・GNビームシールド

両腕の甲に装備されている。

- ・GNビームサーベル

両腕に内蔵されている。

- ・GNバルカン

頭部に二門装備されている。



## Mission 43 合流

「艦長、コリック社より増援が送られて来るそうです。」

「そうか」

あれから1年が経ち、何とか地上に逃れる事が出来たが、クルーの半数を抜けさせられたのは痛手だった。

しかし、逃げ回る中で私達と同じようにテストメントと抗う連邦軍を回収して何とかやって来たが、正直厳しいのが現状だ。

クルーの数は問題ない。

寧ろ、拾った時はメーティアのシステムに不慣れだった連中も慣れ始めている。

問題はMSの方だな。

元はバンとセシリアの二人でセシリアは負傷していた。

セシリアも復帰が出来き、MSも道中で回収した連中を合わせると7、8機になるが、所詮は寄せ集めだから、各個の連携が高い訳ではない。

幸いあれからゴタードを殺った新型機との交戦がないが戦闘でまったくの損害がない訳ではない。

すでにその大半が破壊されて現在はバンとセシリアの二機とパイロ



ツト不在のソルブレイヴとカイウスの4機しか残されていない。

武器や弾薬に関してはいろいろと回収したために充実しているが使えるMSが二機しかないのはこれからの戦いでは話にならない。

現在は中国に潜伏して機会を窺っている。

そして昔の伝手を頼ってコリニック社に増援を頼んだ。

その結果、五機のMSを回してくれるらしい。

機体の詳細は情報漏洩を防ぐため、送られて来てはいないところから通常の量産機でない事は分かる。

恐らくはコリニック社がかつて製造した機体で倉庫に眠っていた物を出して来たんだろう。

なににせよ増援はありがたい。

「後数時間で本艦のレーダーの補足域に入る予定です。」

「分かった。この機に敵も来る可能性も考えられる。警戒レベルは厳にしておけよ。」

今は敵もこちらを見失っていると思われるが、増援のMSの動きからこちらの位置が特定される恐れがある。

もしも、増援が到着するよりも速く攻撃が開始されたのならばこちらは二機で応戦するしかあるまい。

ここは増援が先に到着することを神に祈るしかないな……

「大丈夫か？セシリア」

月基地からの騒動から1年経つが、セシリアは定期的に検診を行っている。

テストメントは連邦よりも高い技術を持っているため、ただの銃弾を使っていない可能性もあったため、定期的に検診を受けている。

「いつも通り、大丈夫ですわ。」

幸いな事にセシリアの体には異常が出ていない。

どうやら、あの時使われた銃は通常の弾丸を使っていたらしい。

あの時……ライトはテストメント側についた。

あいつは自信家で偉そうな事を言っているが、仲間を裏切るような奴じゃない。

テストメントの内部に潜入すると言う可能性も考えたが、この一年音沙汰がない。

幾らなんでも何らかのアクションがあっても良いころだから、その可能性はないんだろう。

「バンさん…聞いてますの？」

「……済まない。」

セシリアが何かを言っていたが、考えごとをしていて聞いてなかったらしい。

「ワタクシよりもバンさんの方が大丈夫ですよ？今、メーティアにはパイロットはワタクシとバンさんの二人だけですのよ。もうじき増援が来ると言う話ですが、それまではワタクシ達だけでメーティアを守らないといけないのですわよ。もう少ししゃきつとしてくださいな。」

セリシアの言う通りだ。

今はライトの事よりも艦を守る事を考えないといけない。

隊長が命と引き換えに俺達を逃がしてくれたんだ。

メーティアを守り抜いて、世界を……市民をテストメントの好きにさせないために……

コリニック社からの増援がまじかに迫る頃、アルエットの考え通り、テストメントは輸送機の進路からメーティアを補足して仕掛けていた。

「艦長！完全に包囲されています。」

「くっ……MS隊は敵の数を少しでも減らさせる！最悪の場合は宇宙に逃れる！ノマルとベルシュタインにも伝えてメーティアから離れ過ぎないように言うておけ！」

「艦長！敵量産機の中に識別不能のMSが二機確認！」

モニターに識別不能のMSが映し出される。

一機はアルエットは見覚えがあった。

それはかつて自分の上司のアベル・ウォーカーが搭乗していた初代リベリオンに酷似していた。

大きな違いは機体が黒く塗装され、左腕にシールドが装備されている位だった。

G N G - 0 0 0 0 B 『ブラックリベリオン』

テストメントがリベリオンのデータを元にして製造したイノベイター専用のMS

外見こそはリベリオンに酷似しているが、最新の技術を使っているため、性能は比べものにならない。

もう一機は濃いクレーを基調として重厚感のある装甲に全身に棘のような突起物がついており両肩には鉄球が両手に小さい斧『シヴァ』を装備しているMS『アイゼンオーガ』が映し出されている。

「リベリオン……ふざけた真似を……MS隊はあの二機を何としてもメーティアに取りつかせるなよ！」

「あれがメーティアか……腕がなる。」

アイゼンオーガに乗る大柄の男、アールン・バスガーグが好戦的な笑みを浮かべてそう言う。

「お前の古巣だが手加減をするなよ。」

「そのつもりはない。」

Bリベリオンに乗っているライトはそう答える。

「結構だ。来るぞ。」

二機はバンのGN-X?の粒子ビームを散開してかわす。

「あのGN-Xは俺がやる。」

「好きにせい」

Bリベリオンはビームライフルを放ちながらGN-X?に向かい、アイゼンオーガはセシリアのガラス?に向かって言った。

「久しぶりだな。バン」

「ライトか!」

ライトはGN-X?に通信を繋いだ。

「久しぶりで悪いが落とさせて貰う。」

BリベリオンはGN-X?にビームライフルを放ち、GN-X?はGNバスターソードを抜いて接近して振う。

「どうして裏切った!」

「前に言った筈だ。俺は俺を一番高く買った方につくとな。」

BリベリオンはGNビームサーベルを抜いて受け止めた。

「それがあいつらだと!」

「そう言う事だ。」

BリベリオンはGN-X?を弾き飛ばすとビームライフルを放ちGN-X?の右腕を貫いた。

「少しは楽しませてくれよ。人間!」

ガラツゾ?はGNバルカンを放つが、アイゼンオーガは気にする事なく接近してシヴァを振う。

「この程度の攻撃は避けるに値しないといたいのですか!お行きなさい!ファンゲ!」

ガラツゾ?はGNソードファンゲを射出する。

「フン…そのような軟弱な攻撃など!」

アイゼンオーガはシヴァでソードファンクを破壊していく。

「やりますわね……」

ガラツゾ?はGNロングソードを抜いて接近する。

「思い切りの良い……だが!」

アイゼンオーガはガラツゾ?の攻撃をシヴァで受け止める。

攻撃を受け止めたシヴァの刃が高速で動き初めて、ガラツゾ?のロングソードを削って行く。

そして、ロングソードを削り破壊するとそのままガラツゾ?の右肩から腕を削り破壊した。

「まだですわ!」

ガラツゾ?はGNショートキャノンを放ちながら後退しようとするが、アイゼンオーガはシヴァで追撃する。

ガラツゾ?は左手のビームソードで応戦するも、アイゼンオーガはガラツゾ?の左腕をシヴァで切り落とす。

「セシリア!」

GN-X?がガラツゾ?の援護に向かおうとするも、Bリベリオンがビームライフルで牽制する。

「ライト!」

「悪いな。これも戦いだ。」

アイゼンオーガがシヴァを振り下ろそうとすると、アイゼンオーガとガラッゾ?の間に赤い影が割り込む。

「ホウ……間に合うか……」

「ガンダム……」

二機の間割り込んでシヴァの一撃を受け止めたのは付近まで輸送機で接近していたが、戦闘を確認して直接MSで向かっていたシンのR2ガンダムだった。

「初めて見る機体だ。新型か?」

ライトがそう言っていると後続のMSが到着して粒子ビームを放つ。

「少し遅くなった。後はこちらが持つ。君はもう一機のMSとともに母艦に帰投するんだ。」

マシユーがバンのGN-X?に通信を繋いでそう言う。

「助かりました。」

バンのGN-X?はセシリアのガラッゾ?を抱えると、メーティアに帰投して行く。



「行かせるか」

Bリベリオンがビームライフルを放つがリタのバリスタのアンチ粒子シールドが防ぐ。

「新型のガンダム……連邦のMSよりかは楽しめるか……」

「何とか間に合った……」

R2ガンダムとアイゼンオーガは睨み合っている。

「良からう。相手をしてやる！」

アイゼンオーガはシヴァを構えて突っ込む。

「来た！だけど……僕にも新しい力があるんだ！」

R2ガンダムもGNビームザンバーを構えてアイゼンオーガに突っ込んでぶつかりあう。

「臆せずに来るか！だが、このアイゼンオーガのパワーに勝てると思うな！」

アイゼンオーガはR2ガンダムを弾き、追撃の一撃を振うがR2ガンダムは急上昇してかわすと背部のスラスタが展開されてGNウイングを形成すると急加速をして降下する。

R2ガンダムは急降下して勢いの乗せた一撃をアイゼンオーガに喰らわせる。

「なかなかだな！」

R2ガンダムはそのままビームライフルを持ちマグナム弾を放つ。

マグナム弾をアイゼンオーガは回避しようとするも足に掠り、アイゼンオーガの足の装甲の一部が溶解する。

「このアイゼンオーガの装甲を貫いて来るとは……中々の装備だ。」

「掠つてあの程度……」

アイゼンオーガはR2ガンダムに向かって言った。

「まったく……宇宙に上がる前にこいつらと戦う羽目になるとはな……」

ローゼンクロイツァー改はレーヴァティンを抜いて構える。

メーティアを攻撃していたガントミーはローゼンクロイツァー改に対してマシンガンやバズーカで応戦して来る。

「やれやれ……私はすでに敵として認識されていると言っ訳か……ならば、躊躇いは不要か」

ローゼンクロイツァー改はガントミーからの攻撃を掻い潜り、レーヴァティンでガントミーを切り裂く。

「ガントミー風情に後れを取る私ではない。」

ローゼンクロイツァー改はGNビームキャノン？を展開してガントミーを撃墜する。

「こいつらの数は少ないが…相手にするとこの数も以外と厄介だな。」

ローゼンクロイツァー改はレヴァティンでガントミーを蹴散らしていく。

ローゼンクロイツァー改を抜けてメーティアのガントミーが向かっていくが、粒子ビームがガントミーを撃ち抜いた。

「何だ？まだMSがいたのか？」

それを皮切りにガントミーが次々と撃ち抜かれて行く。

「艦長……」

メーティアのモニターにはGNスナイパーライフル？を構えてガントミーを狙撃しているコマンドガンダムが映されている。

ロシアを出たロックオンは中国でテストメントに激しく抵抗している者たちがいるとの情報を得て中国に入っていたが、偶然にこの戦闘に出くわすと1年前に共闘したメーティアを発見して援護射撃を行っていた。

「久しぶりっすね。援護が必要っか？」

メーティアのモニターにロックオン・ストラトスが映される。

「ああ…そうして貰えると助かる。」

「了解です。狙い撃たせて貰いますよ。」

コマンドガンダムはGNスナイパーライフル？でガントミーを狙撃していく。

「まさか、リベリオンと戦う事になるとはな……」

マシューのバリスター号機はGNビームキャノンでBリベリオンに放つ。

「三対一か……」

Bリベリオンは粒子ビームをかわしながら、ビームライフルで反撃する。

「だけど、相手がアベルでなければ大した事はないよ。」

リタのバリスタ二号機がその攻撃をシールドで防ぐ。

「マシュー君、そっちに行ったよ」

オリビアのバリスタ三号機がGNビームガトリングライフルを放ち、Bリベリオンを誘導する。

「捉えた！」

一号機のNGNレールガンがBリベリオンを捉えるが、直撃する前にシールドを掲げてシールドが破壊される。

「性能はこちらが上だと言っただが……」

「撤退するぞ。小僧」

いつの間にか戦闘を中断していたアロンからライトのBリベリオンに通信が入る。

「敵の増援も到着した以上、連れて来た戦力では落とすきれんからな……それに楽しみは後にとって置くものだ。残っても構わんがこちらは援護はしないからな。」

「……了解」

アイゼンオーガヤガントミーが引いて行くのを見るとライトも撤退を始めた。

「引いて行くのか？」

「そのようだな。筋脳かと思っていたが、アロンも引き際と言うものを心得ていると言う事か……」

「敵も引いたようだし、俺もその船に乗っても良いっすか？」

ロックオンはメーティアに通信を繋いでそう言う。

「……許可しよう。」

アルエットがそう言うのとメーティアのカタパルトハッチが開閉する。

「コリニック社から来た増援も感謝する。敵の撤退を確認し次第、  
帰投してくれ」

そして、テストメントが完全に撤退した事を確認すると、シンク達  
はメーティアに乗艦していった。

## Mission 43 合流（後書き）

### 新キャラ設定

アロン・バスガーク

（CV若本 規夫）

肉体年齢40代（男）

テストメントのNo.05を与えられている。

戦闘において豪快かつ力任せの戦い方を好み、逆に小細工をまったくしない性格をしている。

### 新MS

GNTS-005 『アイゼンオーガ』

テストメントがアロン専用開発した近接戦闘用MS

射撃武器と搭載しておらず、圧倒的なパワーを持っている。

## 武装

・シヴァ

アイゼンオーガのメインの武装で小型の斧

刃が高速で回転することで対象を削りながら両断することが出来る。

両手に一基づつ装備している。

・GNハンマー

両肩に装備されている棘付きの鉄球。

鎖がついており、振りまわして使う

GN G - 0000 B 『ブラック  
ブリベリオン』

テストメントが初代リベリオンのデータを元に開発したイノベータ  
ー専用機



外見はリベリオンを黒く塗装しただけだが、当時の欠陥点などは改善されていたり、使われている装甲がナンバーズの専用機と同じものを装備しているなど基本的な性能は向上している。

機体にはオリジナルのGNドライブが三機搭載されている。

## 武装

### ・GNビームライフル

通常のビームライフルよりも威力が向上しており、射程も向上しているが連射速度が落ちている。

### ・GNビームサーベル

テストメント機が装備している物と共通で両腕に内蔵している。

### ・GNシールド

左腕に装備されている通常規格よりも一回り大型のシールドを搭載している。

### ・GNバルカン

頭部に二門装備している。

## Mission 44 地獄へ

「改めて窮地を救ってくれた事に礼を言う」

増援が来る事は想定ないだったが、まさかガンダムとテストメントのMSを引き連れて来るとは予想外だったかな。

それに一機とは言え、ガンダムも現れるとはな……

ソレスタルビーイングは1年前にテストメントに敗れて壊滅していたと聞いていたが……

「礼には及ばないっすよ。俺もガンダムでの移動は流石に疲れてたし……」

ソレスタルビーイングのガンダムマイスター……確か、彼のコードネームはロックオン・ストラトスと言ったか。

「こつちも構わないと言うか、そのためにわざわざバリスタを持って来たようなものだしね。」

バリスタに乗って来たマシューがそう言う。

三機のバリスタには私にとって馴染み深い人達が乗っていた。

連邦内部に内通者がいた事を考えると確実に信用のおける者を選したと言う事か……

それにマシュー達はELS戦役を生き延びた歴戦の勇士だから、実

戦経験においてはノマルやベルシュタインとは比べものにならない。

「それで……お前たちはこれからどうするつもりだ？よもや、この数で戦いになると思っっているのか？」

元テストメントのパイロット……ローズ・ローゼンがそう言う。

「そこまで事体を楽観してはいない。それで君に聞きたい事がある。」

幾ら増援が来たところでメーティアの状況は良くなってもテストメントとの戦局は変わらない。

「何だ？私の答えれる範囲でなら答えてやる。」

「そうか……では単刀直入に聞かせて貰う。アベル・ウォーカー中将の居場所だ。」

現状において最大の障害は中将の身柄。

最悪の場合は見捨てる選択肢もあるが、それは明らかに兵の士気にもかかわる選択の為そう簡単に決断は出来ない。

逆に中将の身柄を確保すれば、戦力も士気も大幅に上がる。

増援が来て装備が充実している今の内に確保出来るなら確保しておきたい。

「成程な……確かにアベル・ウォーカーならば、事体を動かす事は可能かも知れん。だが、それは私の上も重々承知の事だ。だからこ

そ、こちらにとって最も安全な場所に居ると言っておこう。」

「情報提供に感謝する。」

彼女の言葉を信じるのならば状況は最悪かもしれん。

恐らくは敵の本拠地と思われる巨大な構造物に居ると見て間違いないだろう。

あそこを攻めるとなると連邦軍の総戦力を投入しても足りるかどうか……

「それでこれからどうするつもりだ？」

どうするか……

事体を打開するキーは中将だと言う事は確定……

「そうだな……」

ならば決断せざる負えないだろう。

「本艦はこれより宇宙に上がり、ウォーカー中将の奪還作戦の為に作戦行動を開始する。依存はないか？」

「僕たちはメーティアの増援として来たから、アルエットに従うだけだ。」

「俺も賛成させて貰いますよ。宇宙に上がれば俺らの母艦と合流出来るかも知れないですから……」

ストラトスも私に同意する。

「僕もです。宇宙に上がってヴィクトリアに戻らないといけませんし……」

ヴィクトリア……確かにベリオンを回収した艦だったな。

ヴィクトリアと合流すればこちらの戦力も増強出来る。

「分かった。メーティアはこれより宇宙に上がる。」

とにかく、私達の進む道は決まった。

後はその道を進むだけだ。

ブリーフングが終わり、方針が決まったところで私は艦長室に戻っている。

宇宙に上がるための準備は私が指揮を取らずとも、部下だけでも十分と判断した。

これから先は逃げ回っていた今まで以上に困難な戦いになるだろう。

そのために指揮官である私は休める時に休まねばならない。

「入るぞ。アルエツト」

私が答える前にマシユーが入って来る。

「まだ、許可を出してないぞ。マシユー」

「堅い事は言いつこ無しだ。」

マシユーはそう言い、艦長室のソファーに座る。

「何の用だ？私はこれからの事を考える事で忙しい。」

「君は相変わらずのようだね。連絡もたまにしか来ないしね。」

「私も仕事で忙しいんだ。文句なら私に仕事を与える中将に言ってくれ」

テストメントの目から逃れ続けていたこの一年間はともかく、今までは中将からの任務が忙しくマシユーと連絡を取っている時間がなかったからな。

不要な通信は任務にどのような障害を発生させるか分からない以上、指揮官である私が私用で通信など部下に示しがつかんからな。

「成程……確かにね。中将を確保したら、是非ともそうさせて貰うとするよ。」

「聞くかは保証出来んぞ」

中将の事だ、適当な事で誤魔化すのが落ちだと思つがな……

「まあね……」

「それよりも良いのか？本当に……宇宙は地上よりも状況が悪いと聞いている。」

地上もすでに敗戦ムードが漂い、抵抗活動も鎮静化している。

宇宙は敵の本拠地もあるため、敵の数は地上の非じゃない。

私達は望んで宇宙に上がろうとしている。

地上なら、最悪逃げ場はどうにかなるが宇宙の場合は敵のMSや戦艦だけでなく環境そのものが私達の敵となりうるかも知れん。

「宇宙の状況は聞いている。だけど、俺も仕事で来てるから社長の指示に逆らえないんだよ。」

マシューはそう言い肩を竦めるが、コリンズ社長が権力を盾に行くように命じた訳でもない筈だ。

「そう言う事しておくよ。」

どの道マシュー達は一線を引いたとは言え、戦力としてはノマルとベルシユタイン以上と見ても良いからな。

MSの搭載数もメーティアの最大数の10機が搭載されている。

途中の基地でGN-Xのアーモードモジュールも回収して、予備の武器も大量に確保した。

ガンダムを乗せているから、粒子の補給を考える必要性も少なくな



っている。

状況は良くないが、悲観的に考えるのはよそう。

指揮官として最悪の事態を考えて行動する事は大切だが、今は最善の事を考えて行動をしないといけないのかも知れない。

常に自分の能力を信じて負ける事を考えていない中將のように……

「奇妙な光景ですわね。」

「確かに……」

俺とセリシアは先の戦いで損傷した機体の修理の様子に来ていたが、格納庫はセシリアが言う通り奇妙な光景と言える。

俺のGN-Xやセリシアのガラツゾなどの連邦軍のMSはともかく、ガンダムが二機にテストメントのMSまで置かれているのは奇妙としか言いようがない。

一年前の戦いでガンダムとは共闘したけれども、慣れないものだな。

それにガンダムとテストメント機と共に増援として来たMS……バリストと言っらしいがそのパイロットも俺達からすれば有名人だ。

「宇宙に上がると艦長は言っていたけど……」

「大佐の救出作戦の機を窺うためにも宇宙に上がる必要はあります

わ。」

分かってはいるけど……

機会を窺って機を見つけても地上にいては出遅れる。

そのために宇宙に上がるのは分かるんだけどな……

宇宙の状況が悪いと言う事で何とか地上に降りて来た。

「大佐さえ救出してしまえば、テストメントなど恐れるるに足りませんわ。」

「だと良いけれど……」

「バンさん！大佐がいればワタクシ達の勝利は確定ですわ！」

セリシアはそう言い中将の武勇伝を語りだす。

今更、説明されなくてもすでに何度も……耳にタコが出来るくらいセリシアが熱弁していたからな……

ロシアを出て情報を元に発見した連邦のメーティアの整備兵にガンダムを預けて俺は艦内をぶらついている。

抵抗勢力だから連邦か現地のレジスタンスと踏んでいたが、まさかメーティアと再会することになると名ね……

粒子の補給はガンダムには必要ないが、破損して時の修理は出来ないがガンダムの中ではなくベットで休めるのは大きい。

一年前に共闘したお陰で艦長も俺がソレスタルビーイングだからと言っでどうこうするつもりはないのも大きいな。

俺が適当にぶらついていると赤いガンダムのパイロットの少年とテスタメントだったと言う少女を見かける。

「よお…お前だよな。あの赤いガンダムのパイロットってのは？」

「はい…シンク・ウオーカーと言います。」

少年は律義に答える。

ウオーカーね……と言う事は艦長の子供か……

背格好から推測するに共闘時に会ったシャロンの弟だろうな。

「年幾つ？」

「15ですが？」

15ってアニエスの一つ下かよ……

アニエスはイノベイターだからそこまで驚く事でもないが……

才能って奴か……

親父は最強のイノベイターだしな…15でも驚く事も無いか……

「お前の様な軽い奴がガンダムに乗っていたとはな……」

赤毛の女の方が俺を見てそう言う。

確か、あの赤いMSは前に比べると若干違つが1年前の戦いでレムリアと交戦したMSだよな。

こんな少女が乗っていたのかよ。

「悪かつたな」

「そうだな。回収した個体もだが、ガンダムマイスターとは腑抜けのようだ。」

「ちよっ…ローズさん」

赤毛の少女…ローズは俺にそう言う。

喧嘩売つてんのか？

と言うか今、こいつ聞き捨てならない事言つてなかつたか？

「回収した個体つてどういう事だよ？」

「1年前の戦いで私と交戦したガンダムに乗っていた個体の事だ。」

コイツと交戦したガンダム…レムリアのフォートレスの事か……

「レムリアはお前らに捕まったのか？」

「そう言う事だ。もっとも…ガンダムに搭載されていたGNドライブはすでにパージされた後だったがな。」

取り合えずはGNドライブは守り切ったと言う事か……

「レムリアはどうなってんだ？」

「さあな。だが、あの個体はイノベーターに匹敵する脳量子波が使えると体を調べた結果分かったからな。その能力は使えると判断したから今も私達の本拠地で調整を受けているだろう。」

「調整？」

「そうだ。あの個体はこちらに協力的ではなかったと聞いている。だから、一度意識データをフォーマットするらしい。私達が欲したのはあの個体の能力で意識データは必要ないからな。」

つまりはレムリアの人格を消すってか……

ふざけやがって……

「てめえ……」

「私に怒りをぶつけるのはお門違いだ。その判断を下したのは私ではないからな。」

確かにそうだが……

だからと言って納得が行く訳じゃないだろ……

「使えると言ったが…具体的にレムリアに何をさせる気だ？」

「そこまでは私の知るところではない……だが、私の妹に当たる個体もその個体と同じコンセプトで作られている。その個体との差は自らも戦闘能力を持っているかの有無だろう。妹の個体はイノベーターに匹敵する脳量子波が使えるが、自身の戦闘能力は皆無だ。だから実戦に投入する時には護衛の機体が必要となるが、それに対して回収した個体はガンダムマイスターとなるべくして作られたマイスタータイプの固体だ。ならば自衛位は出来よう。その辺りが関係していると私は推測している。それ以上の事を聞かれても私には答えようがない。私はただ、その個体の回収を命じられただけに過ぎないからな。」

「そうかよ……」

コイツの言っている事を信じるとしたら、かなり機密を話している。流石にこれ以上の事を問い詰めても話さないだろう。

頭に血が上っていたが、確か母艦にレムリアの意識データはリアルタイムでバックアップが取ってあった。

例えば意識データが消されてもレムリアが死んだ訳じゃない。

そこはイノベイドの特徴として割り切るしかないな。

俺は頭を冷やすべく、その場を後にする。

「艦長……メーティア、大気圏の離脱準備が完了しました。」

MSの修理を艦の補修が終わり、メーティアは大気圏の離脱シークエンスに入っている。

「トランザムの起動後、本艦は大気圏の離脱を開始する。各員は離脱に備えよ。」

私の指示でブリッジクルーが慌ただしく、作業を開始する。

「トランザム起動!」

「トランザム起動しました。」

オペレーターがそう言うつと艦体が大きく傾く。

「GNフィールド最大展開!」

「GNフィールド展開しました。」

そして、次第にメーティアは加速を初めてそれに合わせるかのよう  
にGが私達にかかる。

そのGを受けながら、メーティアは地獄が待っているだろう宇宙へ  
と上がって行く。

## Mission 45 帰還

地球軌道上で戦闘の光が見える。

ルージュが去った後、ルージュの約束通りテストメントは一度は完全に撤退した。

しかし、動けない敵を野放しにするほどテストメントは甘くない。

MSの修理が完了する前にガントミーを差し向けていた。

対するヴィクトリアは宙域を離れるために艦の推進や兵装を優先して直していたため、MSの修理が終わってなくMSを出せずにいた。

ヴィクトリアは艦の兵器で応戦するも、幾らガントミーの性能が一般の量産機に劣るとは言え戦艦の兵器に対してただ突っ立っている訳でもなくMS戦の時のように落とせないでいた。

「艦長！敵MSが来ます！」

「撃ち落とせ！」

ヴィクトリアがGNキャノンやGNミサイルで迎撃するも、ガントミーは散開してバルカンやミサイルでヴィクトリアを攻撃する。

「右舷に被弾！GNフィールドの出力が10%低下します！」

「くっ……何としても持ち堪えさせる！」



ヴィクトリアは可能な限りの火器を駆使して応戦するも戦艦一隻で群がって来るガントミーを排除しきれぬ訳もなく、一機のガントミーがヴィクトリアの火線を掻い潜りブリッジにバズーカを向けた。

その様子が映し出されているブリッジでは皆が死を覚悟するがガントミーがバズーカを放つ前にガントミーは横から粒子ビームで撃ち抜かれる。

「何だ……」

ブリッジが突然の事で茫然としていると、粒子ビームが次々とガントミーを撃墜していく。

「艦長！友軍機の識別コードを確認しました！識別コードの所属は……ルーラー中佐揮下のメーティア隊の物です！」

そして、モニターにはR2ガンダムとコマンドガンダム、ローゼンクロイツァー改、三機のバリスタ、GN-X？、ガラッゾ？と言った面々が映し出されている。

「僕が先行します。」

シンクのR2ガンダムがGNウイングを展開して急加速してヴィクトリアの前に向かい、GNビームライフルでガントミーを破壊する。

「ヴィクトリア聞こえますか？シンクです！」

「シンク！」

「戻って来たのか……」

シンクはヴィクトリアの通信を繋いでそう言う。

「ここは我々に任せて貴官らは自艦の防衛に専念しろ。」

メーティアからアルエットがヴィクトリアのラディウムにそう言う。

「了解しました。」

「ノマルとベルシユタインはヴィクトリア級の防衛、ストラトスは本艦の防衛、その他は敵MSの掃討を開始せよ！」

ヴィクトリアとの通信を切り、アルエットは各機へと指示を飛ばしてメーティアは戦闘に介入する。

「宇宙に上がった途端に戦闘かよ……」

「敵機接近！敵機接近！」

「分かってるよ。ハロ」

ロックオンはそう言い専用のガンコントローラーを構える。

「生憎とまだこの船を沈めさせる訳にはいかないんでね。狙い撃つぜー！」

コマンドガンダムはGNスナイパーライフル？を放ち、メーティアに接近しようとするガントミーを狙撃した。

「シンク君、ここは俺達に任せて貰う。」

「貴方は思う存分戦って構いませんわ。」

「済みません…頼みます。」

R2ガンダムはGNウイングを戻して、ガントミーに突っ込んでいくとバンのGN-X?はGNキャノンとビームライフルでセリリアのガラツゾ?はGNバルカンで迎撃を始める。

「ここは意地でも死守するぞ。セリシア」

「言われなくてもですわ。」

ガラツゾ?はGNフィールドを展開して、ガントミーの攻撃をウイクトリアに当てさせないように防ぎながら接近してロングソードでガントミーに接近して両断する。

「お行きなさい!ファンゲ!」

肩に装備しているGNソードファンゲが舞いガントミーを破壊していく。

「久しぶりの宇宙戦だが、まだ感は衰えてないようだな。」

マシューのバリスター号機はガントミーのマシガンでGNディフェンスロッドで防ぎながら、ビームライフルで破壊する。

「人の感はそう簡単に衰える訳でもないって事だよ。」

リタのバリスタ二号機はシールドの戦端についているGNハンマーでガントミーを殴り飛ばして破壊するとトリスマッシャーを放つ。

「だね〜まだまだ若い奴には負けないって奴だね〜」

オリビアのバリスタ三号機がGNビームガトリングライフルを乱射してガントミーを一掃していく。

三機のパイロットは久しぶりの宇宙での戦闘でも衰えていない事を見せつけながらガントミーを破壊する。

「これ以上やらせない！」

R2ガンダムはビームライフルでガントミーを破壊しながらシールドの戦端のビームソードでガントミーを両断する。

「まったく……相手にして見ればこの数は面倒だな。」

ローゼンクロイツァー改はレーヴァテインでガントミーを両断する。

「それでも守りきる！」

R2ガンダムがビームライフルでガントミーを撃ち抜き、ローゼンクロイツァー改がレーヴァテインを振う。

元々、動けない戦艦一隻を沈めるために派遣されていたため、通常の戦闘時よりもガントミーの数も少なかったため、メーティアのMSによって簡単に殲滅された。

「ヴィクトリア艦長のラディアン・ライオット少佐です。」

「副長のフリム・マリアージュ少尉です。」

「メーティアの艦長、アルエット・ルーラー中佐だ。」

戦闘を終えた私はヴィクトリアの艦長と副長と会談を行っている。

この場には私と二人以外にはローゼンが立ち会っている。

今後の事を決める上でテストメントの内情を知っている彼女の意見も聞く必要がある。

彼女が敵のスパイである可能性も否定は出来ないが、今更心配したところで手遅れだ。

「今回は窮地を助けていただき感謝します。中佐」

「礼には及ばんよ。少佐、我々は友軍の窮地を救ったに過ぎない。」

幾ら、自分達の状況が良くないとは言え、友軍をみすみす見捨てるのは目覚めが悪い。

それに戦力を確保すると言う意味でも助けた意味はある。

「それで貴官らには私の指揮下に入り同行して貰いたいと思っているが、この状況だ。私に貴官らに強制することは出来ない。」

すでに連邦軍はまともに機能していないからな。

「こちらとしましても現状での単独行動は避けたいですから、是非とも同行させて貰いたいと思います。」

「了解した。MSと艦の修理に必要な物資と人員はこちらの物を使ってくれてかまない。すぐに現宙域から離れる必要がある。」

物資は地上で大量に確保して来ている。

それに敵も部隊が壊滅した事に気づいていると考えるのが妥当だ。

だとすれば、次は先以上の戦力を投入して来るだろう。

最悪、ナンバーズとやらを投入する可能性も否定できない以上は速やかに現宙域を離れて、身を隠す必要がある。

それも敵に見つかり難く尚且つ機を見つけた時にすぐに動ける場所  
にだ。

そのため、なるべく早く移動を開始したい。

その方が潜伏場所を探す時間もかけられるし、敵にトレースされる  
危険も減る。

「助かります。すぐに作業をさせます。」

ここからは時間との戦いにもなるな。

「それで中佐達はこれからどうするつもりですか？」

「ウォーカー中将の救出作戦を開始する予定だ。貴官らにも手伝って貰う事となる。」

「中将をですか……確かに中将ならば、現状を打破することも可能かも知れませんが……具体的にどうするつもりですか？」

それが一番の難点かも知れん。

「ローゼン、テストメントの総戦力はどのくらいになる？」

「さあな。私に聞かれても分からんよ。」

「どういう事だ？自軍の戦力だぞ？」

話によれば、ローゼンはテストメント内でも上位に位置していたと聞いている。

「私に分かるのはナンバーズ専用機が最大で14機……私とルギアムが離脱しているから12機か、それに加えてガントミーが大量だ。その数は多過ぎて私も知らんし、正確に答える事が出来る者など果たしているものか……だが、それでも答えよと言うのならば約数億と言ったところか……」

「数億だって……」

「ありえんが……そうも言いきれんな」

あれだけの大きさだ。

量産性に特化していると思われる量産機がそれだけあっても不思議ではないと言う事が……

数億……こちらの戦力は戦艦二隻にMSが十数機……

戦いにすらならんぞ……

「そう悲観する事も無いぞ。数億と言っても常に常駐している訳でもない。特にナンバーズはな」

ローゼンがそう言うが、何の慰めにもならない。

テストメントの数は圧倒的だとは思っていたが、よもやここまでとはな……

20年前のELS戦役の時の方が楽に思えるのが不思議だ。

私達はそこに飛び込み中将を助ける事になると言う事が……

目的が救出であるため、それら全てと戦う必要もないがあまり嬉しい状況でない事は確かだ。

まったく……中将も厄介なところに囚われているものだ。

「まさに地獄に飛び込むと言う事が……」

「そう言う事になるな。」

「だが……それでもそれしか手が無いのならば、行くしかないだろう。」



ここまで来たら腹を括るしかないだろう。

「久しぶりだな。シンク君」

僕はヴィクトリアに戻るとルビィさんに呼び止められる。

「そうですね。」

「良く戻ったと言いたいが、君に謝る事がある。」

ルビィさんはそう言いシレーヌがテストメントに連れ去られた事を話してくれた。

「そうでしたか……」

薄々は気づいていた。

艦の空気がそんな感じをしていたから……

「不甲斐ないな。君の留守中に彼女を守るどころか、彼女に守られる事になってしまつとはな……」

「仕方がないですよ。」

ローズさんが言うにはシレーヌは重要な位置にいるから、酷い目には合わないと思うから取り戻す機会はきつと来る。

それにメーティアの艦長さんはお父さんを助けるつもりで聞いている。

お父さんが居れば、きっと何とかなる。

僕も地上でナンバーズを相手に追い詰められた。

機体性能で劣るルビイさん達は生き残っただけで凄いと思う。

僕はリタがいなかったら死んでいた。

「そう言ってくれると少しは気が晴れるよ。」

「いえ……」

「シンク！」

ルビイさんと話しているとミリィとロイドが走って来る。

「では、私は行くとする。」

ルビイさんはそう言い二人とは反対方向に去って行く。

「まったく心配させるんだから……」

「まったくだぜー！」

ロイドはそう言い僕にヘッドロックをかけて、ミリィは少し怒っているけどそれでも少し安心した表情をしている。

二人とも無事で良かった。

「ロイド……ミリィ……ただいま。」

二人は無事だった。

守る事が出来た。

次はシレーヌを助ける。

僕は約束したから……ローズさんと……

「メーティアが宇宙に上がったそうだな。」

テストメントの本拠地の一画に存在しているMSの格納庫でゼロがそう言う。

「のようですな。あの人の直属と言うだけあって無駄にしぶといですからね。」

その後ろでアメリカがそう言う。

「それで……潰しますか？今なら一万程のガントミーを差し向ける事も可能ですか？」

「捨て置け」

ゼロがそう言うと、アメリカは表情こそは殆ど変わらないが、若干不服そうにする。

彼女にとってメーティアはソレスタルビーイングと同レベルで危険視すべき存在であるため、放置すると言うゼロの選択に納得出来ない。

「それよりも……ようやく、完成するらしい。」

「デウス・エクス・マキナですか……」

格納庫には巨大なMAが置かれている。

GNTA-0000 『デウス・エクス・マキナ』

テストメントが開発した大型MA

「ああ……後は最終調整を終えれば実戦テストに出せるらしい。」

「これをメーティアにぶつけると？」

「それは完成した時の状況による」

「そうですか……それでこの機体にはどちらを乗せるので？」

この機体には通常のイノベイドの能力では扱えないシステムが搭載されているため、デウス・エクス・マキナの能力を最大限に発揮出来る個体は少ない。

「この機体との相性はシレーヌよりも回収した方が適しているとヴ  
エーダが判断した。」

「分かりました。すぐに調整を完了させて準備させます。」

アメリカはそう言い格納庫を出て行く。

「デウス・エクス・マキナ……機会仕掛けの神か……」

ゼロはそう呟き格納庫を後にした。

## M i s s i o n 4 6 H E R O

あの戦いから1年が経ち、私はあの後解放戦線の連中と別れてアメリカに帰って来ていた。

帰って来たと言っても、アメリカに私の家族がいる訳じゃない。

あるとすれば、妹のアリシアのお墓しかない。

艦長からは太陽炉を守れと言われたけれども、私としてはもうどうでも良いわ。

あの戦いで分かった事がある。

イノベイターだなんだと言っても所詮は一人の力では抗えない力が存在していると言う事。

あのアベル・ウォーカー然り、あの白いMSも然り……

だから、私は太陽炉とガンダムをあの連中に渡して別れた。

バイオメトリクス認証はジェシカさんも一緒だったから、解除は出来ると思う。

あの白いMSには歯が立たなかったけれども、量産機を相手では十分過ぎる程の性能を持っているだろうしね。

そして、私は今ガンダムマイスター時代にコツコツと貯金していたお金とバイトで生活している。

連邦はテストメントを相手にゲリラ戦で戦っているけれども、連邦政府の首都であるワシントンは平和そのものだったりする。

連邦大統領とテストメントの間で和平交渉をしているからと言うのがもっぱらの噂だけど、実際のところは大統領がテストメントの与するのかを濁して時間を稼いでいると言うのが有力らしい。

市民の反応は一時期は注目されていたけれども、今では連邦だろうとテストメントだろうとどっちが勝とうが、自分達の身の安全を確保してくればどちらでも良いと言う雰囲気になっている。

まあ、市民にとって連邦とテストメントとの戦いは遠い世界の出来事で自分達には関係ないって事よね。

そんな連中の為に戦っている連邦軍もご苦勞な事よね。

私は御免よ。

元々、お金を稼ぐためなのが一番の戦う理由でその理由すらも、私のエゴの為にこの状況で貫くようなものじゃなかったしね。

貯金も十分溜まっているから当分はそれとバイト代で十分に暮らせる。

後は適当に戦いを終わるのを待つだけよ。

私が町を適当に歩いていると爆音とともに地面が大きく揺れた。

「プレジデント！大変です！」

いつも通りの午後のひと時と思いきや、今日に限って違った。

連邦軍の士官が慌てて執務室に飛び込んで来たわ。

最近はどうやってテストメントとの交渉を引き延ばしにするかを考えていて頭が痛いと言っのに何か起こったようね。

恐らくは先ほどの爆発の事でしょうけど……

「何事？」

「タスタメントが大統領府に対して侵攻して来ました！」

まさか……だけど、この慌てようは事実のようね。

「被害は？」

「量産機が多数にエース機が一機が侵攻を開始して、進路上を攻撃しつつ侵攻しています。」

どうやら、連中は痺れを切らして来たってところね。

ワシントンを焼いているのは抵抗勢力に対する見せしめと言つと……  
るかしら……



これは脅しでないと……

「市民の非難を……出せるMSをすぐに出して時間を稼がせて」

「プレジデントは？」

「私はここで指揮を取ります。」

「この防衛戦力では時間を稼ぐのが精一杯……」

「一秒でも時間を稼いで市民を逃がす。」

「例えば政府が崩壊しようとも人が残ればまた、国も政府を作れる。」

「了解しました。」

士官は敬礼をして出て行く。

「さて……ここが踏ん張りどころね。」

「最悪」

私は爆発から運良く逃れる事が出来たけれども、その後の第一声がこれだった。

つい先ほどまで日常の一幕だった町は無残にも瓦礫と化していた。

上空にはテストメントの量産機と黄色のMSが大統領府に侵攻している。

「ご丁寧に町を破壊しつつね。」

「正気の沙汰じゃないわよ。」

町を火の海にしながらの侵攻なんて正気の人間の出来る事じゃないわよ。

「これは逃げた方がいいわね。」

この状況で逃げるところがあるかどうかなんて分からないけれども、突っ立っていれば確実に死ぬわね。

本当に最悪……

すでに町には多くの人がさっきの爆発の余波で怪我したのか死んだのかは分からないけど、倒れている人が沢山いる。

生憎と他人を気にしている余裕は今の私にはない。

私は逃げようとした時に思い出す。

……お姉ちゃんは私のヒーローなんだよ。

それはアリシアが私に最後に言った言葉。

あの時は何でヒーローなんだって突っ込んだっけ……

最悪…何でこんな時にアリシアの言葉を思い出すのよ。

病弱だったアリシアにとってイノベーターの私はヒーローだったらしい。

雲の上の存在のアベル・ウォーカーよりも……

強くてカッコ良くて何でも出来るヒーロー……

実際の私はそれほど上等な人間じゃないってのにさ……

だけど…アリシアは私がヒーローだって信じていた。

そう信じて死んだ。

妹一人守れなかった私をそう信じて……

「まだ…間に合うのかな……」

アリシアが信じたヒーローに……

「んな訳ないわね……今の私には何の力も無い。なのにヒーローになるなんてさ……」

ガンダムがあれば、どうにかなったかも知れないけれども……

最悪……こんなことなら、いざって時の為にガンダムをとっておけば良かったわよ。

「力があればヒーローになれるのかな？」

「そうね……ってジェシカさん！」

私の一人ごとに自然に会話して来たのは解放戦線の人と一緒にいたジェシカさんだった。

「もう一度、聞くけど力があればヒーローになれるの？」

「あればね。」

だけど、世の中はそうそう都合が言い訳じゃない。

ピンチの時に救ってくれる正義の味方も居なければ、地下にMSが隠してあるなんてベタな展開がある訳でもない。

「ならば……私がその力を上げよう。」

「力を？」

「そう……しかし！その力を手にすれば、もう二度と平穏な生活には戻る事は出来ない……かも知れない。君にその覚悟があるのかな？」

ジェシカさんは物凄く胡散臭い芝居がかった事を言っている。

「上等よ。」

どの道、前に進むしか道はない。

「良い覚悟だ。ついて来い。」

相変わらず芝居がかった言動でジェシカさんは歩き出して、私も続いて行く。

「ベタな……」

私はつくづくそう思った。

ジェシカさんに連れられたのは今やワシントンの名所の一つとされている旧スミス邸の地下。

そこにはMSの格納庫があり、そこに蒼いガンダムが置かれていた。

「どしたの？」

「まさか…地下にガンダムが隠されてた事に驚いています。」

私が半ば茫然として答えるとジェシカさんは本気で呆れたような顔をしてため息をついた。

「何言ってるのさ？地下に秘密兵器を隠すのは古今東西いつの時代も常識だよ。」

常識なの？

私の感覚が間違っているの？

「そんな事よりも、アニメスはこのガンダムに乗って貰うよ。」

「新型ですよね…これ？」

外見は資料にあったダブルオーガンダムに似ている。

両肩に太陽炉が搭載されている辺りは……

だけど、両腕に実体剣が装備していたりと、所々が違う。

「そう…… GNDT-0000 レイジングガンダム。この機体にはセイバーガンダムのTGNドライブと木星で作った最後のTGNドライブの二基のTGNドライブが搭載されてるんだよ。それをツインドライブの容量で同調させたデュアルツインドライブシステムが搭載された第8世代のガンダムだよ。」

第8世代……確か、私のセイバーガンダムが第6世代だから……

このガンダムは二世代も先のガンダムって事？

「元々はアベル専用に開発したんだけどね。当のアベルが行方を眩ませてるからね。この際、イノベーターなら誰でも良いっかと思っ  
てアニエスに乗って貰おうと思っただよ。」

あのアベル・ウォーカー専用のガンダムね……

「怖気づいたんなら、止めても良いけど？ここはシエルターも兼ねてるから多分大丈夫だと思うよ。」

「冗談じゃないわ。」

ここで逃げる訳にはいかないわ。

今度こそ、アリシアの信じたヒーローになると決めたから……

「抵抗がこの程度なんてつまんないな……」

セルは防衛の為に出撃した連邦軍のMSを全滅させてそう言う。

「さつさと、終わらせて僕もソレスタルビーイングのガンダムを探しに行きたいな。」

ケントウリアはGNキャノン大統領府に向けると、ある事に気づく。

大統領府の前の庭が割れて、地下からMSが出て来た。

「いきなり、大統領府の前に出て来たわよ。」

「ここと地下で繋がっているからね。」

それは旧スミス邸からベルトコンベアで大統領府の庭の下まで移動し、リフトで地上に出て来たアニメスに乗る第8世代相当のガンダム、レイジングガンダムだった。

エクシア系統の青い装甲にダブルオーガンダム同様の両肩にTGNドライブを搭載し、両腕には実体剣の『GNブレードトンプアー』が装備されている。

右腕にはジェシカが20年前に見た映画「ソレスタルビーイング」

に出て来たMSダブルオーライザー他3機のガンダムによる合体技の「ライザーソード」を真似て設計された超巨大ビームソード『レイジングソード』の発生装置が腕の装甲に内蔵され、左腕の装甲には22年前のソレスタルビーイングのEース機のダブルオーライザーに搭載されていたライザーソードとほぼ同等の間合いを持つ『GNハイパービームサーベル』が内蔵されている。

そして、全身にはアヴァランチエクシアを思わせるGNコンデンサーとスラスターが内蔵されて装甲が取り付けられており、背部にはOガンダムなどに採用されていたコーン型のスラスターがレイジングガンダムにも採用されていた。

が、胸部にはレイジングガンダム唯一の火器の4銃身式機関砲式のGNバルカンが二基搭載されている。

「稼働テストも終わってないから、ぶっつけ本番だけど、やれるね。」

「この状況でやれませんか？って言える訳ないですよ。」

「なら、問題ないね。」

「見た事もないガンダムだ……新型かな？」

アニメスがベダルを踏むと背部から大量のGN粒子が放出されてGNフェザーが展開する。

GNフェザーは大量のGN粒子を消費すると言う欠点からOガンダムの後継機の1ガンダムにのみ採用されたが、デュアルツインドライヴシステムによりツインドライヴ搭載機の二乗の膨大なGN粒子を放出しているレイジングガンダムにとってこの程度の粒子量は



した量ではないため、再び採用されていた。

「へえ……すごいね。」

セルが感心していると、次の瞬間レイジングガンダムは消えており、ケントウリアの横を通り抜けてガントミーに突撃して破壊した。

「え？」

「ちょっと！どうなってるのよ！今、一瞬意識が飛んだわよ！」

その事体にセルだけじゃなく、レイジングガンダムに乗っていたアニメスも驚いていた。

アニメスはゆつくりと上昇しようとしていたが、レイジングガンダムはあり得ない加速でケントウリアの横を通りぬけていた。

「反応が良過ぎるみたいだね。アベル専用調整してるからかな。」

「何とか出来ないの！少し動かしただけで凄く反応するわよ！」

「無理」

ジェシカはそう言い、レイジングガンダムは上空を駆け回り、ガントミーに激突しては破壊していく。

「はあ！」

「それでもかなり、反応が遅くしてあるから、それ以上遅くすることとは出来ても、私の技術者としてのプライドが許さないから、それ

になれて」

「だったら何か火器はないの！火器なら何とか狙いが付けられるから！」

「んな物はないよ。」

アニエスの心の叫びにジェシカはあっさりと返す。

「何だよ！」

「その機体は近接戦闘に特化してるからね。火器は邪道なの。分かる？ちなみにビット兵器もないから悪しからず。」

「分かるかあああ！」

アニエスは叫び、壮大にビルに墜落する。

かなりの加速としていたため、幾つものビルを破壊してレイジングガンダムは仰向けで倒れ込む。

「最悪……私の一世一代の決意を返してよお……」

「何だ……新型だから楽しみにしていたのがっかりだよ。」

その一部始終を見ていたセルはため息とついてGNキャノンをレイジングガンダムに向ける。

「つまんないから消えてよ。」

ケントウリアはレイジングガンダムに粒子ビームを放つ。

「攻撃が来るよ。」

「見えてるわよ！」

レイジングガンダムは両肩のTGNドライブを機体の全面に向けるとTGNドライブから大量のGN粒子が放出されて粒子ビームを防いだ。

「こんのおおお！」

アニエスはそのまま、GN粒子の放出の威力を強めるとそれは上空のケントウリアまで届いた。

「うそ！粒子だけで圧倒されてるの！凄いや！」

その大量のGN粒子はケントウリアを圧倒すると、その間にレイジングガンダムは立ち上がる。

「何とか立てたけど……このガンダム……繊細過ぎるわね。」

レイジングガンダムは立ち上がると、両腕のGNブレードトンプァーを展開する。

「立てるようにはなったけど……まだ、慣れないわよ……だったら！」

レイジングガンダムはそのまま一直線にケントウリアに向かう。

「下手な小細工を使わないで戦ってやるわよ！」

そして、そのままケントウリアの右腕を切り落として空中で急制動をかける。

「くっくううう！」

急制動時のGに耐えながら、空中で制動しレイジングガンダムは再びケントウリアに向かっていく。

「そうでない面白くないよね！」

ケントウリアはズメイを展開しようとするも、それよりも速くレイジングガンダムはケントウリアの腕を切り落とす。

「これで終わりよ！」

レイジングガンダムはそのまま、地面に着地し勢いで地面を滑走しながら、左腕に内蔵されているGNハイパービームサーベルを取り出す。

「はあああああ！」

そして、そのままハイパービームサーベルを展開しつつ振った。

「あああ……ゲームオーバーか……」

レイジングガンダムの一閃はケントウリアを真っ二つに両断して、ケントウリアは爆散した。

「ハアハア……何とか終わったわね。」

「10点だね。テストメントのエンジン機を撃墜した事は褒めて上げるけど、レイジングガンダムの機動力と出力に振り回されっぱなしなのはいけないよ。要練習ってところかな。精進するべし」

ジェシカからの通信でアニエスの臨界点は突破した。

「ふざけんなあああ！」

アニエスは叫ぶが、すでにジェシカは通信を切っていた。

## Mission 46 HERO (後書き)

新MS設定

GNDT-0000 『レイジングガンダム』

ソレスタルビーイングが開発した第8世代相当の新型のガンダム。

両肩にTGNドライブを搭載し、それをツインドライブの要領で同調させたデュアルツインドライブシステムを搭載し、ツインドライブ搭載機の二乗のGN粒子を放出出来る。

近接戦闘に特化しているため火器は殆ど搭載していないため、膨大なGN粒子を防御を機動力に回しているせいで驚異的な速度や防御力を可能としている。

元々はアベル専用のガンダムとして開発されていたため、非情の操縦性が悪い。

武装

・GNブレードトンファー

両腕に装備している実体剣でプロトGNソードをベースとして開発されている。

展開してGNソードのように使う事も出来るが、展開することなくトンファーとしても使う事が出来る。

切れ味は鋭く、リベリオンZのGNバスターブレードライフルと同等の攻撃力を持つ。

・GNハイパービームサーベル

左腕の装甲に内蔵されているビームサーベル。

威力も通常のビームサーベルとは段違いの攻撃力だが、最大の特徴はライザーソードに匹敵する距離を攻撃することも可能となっている。

・レイジングソード

右腕に内蔵されている巨大なビームソード。

レイジングガンダムの武装の中でも最高の威力を持っている。

・GNバルカン

胸部に二門装備されている4銃身式機関砲式のバルカン。

レイジングガンダムの武装の中で唯一の火器だが、その威力は通常の強化Eカーボンでも易々と破壊出来る威力を持っている。

・GNフェザー

Oガンダムに搭載された物を再び採用している。

レイジングガンダム事体が高出力のお陰でOガンダムよりも広範囲かつ、高出力に展開が出来き、使用時間も大幅に上がっている。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2637v/>

---

機動戦士ガンダムOO～変革への道 New Generations～

2011年10月19日02時13分発行